

ISSN:1881-5731

CODEN:KDKOBM

甲子園大学纪要

BULLETIN OF KOSHIEN UNIVERSITY

No. 38

2011年3月

甲子園大学

甲子園大学紀要 No.38 (2011)

目 次

『西東詩集』の「ズライカの書(そのⅡ)」	上野 義久	1
統合型マーケティング・コミュニケーションの理論的フレームと戦略立案	大塚 賢龍	11
『ゴシック入門』増補	比名 和子・金崎 茂樹訳	25
ローマ喜劇における‘sed’の訳語について	上村 健二	31
システムを取り巻く環境の移り変わり	中井 孝	37
Witchcraft and Hawthorne’s Fiction Writing	中西佳世子	49
『学生力』を高めるための「教養演習Ⅰ」(3)		
…… 西川真理子・若槻 健・中西佳世子・梶木 克則・増田 将伸・石川 朝子		55
『ビラヴド』を読む(1)	比名 和子	71
文法理解を基盤とした英文読解のための方略		
—英語が苦手な大学生のために—	増田 将伸	77
鳩摩羅什の生涯とゆかりの町の調査報告		
—疏勒・尉頭・龜茲・楼蘭・敦煌・涼州・長安—	山田 勝久	87
京都伝統産業のものづくり経営に関する一考察		
—川島織物を事例として—	渡邊 喜久	97
心理臨床に「素材」の視点を導入する意義と方法について		
—女子大学生の症例へのETC理論からの検討—	市来百合子	109
就職支援に向けたeポートフォリオの活用について	梶木 克則	119
過去の否定的経験と大学/大学院教育に関する調査研究	金網 知征・谷口麻起子	125
播州高砂の「大蔵元」について	中川すがね	137
ゲームによる仕訳学習システムの構築	那須 靖弘	159
高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性尺度の開発と応用に関する調査研究		
……	藤田 綾子	163
大学におけるモバイル端末の演習環境	榊井 猛	173
精神療法における自己愛と甘えの問題について	安村 直己	183
学術活動		193

BULLETIN OF KOSHIEN UNIVERSITY

No. 38 2011

CONTENTS

Some poems of 〈Buch Suleika (II)〉 in 《West-östlicher Divan》	Yoshihisa Ueno	1
The Theory Frame and Strategy Planing of Integrated Marketing Communication (IMC)	Kenryu Otsuka	11
Supplementary Translations of <i>The Handbook to Gothic Literature</i>	Trans. Kazuko Hina & Shigeki Kanasaki	25
On the Translation of 'sed' in Roman Comedies	Kenji Kamimura	31
Changes of outer circumstances surrounding various systems	Nakai Takashi	37
Witchcraft and Hawthorne's Fiction Writing	Kayoko Nakanishi	49
"Seminar for Cultural Accomplishment I" —To Enhance "The Student Power" (3)	Mariko Nishikawa Ken Wakatsuki Kayoko Nakanishi Yoshinori Kajiki Masanobu Masuda Tomoko Ishikawa	55
Reading <i>Beloved</i> (1)	Kazuko Hina	71
Strategies for Better Reading Based on Grammatical Understanding: For College Students Weak in English	Masanobu Masuda	77
A Report on the Life of Kumarajiva and the Towns Associated with him —Kashgar, Tumushuk, Kuqa, Loulan, Dunhuang, Liangzchou and Changan—	Katsuhisa Yamada	87
A Study on the Product Development in Kyoto Tradition Industry —Case Study on Kawashima Textile—	Yoshihisa Watanabe	97
The Significance of Art Materials and Media in Psychotherapy and Assessment —A case study examined through the Expressive Therapies Continuum—	Yuriko Ichiki	109
Practical use of the e-Portfolio system to the career support	Yoshinori Kajiki	119
Retrospective study of the relationships between the past negative experiences and the university under-and over-graduate education.	Tomoyuki Kanetsuna Makiko Taniguchi	125
Historical research of merchants named "Ohkuramoto" in port Takasago of Edo period	Sugane Nakagawa	137
Development of game type learning system for journalizing	Yasuhiro Nasu	159
Development and application of productive-aging intent scale	Ayako Fujita	163
Computing environment of university that uses Virtual Software	Takeshi Masui	173
On Problem of Narcissism and Amae in Psychotherapy	Naoki Yasumura	183
Academic works		193

◇原 著◇

『西東詩集』の「ズライカの書（そのⅡ）」

上野 義久

平成 22 年 10 月 29 日受理

Some poems of 〈Buch Suleika (Ⅱ)〉 in 《West-östlicher Divan》

Yoshihisa Ueno

Goethe's several poems of 〈Buch Suleika (Ⅱ)〉 in 《West-östlicher Divan》: [Lieb'um Liebe], [Volk und Knecht], [Mag sie sich] and so on are translated into Japanese with explanatory notes.

This paper is intended to conclude on the basis of Goethe's 《Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans》 and his following words: “Der höchste Charakter orientalischer Dichtkunst ist, was wir Deutsche Geist nennen, das Vorwaltende des oberen Leitenden; hier sind alle übrigen Eigenschaften vereinigt, ohne daß irgendeine, das eigentümliche Recht behauptend, hervorträte. Der Geist gehört vorzüglich dem Alter, oder einer alternden Weltepoche. Übersicht des Weltwesens, Ironie, freien Gebrauch der Talente finden wir in allen Dichtern des Orients.” that he made every effort to devote himself as a Western poet to Oriental poetry, to write his poems in the Oriental style and to leave many remarkable poems for us.

はじめに

『西東詩集』の原語は West-östlicher Divan で、Divan は Diwan と綴り、元々ペルシア語で「詩集」を意味する。従って『西洋的かつ東洋的な詩集』とでも訳すべきところだが、一般に『西東詩集』として世に知られている。

ゲーテがこの詩集の創作に最も力を注いだ時期は、1814, 15 年頃で、詩人の 65 歳前後の頃である。当時の西洋、とりわけドイツは、ナポレオン占領下での社会の混迷と長い政情不安の中にあった。そんな折、ゲーテはたまたま手にしたペルシャの詩人、ハーフィスの『詩集』（ハンマー訳、1812 年）を読み、ハーフィスと自分との親近感を強く覚えるとともに、ハーフィスのように純粋な恋愛、人生の喜びを素直に享受し、明るい生の肯定と享樂を謳歌し、西洋詩人による東洋的な詩を書こうとの意図のもと、この『西東詩集』を編んだのである。

しかし、この詩集は容易に理解できる類いのもではなく、ゲーテの多くの詩集中最も難解なものとされている。しかも分量は、ヴァイマル版『ゲーテ全集』の第 6, 第 7 の 2 巻を領し、内容的には抒情詩、相聞歌、格言風の詩、思想詩など多岐にわたるが、もちろん単純に分類できないものも多数含まれている。

この詩集を刊行するにあたって、ゲーテ自身、読者の理解を助けるために『西東詩集をよりよく理解するための注解と論考』と題した解説を書いている。この稿では前回の「ズライカの書（そのⅠ）」(Buch Suleika (Ⅰ)) に引き続いて、「ズライカの書（そのⅡ）」(Buch Suleika (Ⅱ)) の中から特色ある注目すべきものを選んで訳出し、ハンブルク版『ゲーテ全集』の編者、E・トゥルンツの注解やゲーテ自身の『注解と論考』を参照しながら、若干の註釈を施すことにする。

Ohne Titel

Lieb' um Liebe, Stund' um Stunde,
Wort um Wort und Blick um Blick;
Kuß um Kuß, vom treusten Munde,
Hauch um Hauch und Glück um Glück.
So am Abend, so am Morgen!
Doch du fühlst an meinen Liedern
Immer noch geheime Sorgen;
Jussuphs Reize möcht' ich borgen,

Deine Schönheit zu erwidern.

無題

愛には愛、時には時、
言葉には言葉、そして目には目。
真心こもった口からのキスにはキス、
吐息には吐息、そして幸福には幸福。
こうして夜も、朝もまた！
でも君は私の歌に
いつもなお隠された憂いを感じる。
ユスフの魅力を私は借りたい、
君の美しさに報いるために。

(註釈) 『ズライカの書』の大半は、ズライカことマリアンネとハーテムことゲーテとの相聞から成っていることは、前稿で述べた。ハーテムの詩はもちろんゲーテの作であるが、ズライカの詩はすべてマリアンネの作というわけではなく、ゲーテが多少手を加えたものもあれば、彼が代作したものもある。それが渾然としていて、我々には詳細はわからない。

ペルシアの言い伝えによると、美女ズライカが愛した相手はユスフという美男子であるが、すでに齢60も半ばを過ぎたゲーテは、まさかユスフとは名乗れず、ハーテムを選んだのであろう。ハーテムは才知に富んではいても、もはや若さの魅力はない。愛が競えば、いかなる嘘偽りもききめなしとゲーテは悟った。「ユスフの魅力を私は借りたい」という表現は、彼の本心を吐露したものである。

因みに、E・トゥルントの説明によると、ズライカは夢の中でユスフを見知ってから激しい恋におちたという。だが、適わぬ恋だと知ると、ユスフへの愛を美そのものへの愛に、更には神への愛にまで高めた。旧約聖書の「創世記」第39章、ヨセフとポテパルの妻の話やコーラン第12章にも類似した話が記されている。

Ohne Titel

Suleika

Volk und Knecht und Überwinder,
Sie gestehn, zu jeder Zeit,
Höchstes Glück der Erdenkinder
Sei nur die Persönlichkeit.

Jedes Leben sei zu führen,
Wenn man sich nicht selbst vermißt;
Alles könne man verlieren,
Wenn man bliebe, was man ist.

Hatem

Kann wohl sein! so wird gemeinet;
Doch ich bin auf andrer Spur:
Alles Erdenglück vereinet
Find' ich in Suleika nur.

Wie sie sich an mich verschwendet,
Bin ich mir ein werttes Ich;
Hätte sie sich weggewendet,
Augenblicks verlör' ich mich.

Nun, mit Hatem wär's zu Ende;
Doch schon hab' ich umgelost:
Ich verkörpre mich behende
In den Holden, den sie kost.

Wollte, wo nicht gar ein Rabbi,
Das will mir so recht nicht ein,
Doch Ferdusi, Motanabbi,
Allenfalls der Kaiser sein.

無題

ズライカ

庶民と奴隷と支配者、
彼らはずも告白する、
地上の子らの最高の幸せは
ただ人格のみと。

もし自分自身を失いさえしなければ、
いかなる生き方もできる。
もし本来の自分でいられるなら、
すべてを失ってもよいと。

ハーテム

それもよいだろう！そう考えられる。
でも私は別の道を進む。
すべての地上の幸せはひとつになって
ズライカの中にだけある。

彼女が私に惜しみなく与えてくれると、
私は貴重な自分になる。
もし彼女がそっぽを向いてしまったら、
その瞬間に私は自分を失うだろう。

さて、ハーテムはおしまだろう。
でも私はくじをひきなおした。
私はすばやく
彼女が愛撫する恋人に変身する。

ラビには、どうしてもなりたくない、
これはそんなにじっくりいきそうにない、
だがフェルドゥシ、モタナビ、
ひょっとしたら皇帝になるかもしれない。

(註釈) この詩は、最初の8行がズライカの作、残りの16行がハーテムの作とされ、先に採り上げた『Lieb' um Liebe』と密接な関連がある。若さの欠乏を嘆くハーテムをズライカが上手に慰める。若さというものは、いずれ消え去るもので、いつまでも頼りにはならない。その人をその人にする不変の人格こそ、「地上の子らの最高

の幸せ」と歌う第1節は、ズライカの口を借りたゲーテの信念である。

それを受けて、ハーテムの答えが続く。人格を人間の最高の幸せと認めた上で、彼は「別の道を進む」。ハーテムことゲーテは変幻自在で、とてもひとすじ縄では捉え難い。諧謔味たっぷりの表現には、恋のとりこになった人間の心の機微に触れるものがあるが、しかし愛の有りようの極致を告白したのも、大げさに誇張したのでもない。また理想化された愛の姿が語られるのでもない。要するに、ハーテムにとってのズライカの愛は疑う余地がないからこそ、このような戯れの表現も可能なのである。この詩だけではなく、『西東詩集』全般にわたって言えることであるが、これ程諧謔味のある気をゆるした詩を読むと、作者ゲーテのスケールの大きさを思わざるを得ない。

語句について、最終節のRabbiは、ユダヤ人が学識ある教師に対して用いた尊称で、のちに律法学者の称号にもなった。Ferdusiは、本学紀要第34号で『Ferdusi spricht』の詩を採り上げた際に少し述べたが、ゲーテ自らが書いた『注解と論考』にフェルドゥシの項があり、ペルシア最大の叙事詩人という。おもに神話、伝説に基づいて、ペルシア建国からササン朝滅亡に至る物語を一篇の叙事詩にまとめた。Motanabbiは預言者と自称したアラビアの詩人アブト・タイジブ・アハメド・ホザイの別名とのこと。

Ohne Titel

Mag sie sich immer ergänzen
Eure brüchige Welt in sich!
Diese klaren Augen, sie glänzen,
Dieses Herz, es schlägt für mich.

無題

君たちのこわれ易い世界は
常に補い合うがいい！
この澄んだ瞳、それは輝く、
この胸、それは私のために高鳴る。

(註釈) 我々人間にとってひとつしかないこの世界は、「こわれ易い世界」で、今や至る所傷だらけで、ばらばらになろうとする。太古の昔に遡るまでもなく、ハーフィスの時代はチムールによって、またゲーテの時代はナポレオンと革命さわぎによって、収拾困難と見える程騒乱されていた。

そのような武力や暴力の支配する非常時に、詩人の言葉がかつて功を奏したためしはない。そんな時、詩人は自らの詩作を断念し沈黙を続けるか、それとも武力を称えるものである。しかし、ゲーテはそのいずれの態度も採らない。彼はハーフィスのやり方に倣って、酒と女性を称えながら、ペルシア風の詩をうそぶく。その独特の口調は、わずか4行の詩の行間にもひびいている。

恋人同士が互いに目の光となって輝き、胸の心臓となって高鳴るように、世界もまた互いに補い合えと言うだけだが、作者の平和に対する強い思いが見て取れるだろう。

Ohne Titel

O daß der Sinnen doch so viele sind!
Verwirrung bringen sie ins Glück herein.
Wenn ich dich sehe, wünsch' ich taub zu sein,
Wenn ich dich höre, blind.

無題

ああ、感覚のなんと多いことか！
混乱をこれらが幸せの中へ持ち込んでくる。
君を見ると、私は耳の不自由なことを望む、
君の声を聞くと、目の不自由なことを望む。

(註釈) 思想や主義の相異によって、また世界観の対立によって、戦争や動乱の絶える暇がないのは世の常だが、内面の世界も無事平穏であることはむしろ珍しい。いま感覚の種類が多すぎて混乱状態にあると言う。特に男女のかかわり合いの場合、様々な感覚が刺激されるので、幸福感が乱されては困る。聴覚を失った場合の方が視覚は鋭くなり、視覚を失った場合の方が聴覚は鋭くなるとは、作者ゲーテの達見である。

Ohne Titel

An vollen Büschelzweigen,
Geliebte, sieh nur hin!
Laß dir die Früchte zeigen,
Umschalet stachlig grün.

Sie hängen längst geballet,
Still, unbekannt mit sich,
Ein Ast, der schaukelnd waltet,
Wiegt sie geduldiglich.

Doch immer reift von innen
Und schwillt der braune Kern,
Er möchte Luft gewinnen
Und sah' die Sonne gern.

Die Schale platzt, und nieder
Macht er sich freudig los;
So fallen meine Lieder
Gehäuft in deinen Schoß.

無題

たっぷりと茂る枝に、
恋人よ、見てごらん！
木の実が見えるだろう、
刺のある緑の皮にくるまって。

それらはもう丸くなって垂れている、
ひっそり、いつの間とも知らぬうちに、
波のように揺れる大枝が、
それらを我慢づよく揺らしている。

しかしいつも内部から熟してきて
茶色の実はふくらむ、
それは空気にあたりたがり
そして太陽を見たがっている。

殻がはじけ、そして実は
嬉しげにこぼれ落ちる。
そのように私の歌も落ちる
とめどなく君の膝に。

(註釈) この詩は1815年9月24日の作。E・トゥルンツの注によると、当時ゲーテのいたハイデルベルクの城山の庭園には美しい栗の木があったとのこと。したがって「木の実」は栗の実であろう。時はあたかも春に戻ったかのような、麗かな秋晴れである。やがて始まる厳しく長い冬の前の暖かな陽気、我国でいう小春日和である。ハイデルベルクの城山の栗の実が、好天の日差しを受けて急に実ったらしく、ほとんど風もないのに、時々ひとりではじけて落ちる音がする。66歳のゲーテと31歳のマリアンネ、彼女はフランクフルトからここハイデルベルクまでゲーテのあとを追って来て、今城山をふたりで散策している。彼女は、拾い集めた自然の実りを膝の上に置きながら、彼の口からもれ出る詩句の言葉を待っている、そんな光景が浮かぶ。

ゲーテはペルシア風にハーテムと自称し、連れの女性をズライカと呼んで、東方風の愛と詩の旅を続けて来たが、この城山の出会いを最後に、いよいよ西と東に別れ去る時が迫っている。大地を打つ栗の実の音に合わせて、ゲーテの詠む詩の言葉がひとしきりマリアンネの膝の上に降りかかる。最後の2行に、作者の詩魂の横溢が見てとれる。

Ohne Tietel

Suleika

An des lust'gen Brunnens Rand,
Der in Wasserfäden spielt,
Wußt' ich nicht, was fest mich hielt;
Doch da war von deiner Hand
Meine Chiffre leis gezogen,
Nieder blickt' ich, dir gewogen.

Hier, am Ende des Kanals
Der gereihten Hauptallee,
Blick' ich wieder in die Höh',
Und da seh' ich abermals
Meine Lettern fein gezogen:
Bleibe! bleibe mir gewogen!

Hatem

Möge Wasser springend, wallend,
Die Zypressen dir gestehn:
Von Suleika zu Suleika
Ist mein Kommen und Gehn.

無題

ズライカ

水の糸の戯れる、
楽しげな泉のふちに
何が私をしっかりとつかまえるのか分らなかった。
でもそこであなたの手で
私の頭文字がかすかに書かれてあった、
私は目を伏せた、あなたを慕って。

ここ、並木道の通っている
運河のはずれで、
再び私は見上げる、

そしてそこにまたしても私は見る
私の文字が美しく書かれてあるのを。
ずっと！ずっと私を慕って！

ハーテム

吹き上げ、波立つ水も、
糸杉も君に告げてくれるだろう。
ズライカからズライカへ
これが私の往来です。

(註釈) シューベルトの『菩提樹』を思い出すまでもなく、ドイツには今も並木道のほとりに白糸を垂れたような泉をよく見かける。マリアンネがそこに立ち寄ってみると、泉の石面に自分の名前の頭文字が書かれてある。その筆跡を見て、それが誰の手であるかすぐにわかった。並木道に沿って運河の水が流れている。そのはずれにたずんで、ふと彼女が見上げると、また並木の幹にも自分のイニシャルが彫られてある。

このことを後でゲーテに告げると、君がここへ来るまで、僕は並木道をズライカからズライカへと毎日ひとりで歩き暮らしたとでも答えたのであろう。その会話を相聞の形で詠んだのである。泉の水も、並木の枝も、相愛のふたりの心も、読む者の心も共にさやぎ、高揚する。

ズライカとハーテムの相聞の形で書かれているが、もちろんゲーテがマリアンネとの会話を基に作ったものである。E・トゥルントの注によると、この詩は1815年9月22日、ハイデルベルクにおいてとある。ところが、ゲーテのあとを追ってマリアンネがハイデルベルクに来たのは、ゲーテの日記によると9月23日のことだから、それが事実だとすれば、この詩の内容は作者の想像ということになる。それとも、彼がフランクフルトでマリアンネと会っていた頃の思い出に基づく作詩であろうか。一般に詩は、仮想と現実が妖しく融け合いながら生まれるものであるから、このような詮索はさして重要なことではないだろう。

Ohne Tietel

Suleika

Was bedeutet die Bewegung?
Bringt der Ost mir frohe Kunde?
Seiner Schwingen frische Regung
Kühlt des Herzens tiefe Wunde.

Kosend spielt er mit dem Staube,
Jagt ihn auf in leichten Wölkchen,
Treibt zur sichern Rebenlaube
Der Insekten frohes Völkchen.

Lindert sanft der Sonne Glühen,
Kühlt auch mir die heißen Wangen,
Küßt die Reben noch im Fliehen,
Die auf Feld und Hügel prangen.

Und mir bringt sein leises Flüstern
Von dem Freunde tausend Grüße;
Eh' noch diese Hügel düstern,
Grüßen mich wohl tausend Küsse.

Und so kannst du weiter ziehen!

Diene Freunden und Betrübten.
Dort, wo hohe Mauern glühen,
Find' ich bald den Vielgeliebten.

Ach, die wahre Herzenskunde,
Liebeshauch, erfrischtes Leben
Wird mir nur aus seinem Munde,
Kann mir nur sein Atem geben.

無題

ズライカ

あの動きは何を意味するのだろうか？
東風が私に嬉しい知らせをもたらすのか？
その羽ばたきのさわやかな動きが
心の深い傷を冷やしてくれる。

その風は愛撫するようにちりと戯れ、
軽い小さな雲にして吹き上げ、
楽しく群れる虫たちを
安全なぶどう棚へ追いやる。

太陽の灼熱をやわらかに鎮め、
私の熱い頬もさまし、
野と丘に熟れて輝くぶどうに口づけ、
風はもう遠ざかる。

そして風の小さなささやきが私に
あの友の千の挨拶を運んでくれる。
この丘がまだたそがれないうちに、
多分私に千の口づけが挨拶してくれるでしょう。

そしてもう、風よ、先へ行くことができるよ！
友だちと悲しむ人たちを世話しておやり。
高い城壁が輝くあそこで、
私はもうすぐ幾重にも愛しい人に会う。

ああ、真の心の知らせ、
愛の息吹、さわやかな命は
私にただ彼の口からだけ与えられ、
私にただ彼の息だけが与えることができる。

(註釈) この詩は『ズライカの書』の中で、最も有名なもののひとつであり、シューベルトやメンデルスゾーンなどによって作曲されている。前の詩の註釈で述べたように、ゲーテは1815年9月21日以来ハイデルベルクに滞在していて、その2日後、23日にマリアンネはここにやって来た。その旅の途上、馬車の中でマリアンネが作り、あとでゲーテが少し加筆訂正したらしい。

第5節でいう「高い城壁」は、有名なハイデルベルクの古城で、時は昼さがり。その城が車窓から望まれるあたりのぶどう山の斜面に、しばらく車を止めてひと休みしている間の作であろうか。「東風」が吹いて、「ちり」

や「楽しく群れる虫たち」を吹き上げ、汗ばんだ「熱い頬」を快く冷やしてくれる。見事に実ったぶどうの房がかすかに揺れているのは、見えない風にキスされているようだ。「風の小さなささやき」の中に、愛しい人の声を聞く思いがする。もう随分近くまで来ている。あとひと走りすれば、私はあの人から「千の口づけ」を受けられる。風よ、私はもうお前に用はない。私はもうすぐ彼の口からもれ出る「愛の息吹」を受けることができるのだから。「彼の息」、これこそが「真の心の知らせ」を伝えてくれる風であると歌う。

これはまさに、逢瀬の期待に胸ふくらませる女心を巧みに詠んだ見事な傑作である。因みに、E・トゥルンツの注によると、この作は余りによくできているので、長い間ゲーテの作と思われていたが、マリアンネの書簡などから、彼女の実作にゲーテが僅かばかり手を加えたものであることが確証されているとのことである。

(この稿続く)

付 記

テキストにはGoethes Werke (Hamburger Ausgabe) Band 2 を使用し、適宜Goethes Werke (Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sohie von Sachsen)6. und 7. Bandを参照した。

統合型マーケティング・コミュニケーションの理論的フレームと戦略立案

大塚 賢龍

平成 22 年 10 月 29 日受理

The Theory Frame and Strategy Planing of Integrated Marketing Communication (IMC)

Kenryu Otsuka

ABSTRACT

The purpose of this paper is the theoretical examination and strategy planing about the IMC. This paper approaches the field of advertising and promotion from an integrated marketing communications perspective. we examine how the various elements of an organizations's promotional mix and combined to develop a total marketing communications program that sends a consistent message to its customer.

キーワード：IMC 革命、戦略的一貫性、ブランド価値、消費者のニーズ、生涯顧客価値

1. IMC 革命の背後にあるもの

企業は最近効率と効果の視点から、マーケティング・コミュニケーションの改良・開発に関心をより高め、いろいろな施策と努力を重ねている。1980年代後半から1990年代の初期にかけて、米国において統合型マーケティング・コミュニケーション (IMC) が提唱されるようになってきた。1992年、アメリカで「New Marketing Paradigm - Integrated Marketing Communications」が発行され、大反響を呼んだ。従来から、商品 (product)、価格 (Price)、場所 (place)、プロモーション (promotion) の4 P に代表されるマーケティング要素を組み合わせ、相乗効果を期待し、最小費用で最大効果を得るマーケティング・ミックスが多くの企業で実施されてきた。⁽¹⁾ しかし、そこでは統合という概念を、企業がほとんど強く意識していなかった。

伝統的に、企業のプロモーション活動は、売り手が商品およびサービスに対する消費者需要を刺激し、喚起しようとする情報提供諸活動である。プロモーションには、広告、人的販売、販促促進、およびパブリシティがある。前三者の最適な組み合わせがプロモーション・ミックスである。パブリシティは、企業が、自社、商品、サービス、アイデアなどが無料で各種の媒体に記事とかニュースとして好意的に扱われるように日常努力する活動である。広告が、有償で、企業の統制可能要素であるのに対して、パブリシティは、無料で、統制不可能である。なお、プロモーションは、コミュニケーション過程をとって行われる。この過程は、コミュニケーションター、メッセージ、経路、オーディエンス、および反応から構成される。⁽²⁾

企業各社は長年にわたって、マス広告、店頭対策を含む S P、P R、パブリシティ、人的販売、イベントやダイレクト・マーケティング等をコミュニケーション・ミックスに取り組み、ノウハウを積み上げ、それなりの成果を挙げてきた。その機能を担うのは、広告部門であり、または広報部門である。また、マーケティング部門には関連部門がまとめられていたとしても、多くの場合、縦割り組織のなかで実施されるのである。全体として統合することを必ずしも強く意識したものではない。消費者は、同一企業からマス広告や折込広告、ポスター、POP、DM等、さまざまな媒体・ツールによりコミュニケーションを迫られる。また、消費者は、情報を平面的に消化し、頭の中で統合する。企業が発信する情報が統合されていないと、消費者はその情報を無視するか、企業が意図した方向とは異なる方向に態度変容を起こすこととなる。

このようなIMCに対する関心が高まっている背景には、アメリカにおける「マーケティング革命」の進行がある。その原因としては、次のような要因が指摘されている。⁽³⁾

(1) 従来のマーケティング経費のうち、媒体広告から他の形態のプロモーション (消費者向け販促と業界向け販促) へ移行しつつあることが指摘される。伝統的な媒体広告は余りにも高額になりすぎたため、費用対効果が低下している。価格競争が高まると、媒体広告よりも、価格販促と関連した販促の方に経費を投入するようになる。

(2) 媒体市場の分散化が進みつつある。ネットワーク・テレビといったマス媒体があまり強調されなくなり、ダイレクト・メールとかイベント・スポンサーといった小規模のターゲット・メディアに注意を向ける。

(3) 市場支配力における製造企業から流通企業への移行が進行しつつある。小売産業の集中化により、小規模なローカル小売企業は、リージョナル・レベルからナショナルおよびインターナショナル・レベルの小売企業によって取って代わられている。これらの大手小売企業は、製造企業から協賛金や販促金の支援を要求する。POSデータの分析により、製造企業のプロモーション企画の良し悪しに関する情報が、小売企業に提供される。このことが、販促といった短期的な成果を高めるプロモーションの方に焦点を当てるようになる。

(4) データベース・マーケティングの急速な成長と開発が進みつつある。多くの企業はコンピューターを使って、消費者の名前も含まれているデータベースを構築している。

マーケティング担当者はこういった情報を使って、これまでの伝統的な広告を通じたマス媒体を使用するよりも、多様なダイレクト・マーケティング方法、たとえば、テレマーケティングやダイレクト・レスポンス広告を使用し始めている。

(5) 媒体仕入方法の変化が進みつつある。多くの企業は、媒体仕入を自己のインハウスで行うようになってきている。マス媒体よりも経費のかからない方法を要求している。

しかし、IMCを実施する上においていろいろな問題点をかかえている。このアプローチは、プロモーション戦略の計画および実行の仕方の変更を要求する。多くの企業は、財務重視型が多い。長期的な顧客ロイヤルティの確保よりも、計画は売上目標を達成することに重点が置かれている。さらに、顧客の創造よりも、その企業の商品を買ってもらうことの方にマーケティング努力を払っている。また、組織変更には社内に一般的な抵抗がある。自分が訓練を受けてきたやり方の方が楽であると考え。多くの管理職は、広告、販促、といった単一側面の販促の方法で専門化を図ってきた。これらの人達は、他の側面のプロモーションは訓練されていない。また、IMCアプローチは、広告よりもそれ以外のプロモーションの側面に重要性を割り当てている。

これまでマーケティング企業では、コミュニケーション活動は比較的優先順位が低かった。プロモーション戦略はブランド・マネジャーといった下位レベルで立案されてきた。IMCアプローチは、マーケティング・ミックスの他の要因（パッケージング決定や価格決定）の他の側面をコミュニケーション戦略の一部と見なすよう要求している。そのために上位レベルの管理者にこのプロモーション意思決定に参画してもらう必要がある。IMCアプローチを成功させるためには、全社レベルのコミットメントが要求される。

一般に顧客は、ばらばらなメッセージを受け取っているケースが多い。例えば、スポーツカーを購入したい人の事例を取り上げてみると、そのスポーツカーの全国ネットのテレビ広告を見たり、雑誌の全国誌の広告、地方新聞広告を見たりする。また、その車の販売代理店の販売員と話したり、新聞や雑誌の新車紹介記事をみたりする。また、その自動車会社から送られてくるカタログも重要な情報源である。このような各種のメッセージを一貫させることは、大変難しい。

また、中堅規模の企業から大企業では、多ブランド商品を販売しているが、そのブランド商品ごとにそれぞれ独自の広告企業が担当しているために、どうしても混乱が生じやすい。

このような分裂現象に対する一つの解決方法としてIMCコンセプトが適用されるようになった。つまり、IMCコンセプトとは、一貫し、統合化されたメッセージを提供するために、企業のあらゆるマーケティング活動やプロモーション的コミュニケーションをコーディネートし、統合化する戦略活動を意味している。簡単に言えば、広告主企業は、できるだけ一貫した、費用対効果の高い方法をワン・ボイスで話し掛けることにある。そのためには、IMCではまず顧客に関するデータを集めて分析し、それからその特定化された訴求対象に対して統合型マーケティング・コミュニケーション戦略を組み立てる。このIMCが適切に実行されると、マーケティング効果やプロモーション効果を高め、逆にマーケティング・コストを引き下げることができる。しかし、こういった利便性がえられるにもかかわらず、広告主企業はこのIMCを実施に移すことはかなりの困難を伴うと見ている。そのコミュニケーションの種々の要素が管理されているそのやり方に最大の問題点が潜んでいる。IMCを実行しようとする、マーケティング機能の計画方法や組織方法を全く新しく変更していく必要がある。

しかし、IMCが実行するのにいかに困難がともなうとしても、IMCのもつ潜在的なメリットは非常に大きいので、いずれ、広告やマーケティングの研究分野での標準となると思われる。Belchは、このようなIMCの概念的モデルを、図1のようにまとめている。

IMC企画アプローチは、次のような4つの基本概念を基盤にしている⁽⁴⁾。また、このIMCの概念的モデルと

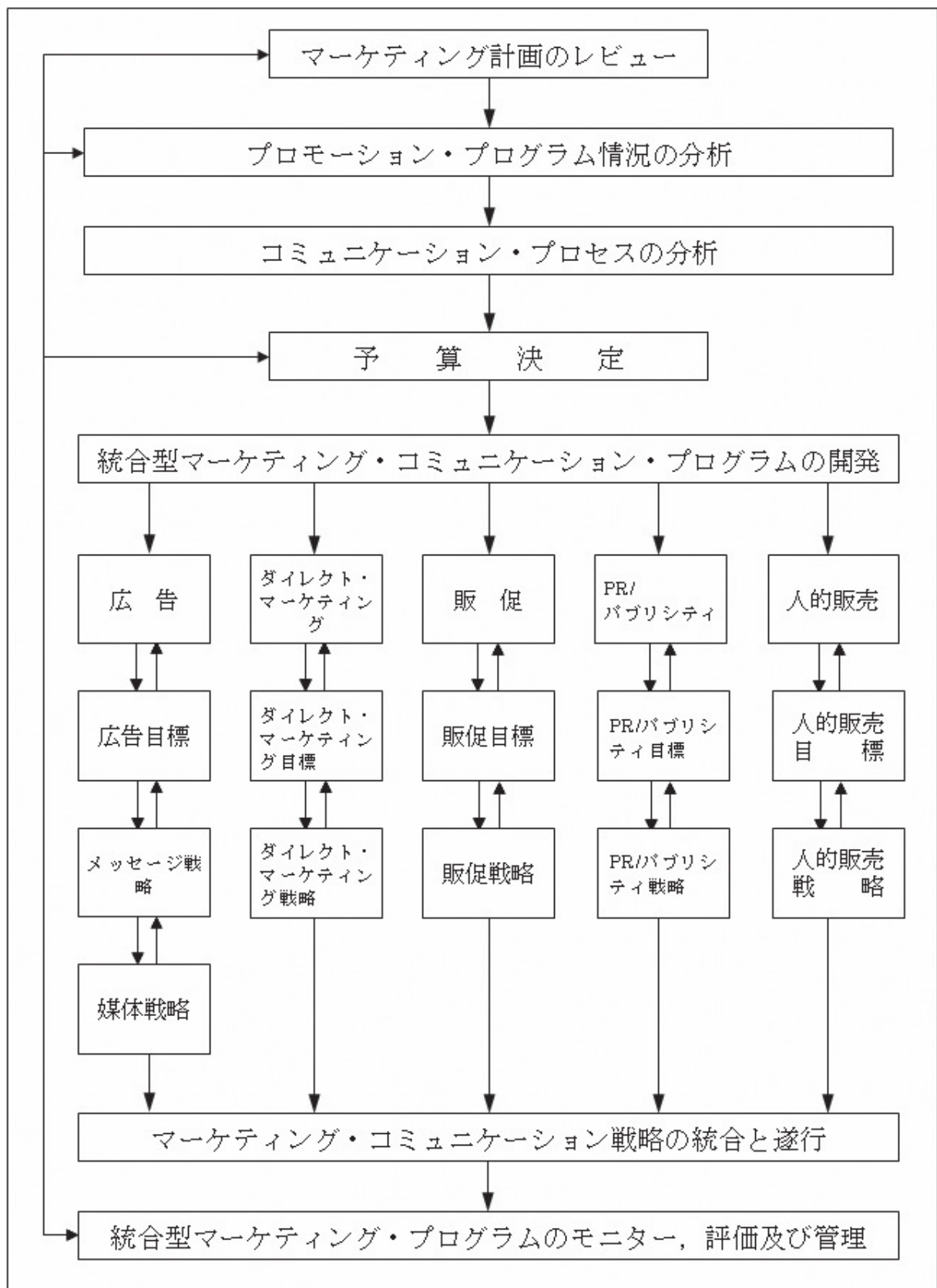


図1 BelchのIMC概念的モデル

出所：B.G.E. Belch, & M.A. Belch, "Introduction to Advertising and Promotion: An Integrated Marketing Communication Perspective", D. Richard, Irwin Inc., 1993, p.22

しては図1のようになる。

IMCは顧客コミュニケーションのすべてをコーディネートしている。IMCでは、顧客は一定の期間にわたって情報を蓄積するが、この蓄積された情報が購買行動に影響する、という視点を強調する。それゆえに、もし、バラバラなメッセージを送っていると、顧客は期待通りの反応をしてくれない。それゆえ、IMC企画を通じて、媒体が何であろうと、発信するメッセージに一貫性を持たせる必要がある。そうすると、訴求対象者のマインドにより強烈な印象を残すことになる。

IMCは顧客から出発するのであって、商品から出発しない。商品から出発してその商品の利便性をターゲット

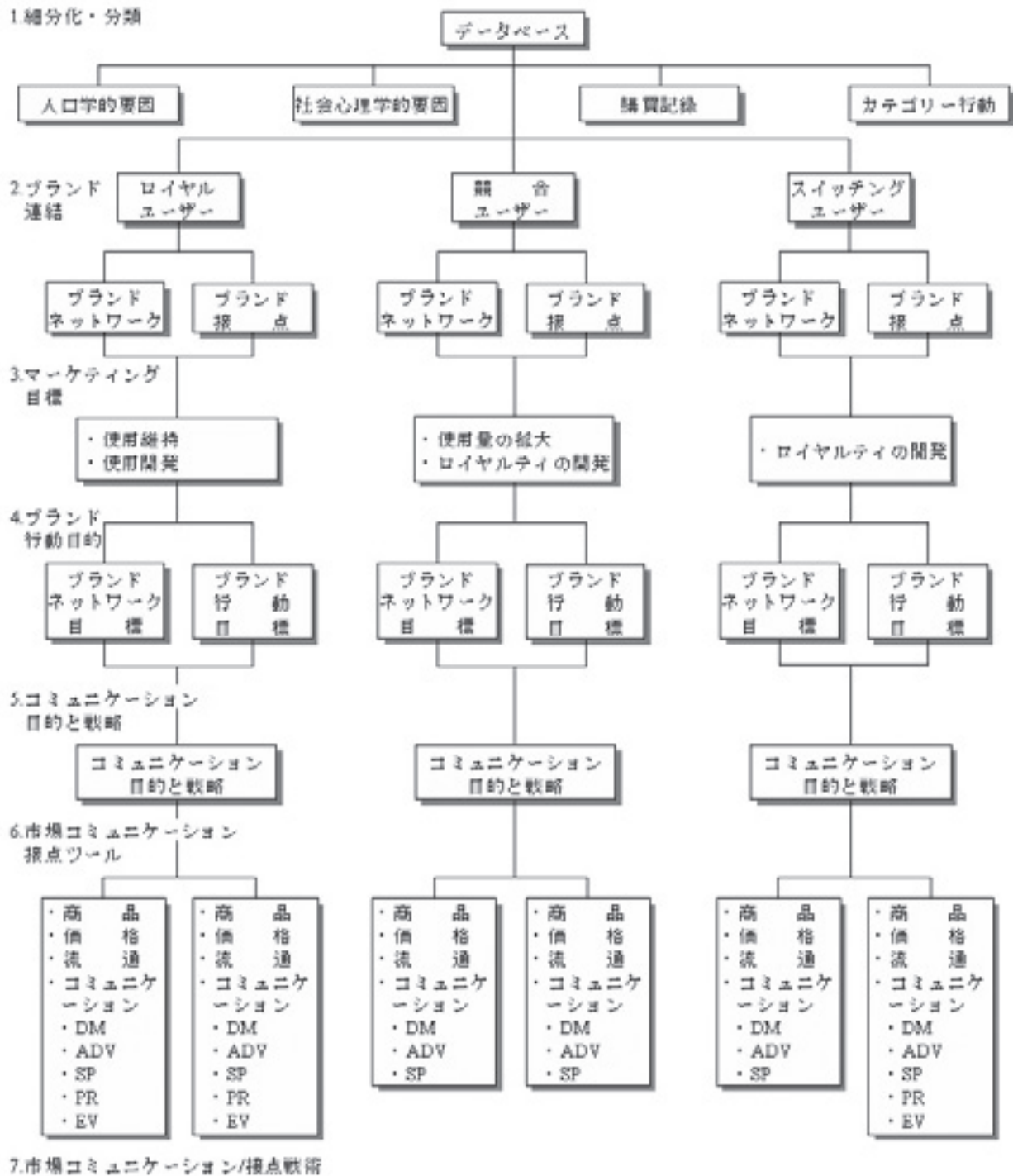


図2 コミュニケーション企画に対するIMCアプローチ

出所：C.L.Bovee, J.V. Thill, G.P. Dovel, M.B. Wood, "Advertising Excellence", McGraw-Hill, Inc., p.175.

ト顧客層にコミュニケーションすることよりも、顧客の頭の中からスタートして、顧客が価値を認めているものを理解することからスタートする必要がある。それから商品に戻って、その顧客と連結しているメッセージを企画立案する必要がある。

IMCは顧客との一対一のコミュニケーションを創造しようとしている。顧客から出発することの当然の帰結として、顧客はすべてユニークであるために、その人にパーソナライズしたコミュニケーションにもっとも敏感に反応してくる。

図2に示されているように、コミュニケーション企画は7つのステップから成り立っており、コンピュータ・データベースから出発する。この顧客に関する十分な情報をもとに、もっとも効果的で、しかもパーソナライズされたプロモーション・メッセージを立案する必要がある。それから、訴求対象者をロイヤルティの高いユーザー、競合ブランドのユーザー、ブランド・スイッチングの高いユーザーという3つのカテゴリーに分類する。一定の商品カテゴリー内のブランドについて顧客はどう考えているのか(ブランド・ネットワーク)を決定し、顧客はブランドとどのように接点をもっているかを確かめる。こういった情報をもとに、各カテゴリー別のユーザーの目標を設定し、それからもっとも適切なコミュニケーション媒体を用いる。

一般にはIMC企画モデルとして基本的につきのような5つのステップを考えている。

- (1) 消費者分類
- (2) 接点管理(コンタクト・マネジメント)
- (3) マーケティング目標とコミュニケーション戦略
- (4) プロモーション・ミックス戦略
- (5) プロモーション・キャンペーンの評価と修正

そこで、この節では、総合型マーケティング・コミュニケーション(IMC)について、IMCの本質的意義を理解・評価し、アメリカにおけるIMC研究の成立と歴史的背景を検討した。

2. シュルツの理論的フレーム⁽⁵⁾

(1) **IMCの意義**： 全米広告業協会は、IMCについて「あらゆるコミュニケーションの手法(広告、PR、SPなど)の戦略的な役割を生かして組み立てられた包括的なコミュニケーションの価値を認めることを提唱している。つまり各手法を合体して、明晰で一貫性があり、最大効果を生むコミュニケーションを創造すること」⁽⁶⁾と定義している。これに対し、ノースウエスタン大学のチームは、IMCを次のように考える。「IMCは、消費者とブランドや企業とのすべての接点をメッセージ伝達のチャンネルと考え、ターゲットの購買行動に直接影響を与えることを目的とする消費者から出発し、あらゆる手法を駆使して、説得力あるコミュニケーションを実践するプロセスである。」⁽⁷⁾

ノースウエスタン大学IMC学科シュルツ教授は、これらの定義に満足していない。それは定義が、何を中心にコミュニケーション統合を考えるかによって変わってくるからだと言っているのである。しかし、IMCの定義は、それを考える視点や使う立場により異なるのがまだ実状であるが、本質的には、「統合的に思考すること」であると考えられる。なお、シュルツ教授は、IMCに対し、広告主、広告代理店、メディア、学術研究者からの視点を例にとって次のように紹介している。⁽⁸⁾

① 広告主にとって： 広告、SP、PRなどの複数の手段から一貫したメッセージを発信し、コミュニケーション戦略を統合することによって、ブランド・商品イメージを強化すること。

② 媒体にとって： 大手媒体企業は、1980年代に他の媒体企業を買収し、巨大マルチメディアに成長した。個別のメディア単位でキャンペーンを実施するだけでなく、複数の媒体を併合したプログラムを設けて、広告主によりよいサービスにつとめること。

③ 広告代理店にとって： 広告機能だけでなく、SP、PR、DM、パッケージなど、あらゆるコミュニケーション機能を必要に応じて動員・統合して、クライアント・サービスにつとめること。

④ ビジネス研究者・戦略家にとって： データベースを用いて消費者をとらえ、消費者から企業を見てコミュニケーションを構築すること。消費者のほしいメッセージを、彼らが受け入れ易い方法で提供する。消費者の購買行動に直接働きかけ、顧客との関係等を強化するコミュニケーションを行なうこと。

(2) 1993年、有賀(1996)によれば、ドン・シュルツ教授は、統合型マーケティング・コミュニケーションの6つの基本原則を提示している。それらは、①アウトサイド・イン、②消費者行動重視、③縦のプランニングから横のプランニング、④ブランド・コンタクト(ブランド接触)、⑤双方向性コミュニケーション、⑥アカウントビリティである。⁽⁹⁾

以上のような特徴を持ったIMC計画モデルは、図表3に示す通りである。⁽¹⁰⁾

(3) **IMCの基本概念**：マーケティングの中で行われるプロモーションは、マスの情報や知識を持つことが不可欠となっている。また、逆にマス広告の関係者にもプロモーション的な視点が必要になってきており、今後IMC的な視点で統合的にマーケティング・コミュニケーションを実施する際には、新しいプロモーションは重要な役割を果たすことが期待される。セールス・プロモーションが、全マーケティング・ミックスの中での主要な統合要因になるだろうと考えられる。20世紀におけるアメリカ・マーケティングの基盤は経営専門技術としてのティラーシステム、フォーディズムの流れの中に組み込まれている。マーケティングは経営管理論の考え方をベースとし、ものを売る技の知識の専門化、分権化の体系から出発した。IMCは、マーケティング・コミュニケーション活動の部分工学的な調和ではなく、ホーリスティックな概念、セクショナリズムを越えた「統合する」思考である。アメリカでは、マーケティングの機能的分化が進んでいるために、マーケティングの専門会社、媒体企業、制作会社などがそれぞれ独立していた。ところが、複雑化する社会、多様化する文化への進展とともにその中に含む矛盾点が次第に生じてきたために、統合的なマーケティング、統合的なコミュニケーション活動を展開すべきであるというのがIMCの基本概念ではないかと考えられる。

3. ダンカンとモリアティの理論的フレーム

ダンカン(T. Duncan)とモリアティ(S. Moriarty)は、シュルツのIMC理論をさらに発展させ、ブランド関係性の構築におけるコミュニケーションの役割をより強調するモデルを提案している。その理論的フレームの考え方を要約すれば以下の通りである。⁽¹¹⁾

統合型マーケティングとは、利益率の高いブランド関係を管理する横断的プロセスを意味している。そのブランド価値の管理は、次のような方法で人々と企業学習とを融合することによって達成する。第1は、ブランド・コミュニケーションで、戦略的一貫性を維持し、第2に顧客や他の利害関係集団と目的志向的な対話を促進し、第3にブランド信用を高める企業のミッションをマーケティングすることを通じて行う。

個人的な関係性であろうと、商用的な関係性であろうと、いかなる関係をも推進する燃料源は、コミュニケーションである。何らかのコミュニケーションの形をとらないかぎり、関係性を成立させることはできない。こういった理由から、コミュニケーションは、統合型マーケティングの生命線である。そして、実際のコミュニケーションは話し掛けるだけではなく、耳を傾けることまでを含んでいる。21世紀のクリエイティブな挑戦は、商用的な関係性で目的志向的な2方向的なコミュニケーションを規定し、修正することである。

企業は、ブランドは利害関係者の頭や心の中に存在するのであって、パッケージの側面にはない、ということをおぼわしている。パッケージは単にブランドの名前であり、ロゴであるにすぎない。言い換えれば、企業はブランドの名前やロゴを所有しているが、利害集団がブランドを所有している。利害集団の人たちの頭の中で生きているブランドはその利害集団が独自で統合するブランド・メッセージの「東」をもとに形成され、修正される。したがって、ブランド・メッセージを統合化できない企業は、利害集団に対するメッセージ統合化過程を放棄したことに等しい。

図3で示したように、シュルツのIMCの概念モデルには、企業内のあらゆる部門や職能分野はそれなりのコミュニケーション軸をもっているということを想定している。企業がブランド・メッセージを送っているという事実がIMの価値を理解するのに決定的に重要である。商品が簡単には入手できず、価格が高すぎると知覚され、サービスが遅くまたは雑であると思われ、広告が侮辱されていると取られ、販促が複雑すぎたり、誤解されたりしているとするならば、その結果は、否定的なメッセージとなり、ブランド関係性を低下させることになる。

価値連鎖は産業経済的モデルをもとにしており、インサイド・アウト視点をとっているために、最終的販売が完了した時点で終了する。価値連鎖は、関係性の付加価値的役割や顧客との2方向的なコミュニケーションが入る余地がない。そのリニアなアプローチは、商品に基盤を置いたトランザクション・ベースの伝統的なマーケティングを説明するのには役立つ。しかし、価値連鎖は、価値をプラスしたり、マイナスしたりする重要な利害

集団の相互作用は説明できない。

価値連鎖メタファーは、ブランド環境（これは、ジェームス・ジョーンズがエコシステムと呼んでいるもの）を構成している多様な関係性の双方向的な特性を見逃している。しかし、「価値範囲」(value field)モデルは、ブランド・エクイティは関係性の範囲の結果であり、価値を付け加えることは継続的で重複的な相互作用をともなった非線形でダイナミックな過程であるかを示す。

ブランド関係性に焦点を当てるのが特に重要である。今日でも、近い将来でも、事業における価値の単位は、もはや商品ではなく関係性である。倉庫に商品を満杯持っている企業は、利益率の高い顧客、見込客、その他の支援利害関係が満載のデータベースをもっている企業ほどには豊かとは言えない。

しかし、ほとんどの企業はトランザクションを重視しており、関係性を重視していない。このブランド関係性をダンカン、モリアティは、図4のようにまとめている。このモデルは次のような特性を持つ必要がある。⁽¹²⁾

(1) 戦略的一貫性を開発すること

ブランド関係性を構築することは、ブランドのトータル“コミュニケーション・パッケージ”を管理する必要である。いろいろなコンタクト・ポイントで伝達されるメッセージのすべてがモニターされねばならない。戦略的一貫性は、顧客や利害関係者のマインドに、ブランド・イメージやポジションや名声を創造したり、喚起するすべてのメッセージをコーディネートすることにある。ブランドが言っていることやしていることに一貫性が少なくなるほど、そのブランドは焦点がぼけたり、拡散したり、ファジーになる。

核価値とミッション、企業理念、ブランド・アイデンティティといった戦略的基盤領域での一貫性が確保されるまでは、実効的な一貫性を保とうとすることによって、得るものは少ない。これらの各階層でより一貫性が高ければ、それだけ顧客のマインド内により明確になり、鮮明になり、予測可能になる。ブランドがより鮮明になり、予測可能であれば、容易にアイデンティティ化が進み、想起率もよく、信頼度が高くなる。

ブランド・メッセージをコントロールしたり、影響したりすることがブランド関係性を管理する基礎であるから、こういったメッセージがどこから派生するかを識別することは重要である。言い換えれば、誰が、どのような部門や製品や人々がメッセージの源泉となるか。企業のあらゆる要素やそのプロセスがコミュニケーション軸

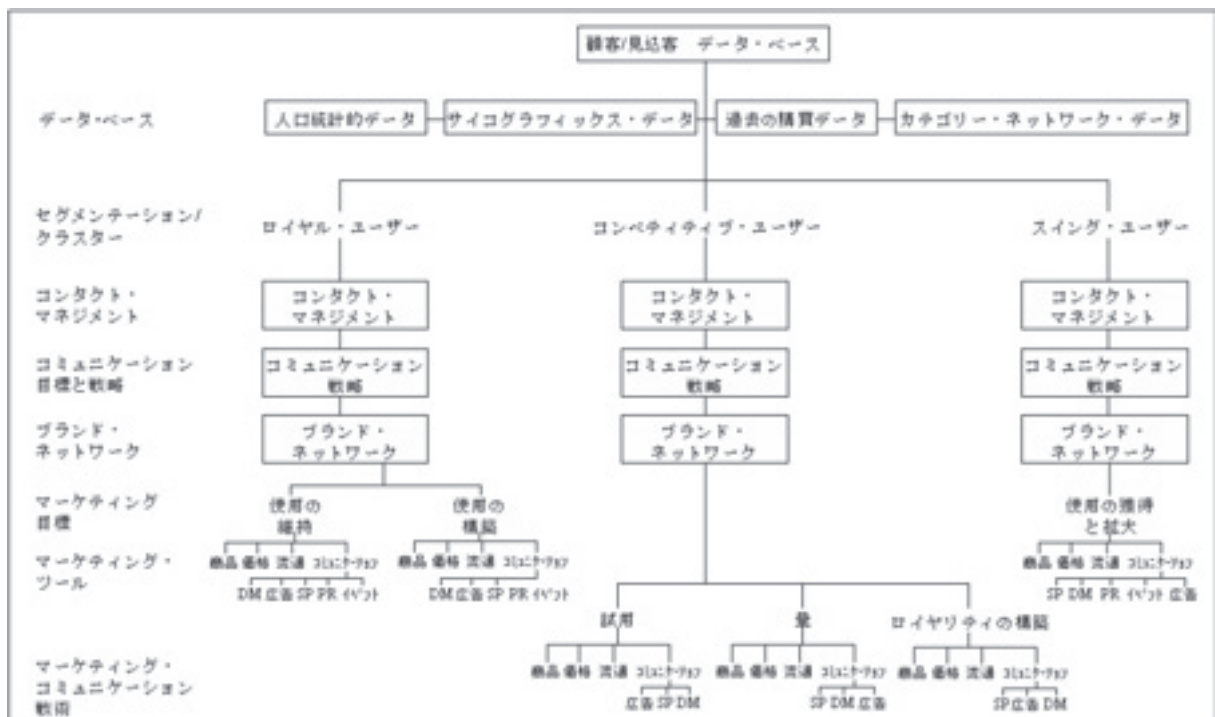


図3 SchultzのIMC概念モデル

DM=Direct Marketin, SP=Sales Promotion, PR=Public Relations

出所：D.E.Schultz, & I.T.Stanley, & R.F.Lauterborn, “Integrated Marketing Communications”, NTC Business Books, 1993, p.54

をもっている。重要なメッセージ源泉が識別されると、メッセージをコントロールしたり、影響したりために、戦略と戦術が開発される。そして、メッセージは一貫しているかどうか、互いを強化しているか、そして、より重要なことは、互いに矛盾していないかどうかを確認する。ブランド・コンタクト・ポイントの分析を通じて次のようなブランド・メッセージの4つの源泉が発見された。つまり、商品メッセージ、サービス・メッセージ、企画されたメッセージ、企画されないメッセージの4つである。

この企画メッセージは、伝統的なマーケティング・コミュニケーション・メッセージである。そこには、広告、セールス・プロモーション、人的販売、マーチャンダイジング資材、PR、イベント、スポンサーシップ、パッケージング、イベントなどが含まれる。

企画メッセージは、ブランドや企業がでさうる約束を確約することを狙っている。企画メッセージは、一般にはブランド認知、ブランド・ポジショニング、ブランド知識、購入、サンプリング、付加的情報の請求、購買頻度の増加といった行動的反応の動機づけに責任がある。企画メッセージの一貫性を維持することは、初心者レベルの統合化である。さらにマーケティング・コミュニケーション内での一貫性を維持することも容易である。というのは、これらのメッセージはコントロールされるが、影響され難いからである。マーケティングおよびマーケティング・コミュニケーションの目標は、一貫性を保つために企画メッセージを管理することである。

(2) ブランド価値の推進について

伝統的マーケティングはもはやその存在を正当化できない。企業はガンを治療しないと、もはや単に製品を作り、その価格を決め、その商品を流通させ、プロモーションするだけで存続していくことは期待できない。そのような考え方は、直線的でインサイド・アウト志向である。商品、価格決定、流通がますますコモディティ化するにつれて、長期的で利益率の高いブランド関係性を創造するブランド価値が新しい競争領域に入ってきている。⁽¹³⁾

テクノロジーの発展によって、一方向から二方向、双方向マーケティング関係性環境への移行を推進している。企業にとってブランド関係性をいかに管理するかが、商品自体を管理することよりも重要になってきている。このことは、企業がこのようなブランド関係性を創造するだけでなく、いかに効果的にその関係性を維持し、成長させるかが、ブランド価値を決定することを意味している。このブランド関係性は、図4のようにまとめられている。

伝統的なマーケティング部門はなおもトランザクションのマネジメントに焦点をあててきているために、この部門はブランド関係性をマネジメントする方法を知らない。その結果、マーケティング職能は限界的な存在に追いやられている。マーケティング部門は1990年代の企業環境から消滅しつつある。マーケティングに要求され

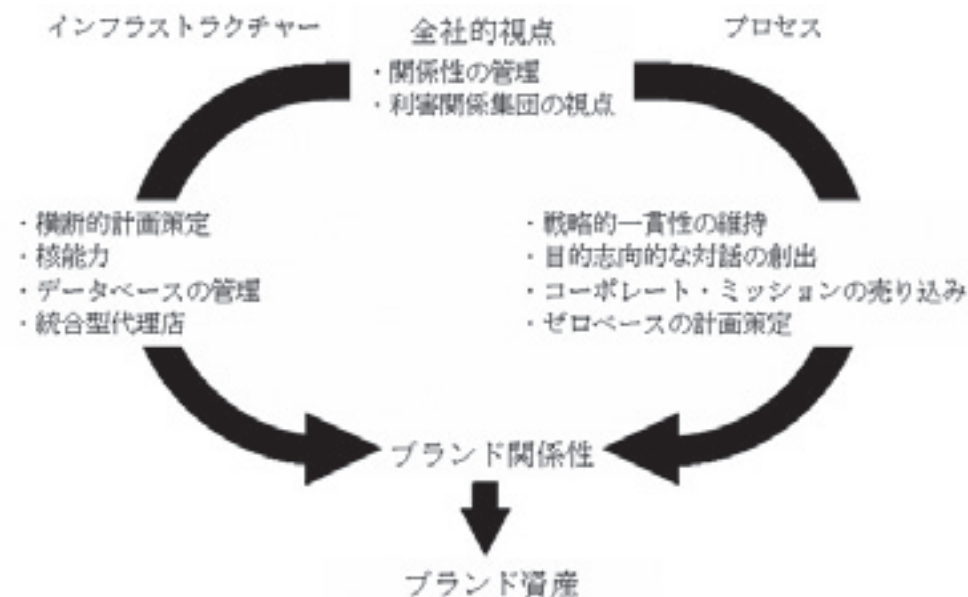


図4 ブランド関係性の推進要因

ることと、マーケティング部門で行われつつあることとにギャップがある。マーケティング実務は確かに改革を必要とする。一つのアプローチはマーケティングを部門と見なすよりもプロセスと見なすことである。ここでは、組織は職能別—マーケティング部門、セールス部門、生産部門—に分割するのではなく、ブランド開発と商品供給システム (delivery system) といったコア・プロセスによって分割される。過去20年間、マーケティング部門はほとんど新しいアイデアを創造していない。

ダンカン (T. Duncan) とモリアティ (S.Moriarty) は、企業と彼らの顧客および他の利害関係集団に向けたブランド価値を開発することを目的とした統合型マーケティング (IM) ビジネスを提案している。⁽¹⁴⁾ 図4で示したモデルでは、ブランド関係性の生涯価値を獲得するだけでなく、それらを維持し、最大化することを狙った概念と双方向過程を提案している。IMは基本的にはビジネスのintangible side をリエンジニアする方法を扱っている。つまり、ブランド価値とブランド資産のマネジメントを対象にしている。そこでは、多くの企業では物質的な資産よりも市場価値資産を持っている。IMは、企業の行動のすべてはメッセージを送ることであるという事実を根拠にしている。企業にいる人はだれでも、「顧客と触れ合う」潜在性をもっている。ブランド・メッセージのすべては次のような3つの効果のいずれかと関連している。⁽¹⁵⁾ まず第1は、付加価値を付け加えることによって、ブランド力を強化する。第2は、現在の関係を再強化する。第3は、ブランド価値を下げることによってブランド価値を弱める。

統合型マーケティングと伝統的なマーケティングとの主要な差は、次の点にある。⁽¹⁶⁾

①伝統的マーケティング (伝統型) は顧客を獲得することに力点が置かれているが、統合型マーケティングでは顧客を維持し、成長させることへ力点が置かれていること。

②伝統型は顧客や他の利害関係集団に対してコミュニケーションするが、統合型はこれらの人たちとコミュニケーションし合うこと。

③マーケティング部門を越えて「マーケティング」責任を拡大すること。すなわちマーケティングを機能別に分割する伝統型とは異なり、統合型は事業を行う理念の方を重視している。

IMはブランド価値を高めて、その関係性を強化することを狙っているために、この理論はいかなる業態にも適用される。たとえば、パッケージ商品、サービス、B to B (企業対企業)、小売、製造企業、非利益企業にあてはまる。また、IMは、他の利害関係集団—従業員、株主、政府統治者、メディア、供給業者、コミュニティ—との関係を管理するために用いられる。

ブランド関係性を管理するプロセスを確立することは重要である。なぜなら、関係性がブランド資産の構成要因であるからである。売上やブランド・シェアは重要である。しかし、それらは過去実績の測定値である。ブランド資産は、ブランドがどのような成果をもたらしたかによって影響されるが、投資家はそのブランドの将来の成果により関心がある。基本的には、ブランド資産はブランドの顧客および他の核になる利害関係集団との関係性との質によって決定される。ブランド資産およびブランド関係性はビジネスのソフトな側面あるいはインタangibleな側面とみなされているがゆえに、企業はリエンジニアリングやダウンサイジングやライト・サイジングによって、弾力性のある領域 (生産、流通、ソーシング、価格決定など) のコストを削減することの方が容易でたやすいと考えてきた。

こうしたコスト削減努力は株価や利益率を高めてきたが、今日では次のような問題が出てきている。このような成果は今後どこまで期待できるか、顧客や利害関係集団との長期的関係性に対する効果はどうだろうか、どのような方法でこういった変化はブランド価値に影響を与えるのか。ブランド資産は大多数の多くの企業の市場価値を反映しているが、戦略的にそれを運営するためになんら手を打たれてきていない。その主な理由として、ブランド資産はなおも無形な資産であるとみなされ、時には大半の人が把握したり、理解したりするのが難しいという点が挙げられている。⁽¹⁷⁾

しかし、ブランド資産はもはやそういったミステリーなものでなくなっている。関係性は測定が可能になってきている。生涯顧客価値は測定可能である。新規顧客に売り込むことよりも、既存の顧客に売り込むことの方が5分の1または10分の1で済む。顧客を経済的に追跡したり、顧客の行動を学習したり、顧客の反応の仕方をより正確に予測したりする能力をもっている。企業が規模的に大きくなり、より部門的に細分化され、マーケティング・コミュニケーション・エージェンシーがより専門化されて、その分野でよりエキスパート化されると、顧客やその他の利害関係集団はますますブランドや企業に関する錯綜したメッセージを受け取ることになる。これまで、過去10年間にわたって企業や代理店はこういった錯綜したメッセージの提供を終わらせ、もっとよい関

係を打ち立てたいと考え、マーケティング・コミュニケーションが「One Voice, One Look」となるように努力してきた。長期的な利益率の高いブランド関係性ははるかそれ以上のものを必要とする。One Voice, One Lookの統合だけでは一般的には失敗する。というのは、その統合化は、戦術に焦点を当てており、顧客に対して話し掛けており、顧客と話し合っているわけではない。One Voice, One Lookを創造することはロジスティクな挑戦である。しかし、ブランド関係性を創造し、開発することは戦略的挑戦である。その場合、組織の仕方から出発する。

利益率の高いブランド関係性を創造し、維持し、成長させる責任は、単一の部門に割り当てるわけにはいかない。その責任はもはや職能ではない。そのことは、なぜIMCがすべての事業部門を包含した横断的プロセスであり、あらゆる利害関係集団を考慮に入れなくてはならないという理由でもある。

IMCは確かにアイデアとしては良いが、それを実行しているところは意外に少ない。逆に組織のあり方を大幅に変更し、企業のこれまでの優先順位も大幅に変更しないと、実行できないことが解ってきた。これは、ブランド関係性の質量を決定する場合には、マーケティング・コミュニケーション（例、広告、セールス・プロモーション、商品パブリシティ、ダイレクト・マーケティング、パッケージング）が、部分的な役割しか果たさない。言い換えれば、長期的に利益率の高いブランド関係性の数を高めるためには、IMC以上のものが必要である。そのようなブランド関係性は全社的視点に立った横断的プロセスや、新しい報酬システムや、核能力や、顧客との双方向性を追跡するデータベース・マネジメント・システムや、あらゆるブランド・メッセージにおける戦略的一貫性、企業ミッションのマーケティングや、ゼロ・ベースのマーケティング計画を必要とする。

IMCは氷山の一角にすぎない。費用対効果的な関係性構築過程を持つためには、再統合型マーケティングが必要とされる。IMCとIMとの差は、化粧品と性格形成過程との差のようなものである。化粧品は人々をより美しく、しかもより魅力的にしてくれる。しかし、行動と性格が一貫していないと、魅力的にみえた人はその関係性が消滅していく。いいかえれば、企業の他のアクションにとって強力なメッセージが送られてくると、マーケティング・コミュニケーションは役に立たなくなる。IMは現在の顧客から反復的ビジネスを効率良く創出している方法に焦点を与えているデータベース・マーケティングよりも広範囲で包括的になってきつつある。

また、データベース・マーケティングは、IMの基本要素である。その理由として、IMは、IMC、ダイレクト・マーケティングや関係性よりも、よりマクロ的であり、より包括的である。IMはトップ・マネジメントの承認とコミットメントを必要とする。統合化された組織、顧客や利害関係集団に耳を傾けることを強調したコミュニケーションを必要とする。統合型マーケティングとは、利益率の高いブランド関係を管理する横断的プロセスを意味している。このブランド価値の管理は、次のような方法で人々と企業学習とを融合することによって達成される。第1は、ブランド・コミュニケーションで戦略的一貫性を維持し、第2に顧客や他の利害関係集団と目的志向的な対話を促進し、第3にブランド信用を高める企業のミッションをマーケティングすることである。

4. IMCの戦略立案と企画のプロセス

このようなIMC企画を具体的に立案する場合に、メッセージ・シナージ企画が、重要なステップとして注目されている。その企画の中でクリエイティブ・ベリフ（Creative Belief, CB）の基本概念が、そのシナージ効果を果たす。それはつぎのような特徴を持つ必要がある⁽¹⁸⁾。

(1) ターゲットに関して、欧米CBにおける「ターゲット」は記述の迫真性、発想誘発性が重視される。一人の人間としての「受け手」と「製品」から導かれる。ユーザーは「消費者」としてではなく、「人間」として扱われる。「フォト・ソート」（写真によるイメージ分類）と呼ばれるプロセスは、一般消費者に複数の人物が写っている写真を渡して「この人達の中でこのブランドを使うのは誰か」と尋ねる。「消費者のニーズ」ではなく、「人間のニーズ」という表現がされる。また「ターゲット」という言い方自体「誰にあなたは語りかけようとするか」という規定が多用される。語りかける相手が目の前にいるかのような、思考、暗黙知のすくい上げが表現企画において有益である。

したがって、潜在顧客のプロフィールをいきいきと描くことは、「機会のためのキーファクト」やオリジナルな「コンシューマー・インサイト」に繋がる発想を誘発させる。また、ターゲットにとって企画されるメッセージが適切であるかどうかチェックできる。

(2) ベネフィットに関して、欧米CBにおけるベネフィットは、購入基準からではなく、生活の「問題」から導く。たとえば、ドッグフードについてどのような製品が欲しいかという観点では「栄養」、「味」などである。しかし、ドッグフードについて何か困ったことがあったかと尋ねると、「犬の口臭」「ドッグフードの匂い」「食

べ散らかし」について不満が聞かれる。後者を生活の問題の中から導かれるベネフィットのヒントとして重要視すべきである。

(3) 広告表現の与える効果と影響について、欧米CBにおいては企画すべき広告の接触前である現在と、将来の広告の接触後において期待される望ましい反応後の2時点での「確信」、「態度」、「ブランド連想」等の違い、2時点の間の「ギャップ」、「距離」が強調され広告の果たすべき機能、役割が期待される。

(4) 選好とシンプルさに関して、選好にとっては、シンプルさが重視されている。

欧米の広告主、広告会社によって利用、主張されているCBは、広告表現が企画段階（制作、露出前段階）で最大限の「効果性」をいかに確保すべきかという実務家の知恵がコンデンスされたものである。なぜならば、広告主であれ、広告会社であれ、過去、ある特定の広告表現が実施後、他のマーケティング変数だけではなく、とりわけ広告表現が効果を挙げたケースとそうでなかったケースを数多く経験しており、その学習結果がCBに反映されていると考えるからである。また、広告会社のCBはそれ自体その企業のキャパビリティ（Capability）、優位性主張のPRでもあるので、その内容は、単に「うたい文句」と切り捨てられない知恵の蓄積があると考えられる。そのようなCBは、もともと必ずしも広く流布されているものではないが、「広告表現の企画」上での「効果性」の扱われ方に関して、妥当性、信頼性のある智恵を整理習得できる。

5. むすび — IMC 基本概念の統合化

以上検討してきたように、IMCの基本概念と第1章で検討したMC基本概念とは基本的に異なっていることが理解できる。まず、第1に本研究では、IMCモデルを図5のようにまとめている。この図の特徴は、広告を行う主体者である広告主企業は、基本的に商品から発想するのではなく、常に消費者の視点にたつてアウトサイド・インに考える企業が中軸になっている。このような広告主を「マーケットイン型広告主企業」と呼んでいる。

第2にこのモデルで重要な役割を果たすのは、同じ消費者でも「マス消費者」ではなく、生活向上を目指して自ら情報収集し、生活設計を立案していく「知的消費者世代」が主役を演じている。このような知的消費者に対して、当然、対一の関係で、双方向的な関係性を重視しているために、広告主企業とパートナーシップを組みながら、消費者情報を共有化し、自ら統合型コミュニケーション・エージェンシーとして機能していこうという広告企業が力を持つてくる。この統合型コミュニケーション企業の各能力は、媒体計画ではなく、消費者に多面的に接点をもってシナジー効果を発揮するメッセージ企画力である。これまで広告表現意思決定と言われてきた領域が重要になってくる。

一方、媒体提供者も、その売り物である媒体自体がこれまでのアナログ・メディア中心ではなく、アメリカ政府自体が力を入れているスーパーハイウェイを大前提にしたデジタル・メディアへと大きく変容していくことが予想されている。まさに「メガ・メディア」⁽¹⁹⁾ が急速に浸透してきつつある。他方、広告コミュニケーションの立場から新しいIMCの体系としてのシステムが、ロシター(J. R. Rossiter)とパーシ(L.Percy) (1997) によって提案されている。⁽²⁰⁾

シュルツ(D.E.Schultz.)によって提唱されたIMC計画モデルでは、サージ(M.J.Sirgy.) (1998) は、いくつかの問題点があると指摘している。基本的な点として、シュルツの理論は、マーケティング・コミュニケーション戦略の立案部分が欠落している、と指摘している。この点に関して、つぎのように述べている。⁽²¹⁾

(1) 「マーケティング担当者は広告、ダイレクト・マーケティング、セールス・プロモーション、パブリック・リレーションズ、イベント・マーケティングといった戦術(tactics)を選んで、コミュニケーション戦略を実行し、そしてマーケティング目標を達成する。もちろん、こういった考えはすばらしい。しかし、この考え方には、意思決定全体の階層を考慮していない。マーケティング・マネジャーがマーケティング・コミュニケーション・ツールに関して意思決定をする前に、マーケティング・コミュニケーション戦略を立案する必要がある。」

(2) さらに、サージ(M.J.Sirgy) (1998) は、この戦略問題以外に、シュルツの理論の問題点として次のような3点を指摘している。⁽²²⁾

- ①まず予算問題を扱っていない。この問題は、マーケティング・コミュニケーションでは重要である。
- ②モニター&コントロールの問題を扱っていない。
- ③マーケティング・コミュニケーションやマーケティングや事業戦略の文献であまり使われていない狭い概念を使用している。

こういった欠落部分を修正して、サージ(1998)は、システムズ・アプローチを用いて図5(IMCのシステムズ・

モデル)で示したシステム・コンセプトを提案している。彼は、システム・コンセプトを次のように説明している。⁽²³⁾

「システムズ・コンセプトおよびモデルとは、人々～特に意思決定者やマネジャー～がより良い意思決定の支援をするように設計されている。真空状態では意思決定はできない。意思決定は、計画、プロジェクト、キャンペーンといった文脈のもとでおこなわれる。その目標は、システムの整合性(たとえば、計画、プロジェクト、キャンペーンの整合性)を確保するような効果的な意思決定をすることにある。」

このシステムズ・コンセプトのもとに、図5に示しているように、3つの基本的なシステムズ・コンセプトを強調している。

- (1) 「戦略」→「目的」→「戦術」→「予算」
- (2) 「分析」→「計画」
- (3) 「モニターリング」→「コントロール」

(1)のシステム部分は、大きくは、企業の意思決定の階層にそって、「全社的意思決定」、「マーケティング意思決定」、「マーケティング・コミュニケーション意思決定」の3段階に区分される。「戦術的なMCツールの選定が行われるにしても、その前に取り巻く市場動向や競争環境を考慮してMC戦略を立案する必要がある。

(2)のシステムのコントロール部分は、フィードバック・メカニズムが作用する部分である。もし(1)でたてた計画が予定通りに進行していないと、赤信号がでて、何らかの修正的アクションをとる必要がある。戦略やそれと対応した戦術を変更するか、予算を変更するか、目標自体を修正するか、いずれかのアクションをとる必要がある。

(3)のシステム部分は、MC・マネジャーが情報を集めてそれを分析し、全社レベル、マーケティング・レベル、MCレベルのそれぞれで意思決定をする。このような意思決定の内容は、収集し、分析する情報によって、左右される。要するに、この分析と計画部分は、関連情報をマーケティング・マネジャーに提供することによって、意思決定を促進させることが目的である。

IMCとMCとではこういった基本的なインフラの部分で大きな相違点を持っている。こういったIMCをシステムの的にとらえると、つぎのような2点で従来のMCシステムの基本概念と異なってくる。⁽²⁴⁾

まず第1は、IMCの持つ「統合性」である。これは単に社内におけるマーケティング機能を統合するといった従来のマーケティングとは根本的に異なって、つねに消費者の性格設計を情報面で支援しようという消費者本位の思想が企業の重要な理念として尊重されている。⁽²⁵⁾

第2は、IMCの持つ「双方向性」である。このことは、情報技術の発展により、個々の消費者の買い物動向にマッチした「カスタマイズ」した対応が可能になってきた。とくに顧客データベースを出発点にしたマーケティングが実用可能になってきたことが、このような双方向的マーケティングを可能にしている。⁽²⁶⁾

IMCの基本概念を統合化することにより、IMC推進企業のブランド関係性を高めて、国際競争力を高めるこ

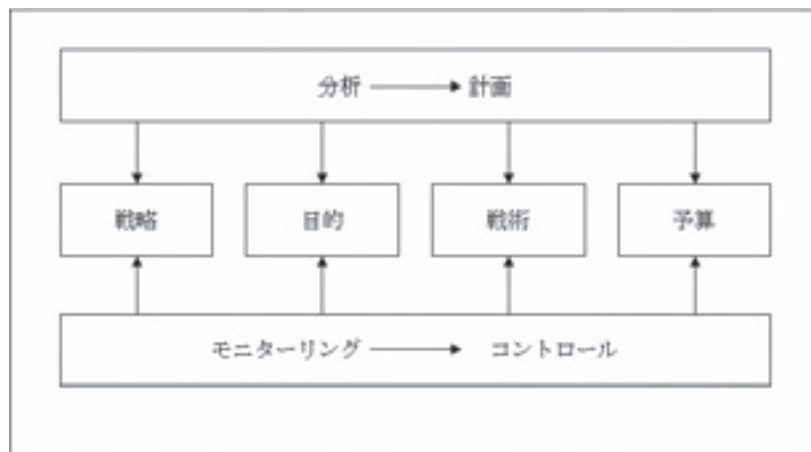


図5 IMCのシステムズ・モデル

出所：M.J.Sirgy, "Integrated Marketing Communication: A System Approach" Prentice Hall, 1998, p.24.

とになる。IMCシステムが、いよいよグローバル競争社会に登場しつつある。

(注)

- (1) 向井鹿松「流通総論—マーケティングの原理」中央経済社, 1980年, p.241.
- (2) 加藤勇夫「マーケティング・アプローチ論—その展開と分析」[増補版]白桃書房, 1982年, pp.138-142.
- (3) G.E.Belch, & M.A.Belch, “Introduction to Advertising and Promotion: An Integrated Marketing Communication Perspective”, Richard D. Irwin Inc., 1993, pp.3-34.
- (4) G.E.Belch, Ibid., pp.9-34
- (5) ドン・E・シュルツ, スタンレー, ロバート著, 有賀勝訳「広告革命—米国に吹き荒れるIMC旋風」, 電通, 1994年, pp.3-83.
(D.E.Schultz, & I.T.Stanley, & R.F.Lauterborn, [1993], “Integrated Marketing Communications”, NTC Business Books.)
- (6) ドン・E・シュルツ「来るべきコミュニケーションの将来像」, 月刊アドバタイジング, 1993年12月号, p.13.
- (7) ドン・E・シュルツ「来るべきコミュニケーションの将来像」, 月刊アドバタイジング, 1993年12月号, p.18.
- (8) ドン・E・シュルツ「来るべきコミュニケーションの将来像」, 月刊アドバタイジング, 1993年12月号, p.23.
- (9) 有賀勝「統合型マーケティング・コミュニケーション (IMC) の実際」DIAMOND ハーバード・ビジネス Feb-Mar., ダイヤモンド社, 1996年, pp.29-37.
- (10) ドン・E・シュルツ, スタンレー, ロバート著, 有賀勝訳「広告革命—米国に吹き荒れるIMC旋風」電通, 1994年, pp.3-83.
(D.E.Schultz, & I.T.Stanley, & R.F.Lauterborn, [1993], “Integrated Marketing Communications”, NTC Business Books.) p.54.
- (11) T.Duncan, & S.Moriarty, “Driving Brand Value”, McGraw-Hill, 1997, p.9.
- (12) T.Duncan, & S.Moriarty, 1997, Ibid. p.16.
- (13) 小林太三郎「生きる広告。12章」電通, 1994年, pp.52-58.
- (14) T.Duncan, & S.Moriarty, 1997, Ibid. p.16.
- (15) T.Duncan, & S.Moriarty, 1997, Ibid. pp.15-16.
- (16) T.Duncan, & S.Moriarty, 1997, Ibid. pp.16-18.
- (17) 菅原正博, 市川貢, 増田大三「次世代広告コミュニケーション」中央経済社, 1998年, p.34.
- (18) Duncan, Ibid., Chapter 12 “Create Partnership with An Integrated Communication Agency”, pp.231-258.
- (19) 水野由多加「広告表現計画における表現効果に関する実践的示唆のための一考察」広告科学, 第35集, 1995年, pp.165-171.
- (20) JR.Rossiter, Larry Percy, “Strategies for Implementing Integrated Marketing Communications”, NTC Business Books, Chapter 3 (IMC Planning Tools), 1997, pp.43-74.
- (21) ドン・E・シュルツ, スタンレー, ロバート著, 有賀勝訳「広告革命—米国に吹き荒れるIMC旋風」, 電通, 1994年, pp.22-28.
- (22) M.J.Sirgy, “Integrated Marketing Communication: A System Approach” Prentice Hall, 1998, p.19.
- (23) M.J.Sirgy, Ibid., 1998, pp.19-21.
- (24) Duncan, Ibid., pp.100-110.
- (25) 菅原正博, 市川貢「次世代マーケティング」, 中央経済社, 1997年, pp.84-86.
- (26) 菅原正博, 市川貢 [前掲書]pp.103-109.

『ゴシック入門』増補

比名 和子・金崎 茂樹 訳

平成 22 年 10 月 29 日受理

Supplementary Translations of *The Handbook to Gothic Literature*

Trans. Kazuko Hina & Shigeki Kanasaki

We, Gothic Reading Group, translated *The Handbook to Gothic Literature* (Macmillan, 1998) edited by Marie Mulvey-Roberts, and published its Japanese version in 2006 from Eihosya under the Japanese title. In 2009, Macmillan published the second edition of *The Handbook* with some new items added, which four of our group (Sugiyama, Kanzaki, Hina and Kanasaki) again attempted to translate into Japanese. Here are some translated by Hina and Kanasaki.

キーワード：ゴシック作家 (Gothic writers)、ゴシックコンテキスト (Gothic contexts)、ゴシックの地域性 (Gothic locations)

はじめに

私たちゴシックを読む会は、Marie Mulvey-Roberts 編集による *The Handbook to Gothic Literature* (Macmillan, 1998) の邦訳を、共訳 (杉山洋子、金崎茂樹、神崎ゆかり、比名和子、他 2 名) の形で、2006 年、『ゴシック入門：123 の視点』と題して英宝社より出版した。その後 2009 年に原著の改訂版が出版され、いくつか新しい項目が追加された。これらの項目を杉山、神崎、比名、金崎の 4 名で新たに訳出したが、次に挙げるのは比名、金崎担当分である。各項目ごとに付記した数字は、改訂版のページ数を示す。また、執筆者、翻訳者名は項目の最後に記してある。

Collins, (William) Wilkie ウィリアム・ウィルキー・コリンズ (1824-1889) (20)

ウィルキー・コリンズは 1824 年ロンドンで生まれた。父ウィリアム・コリンズは風景画家でロイヤルアカデミーの会員、弟のチャールズ (チャーリー) はぱっとしない画家で小説家であったが、チャールズ・ディケンズの娘ケイトと結婚した。コリンズはディケンズと親しく活動し、ディケンズが編集していた『ハウスホールド・ワーズ』『オール・ジ・イヤーズ・ラウンド』誌に数多くの物語を寄稿した。また共同で『ぐうたら徒弟漫遊記』(1857) を執筆している。コリンズの初期の短編にはゴシックかぶれの殺人未遂の物語「恐怖のベッド」(1852) などがあつた。のちにこの物語は「シスター・ローズ」「グレンウィズ館の女主人」「黄色のマスク」「ゲイブリエルの結婚」など、ゴシック色の濃い短編とともに作品集『暗くなってから』(1856) として出版された。こうした短編を読めば、コリンズが超自然の出現よりも人間ドラマの開拓に一層関心があり、その後のセンセーション小説の基調ともなる、狂気、人違い、破産といったテーマを特色としているのがわかるだろう。ディケンズはコリンズの物語を多数出版したが、「マッド・モンクトン」は拒絶した。狂気が遺伝するというテーマが読者の感受性をかき乱すのを恐れていたことであつた。

コリンズが書く「悪」は、舞台演出をしているかのような独特の感触があり、(自らも書いたことがある) 大衆的なメロドラマの影響がうかがえる。『バジル』(1952) の「献辞」で明言しているように、自身の文学的野心は舞台と小説の要素を結合することで、それというのも「小説は語られたドラマで、舞台は演じられたドラマ」だからである。小説とメロドラマが結びついた、メロドラマティックな小説とはすなわち、伝統的な女性ゴシックをとりこんだということになる。たとえば『白衣の女』(1860) は初期の演劇とラドクリフ的女性ゴシックの書き換えとして読むことができる。因習的なジェンダー観に根ざした筋書きをはっきりと批判しながら、監禁、狂気、身元の混乱などが小説に現れる。コリンズの 1860 年代以後のセンセーション小説は、ゴシックの初期の伝統を

手がかりにしながらも、よりどころは犯罪のイメージである。犯罪の解決とは、表面上、ゴシックの脅威的な転覆よりも秩序の回復を意味するものである。ところがコリンズの作品の過激なところは、当時広く受け入れられていたジェンダー観や法に挑んだことにあり、『秘中の秘』(1857)、『ノー・ネーム』(1862)、『法と淑女』(1875)といった小説のテーマになっている。『月長石』(1868)などは、ゴシック的オリエンタリズムによって帝国に関する論争が歪められるさまを読みこむこともできる。

ときおりコリンズは「ブリッグ船もろとも吹っ飛びな」(1859)、「ジョン・ジャーゴの幽霊」(1874)、「ミス・ジェロメットと牧師」(1887)といった幽霊物語を書いてはいるが、その関心は幽霊よりも主人公の秘匿された過去や不安にあり、その「亡霊めいた」性質にあった(「ジョン・ジャーゴの幽霊」のジョン・ジャーゴは死者ですらない)。中編小説『幽霊ホテル』(1878)でも、超自然的な要素を使用しているとはいえ、それはただ中心となる犯罪プロットのドラマを明らかにしてくれるからであって、その簡潔さが、コリンズが五幕ものの芝居構造に依拠していることをはからずも明らかにしている。(アンドルー・スミス/金崎)

Dacre, Charlotte シャーロット・デイカー (1782?-1825) (21)

シャーロット・デイカーのもっとも有名な小説『ゾフロイア、またはムーア人』は、1806年に出版されたが、『リテラリー・ジャーナル』(1806)の批評で、「作者は脳に蛆のわく鬱病に罹っている」とききおろされた。金儲けのためのお粗末なゴシック小説とみなされたとしても、悪魔的崇高をこれほどまでに誇張した表現は、バイロンやP・B・シェリーを刺激して、シェリーは『ゾフロイア』に倣って、初期の中篇小説『ザストロツィ』(1810)を書いた。彼は、子どもの頃から、ローザ・マチルダ(デイカーのペンネームでマシュー・ルイスの『修道士』(1796)に登場する魔性の女マチルダに由来)の詩に傾倒していた。その詩は、クルスカアカデミー派の感傷的な詩に影響をうけている。ハンナ・モアの小説『妻を求めるカイレブ』(1809)の福音主義者の主人公は、将来の花嫁候補がヴェルギリウスよりもローザ・マチルダを好むからという理由で、候補として却下する。

デイカーはシャーロットキングで生まれた。姉のソフィアも作家で、ふたりで1798年に『ヘリコーンの戯れ』という詩集を出版した。当時の批評家が『マンスリー・リテラリー・リクリエーションズ』で「忌まわしく下品」と嘆いた『ゾフロイア』のほかに、デイカーには3つの小説がある。もっと抑制のきいた『放蕩者』(1807)、ヒロインがやはりゴシック的悪女である書簡体小説『受難』(1811)、ルイスに献呈された『聖オマルの尼僧による告白』(1805)。この小説における教訓の主眼点は、女性は子どもの頃に適切な指導を受けなければいかに易々と誘惑の餌食になってしまうかというものである。このようなウルストンクラフト的な考え方は、『ゾフロイア』にも採り入れられている。ヒロインであるヴィクトリア・ディ・ロレンダーニの母、ロリーナは、幸せな家庭生活を破綻させようとつけねらう放蕩者のアドルフに誘惑される。母親の性的な墮落が罪深い娘を生む。デイカーは、ゴシックのステレオタイプを修正して、感傷的ゴシック小説における女性の理想像たるライバルを破滅させていくヒロインを描く。ヒロインは、ライバルの女性を何度も刺し、その遺体を崖から投げ捨てて、「妖精のように優美な身体」がはずみながら山肌を落ちていくのをサディスティックに眺める。ラドクリフ的な女性のゴシックとマシュー・ルイスのような男性のゴシックを混交させて、デイカーは感傷的ゴシック小説と悪漢ゴシック小説の両方を転覆させる。ヒロインのヴィクトリアは、召使のムーア人ゾフロイアに対して性的欲望を抱いて、階級と人種両方の境界を侵犯する。ゾフロイアはヴィクトリアがゆっくり時間をかけて夫を毒殺していくのを手伝い、彼女の共犯者となって、最終的にはその正体がサタン(悪魔的なものの項参照)であることが露見する。

デイカーの夫、ニコラス・バーンもまた殺害された。彼は1883年に、黒いマスクをした正体不明の人物に刺殺された。デイカーが亡くなって8年後に起きたこの殺人事件の詳細は、40年間にわたって秘匿された。デイカーは、長い闘病生活の後、1825年11月7日に死亡したが、ポール・ベインズが指摘するように、彼女の誕生の年が謎に包まれているので、正確な死亡年齢は不詳のままである。(マリー・マルヴィ=ロバーツ/比名)

Oliver Onion オリヴァー・オニオンズ (1873-1961) (66)

ジョージ・オリヴァー・オニオンズは、数冊小説を出しているが、まず英国幽霊物語の伝統に貢献したことで記憶されている。短編はよく幽霊物語のアンソロジーに収録されているとはいえ、このジャンルが連想させるよりももっと広範に超自然の力をさばいてみせた。オニオンズの作品は19世紀を支配していた典型的なゴシックの形式から離れ、幽霊とはもっと主体的なものと再定義した。幽霊は作品にめったに現れず、知らぬ間に聴覚や触覚にまわりつく。幽霊という他者から幽霊のような自己へと向かうこの革新的な動きが、作家としてのオニ

オンズの幽霊定義の基軸である。その幽霊物語は長期にわたる歴史の影響を受けていて、「ベンリアン」(1911)のようにいまだ世紀末の美学的過剰さに浸っているエドワード朝に始まり、「いかだ乗りのロープ」(1935)、「ジョン・グラッドウィンが言うには」(1928)などの、モダニズムと第一次大戦における複雑な心理や主体の危機へと進んでいき、その間ずっと独自の幽霊を生みだしてきたのである。

オニオンズが言及する物語のテーマは古代の神話から芸術創造のトラウマまで幅広いけれども、執拗な欲望劇とその致命的な結末が共通のテーマとなっている。「紫檀の扉」(1929)や「塗られた顔」(1929)は明らかに亡霊めいた性欲を隠喩として秘めている一方、「墓碑銘」(1911)や「ブロンズの復活」(1935)では、自律的な芸術作品を創造したいと願うその欲望こそが、不気味な主体なのである。オニオンズの幽霊物語のなかで最も名高い「手招く美人」(1911)はこの性欲と制作欲がせめぎあう。そこでは魅力的な夢魔に憑かれた物書きが、憑依の舞台として進行中の小説から住家へと自由に往来する。現実と芸術の齟齬、憑かれた主体が行き場のない亡霊めく欲望をうまく処理できないこと——どうやらこれがオニオンズの幽霊物語の不安の中心であるようだ。

(レイチェル・ジャクソン／金崎)

Comic Gothic 喜劇的ゴシック (109)

ゴシックというジャンルははっきり線引きしにくく、またそのように曖昧なところを玩ぶものだとこの頃になって研究者たちもわかってきた。つまりゴシック小説では身体的、心理的、社会的境界が侵犯され、変化が起こる。こうしてゴシックは頻繁に喜劇とホラーの境界を開拓しているのだが、その方法については注意が払われたことがない。だがまさにこうしたゴシックテキストの異種混交性のおかげで、相容れることのないものを効果的に並べて、ホラーやテラーを前にしながらも喜劇的に展開していく可能性が開かれるのである。このことは、最初のゴシック小説であるホレス・ウォルポールの『オトランド城』でも明らかであり、友人宛の手紙でこの作品を喜劇的ゴシックとして次のように売り込んでいる。「あなたを泣かせることは自慢にもなりません、もしあなたを笑わせれば満足です」。ゴシック小説がオペラやメロドラマやサーカスの登場とほぼ軌を一にしているのは偶然ではないだろう。これらはすべて、恐怖あり笑いありの近代社会に対してきわめて感情的で複雑な反応を呼び起こすからである。「まじめ」対「笑い」に二項化するより、むしろ幅をもったひとつの領域としてゴシックテキストをとらえるほうが賢明だろう。一方では、『ドラキュラ』でヴァン・ヘルシングが「王の笑い」の侵入と見なした) 笑いのヒステリーの発作を描くホラーが生まれ、他方では『ロッキー・ホラー・ショウ』のように、まじめに受け入れようがないとはっきり示された作品が生まれている。後者は、ゴシックのプロットや道具を誇張して極限まで自己パロディ化をはかろうとすることによって、喜劇的效果を狙っている。

(アヴリル・ホーナーとスー・ズロスニク／金崎)

Gothic Graphic Novel and Comics ゴシックのグラフィック・ノベルとコミック (141)

ゴシック文学はもともと^{グラフィック}絵画的であるから、ダークファンタジーの人物はコミックによくなじむ。アメリカのコミックは「怪談」向けの雑誌の新たな表現手段として登場した。DCコミック社の編集者ジュリアス・シュワルツはその分野の大御所H・P・ラヴクラフトの著作権代理人であった。ゴシック小説、とりわけ『ドラキュラ』は1940年代からコミック化されている。イギリスのコミック作家アラン・ムーア率いるヴァーティゴ・コミックはストーカーやラヴクラフト、ポーを思わせ、その『フランケンシュタインの怪物』はモンスターを疎外されたスーパーヒーローに変え、『ウルフスベイン』では突然変異の狼男になる。その他の翻案ものにはロレンツォ・マトッティの表現主義的な『ジキルとハイド』(2003)やミーナ・ハーカーが登場するムーアの『怪人連盟』(1999)がある。ポーは『ドリーミング』56号(ヴァーティゴ1996-2001)のなかで、妻と死別し、『バットマン—ネヴァーモア』(DC 1980)でヴィクトリア朝のバットマンと出会う。アン・ライスの作品もグラフィック・ノベルで読むことができる。

原作オリジナルのコミックのなかでゴシックの概念を伝えるものとして、ニール・ゲイマンの『サンドマン』(1989)、フランク・ミラーの『バットマン—ダークナイト・リターンズ』(1986)、マイク・ミニョーラの『ヘルボーイ』(1994)がある。ジェイムズ・オバーの『ザ・クロウ』(1989)は映画化のおかげでよく知られている。ドイツ人作家のアンドレアス(・マルテンス)は、『ロルク』(1979)シリーズでユーゲント様式とゴシックを結合した。チャールズ・アダムズの人気漫画『アダムズファミリー』が『ニューヨーカー』紙上にひとこま漫画で登場したのが1935年。エドワード・ゴリーのコミカルながらも背筋の凍るヴィクトリア朝ふうの物語や、現代の映画監

督ティム・バートンのアニメもゴスたちのお気に入りである。多くのコミックがゴスカルチャーを引用しているし、『サンドマン』の登場人物のドリームやデスはゴスである。女性作家のゴスコミックでは、エイミー・ウィンフレイの『メイキング・フィンド』(2003)、セリーナ・ヴァレンチノ『グルームクッキー』(1998)、テッド・ネイフェのイラストによるインディーズコミック作家ケイトリン・キールナンの『ドリーミング』(2001)がある。女性主人公が登場するジョーネン・バスケスの『ジョニー・ザ・ホミサイダル・マニャック』は単色カラーのブラックコメディでスレイブ・レイバー・グラフィックス社から7号にわたって出版された(1995-97)。さらにエミリー・ストレンジというキャラクターはコミックの登場人物でだけでなく、ポップ・リーガーとリーガーの会社コズミック・デブリー・エトキャンが「創造した」ものだが、最近のベンチャー企業は彼女のようなゴススタイルをとりこんでいる。(アンナ・パウエル／金崎)

Gothic Music ゴシック音楽 (145)

音楽では特定の単独概念としてゴシックがあるわけではない。事実、1996年の『オックスフォード音楽辞典』に「ゴシック音楽」の項目はない。それ自体として「ゴシック音楽」と名がつくかもしれないものは、互いに排することなく形式も多岐に渡る。シャルトルやノートルダム・ド・パリの偉大なるゴシック大聖堂に代表される時代、あからさまに情熱的で神秘的に熱のこもった作品を生みだしたビンゲンの聖ヒルデガルトのような神秘作家から、1970年代後期から展開していくグラム、パンク、ヘビーマタルを組み合わせた、過剰なロックとしての現代ゴスロックまで一括りにされる。

総じて、古典派やロマン派音楽はゴシックの影響が深い。19世紀、ベルリオーズやリスト、ムソルグスキー、サンサーンスなどの作曲家は、ファウスト神話、死や肉体の腐敗、超自然、中世後期絵画の死者の饗宴などからさまざまな靈感をえた。ワーグナーのオペラは、崇高のイメージにどっぷり浸ってヨーロッパ神話の英雄やヒロインをゴシック化した。ハヴァーガル・ブライアの『ゴシック交響曲』の完成は1927年で、宗教的テーマが真に音楽的に過剰な作品を作り出している。この曲が減多に演奏されないのも驚くにあたらぬ。なにしろおよそ1千人もの歌手や演奏家を要するのだから。

情緒的、そして音楽的過剰、暗黒面への思い入れが、1970年代後期のポスト・パンクから発展した現代ゴシックロックの特徴である。1979年に発表されたパウハウスの曲「ベラ・ルゴシは死んでいる」が決定的だった。ゴス「第一世代」のなかで影響力の強いバンドには、ザ・キュア、ジョイ・ディヴィジョン、スージー・アンド・ザ・バンシーズ、ザ・シスターズ・オブ・マーシーがいる。21世紀になると、ゴスロックはコールドウェーブ、ダークウェーブ、インダストリアル・メタルなどのサブジャンルをとりこみ、一方、主流派ロックでも、ゴシック的な要素が歌詞や気取った暗黒の自己パロディに見られる。(ダイアン・メイソン／金崎)

African-American Gothic アフリカ系アメリカ人のゴシック (266)

レスリー・フィードラーは、『アメリカ文学の愛と死』(1960)で、アメリカ文学を次のように評している。「困惑させられ、赤面してしまうほどゴシック的な文学であり」、道徳的かつ心理的な問題と格闘して、アメリカ人の隠された心の「闇」をあらわにする。アメリカのゴシックは、自国の社会的政治的遺産の暗黒面や「父祖の犯した罪」を直視して、「インディアンの虐殺」と「忌まわしい奴隷貿易」という国家によるふたつの「特殊な犯罪」に全力で取り組む。最近ではカリ・J・ウィンターが、ハリエット・ジェイコブズの『奴隷女の生涯の出来事』(1861)のような女奴隷の自伝をアメリカの黒人系ゴシックの草分けとしている。このような作品は、奴隷の立場を家庭という領域で閉塞した女性の状況と等しいとみなして、イギリス作家アン・ラドクリフによって人気を博した女性のゴシックを採用している。ハンナ・クラフツによって1850年代に創作された奴隷の自伝『女奴隷の物語』にもゴシック的手法があまねく使われている。物語の発端となる犯罪、一連の幽霊屋敷、幽閉のテーマ、トラップ氏と名のる弁護士の姿をした吸血鬼のような迫害者、という具合である。

『アメリカの息子』(1940)の序文におけるリチャード・ライトのことばによると、アフリカ系アメリカ人は現実そのものがホラーに満ちているので、改めてホラーを創造するのにホーソーンやポーは必要としなかった。この観点では、現実の暴力とその形象、実際の奴隷状況とその表象、といった関連性を洞察して理論化するまでには至っていない。ウィンターは、女性のゴシックと女奴隷の自伝は恐怖の性の政治学や抑圧されて意識されずに闇に葬られた父権制の真実を白日のもとにすると述べるが、そのふたつの手法には本質的な違いもまた存在する。再建期以降の南部におけるアフリカ系アメリカ人の現実の状況を社会学的に考察した挑発的かつ詩的な評論、

W・E・B・デュボイスの『黒人の魂』(1903)は、人種間の関係へとゴシックを方向づける。デュボイスの主張では、奴隷解放宣言(1863)から40年を経ても、「国家はいまだその罪のやましきから開放されていない。国家の祭日には奴隷の黒い亡霊がいつもの席に座っている」。父祖の犯した罪は経済的搾取という形の別の奴隷状態で続いており、「2世代を経た甥や従兄や債権者が情け容赦もなく法外な地代を取り立てようとどこからともなく手を伸ばす」。デュボイスによる歴史に拘束された煉獄さながらの南部の描写は極めてゴシック的だ。また聖書の黙示録の諸テーマを統合するヴェールという象徴も。アメリカの非理性的な衝動の貯蔵庫として南部が機能するとき、アメリカのゴシックの地域性が際立つ(アメリカ南部のゴシック参照)。

アフリカ系アメリカ人のゴシックは、20世紀になっても、昔ながらのアメリカのゴシック手法を堅守しており、テレサ・ゴデュが述べるように、「歴史の悪夢がアメリカの神話という夢の世界を攪乱する」。リチャード・ライトによれば、「アメリカの国民生活に、黒人虐待が重く暗い影を落としている」。最近のゴシック作品は、例えばトニ・モリソンの『ピラヴド』(1987)のような旧来のものから、イシュマエル・リードの『カナダへの逃走』(1976)のようなパロディに至るまで、多岐にわたる。アフリカ系アメリカ人の女性作家はとりわけこの手法に卓越しており、国家制度が助長した犯罪や抑圧を暴き出して追ひ払うために、しばしば女性のゴシックと政治的ゴシックを組み合わせている。グロリア・ネイラーの『リンデンヒルズ』(1985)は、都市近郊のダンテ風の黒人社会を舞台とした不気味で政治性のある小説だ。ネイラーは、従来の女性のゴシックにあった夫と看守との境界をあいまいにするような秘密主義の葬儀屋を登場させ、中流のアフリカ系アメリカ人の抑圧的で自己嫌悪の強い性癖を非難する。トニ・モリソンの作品にはしばしばゴシック的要素があるが、なかでも『ピラヴド』はゴシックの傑作である。「この国には垂木に死んだ黒人の悲しみがぎっしり詰まっていけないような家はない」と背筋が寒くなるような断言をして、『ピラヴド』は、独自の手法で、アメリカゴシックの幽霊屋敷の伝統を復活させる。124番地として知られる家を舞台にして、母親奴隷の子殺しという恐るべき行為と、「特殊な制度」と逃亡奴隷法を制定した国家の父祖による犯罪とが、重ねて探究され、安らかな眠りへと向かう。

(キャロル・マーガレット・デイヴィソン／比名)

Anglo-Caribbean Gothic イギリス系カリブのゴシック (276)

18世紀以来、奴隷制によって支えられた農園経営にまつわる不安やほとんど理解の及ばないカリブ海流域の文化慣行を描くのに、ゴシックの言い回しや手法が使われてきた。この植民地空間がテラーの表象の場となったのは、一部には頻発する奴隷の暴動(例えば1760年にジャマイカで起こったタッキーの反乱)や1790年代のハイチ革命の結果である。それらは蔓延する暴力、肉体の切断、陵辱、死の極みだった。イギリスの初期のゴシック作家のひとりであるマシュー・G・ルイスは、1797年の劇『城の亡霊』に黒人奴隷を登場させている。死後に出版された『西インド諸島の農園主の日記1815-1817』(1834)では、オビアによる毒殺や逃亡奴隷の報復行為を物語るのにゴシックを利用した。同様に、イギリス作家シャーロット・スミスの「ヘリエッタの物語」(1800)においては、背景となったジャマイカのブルーマウンテンがヒロインの体験する恐怖を増幅させる。黒人に陵辱されたりオビアとして知られるアフリカの呪術信仰の犠牲となるかもしれないという脅威は、このような恐怖の最たるものである。

マークマン・エリスが「逆転の別名」と述べるオビアは、イギリス系カリブのゴシックにおいて、イギリスの従来のゴシック小説での秘密結社と同じ機能を果たす。オビアは、伝統的に迷信を信じやすい社会において恐怖を触発する。しかしおそらくもっとも重要な点は、オビアが革命の情熱や暴力に結びついていると考えられていることである。このような関連が生じたのは、ヴードゥーの儀式がハイチ暴動の引き金となったせいでもある。シンリック・ウィリアムズは、こういったオビアに関わる恐怖の連鎖を、2巻のゴシック小説『オビアの呪術師ハメル』(1827)に織り込んでいる。ローランドという白人の宣教師は、フランス革命の教義を説いて奴隷の反乱を扇動する。しかし彼自身は地元の農園主の娘に邪な欲望を抱き、グロテスクにも暴力の世界へと墮落して自暴自棄となる。題名の由来となったハメルは黒人の呪術師で、最初はローランドの説教に心を奪われ信奉するが、転向して革命による自由を糾弾するようになる。彼が故郷アフリカの神話的世界ギニアへと隠遁することで、この反革命小説は幕を閉じる。

アフリカ系アメリカ人の文学伝統の場合と同様に、イギリス系カリブの文学においても、例えば『メアリ・プリンスの物語』(バルバドス、1831)のような奴隷廃止論主義小説やスレイヴ・ナラティブでは、奴隷制度を描くのにゴシックの手法を援用した。カリブ植民地の作家は、しばしばゴシックのレンズを通して、まさしく墮落の

極みとしてまた市民や国家による逸脱の極悪さそのものの表象として、農園地主の社会を描いている。ハーバート・ド・リサーによる初期のジャマイカ小説の古典、『ローゼンホルムの白い魔女』(1929)では、「精神的道徳的視野の極めて狭い世界」に住む農園地主の狭小な特権社会が描かれている。奴隷制が終焉する時期のジャマイカにおける暴動を主題とするイデオロギー的には曖昧なこの小説で、ド・リサーは、細部にわたって完璧なゴシック小説を創りあげている。相続人排除、オビア、黒人との混血(人種的逸脱)の脅威、アルコール中毒、道徳的退廃、農園の女主人アニー・パーマーというファムファタールの登場。なかでも最大のテラーとして描かれるオビアを操るパーマーは、おそらく混血で、小説中では「狡猾な悪魔の牙城」とされる土地、ハイチ出身である。植民地主義の悪を警告するこの物語は、バルバドスの砂糖農園の跡継ぎロバート・ルーサーフォードが仕事で3週間パーマーを訪問するところから展開するが、残念なことに、作者リサーの性差別主義やパーマーの象徴としての位置づけの曖昧さのために意図が不明確となっている。

イギリスのゴシック文学の伝統がイギリス系カリブのゴシックに与えた影響は、とりわけ20世紀に頂点に達する。作品の正統的な地位のせいだけでなく、たとえ周縁であったとしてもカリブ地域が物語において重要な役割を果たしているがゆえに、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)やエミリー・ブロンテの『嵐が丘』(1847)に代表されるヴィクトリア朝の古典ゴシック小説は、カリブ地域出身のイギリス人作家によってしばしば書き換えられてきた。例えば、ジーン・リースによる『広い藻の海』(1966)は、パーサー・ロチェスターのソーンフィールド以前の生活を描いて、なるほど『ジェイン・エア』の前篇だと納得させる。またV・S・ナイポールの『ゲリラ兵』(1975)は、革命の潜在的脅威に直面したカリブ海流域のどこもしれない国を舞台に、『ジェイン・エア』とキャサリン、ヒースクリフ、エドガー・リントンの三角関係とを書きなおした。ジャマイカ・キンケードの女性のゴシック小説『母の自伝』(1996)も、ヒースクリフを女性に置換したクシュラを主人公に、やはり『嵐が丘』を書き換えている。クシュラは母の不在という悲劇や帝国主義が遺した複雑かつグロテスクで残忍な負の遺産に憑かれている。このようなブロンテ作品の改訂はまた、時には映画の分野にも及ぶ。例えばジャック・ターナーの『私はゾンビと歩いた』(1943)は、西インド諸島を舞台にした『ジェイン・エア』の翻案に、いわくありげな屋敷、ヴードゥーやゾンビといったゴシック的要素を織り込んでいる。リザベス・パラヴィジニ=ギルバートによれば、ゾンビとは「フランケンシュタインの怪物のカリブ版」(238)なのである。

(キャロル・マーガレット・デイヴィソン/比名)

Japanese Gothic 日本のゴシック (305)

日本のゴシックにはふたつの異なる面がある。ひとつは日本古来のゴシック(怪談)から、もうひとつは西洋ゴシックから継承したものである。

日本の伝統的ゴシックは、古代中国の物語や「もののけ」(怨霊)信仰の影響を受けており、10世紀にまでさかのぼる。『源氏物語』や『平家物語』といったこの時代の多くの貴族階級の物語には「もののけ」のモチーフが使われている。一方、庶民階級におけるゴシック風の民話は動物や死者を題材とした。後にラフカディオ・ハーンはこれらの口承民話を蒐集し、『怪談』(1904)として編纂して、日本のゴシック文学ジャンルの確立に役立った。日本のゴシックロマンスは、江戸後期の歌舞伎(例えば『四谷怪談』1825)のもつ冷酷で妖艶な雰囲気の中で花開いた。

19世紀から20世紀への転換期に、欧米のゴシック形式を受容するに従って、日本では異種混交のゴシックが発展した。それ以降、エドガー・アラン・ポーに因むペンネームの江戸川乱歩が日本の近代社会を舞台に小説を書いたのを始めとして、数多くの日本のゴシック小説が欧米のゴシックと共通の特徴をもつようになった。今日では、日本のゴシックは、ファッションにおける「ゴシック・ロリータ」現象のように、サブカルチャーの分野でもっとも活発である。日本のホラー映画(例えば『リング』1998)のスタイルや手法は、今やハリウッドに逆輸入されているが、これらは日本の伝統的ゴシックの影響を強く受けている。

上田秋成、泉鏡花、芥川龍之介は、日本の主要なゴシック作家としてしばしば名前が挙げられる作家だが、村上春樹や川上弘美のような現代作家の作品にそのゴシック的想像力は継承されている。(小澤英実/比名)

ローマ喜劇における ‘sed’ の訳語について

上村 健二

平成 22 年 10 月 29 日受理

On the Translation of ‘sed’ in Roman Comedies

Kenji Kamimura

The Latin conjunction ‘sed’ is, just like ‘but’ in English, often used in breaking off a subject or passing to a new one, and can sometimes be translated as ‘soreyori’ or ‘sonnakotoyori’ in Japanese. These phrases should be used instead of ‘shikashi’ or ‘daga’ especially in the translations of several scenes in Roman comedies.

キーワード：sed, 翻訳, ローマ喜劇

Key words：sed, translation, Roman comedy

I はじめに：羅和辞典における ‘sed’

ラテン語の接続詞 ‘sed’ は英語の ‘but’ に相当し、多くの場合「しかし」「だが」などと訳される。しかしながら、このような「逆接」の他に「話題の転換」を示す用法もあり、羅和辞典等には訳語として「ところで」「ともかく」「それにしても」「それはさておき」などと記載されている⁽¹⁾。

本稿では、「話題の打ち切り」ないし「より重要な話題への移行」という役割を果たす ‘sed’ を——今のところ羅和辞典には出ていない訳語であるが——「それより」あるいは「そんなことより」と訳しうることを指摘し、ローマ喜劇のかなり多くの場面においてまさにそう翻訳すべきであることを示したい。ここで特に喜劇を対象としているのは、言うまでもなく喜劇というものが大部分対話から成っていて、こうした意味・用法の該当箇所が多いからである。

II 羅英辞典における ‘sed’

羅和辞典に掲載されている訳語は当然ながら欧米の羅英辞典等⁽²⁾を参考にしたものであり、羅和辞典の記述には、羅英辞典の記述を和訳したものという面がある（もちろん、それだけというわけではないが）。では、羅英辞典では「話題の転換」に当たる意味・用法はどのように記述されているだろうか。

最も権威ある羅英辞典である OLD (Oxford Latin Dictionary) では、‘sed’ の第2項目として「話題・議論・会話を終わらせる（片づける）のに使われる（used in dismissing a subject or argument or dialogue）」といった説明があり、さらにいくつかの細目⁽³⁾に分類されている。ここでは訳語が出ていないが、まったく訳さないか、もしくは第1項目にある ‘but’ を適用すれば足りるということと解される。

一世代前の Lewis-Short の辞典でも同様に、一般的意味として ‘but, yet’ が挙げられ、特殊な用法の1つ（項目 II A）が「別の話題への移行により、または発言を終えることにより会話を中断する（interrupting the discourse by transition to another subject or by ending the speech）」と説明され、これが「1. 別の話題への移行（in a transition to another subject）」と「2. 発言の打ち切り（in breaking off, discontinuing speech）」に二分される。訳語としては、「別の話題への移行」という項目中の細目の1つで「挿入節の後で」という説明があり、‘but, now, I say’ と記載されている。これらは「さて」「ところで」「それはさておき」などと和訳されるものである。

学習辞典の類ではどうか。Elementary Latin Dictionary の記述は Lewis-Short と概ね同様である（編者が同じなので当然だが）。

Cassell では、第3項目で「話題の転換で、特に主要な話題に戻って（in transitions, esp. back to a main theme）」という説明の後、訳語を ‘but, however’ としている。また、例文の中で、「議論を打ち切って（in breaking off a

discussion)」という説明も加えられている。

Chambers Murray では、先に接続詞としての訳語全般を挙げ、(通常は) 'but, yet' としている。次に、細目 III cで「話題の再開⁽⁴⁾、または転換、または打ち切りで (resumptive or in transition or in breaking off a subject)」という説明があるが、ここには訳語が挙がっていない。

ちなみに、Gildersleeveの文法書485節の説明では、'sed'には強い意味(逆接)と弱い意味(新しい考えを導入する、または古い考えを復活させる)があるということになっている。

このように、羅英辞典等においても 'sed' の「話題の転換」に相当する項目がたいてい記載されており、訳語として——訳語なしという場合は別として—— 'but' が用いられていることがわかる⁽⁵⁾。

Ⅲ 英和辞典における 'but'

英語の接続詞 'but' にも「話題の転換」などを示す用法があり、英和辞典にも項目としてたいてい出ているのだが、訳語としては「さて」「ところで」「とにかく」などが多く、これらは羅英辞典における 'sed' の訳語とも重なっている。(これは、羅英辞典の編者が英和辞典の 'but' の訳を 'sed' に当てはめたという面が現れたものとも考えられる。)

実は、英語の 'but' における「話題の転換」に類した用法では、文脈によっては「それより」「そんなことより」という訳も可能であり、後述のように『英和翻訳表現辞典』には用例とともに詳しい説明がある。

これらの訳語は必ずしも英和辞典に採用されているわけではないが、『ランダムハウス大英和辞典』では、どういうわけか逆説を示す第1項目に加えた語法説明の中に「しばしば文頭に用いて『それより、そんなことより』といった感じで話題の転換を表す」という記述が見られる。また、『ウィズダム英和辞典』では、項目4bに「(話題を変えて) さて、では、それより」と記載されている。

その他の英和辞典では——無論、すべての辞典を網羅的に確認したわけではないが——こうした訳語は見当たらず、採用していない方が主流のようである⁽⁶⁾。

さて、『英和翻訳表現辞典』では次のような用例が挙がっている。

“How long has it taken him to build this?” “Nearly two years. But touch it.”

「あの人は何年かかってこれを作ったの」「二年近くかかったわ。それより、これをさわってごらんなさい」(下線部は筆者による。以下同様。)

語法というより日本語表現上の問題であるが、こうした場合、逆接ではないので「しかし」や「でも」ではうまくつながらず、「さて」「ところで」などのよくある訳語でもしっくりしない。それまでの話題をあっさり打ち切ってより重要な別の話題に移行する(以前の話は重視されず打ち捨てられる)という状況(ないし話者の意図)が、「それより」「そんなことより」という訳語を使ってはじめて明確に表現されるのである。

こうした状況は、本稿で扱うローマ喜劇においてもしばしば見られるものである。そこで、そうした場面でのラテン語の接続詞 'sed' は、英語の 'but' と同様に、「それより」「そんなことより」と訳するのが適切ではないかと考えられるのである。

Ⅳ ローマ喜劇における 'sed' の実例

ローマ喜劇の翻訳で比較的新しいものは京都大学学術出版会から刊行されている『ローマ喜劇集』であり、本稿では主にこの訳を検討対象とする。ここでも 'sed' に対して「それより」「そんなことより」という訳を当てていることは少ない。(筆者は多用しているが、拙訳⁽⁷⁾以外では3例⁽⁸⁾にすぎない。)

そこでまず拙訳から一例を挙げる。

Parmeno	scio.
tantumne est?	
Bacchis	tantum: aderit continuo, hoc ubi ex te audiverit.
<u>sed</u> cassas?	

パルメノ わかった。
 それだけかい。
 バックス それだけよ。あの人、それを聞いたらとんでくるわ。
 それより、なにぐずぐずしてるの。
 (テレンティウス『義母』812-4行)

これは、遊女バックスが、主人公である青年パンピルスを呼んでくるようパルメノ(パンピルスの奴隷)に命じる場面の一部である。少し前では、「何の用で?」と尋ねるパルメノに対し、「自分に関係のないことを訊くのはよして」と答える(810行)など、多少ともバックスの苛立ち⁽⁹⁾が感じられる箇所である。したがって、下線部の「それより(sed)」のところを、「さて」「ところで」「それはさておき」などとするならば、間違いではないにしても、いかにも生ぬるいせりふと感ぜられるであろう。ぴしゃりと対話を打ち切るという意味で「それより」「そんなことより」といった訳がふさわしいのである⁽¹⁰⁾。

次に、現行の翻訳では「それより」「そんなことより」という訳語が使われておらず、かつまたこれらを適用する方がふさわしいと思われる場面を若干例示して検討したい。

Demipho Phaedriam mei fratris video filium mi ire obviam.
Phaedria mi patruae, salve.
Demipho salve; sed ubist Anthipho.

デミポ あれはパエドリアだ。兄さんのせがれがこっちへやってくる。
 パエドリア 叔父さん、今日は。
 デミポ 今日は。だが、アンティポはどこだ。
 (テレンティウス『ボルミオ』253-4行)

これは、老人デミポが、自分に無断で結婚してしまった息子アンティポに立腹しているときに、甥パエドリア(アンティポのいとこで親友)に出会った場面である。デミポはここでパエドリアに事の次第を問いただすことになるが、本来ならば息子アンティポ自身を見つけて詰問したいところである。パエドリアに対して一応挨拶を返したデミポだが、本当は挨拶などどうでもよくて、さっさと大事な話題に入りたいと思っているはずである。こうした状況を考慮すれば、254行の「だが(sed)」のところは「それより」「そんなことより」とする方が適切だと思われる⁽¹¹⁾。

パラエストラ この浜伝いに行くのがいいと思うわ。
 アンペリスカ あたしどこにでもついて行くけど、
 こんな恐い所を、こんなびしょぬれの恰好でさまよわなければならないの?
 パラエストラ それを我慢しなくちゃいけないのよ。
 でも、ねえ、あれは何かしら。
 (ブラウトゥス『綱引き』250-3)

これは、遊女(に身を落としている)パラエストラとアンペリスカが、浜辺で乗っていた小舟から投げ出されずぶぬれのまま、この先どうしたものかと相談している場面である。パラエストラはアンペリスカの問いに手短かに答えてから、今気づいたことを新たな話題とし、それまでの話題を打ち切っている。

ここでは、‘sed’を驚きの感情を示すものとして「おや」「あら」などと訳すことも可能である⁽¹²⁾が、話題の打ち切り、ないしより重要な話題への移行⁽¹³⁾と見るならば、「でも」を「それより」とする方がふさわしいように感じられる⁽¹⁴⁾。

以上のように、相手にいったん返答した上でその話題を打ち切り、別の重要な話題に移るというのはよくあるパターンであり、「それより」「そんなことより」という訳が適合する場合が多い。詳細は省くが、以下に挙げる箇所も同様である。

「しかしお聞きしますが」(プラウトゥス『メナエクス兄弟』230)、「すぐに分かります。ところでその女に小間使いは？」(プラウトゥス『ほらふき兵士』794)、「だが、頼むからぼくを見てくれ。」(プラウトゥス『捕虜』570)、「ところでタイスはずっと前に着いたのじゃないのか？」(テレンティウス『宦官』733)、「ところで、何の用で来たんだい。」(プラウトゥス『ロバ物語』392)、「ところで、あんたが探している男はな、じつはこのおれだ。」(プラウトゥス『クルクリオ』419)など。

以上是对話中の例であるが、独白中の用例もある。長い脱線の後に元的话题に戻る場合(通常は「それはさておき」「それはともかく」「それはそうと」などと訳される)や、他の人物が出てくるのに気づいて観客に注意を促す(その後、次の場面に移る)場合(驚きを表して「おや」などと訳されることが多い)でも、'sed' が用いられ、英訳ではしばしば 'but' とされているのだが、これらも文脈によっては「それより」「そんなことより」という訳が可能なのである。しかしながら、こうした場合については別稿の課題としたい。

V 結び

以上のように、ラテン語の 'sed' は、英語の 'but' と同様に、逆接だけでなく、話題の転換という用法でもかなり頻繁に現れる。そのうち特に、ある話題を強引に打ち切って別の重要な話題に移行するという場合には、「それより」ないし「そんなことより」という訳が適切である。

従来これらの訳語は、羅和辞典に載っていない(また、大部分の英和辞典で 'but' の訳語として記載されていない)といった理由から、広く認知されず、そのためローマ喜劇などの翻訳でも使用頻度が低かったが、本来はもっと積極的に用いられるべきである。将来的には羅和辞典等への採用も期待される。

注

- 1) 『研究社羅和辞典(旧版)』では「(文の転移)とにかく、やはり」、『研究社羅和辞典(改訂版)』では「(話題の転換)ところで、それはさておき」、『古典ラテン語辞典』では「話題(思考)の転換、打ち切り、だが、しかし、それにしても、それはさておき、ともかく」となっている。
- 2) 詳細は省くが、こうした議論は羅独、羅仏等の辞典についても概ね当てはまることである。
- 3) a. 打ち切りで (in breaking off)、b. 脱線などの後で元に戻って (in resuming after a digression, etc.)、c. 新たな話題や議論の道筋などへ移って (in passing to a new subject, line of argument, etc.) という3つの細目が挙げられている。もっとも、この3つが常に明瞭に区別できるかどうかは問題であり、本稿では概ね a. と c. を合わせて扱っている。
- 4) 'resumptive' とは脱線・挿入の後で元的话题に戻ることを指すと思われる。
- 5) ちなみに、'sed' と同様、「逆接」でも「話題の転換」でも用いられる語である 'verum' についても、OLD では第5項目として「話題を打ち切る、または新たな観点や実例を導入する (in breaking off a subject or introducing a fresh point or illustration)」という用法説明があるが、挙げられている訳語は 'but' のみである。
- 6) 『研究社新英和大辞典(第6版)』『研究社新英和中辞典(第7版)』『ジーニアス英和大辞典』『ジーニアス英和辞典(第4版)』『リーダーズ英和辞典(第2版)』『旺文社新英和中辞典』『ロングマン英和辞典』『アドバンスト・フェイバリット英和辞典』『アンカー・コズミカ英和辞典』『スーパー・アンカー英和辞典(第3版)』『グランドコンサイズ英和辞典』『レクシス英和辞典』『ルミナス英和辞典(第2版)』『ライトハウス英和辞典(第5版)』『新クラウン英和辞典(第5版)』などを参照したが、「話題の転換」に当たる項目はあっても、「それより」のような訳は見つけることができなかった。なお、『ロングマン現代英英辞典(4訂新版)』では第11項目に「会話の話題を変えるのに使われる (used to change the subject of a conversation)」といった説明があるが、パラフレーズはない。
- 7) 上村訳、プラウトゥス『三文銭』(『ローマ喜劇集』4) およびテレンティウス『義母』(『ローマ喜劇集』5)。
- 8) プラウトゥス『カシナ』252行、『プセウドルス』276行、『スティクス』9行。他に、「いや、それよか」(『綱引き』950行)という類例がある。
- 9) Ireland の注釈付き対訳では、814行のバックスのせりふの前に「パルメノは動き出す様子をささない」というト書きが付加されている。なお、Ireland の英訳では原文の 'sed' を 'but' と訳している(Loeb版では 'sed' に対する訳語なし)。
- 10) この作品は、一部の登場人物が隠された真相を知らされることなく終わるというローマ喜劇らしからぬ幕切れとなっている。そうした人物の1人である奴隷パルメノは、当然の成り行きとして、いらぬ穿鑿をせぬよう釘を刺されて追い立てられるのである。上村(論文)参照。
- 11) 岡訳では「お帰りなさい、叔父さん」「ただいま。ところで、アンティポはどこだ」となっている。この方が自然な面もあるが、

話題の転換に「ところで」という訳語を使うには、2人の登場人物のやり取りが短すぎると言えよう。なお、Loeb版英訳では'sed'を'But'としている。

12) Loeb版英訳では'Good heavens, though'となっている。

13) Fayの注釈では、筋の進展に伴って韻律が変化している点を指摘している。

14) 松平訳も同じく「でも」となっている。もちろん、日本語の「しかし」「だが」「でも」なども必ずしも逆接とは限らないので、そのように訳しても直ちに誤訳というわけではない。

参考文献

テキスト (Loeb版) :

Nixon, P., Plautus, I-V, Loeb Classical Library 1979-84 (1916-38).

J. Sargeant, Terence, I-II, Loeb Classical Library 1983-86 (1912).

翻訳 :

木村健治他訳、『ローマ喜劇集』1-5巻、京都大学学術出版会、2000-2。

(以下は、『ローマ喜劇集』のうち個別に引用したもの)

宮城徳也訳、プラウトゥス『ロバ物語』(『ローマ喜劇集』1)。

竹中康雄訳、プラウトゥス『捕虜』(『ローマ喜劇集』1)。

小川正廣訳、プラウトゥス『クルクリオ』(『ローマ喜劇集』2)。

岩崎務訳、プラウトゥス『メナエクス兄弟』(『ローマ喜劇集』2)。

木村健治訳、プラウトゥス『ほらふき兵士』(『ローマ喜劇集』3)。

小林標訳、プラウトゥス『綱引き』(『ローマ喜劇集』4)。

上村健二訳、テレンティウス『義母』(『ローマ喜劇集』5)。

谷栄一郎訳、テレンティウス『宦官』(『ローマ喜劇集』5)。

高橋宏幸訳、テレンティウス『ボルミオ』(『ローマ喜劇集』5)。

松平千秋訳、プラウトゥス『綱曳き』(『講談社世界文学全集』2)、1978。

岡道男訳、テレンティウス『ボルミオ』(『講談社世界文学全集』2)、1978。

その他 :

Fay, H. C., Plautus, Rudens, Bristol 1969 (1983).

Gildersleeve, B. L. / Lodge, G., Latin Grammar, Bristol 1867 (1998).

Glare, P. G. W., Oxford Latin Dictionary, Oxford 1982 (1996).

Ireland, S., Terence, The mother in Law, Warminster 1990.

井上永幸他、『ウィズダム英和辞典(第2版)』、三省堂、2003。

上村健二、テレンティウス『義母』における「知るべきでない人々」、甲子園大学紀要 No2 (C)、1999, 17-29.

小西友七他、『ランダムハウス英和大辞典(第2版)』、小学館、1994。

國原吉之助、『古典ラテン語辞典』、大学書林、2005。

Lewis, C. T., An Elementary Latin Dictionary, Oxford 1915.

Lewis, C. T. / Short, C., A Latin Dictionary, Oxford 1879 (1998).

水谷智洋、『羅和辞典(改定版)』、研究社、2009。

中村保男、『新編・英和翻訳表現辞典』、研究社、2002。

Simpson, D. P., Cassell's Latin Dictionary, New York 1968.

Smith, W. / Lockwood, J., Chambers Murray Latin-English Dictionary, 1933 (2001).

田中秀央、『羅和辞典』、研究社、1952 (2002)。

システムを取り巻く環境の移り変わり

中井 孝

平成 22 年 10 月 29 日受理

Changes of outer circumstances surrounding various systems

Nakai Takashi

概要

There are outer circumstances surrounding various systems. They are changing over time. Therefore, the purpose of the system should be changed in line with the times.

Keywords : System thinking, Outer circumstance, Change of system itself

1 はじめに

「ゆで蛙」とは、水で満たされた鍋に入って安穩としている蛙のことをいう。はじめは生ぬるいので気づかないが、そのうちに熱くなって逃げ出そうにも動くことができずにゆであがってしまうのである。このたとえば、ゆっくり迫ってくる危機に気づきながら脱出のタイミングを逸してしまうという意味で使われる。

「ゆで蛙」は他人事ではない。

電車に乗っていて席が空くとすぐに座ってしまう。エレベータやエスカレータがあればすぐに乗ってしまう。お店に 5 分程度の徒歩で行けても車を使ってしまう。少しの買い物なのに手押しのショッピングカートを利用してしまう。医者から禁止されてもお酒やタバコは止められない。暑いと思えばクーラーのスイッチを入れ、寒いと思えば暖房器具を出し、コートを着、マフラーを巻きつける。私たちの生活ですらこうである。からだが地球が病みつつかつても、わが身の生活習慣を変えることはなかなかできない。「ゆで蛙」になりやすいという自覚を持ち続けることは難しい。

さて、企業を取り巻く環境はめまぐるしく変わりつつある。1970 年ごろから、全国に行き渡る道路網の整備により、物流形態が鉄道による貨物輸送からトラック輸送に替ってきた。今や荷物を受付窓口で午前中に申し込めば明日には届いているのである。考えられなかった速さである。だから練りに練った輸送システムであっても、時とともに環境が変化しており、すぐに陳腐化することも覚悟しておかなければならない。つまり、時代の潮流がどの方向に進もうとしているのかに、いち早く気づかなければいけない。常日頃からその潮流を見極めて、変革し続ける努力を怠ってはいけない。

そうはいってもたいていの人たちは、「ゆで蛙」のように居心地（環境）が悪くなってもほとんど動こうとしない。変化を嫌うのである。そうこうしているうちに状況は急速に悪化し、うろたえてしまう。

本稿では、今まであまり経験することのなかったデフレ (2.) について述べる。このデフレを背景に、世の中は「売れるモノだけしかつくってはいけない時代」に移行しつつある。それゆえ企業では在庫リスクをゼロにするために POS・POP システムを採用している (3.)。

4. では、高齢化社会に突入するに当たっての、私たちに求められている心構えについて論じる。またインターネットの利用で広告収入の流れが変わってきている。5. ではこれについて述べる。最後の 6. においては、システムを取り巻く環境ではなく、システム自体が移り変わる事例を挙げて、3つのパターンに分類する。

2 インフレからデフレへ

時とともに考えが時代にそぐわなくなる例として、インフレとデフレ経済における正反対の価値観がある。

1990年代初頭のバブル崩壊までは、地価は一貫して上昇を続け、「土地を所有していれば儲かる」という土地神話を生んだ。ある知人が「高い買い物だったがいずれもっと騰がるから」と言っていたのを思い出す。

バブルの崩壊後も「土地神話」はすぐに消えたわけではなく、近い将来に景気が回復するに伴い再び地価が上昇するとの期待が根強くあった。その結果が、1997年末の北海道拓殖銀行、山一証券の大型破たんであった。その後、日本長期信用銀行、日本債券信用銀行などの破たんが続き、「銀行不倒神話」も崩壊した。

銀行不倒神話があったのも、インフレ時代は、現金の実質価値が目減りするのだから、目減りしない土地やゴールドなどの資産を所有するか、または負債の実質価値は減少するので借金したほうが得、といわれていた価値観があったからである。企業の財務評価においても多額の有利子負債をベースにした借金経営も、支払うべき利子率よりインフレの上昇率が高ければ否定的にはとらえられなかった。

ところが、デフレ経済になると、買わずに待てば待つほど、モノがより安くなるという、デフレ特有の現象が発生する。

冷静に考えれば、大きな戦争がなくなったことや、地震・台風・大火事などに対する建築物の耐震性や耐火性の機能改善によって、昔ほどモノが壊れなくなったからである。そうなるモノが余ってくる。現実には買すぎてモノがあふれている家庭も多い。当然モノが売れなくなり、同品質の商品であれば、自然に安価な商品が選ばれるようになる。

安価な商品をつくるために、企業の投資は中国・ブラジル・インド・ベトナムなどの人件費の安い国へと向かう。現に MADE IN JAPAN の商品が少なくなりつつある*¹。同様のことが20年前のアメリカであった。アメリカのスーパーで MADE IN USA の商品を探したが見つからなかったのである。

このようなグローバル化は避けて通れない。よって現地の人件費が日本より極端に安い間は、また豊かになった現地の人たちが、原油や原材料、食料などの資源を大量に消費するようになるまでは、デフレ傾向が続くことになる。

デフレのときは、インフレ時の借金保有戦略ではなく、借金は早急に返済したほうが安全である。モノが安く買えるので、実質ベースで現金の価値が上がる。だから借金などをしておけば、実質ベースでの借入額が増え金利を払わなければならないダブルパンチを受けることになる。お金を使わずに貯蓄するなどして現金で持つておく。これがベストである。デフレ経済では、値下がりする土地や建物といった固定資産は少なければ少ないほどよいという価値観が変わるのである。

価値観が180度反転する。価値観の変化があれば、過去の成功体験は、邪魔にこそなれ、役に立つことはないだろう。

3 在庫リスクをゼロに近づけて売る時代

今の日本はモノが満ち満ちて、安売りの「百円均一ショップ」が繁盛するかたわらで、高級バッグが売れている。それでいて、商品を値下げしても気に入られなければ売れない時代である。つまり日用品は安売り志向で、気に入った商品は少々高くてもかまわないが、気に入らなければビター文も出さないという個性化した消費者が増えてきている。

このように購買動向がつかみにくい時代にあってもやはり、スーパーマーケット、量販家電店、外食チェーン店、コンビニなどのような小売業の基本的な販売戦略は、大量に商品を仕入れ、各商品の利ざやが少なくても、大量の廉価販売で利益を得ることである。

商品をより安く仕入れるためには新規店舗を出し事業拡大を目指さなければならない。事業が拡大して商品が安く仕入れられそれが短期間に売れて資金がうまく回転しているときはよい。だが、景気が暗転して商品がはけず在庫を抱えてしまうときがある。最悪の場合、仕入れた商品が売るに売れずに値崩れを起こして大損害をこうむってしまうこともある。そういったなかでも、人によってはここが正念場と値下げもせずに、景気が上向くまで抱えておこうと思うかもしれない。

*¹ 最終製品の組み立てが中国や東南アジアで行われているからである。しかし半導体製造装置、運搬機械、工作機械などの生産財や、エンジン、コンプレッサなどの基幹部品、そして電子部品や油圧・空圧部品、炭素繊維、シームレス鋼管といった高機能材料を含む中間財の多くは、今も日本から輸出されている。

ところが決算期になって在庫品が含み損を抱えていても、それを処分して値下がり損失として計上しない限り、その損失分が営業利益から減らないため、法人税を余分に支払わなければならない。

したがって、技術進歩の激しいパソコン、流行りすたりの早い服飾関連商品などは損失覚悟でなるべく早く売り切らないといけない。街なかで SALE ののぼりが立てられているのを見かける理由がそれで、資産の現金化のために行っているのである。

在庫を抱えて資金を塩漬けにしてしまわないためにもいち早く何が売れているのかを知らなければならない。どうすればそのような情報が手に入るのだろうか。

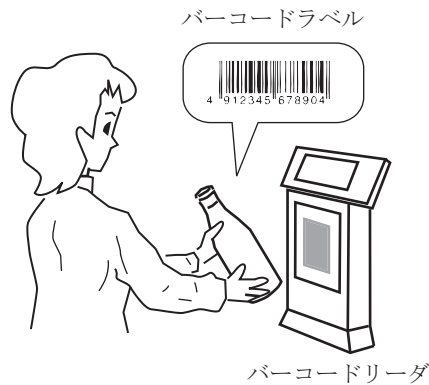


図1 販売時点 (POS) 情報

近頃、図1のように店員が商品に貼りつけられたバーコードを読み取っているのをよく見かけるだろう。この情報は最終的に卸やメーカーに届いているのである。

大きなコンビニでは取り扱っている全商品を色やサイズで何十万点にも細分化し、商品が売れた時点 (POS, Point Of Sale の略である。以降 POS を使う) の販売時点情報を瞬時にとらえる。そのとき売れた商品だけがメーカーから小売店に納入されるようになっている。売れた商品を補給するために、コンビニでは小分けされた商品が1日に2~5回配送されている。つまり需要が飽和している時代においては、在庫を抱えないように売れた商品のみを仕入れて品揃えする受注型の販売に重きをおかなければならないのである。

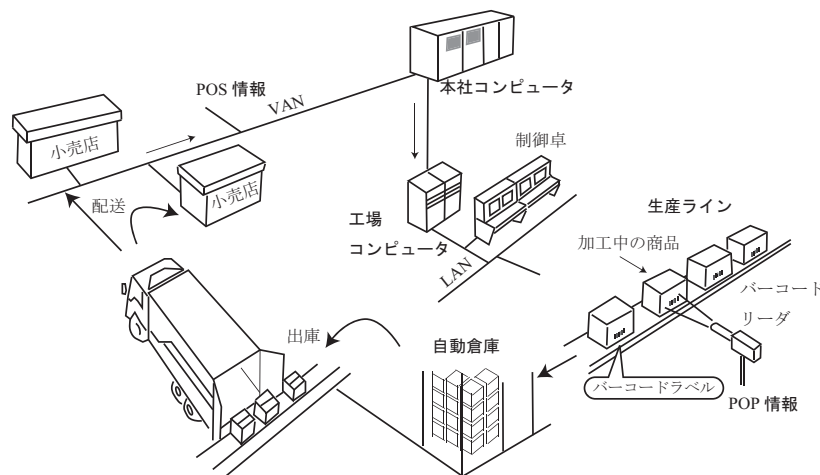


図2 情報の流れ (POS と POP)
山田善教監修『早わかり CIM』より作成。

情報の流れを整理すると、図2のようにまず小売店の POS レジで得られた売れ筋の単品の情報が集計されて卸やメーカーに届く。卸やメーカーでは POS 情報から販売動向を分析し需要を予測する。

工場では、できた製品の数量を生産時点（POP^{*2}、Point Of Production の略）で把握する。受注量と在庫量や、仕掛り量などから、何が何時どれだけ必要かということが、正確に計算されるので、工場ではPOPにより完成品の在庫の低減が可能となる。すなわち小売店で売れたものだけが自動倉庫から出荷され、倉庫から出荷された製品だけが工場で作られているのである。

以上のような仕組みをつくることで、工場においても在庫投資が確実に減らせる。製造業で実施されているトヨタのカンバン方式（ジャストインタイム方式）と同じようなシステムが、コンビニの業界でもつくられているのである。

4 迫りくる少子高齢化社会

新生児がたくさん生まれると、いずれ大きくなって、大学に進めば下宿したり、入社すれば社員寮に入ったり、結婚すれば新居に住んだりすることになる。資金に余裕ができてくるとマンションを買ったり新築したりする。そのときは、冷蔵庫、テレビなどの家電製品は、使えても廃棄して新規に購入したり、什器・調度品を新調したりして、モノの消費は確実に増える。

ところが今や少子高齢化が焦眉の急を告げている。若者が少なくなれば、前述のような買い替え需要が少なくなり経済が失速する。

何も対策が講じられなかった場合、どうなるだろうか。乳幼児や若年層の人口は急速に減少し、それらに関連する働く場が減少する。これまでに1億2000万人に必要な道路、上下水道、電気・ガスなどの施設や、学校・役所などの公共施設、工場などの資産がいずれ余ってくる。実際に、最近ではよく小学校の統廃合や、使われなくなった校舎の再利用が話題に上がる。いずれ学校だけでなく、市町村のさまざまな施設に広がろう。そうなれば、将来、灯が点らない建物がならぶ、まさにゴーストタウンがあちこちに出現する。

施設やインフラはいったん造ってしまうと、メンテナンスに継続的にかなりのお金が必要になる。たとえば立派な音楽ホールや博物館、美術館を建設しても、それらを維持管理していくのは大変である。職員も常駐させないといけないし、光熱費などの維持費や補修費にもお金がかかる。

維持管理にかかる費用を身近な車で計算してみよう。

表1 自動車の維持費用

項目	費用
自動車税	45,000 円
ガソリン代 12 ヶ月	120,000 円
駐車代 12 ヶ月	60,000 円
洗車、エンジンオイル、バッテリー、 タイヤ交換などの保守費用	15,000 円
任意保険	50,000 円
高速代 12 ヶ月	12,000 円
車検費用（1 年分相当）	70,000 円
合計	372,000 円

排気量 2,000cc の乗用車を 200 万円で購入したとする。この 200 万円が初期費用（イニシャルコスト）である。車を維持するために支払わないといけない維持費用（ランニングコスト）を試算してみると、表1のようになったとする。車改造などにお金をかけたりすると、かなり高額になってしまうが、日曜ドライバー程度に乗っておれば、この表の程度の出費となるだろう。

表から1年当たり約19%の維持費用がかかることがわかる。モノを買ったときの維持費用は初期費用の1から3割といわれるから妥当な数字である。ただ、運転手付きの公用車の場合、この上に運転手の人件費たとえば600万円相当が追加される。その場合この維持費用は319%に跳ね上がる。

^{*2} Point Of Production ではなく、Point Of Purchase と勘違いする人もいる。Purchase とすれば生産ではなく購入である。商品の前で買うかどうかを決める、その購入時点という意味で用いられる。たとえば書店に行けばその書店が推奨する本に、推奨する理由が書いてある。これを POP 広告という。

確かに道路や文化施設^{*3}などのインフラに投入する公共投資は景気浮上のカンフル剤になるかもしれない。でも建てたらおしまいではない。

辺地・離島の過疎地域活性化対策として謳っている、大きな娯楽施設。場所によっては、半年は雪に閉ざされているし、離島では塩害で錆びているのを見かける。維持費用は過疎地の財政でまかなえているのだろうか。

また、建築家や芸術家の頭に描いたイメージを形にした、奇をてらった建築物や公園。このような象徴的な構造物は、現場泣かせな造りが多く、市販のものが使えず特注になって割高である。造りが変わっていれば、当然、修理や清掃、草刈などのメンテナンスにお金がかかる。現実には、奇をてらただけでは人は何度も施設を訪れず、維持管理費を捻出するのさえ至難の業となる。建てたらおしまいではない。

つまり、大きな施設を建てたときの留意点は維持費用である。集客できないと収入があがらず建設費の返済と建物の維持に迫られることになる。初期費用を控え維持費用を抑える。他人まかせにするのではなく現地の人がアイデアを出し合って、新しい企画を考え、それを実行に移すしかない^{*4}。

さて、財務省の財政関係諸資料によると、国の財政赤字は巨額で、2005年度末に827兆円と800兆円を突破し、2009年度末で900兆円を超えた。そのような日本に、これ以上公共事業を増やしたり、減税を実行したりといった余力は残っていないのがわかる。

政府はバブルがはじけてからも公共投資というカンフル剤を打ち続けた。このことが財政の悪化を生み、少子高齢化が追い討ちをかけ、回復の兆しがなかなか見えにくい。

財政環境の変化は、行政・教育に携わる公務員や準公務員など、これまで聖域と呼ばれた部局にさえも影響を及んできている。財政を改善するためには、減給するか減員するかしかない。庶民の生活の質も下げざるを得ない^{*5}。ただ2.で述べたように今はデフレである。景気が悪くなって給与がカットになった人も多い。将来が不安である。とはいってもモノの値段も下がってきている。実質の賃金はあまり下がっていないはずだから悲観になりすぎるのもよくない。

人は贅沢な生活に慣れてしまうとその生活を維持したいと望む。悠々自適の生活を送りたい退職者は、年金が減ることや医療費が増えるのを極端に嫌がる。若者は若者で、親が扶養してくれるという甘えがあるからか、何が何でも就職という切迫感がない。そういう人間が増えつつある。安易なバラマキ予算は一時の不満や不安の解消につながるかもしれないが、痛みをともなう何らかの対策を講じないと、年金や健康保険制度の破たんが目に見えている。

5 広告収入の流れが変わる

フジテレビ、日本テレビ、東京放送（TBS）などの民放テレビが作る番組の視聴料はタダである。それが当たり前になっている。

本来なら、日本放送協会（NHK）のように受信料収入がないと、とても番組作りをすることはできない。もちろん民放テレビの視聴料がタダなのは広告収入によるのだが、大作のテレビドラマとなれば製作費用も巨額とな

^{*3} 施設の設置そのものが目的になっており、「何に利用するか」があと回しになっていることが多い。いわゆるハコモノ行政である。今では、建物の管理は、民間企業・NPO法人・市民グループなどの指定管理者に任せることが多い。ある説明会で、行政担当者は、指定管理者らを前にして、「この建物の利用目的、運用方法などについて考えてくれ」と言ったという笑うに笑えない話がある。

^{*4} 観光であれば、地域外の人がリピーターになってくれる企画がある。技術力ある企業の誘致であれば、質の高い従業員を提供できるように、教育水準の底上げと職業訓練の充実、それにインフラの整備と税制面での優遇措置などを考えなければならない。

現に、海外の地方都市は雑誌に4ページ以上の都市広告を出すなどして世界中からの企業誘致に熱心である。日本の過疎地域においても同様、本国のみならず他国企業の誘致を、本腰を入れて考える時期に来ているのかもしれない。

^{*5} 生活の質が下がらない場合もある。たとえば大きな政府を維持するために必要だった高い法人税を軽減し、小さな政府にする。法人税が下がってできた剰余金で、株主に支払う配当や、従業員への給与を引き上げることができれば、家計の所得が増え、無駄な公共投資に頼らない経済の活性化が期待できるようになる。ただし、小さな政府にしすぎてもいけない。「弱者切り捨て」になってしまう。注意が必要である。

り数十億円を超える。それに番組を放映する業務に携わるテレビ局員の平均年収は1,200万円強である。支払わねばならないそのような大金がどこから湧いてくるのだろうか。

5.1 広告の値段

ここでテレビ広告の値段を計算してみよう。テレビ局の総売上高のほとんどが広告収入である。1日当たり20時間放映し、その放映時間の20%がコマーシャルに使われる（15分当り3分の割合となる）として、民放キー5局の05年3月決算報告書から1分間の広告料を試算すると、平均300万円となる。たった1分にもかかわらず300万円と我々の金銭感覚からは信じられないお金が動いている。ただしこの額は視聴率やゴールデンタイムによる広告料の差額を考えずに一律としている。実際には視聴率が重要で1%当り1分間で平均40万円だそうである。

このようなテレビをはじめとする広告業界の市場規模を知るには、経済産業省が行っている特定サービス産業動態統計調査を見るのが近道である。2005年と2010年の調査によると、国内の広告市場規模が5.6兆円と4.7兆円、そのうちテレビが30%と29.5%、新聞が11.5%と8.6%を占める。テレビだけで年間1.7兆円と1.39兆円もの広告料が投下されていることになる。

話のついでに新聞広告にも触れておこう。広告掲載料金は販売部数が多いほど高くなる。紙面1面に載せる全面広告で、価格差があるが4,800万円から2,000万円である。ある新聞社の広告収入を試算したところ総売上高の30%を超えている。このようなことから広告収入の多寡は販売部数とともに一喜一憂する数字といえよう。

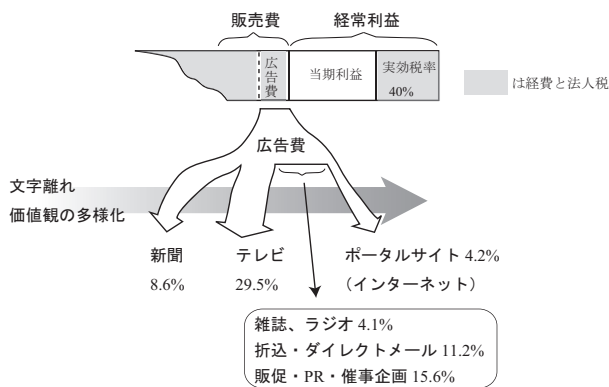


図3 広告費の流れ
2010年特定サービス産業動態統計調査より作成。

ところでテレビ・新聞や雑誌に掲載される広告の目的は、広告主が作る商品を買ってもらうためである。企業のイメージ作りもあるだろう。広告が目につくように著名な俳優やスポーツ選手を起用したりする。ほかの方法、たとえば楽天、ソフトバンクなどの新興のネット企業が大枚をはたいてプロ野球球団を保有するのも企業名を消費者に知らしめるためである。

広告を含む販売促進費は、図3のように経費である。その広告にお金を出す背景には、実効税率4割の法人税がある。景気がいいと利益が拡大し多額の法人税を納めないといけない。そこで広告を経費として計上する企業が多い。逆に景気が悪くなると、広告費は真っ先に削られる可能性が高い。

5.2 広告業の環境の変化

広告業の売上高の内訳を媒体別にみると、テレビの次に構成比が大きい新聞は11.5%（2005年）から8.6%（2010年）と縮小傾向を示し、インターネット広告は高々4～5%程度であるものの、近年急速な伸びを見せつつある。

アメリカではテレビ視聴者数や新聞発行部数が急減して、広告主はインターネットに軸足を移しつつあるようだ。若者を中心とする文字離れや、価値観の多様化から、新聞やテレビに読者や視聴者をつなぎとめておけないのだろう。2006年ごろから化粧品・トイレタリーの最大手、プロクター・アンド・ギャンブル（P&G）はテレビ広告を大幅に削減している。

この理由を、現在のテレビ放映の仕組みから考察してみよう。まずテレビ会社の運営は広告収入で行われるた

め、15分間に3分程度のコマーシャルを入れないといけない。また新聞などに掲載されている番組表からわかるように、興味ある番組があってもその放映時間まで待たないと見られない。このような事情から時間が貴重な人は、録画してからコマーシャルを飛ばして要点だけを見る場合が多いという。忙しくなくても同様の思いを抱く人も少なからずおられるだろう。

そこでもし、好きなアイドルの映像やサッカー試合のゴール場面、映画、ニュースなどの動画を、YouTubeのような動画サイトでパソコンの画面に一覧表示させることができたらどうだろう。クリックするだけで、たとえば政治経済のニュースを選んで視聴したり、野球中継で好きな選手の打席だけを選んで見たり、ということができるようになる。

そのような映像配信サービスができるサイトは、特定のことにしか興味を持たないマニアックな人や忙しい人をはじめとして、衆目を集めるに違いない。サッカー、野球、テニスなどのファンなら、関連の商品にしか興味がそられないから、顧客層を絞ったマーケティングができる。当然ながらそのようなサイトには広告主の食指が動くことになる。

それでは、テレビより加速的に悪くなっている新聞業界はどうなっているのだろうか。

1990年代から各新聞社はニュースを無料でHP上で提供し、広告収入に期待した。ところが、無料記事を集約して提供するヤフーやグーグルなどが急成長、広告収入も奪われてしまった。実際、無料の記事がインターネットで読めるし、また企業からの広告収入が景気低迷で落ち込んでいる。そのために購読料と、収入の大半を占める広告料による収益構造が悪化して、新聞の休・廃刊が目立つようになった。

ウィキペディアによると、2000年代に入ってから休・廃刊が徐々に増え、2009年にはオホーツク新聞をはじめとする6紙が休刊している。2010年に入っては、読売・朝日・毎日・産経・日経の有名5紙の決算において本業の利益を示す営業利益がいずれも赤字になった。収益構造の改善のために、5紙のうちの日経新聞は、後述のWall Street Journalのオンライン有料化を参考に、2010年3月から「電子版」をつくり、有料購読をはじめた。有料会員は7万人台に乗り、無料登録会員と合わせれば同年8月末で50万人を越えた。

アメリカでの新聞業界では、日本よりダメージが大きい。金融危機のゆえに2008年レイオフの嵐が吹き荒れた。たとえば2月にNew York Timesでは1,332人のニューススタッフのうち100人が職を失った。翌年の2009年の2月には、コロラドの地方紙Rocky Mountain Newsが廃刊。2009年12月、アリゾナ州の老舗紙East Valley Tribuneが廃刊した。一方で、ダウ・ジョーンズ社が発行する経済紙Wall Street Journalは、1996年にオンライン米国版の有料購読をスタートさせている。現在120万人の購読者数を有し世界1位である。

有料化を目指すのは、無料記事のオンライン提供によって広告の収入を得るという従来のビジネス・モデルが、大きくつまづいているからである。有料化すれば広告主が逃げることも考えられ、すべてうまくいくとは限らないが、有料課金へかじを切って成功している日本の企業がある。ディ・エヌ・エーの交流サイト「モバゲータウン」や、クックパッドのレシピサイト「モバレび」、ドワンゴが運営する動画共有サイト「ニコニコ動画」などである。これらは利用料の徴収によって利益を上げている。

このように、インターネットの利用者が増えている現状から、巨額の広告収入の流れを、新聞やテレビといった旧来のメディアからネット企業へと変える意図が感じられる。言い換えれば広告収入がポータルサイトへ流れ込んでくる仕組みを創出する頭脳が、ネット企業において求められるようになってきているのである。

6 システムそれ自体の移り変わり

マンションを買ったり家を建てたりするとき、そのときは自分のライフスタイルに合ったものを選んでおらずである。しかし、子どもが増えたり大きくなったり、所蔵の本が増えたり、パソコンを買い足したりすると、今まで快適に過ごしていたのが住みにくくなったりする。

しかし買い替えや改築にはなかなか踏み込めない。住む家でさえこれである。まして数人ではじめた企業が成功して数万人を擁するようになれば、社長と従業員たちとの間でなかなか意思疎通ができず、企業経営も難しくなる。

このように、前節まで述べた、システムを取り巻く環境の変化のみならず、環境の変化とともにシステム自体が移り変わっていく場合もある。

幼児から青年そして大人への成長や、生ゴミをはじめとした有機物の発酵、パイオニアプランツから極相林へ

の植生変遷、会社の業容の変化などもまた、システム自体の移り変わりに相当する。

ここでは、発酵と、アポトーシスによる変形、袋小路に入って抜け出せない状態の3つの移り変わりのパターンについて述べる。

6.1 発酵の過程

薄上秀男の『発酵肥料のつくり方・使い方』に、米ぬかや油かすといった有機物を発酵させて肥料化する方法が書かれている。有機物を混ぜ合わせた堆積物の山を、ここではシステムとしてとらえ、そのシステムの移り変わりを見てみる。

肥料になるまでに大まかには、図4のように糖化過程→タンパク質分解過程→酵母によるアミノ酸・タンパク質合成過程の3つの発酵段階を経る。はじめは糸状菌（カビ）によって糖に分解され、つぎに納豆菌、枯草菌などの細菌がタンパク質をアミノ酸に分解するために働き、最後に酵母菌や放線菌へとバトンタッチされて発酵肥料が完成する。

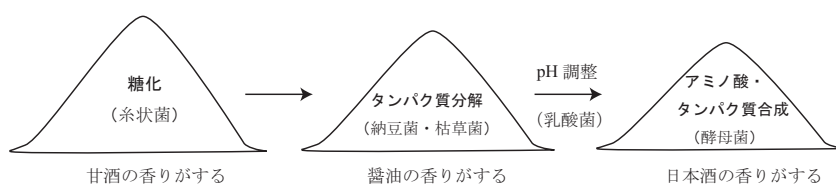


図4 堆積された有機物の移り変わり

温度、水分含有量、pH、切り返し数（酸素の有無）、紫外線量、そして有機物の種類と投入量といった発酵条件で肥料の出来不出来が決まる。微生物は、糸状菌（カビ）、納豆菌、枯草菌などの細菌、乳酸菌、酵母菌、放線菌などである。ほとんどの微生物にとって、ショ糖（白砂糖）、ブドウ糖、麦芽糖、果糖などの糖分は大好物である。つまり糖分から活動のエネルギーを得ている。

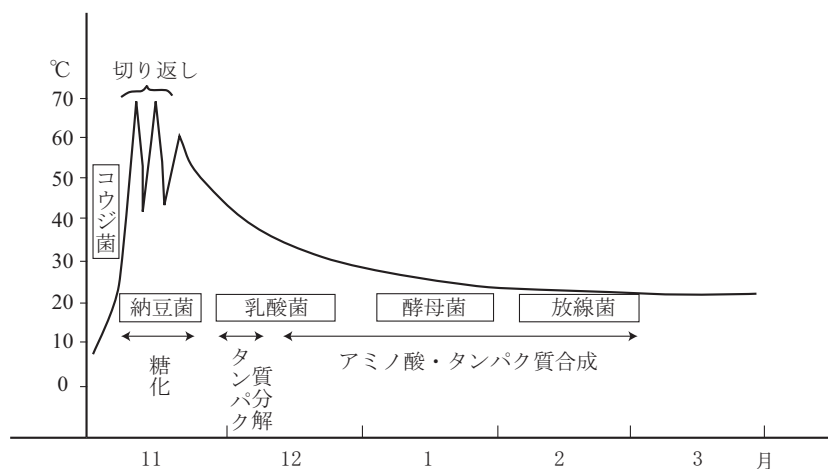


図5 堆積物の中心温度の経時変化

薄上秀男著『発酵肥料のつくり方・使い方』より作成。

有機物の堆積物が発酵によってどのように移り変わっていくのかを、図5に示した堆積物の中心温度の経時変化で、前述の3つの段階に分けて見てみよう。

糖化過程 堆積物は2,3日でホカホカしてくる。7日間ほど経てば45度くらいに上がる。そのときには山の表面が白い綿毛の菌糸で覆われ、内部では菌から分泌された分解酵素アミラーゼとマルターゼによって、デンプンはそれぞれ麦芽糖、ブドウ糖へと分解される。

さらに温度が上昇し50度を超えると、コウジ菌の活動が鈍り、代わりに高温を好む納豆菌や枯草菌が活動をはじめ。中心部の温度が70度まで上昇した後、1日おいて切り返しを行う。切り返しをするのはそのまま放っておくと、自然発火するかもしれないし、内部が酸素不足の嫌気状態になるからである。切り返しと同時に散水して水分調整をしておく。含水率60～70%程度である。このころにはやや甘酸っぱい香りがするようになる。再び、中心部が70度を越すようになる。70度まで温度を上がると、病原菌や糸虫などが死滅し、また植物繊維

を構成するセルロースやリグニンなどが分解されやすくなる。

なお、切り返しと同時に水分を補給するのは高温で水が蒸発し水分が不足しているからである。水分が足りないと菌が活動しなくなる。

タンパク質分解過程 25日前後経過すると、中心部の最高温度も50度を割り、タンパク質の分解過程に入る。納豆菌などが分泌するタンパク質分解酵素プロテアーゼによって、原材料の中に含まれる魚かすなどのタンパク質がプロテオースに、そしてポリペプチド、さらにはアミノ酸にまで分解される。

温度が45度前後に低下すると乳酸菌が登場する。豊富な糖分やアミノ酸を食して、乳酸菌が急激に増えてくる。乳酸菌の活動とともに、肥料の山の表面に見られた綿毛状の菌糸体の塊がだんだん消えてなくなってくる。と同時に醤油の香りがするようになる。この香りが漂い始めると、材料の温度の上下動がなくなり、45度前後でほぼ一定になる。

アミノ酸・タンパク質合成過程 温度が30度前後に低下してくると、盛んに乳酸を分泌する。乳酸が分泌されれば発酵材料のpHが低下して酸性となり、それまで繁殖してきた納豆菌などが死滅する。また酸性になることで雑菌の進入を阻んでくれる。

さらに温度が低下すると、酵母菌の繁殖適温27～26度に近づいてくる。このころになると乳酸の働きによりpHは4.0～4.5にまで低下している。ここで酵母菌を添加する。酵母菌の急激な増殖で、翌日からアルコールの香りがし始める。酵母菌は酸素の少ない嫌気状態ではアルコールを作る。アルコールが匂うのはこのためである。

合成過程はじめに活躍した乳酸菌や酵母菌も最終的には自ら分泌した酸によって死滅する。代わって増殖してくるのが放線菌で、乾燥作業中にさらに増殖し、殺菌力・制菌力の強い肥料ができるのである。

このようにして有機物の堆積物というシステムが移り変わって肥料となるのである。

6.2 細胞自死（アポトーシス）

秋になって葉が落ちる。葉の付け根に離層ができて要らなくなった葉を切り落とすからである。このような細胞が自殺する行為をアポトーシス（以降、細胞自死とする）と呼ぶ。この細胞自死は早くから胚の発生の過程に起こることが知られていた。



図6 人間の手ができるまで
マーロン・ホーランド、パート・ドッドソン著『Oh!生きもの』より作成。

たとえば人間の手のできはじめは、図の左端のようにただの平べったい突起物である。この発生の段階では手の形には見えない。指の形になるようにやがて4つの谷間ができる。指の谷間にあたる部分の細胞が自らの命を絶つようにプログラムされている。

この細胞自死を止める物質も存在する。

たとえばニワトリの胚の発生過程で、5-プロモデオキシウリジンという細胞自死を抑制する物質を投与すると水かきが残ってしまう。

またオタマジャクシからカエルへの変態は、甲状腺ホルモンがあればオタマジャクシの尻尾が細胞自死するが、分泌する甲状腺を取り除けば尻尾が切れず変態しないで大きなオタマジャクシになってしまう。

以上のような細胞自死メカニズムをガン細胞の自死に利用しようという研究が活発である。一般に、ガンとは増殖調整が暴走しその細胞が無制限に増えていく病気である、と思われている。

ところが、ガン遺伝子には細胞増殖能力を高めるだけでなく、逆に細胞自死を抑制したりする働きを持って

いることがわかってきた。つまり本来なら死んでしかるべきところを細胞自死の抑制によって生き残り、死に損なった細胞がガン化してしまうことが明らかになったのである。

したがってガン細胞に攻撃を加えるためには、細胞増殖するガン細胞に細胞自死の遺伝子を放り込んだり、細胞自死を促進させるようなホルモン・酵素などを投与したりすればよいことがわかる。そのような細胞自死の制御によるガン治療に期待が寄せられているらしい。

6.3 脳内物質と中毒

脳内の物質によって、幸せ、快感、怒りなどの情動がコントロールされる。その物質として、ドーパミン、セロトニン、ノルアドレナリン、 β （ベータ）エンドルフィンなどがある。

コカイン、大麻（マリファナ）、LSDなどの麻薬や、メタンフェタミン、アンフェタミンなどの覚醒剤、アルコールやタバコなどはドーパミンを増やす。

行動そのものも、動機となって、それらの脳内物質の分泌が強化される。たとえばパチンコの場合がそうである。大当たりすると、「ほっとする」「安心する」といった「安堵」の快感をもたらす β エンドルフィンの分泌量が増加する。また、長時間走り続けて体に痛みや疲労を感じだすと、脳内で β エンドルフィンなどの分泌量が増し、痛みが和らぐ。そのおかげで走り続けられる。ところが、そのような走りが習慣になると、さらに「快感」や「恍惚感」になり、いわゆる「ランニングハイ」と呼ばれる陶酔状態に陥る。

脳内物質が分泌することによる、依存症のメカニズムは、以下のようにして進む。

- ①快感刺激があると、ドーパミンを分泌し、それが神経ネットワークに伝達される。そのネットワークには、受け皿になる受容体があり、それがドーパミンで満たされると快感を覚える。
- ②強い快感が続くと、脳は、脳波の興奮を抑えるため、受容体の数を増やす。
- ③この状態を快感に対して「耐性」が出来るという。耐性が出来ると、今までと同じ刺激のままでは「最初の快感」が得られなくなる。人はさらに快感を求めようと行動する。
- ④周期的にドーパミンの分泌行為を繰り返すと、その量は増え続け、それが強化され、身体のメカニズムとして刻み込まれてしまう。
- ⑤すると、行為を行う前から受容体が自然にドーパミンを待ちかまえるようになる。こうなるとドーパミンを強く欲しがる精神依存を作り出し、また同じことを無意識の内に繰り返し、止めたくても止められなくなる。

タバコ、アルコール、麻薬、パチンコやランニングに限らず、人はすべての行動にはまる。チョコレートやアイスクリーム、ぜんざいなどの甘いもの、釣り、テレビゲーム、ショッピング、恋愛、そして仕事にも。これらのすべてに脳内物質の変化が関係している。

これらのことを鑑みて援助交際は危険な行為と言わざるを得ない。誰にも迷惑をかけていないから悪くないと考えている少女もいるが、若いうちから性におぼれてしまうと、母性本能より性欲が勝ってしまい、子育てができなくなってしまう危険性ははらんでいる、と思う。

以上、ここではシステムを取り巻く環境が変遷するさまについて述べた。

我々は、自分たちが関与するシステムがうまく働いており居心地がいいと、そこからたとえ離れるべきであっても離れようとしめない。時々刻々とシステムやその周りの環境は変化していく。だから忍び寄ってきている変革の波をキャッチできていないと、それが急に表出してうろたえてしまう。そうならないためにも、常時アンテナを張っており、時代の潮流がどの方向に進もうとしているのか、常日頃から検証して変革のための対策を講じておくべきなのである。

参考文献

1. 中井孝著,『システム思考のすすめ』,大学教育出版,2010
2. ルイス・ガースナー著,山岡洋一,高遠裕子訳,『巨像も踊る』,日本経済新聞社,2002
3. 中谷巖著,『プロになるための経済的思考法』,日本経済新聞社,2005
4. 山田善教監修,『早わかり CIM』,日刊工業新聞社,1991
5. 日本経済新聞社 05 年 12 月 13 日付朝刊,13 面
6. 日本経済新聞社 2010 年 6 月 30 日付朝刊,17 面 (利用者課金、収益の柱に)
7. 日本経済新聞社 2010 年 7 月 8 日付朝刊,38 面 (日本経済新聞 電子版、有料会員 7 万人超)
8. 薄上秀男著,『発酵肥料のつくり方・使い方』,農山漁村文化協会,1995
9. 大山ハルミ,山田武著,『細胞の自殺—アポトーシス』,丸善,1995
10. マーロン・ホーランド,バート・ドッドソン著,中村桂子,中村友子訳,『Oh!生きもの』,三田出版会,1996

Witchcraft and Hawthorne's Fiction Writing

Kayoko Nakanishi

Received October 29, 2010

Key Words : Salem Witchcraft, Vision, Self-consciousness as a Writer

From earlier tales, such as “The Hollow of the Three Hills” (1830), “Alice Doane’s Appeal” (1834) and “Young Goodman Brown” (1835), to later romances, like *The Scarlet Letter* (1850) and *The House of the Seven Gables* (1851), Hawthorne frequently creates witches and wizards who possess the ability to trap people in visions and illusions. Similarly, Hawthorne often likens the act of fiction writing to the act of witchcraft by depicting both as conjuring visions and illusions in people’s minds. This likening of fiction writing to witchcraft suggests that Hawthorne holds an ambivalent view of his own act of writing in which he feels both pride as a man of letters and guilt about manipulating others’ imaginations. In this paper, I discuss Hawthorne’s self-consciousness as a writer, focusing on the demonic nature of Puritan writings in seventeenth-century New England and his keen interest in it.¹

1. Vision and Witchcraft

It is common knowledge that Hawthorne read seventeenth-century Puritan writings from New England and mined materials, such as the Salem Witch-hunt and Indian warfare, from them.² For example, he borrows in “Young Goodman Brown” the phrase “a rampant hag” (X, 86)³ from Cotton Mather’s *The Wonders of the Invisible World* (1693) that refers to the Salem Witch-hunt. However, a more significant aspect to consider in Hawthorne’s Puritan-influenced witchcraft stories is that they always integrate the complexities of vision and reality. For instance, in “The Hollow of the Three Hills” and “Alice Doane’s Appeal,” a witch and a wizard converse with people and conjure visions that reflect people’s desires and anxieties that are hidden in their minds.

More specifically, in “The Hollow of the Three Hills,” a lady asks an old withered witch to bring her news about the welfare of her family that she has betrayed and left behind. The lady meets the witch at a hollow between three hills, where a pool of green and sluggish water lies. Such scenes were, the narrator explains, “once the resort of a Power of Evil and his plighted subjects” (IX, 200).⁴ At the verge of the basin, the witch practices witchcraft for the lady, muttering words of a prayer and conjuring sounds and visions as follows:

In such a manner, as the prayer proceeded, did those voices strengthen upon the ear; till at length the petition ended, and the conversation of an aged man, and of a woman broken and decayed like himself, became distinctly audible to the lady as she knelt. . . . Their voices were encompassed and re-echoed by the walls of a chamber, the windows of which were rattling in the breeze; the regular vibrations of a clock, the crackling of a fire, and the tinkling of the embers as they fell among the ashes, rendered the scene almost as vivid as if painted to the eye. (IX, 201 emphasis mine)

In this vision, the lady sees her weeping parents, her child’s funeral, and her broken-hearted husband. Whether these visions mirror actual events or not, they certainly reflect the lady’s heartsick groans and fears that stem from her self-condemnation.

Likewise, in “Alice Doane’s Appeal,” a wizard moves Leonard Doane to murder Walter Brome by exciting Leonard’s “diseased imagination and morbid feelings” (XI, 270).⁵ Discerning Leonard’s repressed incestuous feeling toward his sister Alice Doane, the wizard arouses Leonard’s “suspicion of a secret sympathy between his sister and Walter Brome” (XI, 271):

While Leonard spoke, the wizard had sat listening to what he already knew, yet with tokens of pleasurable interest, manifested by flashes of expression across his vacant features, by grisly smiles and by a word here and there, mysteriously filling up some void in the narrative. But when the young man told, how Walter Brome had taunted him with indubitable proofs of the shame of Alice, and before the triumphant sneer could vanish from his face, had died by her brother's [Leonard's] hand, the wizard laughed aloud. Leonard started, but just then a gust of wind came down the chimney, forming itself into a close resemblance of the slow, unvaried laughter, by which he had been interrupted. (XI, 272 emphasis mine)

Leonard pursues the fearful story with the wizard's encouragement, resulting in the murder of Brome. Leonard thinks that "[he] was deceived" by the wizard, (XI, 272) but it's too late. "[S]tung with remorse for the death of Walter Brome," he shudders with "a deeper sense of some unutterable crime, perpetrated, as he imagined" (XI, 273). Like the witch in "The Hollow of the Three Hills," this wizard calls up visions that reflect the innermost desires and disquietude of Leonard. In these stories, the visions invoked by the witch and the wizard serve to reveal people's hidden feelings and highlight taboo themes, like women's transgressions and incestuous relationships.

In "Young Goodman Brown," rather than a witch or a wizard raising visions, it seems as if the young man himself raises visions of the Devil and other objects. For example, when walking through "the gloomiest trees of the forest" (X, 75) to join "a witch-meeting" (X, 89), Brown thinks, "What if the devil himself should be at my very elbow!" (X, 75). Just at that time, he beholds "the figure of a man" (X, 75), the Devil. A similar pattern is repeated with the term "figure." For example, when Brown hears mingled sounds along the road, within a few yards of his hiding-place, he believes that he recognizes the voices of the minister and Deacon Gookin "without discerning so much as a shadow" of "their figures" that brush the small boughs. Immediately following, he hears the two men begin conversing about the witch-meeting that they are attending (X, 81). Instead of a witch or a wizard conjuring visions, Brown's anxiety and desire are converted into figures as soon as he thinks them.

This narrative structure of "Young Goodman Brown," as Niwa points out, reveals the psychological aspect of specter evidence (34-35).⁶ Specter evidence was adopted during the Salem Witch Trials in 1692-93, where if people claimed that some person's specter was tormenting them, the person was accused to be a witch or a wizard. For example, when the girls in Salem village, who had acted as triggers of the witch hunt, went into a fierce fit in the presence of the accused at the trials, they were regarded as witches and wizards who tormented the girls in the shape of the accused, and were sentenced to be hanged on the basis of specter evidence (Saari 55). However, what the townspeople witnessed during the trial were most likely misinterpretations of the events, even illusions, caused by their fear of witches and wizards. Like Goodman Brown fails to distinguish between "a person and the person's 'shape,' or specter" (Levin, 344), during the witch hunt frenzy in Salem, people, frightened by the superstitions and beliefs in witchcraft, misdeemed their fears and the resulting misinterpretations for reality. And it was Puritan writings in seventeenth-century New England that propagated this horror of wizards and witches and laid emphasis on the power of witnessing them, leading to the adoption of specter evidence in the Salem Witch Trials. This nature of Puritan writings can be seen in Hawthorne's strategy of integrating the complexities of vision and reality in his stories.

2. "Providence Tales"

Hawthorne's reading included *Memorable Providences Relating to Witchcraft and Possessions* by Cotton Mather (1689). This eminent Puritan highlights the importance of eyewitnessing at the beginning of his work:

By the special Disposal and Providence of the Almighty God, there now comes abroad into the world a little History of several very astonishing Witchcrafts and Possessions, which partly my own Ocular Observation, and partly my undoubted Information, hath enabled me to offer unto the public Notice of my Neighbours. (93-94, emphasis mine)

"I was my self an Eye Witness to a large part of what I tell," Mather states (123). By using the term "witness" repeatedly and relaying tales of witchcraft and possessions, this Puritan minister fanned people's fear for the purpose of solidifying their faith in God. Hawthorne possesses a keen interest in Cotton Mather and the nature of his writings, making them the subject matter of many of his works.

Before delving into Hawthorne's interest in Cotton Mather and his works, it is necessary here to provide a brief explanation of Providence and "providence tales." The term "Providence," derived from Latin, is traceable to Ancient Greece. In its original sense, the Greek equivalent of Providence means "looking ahead." It was Plato who first asserted a systematic doctrine of divine Providence and presented the idea of "a World Soul" that benevolently guides the whole universe. Philo Judaeus of Alexandria furthered the Platonic arguments for Providence, referring to a personal God, which is closer to Christian thought. Introduced into Christianity in the Roman Empire, Providence came to mean God or God's protective care for all his creation, especially humankind.⁷

Focusing on the literary use of Providence, in his *Providence Tales and the Birth of American Literature*, Hartman defines "providence tales" as "stories that relate the activities of God on earth" and explains why Puritans in the seventeenth century attached particular significance to the eyewitness. In the following two paragraphs, I briefly summarize Hartman's argument regarding the creation and rise of the providence tale.

The Bible is undoubtedly the most typical and ancient providence tale. In the second half of the seventeenth-century, however, a major transition occurred in English providence tales in response to several great cultural and historical changes, which were caused mainly by land explorations, the Civil War, and the rise of the new science. These factors complexly intertwined to encourage the empiricism, skepticism, and atheism of the age (1).

In response to these changes, Puritans in England began to promulgate a new style of providence tales. They attested to the works of God on earth not by rejecting but rather by adopting the empirical methodology of the new science, which was commended by the Royal Society of London, the oldest scientific society in Britain founded in 1660. Put into print in massive quantities by a new printing technology, these religious writings were infused with other popular printing forms, including merriments and ballads, which forged "a new hybrid providence tale," neither wholly religious, scientific, nor entertaining. In order to challenge the declining theocracy, the religious leaders like Increase Mather and Cotton Mather, both members of the Royal Society, brought a new type of providence tale into New England. They earnestly composed and promoted providence tales that paid particular attention to issues present in the New World, such as witchcraft, a trackless wilderness, and Indian captivity. They also heralded "the future discourse of the new nation" (1-2).⁸

In this rich, historical context, the providence tales specific to New England emerged. *An Essay for the Recording of Illustrious Providence* (1684) by Increase Mather was the first providence tale about witchcraft in America (Saari 99). Highly influential due to his decisive leadership, Cotton Mather propagated the horror of demons and witches in his *Memorable Providences Relating to Witchcraft and Possessions*, and his *The Wonders of the Invisible World* justified the Salem Witch Trials. In a style that followed empirical methodology, these providence tales put emphasis on eyewitness accounts. This led to the adoption of specter evidence in the Salem Witch Trials, and the observation records of the trials were made into another kind of providence tale.

3. Witchcraft and Fiction Writing

I now turn to exploring Hawthorne's descriptions of Cotton Mather. In Hawthorne's fiction, Mather is often accused of dogmatism because his works that emphasize the fear of devils and witches drove people into the frenzy of the Salem Witch Trials. For example, in *Grandfather's Chair* (1840), Cotton Mather is described as follows:

From the foundation of New England, it had been the custom of the inhabitants, in all matters of doubt and difficulty, to look to their ministers for counsel. So they did now; but, unfortunately, the ministers and wise men were more deluded than the illiterate people. Cotton Mather, a very learned and eminent clergyman, believed that the whole country was full of witches and wizards, who had given up their hopes of heaven, and signed a

covenant with the Evil One. (VI, 78)⁹

The narrator also says that Mather is “that prodigious book-worm,” “sometimes devouring a great book, and sometimes scribbling one as big” (VI, 93). In another instance within the same story, to his granddaughter’s question, “Was not the witchcraft delusion partly caused by Cotton Mather?” (VI, 94), the grandfather answers:

‘He was the chief agent of the mischief,’ answered Grandfather; ‘but we will not suppose that he acted otherwise than conscientiously. He believed that there were evil spirits all about the world. Doubtless he imagined that they were hidden in the corners and crevices of his library, and that they peeped out from among the leaves of many of his books, as he turned them over, at midnight.’ (VI, 94 emphasis mine)

In these passages, one can recognize a cyclical repetition between seeing and writing in that Mather sees delusions due to his reading. Fermenting his active imagination by intensive reading, he wrote providence tales based on the delusions he “witnessed,” and it excited the imaginations of their readers, who also pictured delusions. This cyclical process played a crucial role in causing the Salem Witch-hunt. Thus, “He [Mather] was the chief agent of the mischief,” the grandfather says (VI, 94).

Even though Mather’s abilities had a negative influence on himself and others, Hawthorne is still attracted to Mather’s language power that seems to possess an almost demonic energy. His attraction to Mather’s power becomes clearer in “Alice Doane’s Appeal” where Mather appears in the vision of a young writer who recounts the story of the Salem Witch-hunt to two young women, bringing them into a mesmeric trance. In the story that the young writer creates, Mather observes the accused “witches and wizards” on their way to the scaffold. The writer narrates, “my hearers mistook him for the visible presence of the fiend himself; but it was only his good friend, Cotton Mather” (XI, 279). He converts “a very learned and eminent clergyman” (VI, 78) into a congenial companion of the fiend.

However, this bitter comment regarding Mather is easily regarded as ironic because the young writer also conjures the vision of Salem Witch-hunt as Mather did in the dreadful calamity. Mather’s works warned people not to be deceived by wizards and witches who conjure specters. However, it was his writings that assumed a diabolic power, which incited people’s fear and curiosity of witchcraft and encouraged them to see visions. Like Mather, “that prodigious book-worm” (VI, 93), Hawthorne, picturing visions in the moonlight, contrives a means of charming his readers into his visionary world. Thus, the attempt of the young writer clearly mirrors that of Hawthorne, who is also a young writer in search of his own writing style. The young writer’s conflicting attitude toward Mather, modeling his demonic writing and yet blaming it, reflects Hawthorne’s ambivalent view of the act of his own fiction writing.

Hawthorne is surely aware of the demonic aspect of his act of writing. Melville, an admirer of Hawthorne, also points out the demonic nature of Mather’s and Hawthorne’s writings. In “The Apple-Tree Table” (1856), Melville describes Cotton Mather and his works as follows:

In the most straightforward way, he [Mather] laid before me detailed accounts of New England witchcraft, each important item corroborated by respectable townsmen, and of which not a few of the most surprising he himself had been eyewitness. Cotton Mather testified whereof he has seen. (382)

...

For my own part as I lay in bed watching the sun in the panes, I began to think that much midnight reading of Cotton Mather was not good for man; that it had a morbid influence upon the nerves, and gave rise to hallucinations. I resolved to put Cotton Mather permanently aside. (385)

Melville warns that Mather’s works have a morbid influence to conjure hallucinations in his readers’ minds. Likewise, in “Hawthorne and His Mosses” (1850), Melville writes that “when the book [*Mosses from an Old Manse*]

was closed, when the spell was over, this wizard [Hawthorne] ‘dismissed me with but misty reminiscences, as if I had been dreaming of him’ (241). Melville likens Hawthorne to “a wizard,” whose writing possesses “the spell” that brings his readers into a mesmeric trance and shows them visions.

In addition to Melville likening Hawthorne to a wizard, Hawthorne himself metaphorically likens writing to witchcraft and blames it and, yet, he openly admits a demonic aspect to his own writing as is seen above in “Alice Doane’s Appeal.” Such an ambivalent view that Hawthorne holds of his own act of writing is also projected onto some of the characters that he creates. For example, in *The House of the Seven Gables*, Holgrave, “a young author” (II, 211) and a descendent of the Old Matthew who was reputed as a “wizard,” puts Phoebe into a trance and shows her visions of Alice Pyncheon’s tragic story, like the young writer in “Alice Doane’s Appeal” does to the young ladies. However, Holgrave refrains from completing “his mastery over Phoebe’s yet free and virgin spirit” or establishing “an influence over this good, pure, and simple child, as dangerous, and perhaps as disastrous, as that which the carpenter of his legend had acquired and exercised over the ill-fated Alice” (II, 212). Having “the rare and high quality of reverence for another’s individuality,” the narrator says, Holgrave “forbade himself to twine that one link more, which might have rendered his spell over Phoebe indissoluble” (II, 212). Samuel Coale points out that Hawthorne regarded mesmerism as “a modern form of witchcraft” and that “the techniques both attracted and repelled him.” Hawthorne indicates here that to acquire “empire over the human spirit” (II, 212) by mesmerism is to violate morality and commit a sin as does witchcraft that manipulates peoples’ imaginations, even though mesmerism and manipulating imaginations is the very nature of his writing.

In *The Scarlet Letter*, Hawthorne’s dilemma between pursuing art and violating morality also crystallizes into an oxymoronic character in the form of Hester as an admirable “witch.” In “The Custom-House,” the preface to the story, Hawthorne introduces the cyclical repetition of seeing and writing, depicting the process of recovering Hester’s embroidered scarlet letter that was preserved by Mr. Pue. The narrator of the preface witnesses the scarlet letter, conjures images, and weaves them into a story. This pattern is repeatedly presented throughout the story. The townspeople make various interpretations of what they see when they gaze at Hester’s scarlet letter as well as observe the letter A on Dimmesdale’s breast and witness the meteor darting through the sky in the shape of the letter A.

Hester makes use of this cyclical repetition to practice her own strategy of manipulating the townspeople. As Bercovitch suggests, Hester utilizes a “self-conscious manipulation of the townspeople” (6) and, as Person points out, Hester’s “strategic silence” (471) affects the plot and the destiny of other characters, some elements of the story indicate a secret plan that Hester herself carries out.¹⁰ In terms of both the embroidery by her hands and the very symbol of her transgression, Hester is the “author” of her letter A. Hester, who is regarded as a “witch” and is the author of the scarlet letter, manipulates townspeople’s imaginations. As a result, the meanings they give to the letter A change from “adultery” through “able” into “admirable.” In this sense, Hester’s strategy directly coincides with and reflects Hawthorne’s own writing technique—a technique that seeks to encourage his readers to picture the scenes of his story as though they were in front of their eyes. Hawthorne as a man of “letters” is like a wizard, similar to Hester being like a witch, who manipulates people’s imaginations through her “letter A.” His ambivalent self-consciousness about his fiction writing is personified in Hester who functions as an admirable “witch,” whom the townspeople hold in great reverence and yet alienate from the community.

Hawthorne borrowed from providence tales written by the seventeenth-century Puritans not only their historical records but also their demonic mechanism of creating illusions that manipulate human memory into mistaking an illusion for reality. By doing so, he experiences conflict between his sense of sin arising from his self-conscious awareness of the profane nature of his act of writing and ambition for success as a writer. Hawthorne’s narrators and characters who are able and yet never allowed to fully exert their magic power, or “authority,” over their “readers” reflect Hawthorne’s ambivalent view of his act of fiction writing.

Notes

1. An earlier version of this article was published in *Forum* 13, 2008, and its revised and enlarged version also appeared in the Introduction and Chapter 2 in my Ph.D. thesis submitted to Kyoto University in 2010.
2. For further information of Hawthorne's reading of Puritan books, see Colacurcio and Kesselring.
3. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. X [*Mosses from an Old Manse*] 86. All further references to Hawthorne's works are to this edition. The volume and page numbers are included parenthetically in the text.
4. *The Centenary Edition* Vol. IX [*Twice-told Tales*] 200.
5. *The Centenary Edition* Vol. XI [*The Snow-Image and Uncollected Tales*] 270.
6. For the argument of specter evidence and "Young Goodman Brown," see Levin and Niwa.
7. Freedman 520-21, Buttrick 940, and Wood 979-80. For a full account of this, see Baaren's "Providence."
8. What Hartman refers to as "the new nation" here is not the one independent from England. The complete separation of the colony from England was accelerated by the Stamp Act in 1765, when a divergence between England's and America's interpretation of Providence developed and became clear (Guyatt 85).
9. *The Centenary Edition* Vol. VI [*True Stories from History and Biography*] 78.
10. For further argument about the strategy of Hester as an admirable "witch," see Nakanishi.

Works Cited and Consulted

- Baaren, Teodorus P. van. "Providence." *Encyclopædia Britannica*. *Encyclopædia Britannica Online*. Encyclopædia Britannica, 2010. Web. 15 Oct. 2010.
- Bercovitch, Sacvan. *The Office of "The Scarlet Letter."* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1991.
- Buttrick, George Arthur. et al., eds. *The Interpreter's Dictionary of the Bible*. New York: Abingdon P, 1962.
- Coale, Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1998.
- Colacurcio, Michael J. Introduction. *Selected Tales and Sketches*. Ed. Colacurcio. New York: Penguin, 1987. vii-xxxv.
- Freedman, David Noel, et al., eds. *The Anchor Bible Dictionary*. 5 vols. New York: Doubleday, 1992.
- Guyatt, Nicholas. *Providence and the Invention of the United States, 1607-1876*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Hartman, James D. *Providence Tales and the Birth of American Literature*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1999.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Kesselring, Marion L. *Hawthorne's Reading, 1828-1850*. New York: New York Public Library, 1949.
- Levin, David. "Shadows of Doubt: Specter Evidence in Hawthorne's 'Young Goodman Brown.'" *American Literature* 34 (1962): 344-52.
- Mather, Cotton. *Memorable Providences Relating to Witchcraft and Possessions*. 1689. *Narratives of the New England Witchcraft Cases*. Ed. George Lincoln Burr. Mineola. New York: Dover, 2002. 89-144.
- . *The Wonders of the Invisible World*. 1693. *Narratives of the New England Witchcraft Cases*. Ed. George Lincoln Burr. Mineola. New York: Dover, 2002. 203-52.
- Mather, Increase. *An Essay for the Recording of Illustrious Providences*. 1684. *Narratives of the New England Witchcraft Cases*. Ed. George Lincoln Burr. Mineola. New York: Dover, 2002. 1-38.
- Melville, Herman. *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston: Northwestern UP; Chicago: Newberry Library, 1987.
- Nakanishi, Kayoko. "Hester as Admirable 'Witch': The Magic Power of the Scarlet Letter." *Forum* 13 (2008): 25-44.
- Niwa, Takaaki. "Preference for 'Truths' over 'Facts'." *Review of American Literature* 18 (2002): 28-39.
- Person, Leland S., Jr. "Hester's Revenge: The Power of Silence in *The Scarlet Letter*." *Nineteen-Century Literature* 43 (1989): 465-83.
- Saari, Peggy, et al., eds. *Witchcraft in America*. Detroit: U·X·L, 2001.
- Wood, D. R. W., et al., eds. *New Bible Dictionary*. 3rd ed. Downers Grove: Intervarsity P, 1996.

『学生力』を高めるための「教養演習Ⅰ」(3)

西川真理子・若槻 健・中西佳世子
梶木 克則・増田 将伸・石川 朝子¹

平成 22 年 10 月 29 日受理

“Seminar for Cultural Accomplishment I”—To Enhance“ The Student Power”(3)

Mariko Nishikawa Ken Wakatsuki Kayoko Nakanishi
Yoshinori Kajiki Masanobu Masuda Tomoko Ishikawa

【要約 (英語)】

The program of “Seminar for Cultural Accomplishment I” started in 2005 as a course in career planning for first-year students. Since 2008, this program has been designed and improved by the project team that consists mainly of the faculty members of the Institute of General Education in Koshien University.

In 2010, we, as the staff members of the project, have made several changes to the program, taking into account the results from the practices we had carried out in 2008 and 2009. This paper refers to the improvement of the program after applying the changes we have made, suggesting possibilities of a more effective way of motivating our students to build their self-esteem and feeling of belongingness and to begin planning on career formation during their first year at university.

キーワード (英訳): キャリア教育科目: A course in career planning 学生力: Student Power
成長意欲: Self-motivation of glowing 自尊感情: Self-esteem 帰属意識: Feeling of belongingness

0. はじめに

本学では、2005年度から、1回生の時から『就職意欲』を高めるため、「キャリア教育」科目の1つとして「教養演習Ⅰ」が開講され、2007年度から単位化された。また、2008年度からは、本学の初年次教育を担当している「総合教育研究機構(以下、機構)²」が担当部署となり³、その中の私たちワーキンググループ(以下、WG⁴)が中心となり、キャリアサポートセンター⁵の支援のもと、プログラムの作成、運営を行っている。

2008、2009年度は、年度ごとの学生の共通点や相違点を明らかにするためにプログラム全体の内容はほとんど変えずに実施した⁶。そして、2010年度は、ほぼ同じプログラム内容で行った過去2年の結果を比較しながら改善点を探った結果、全体のプログラム内容をかなり変えることとなった。

本稿では、まず、2010年度に「教養演習Ⅰ」がそれ以前とどう変わったのかを、変更に至った経緯(理由)とともに述べ、次に、変更後の「教養演習Ⅰ」が実施された結果と、結果の分析に基づく発展の可能性について言及したい。本学の「教養演習Ⅰ」が、改善、発展されていく中で、大学1回生における「キャリア教育」の一つのモデル(たたき台)となることを期待する。

¹ 本学の「文部科学省学生支援推進プログラム」学生支援員

² 栄養学部、現代経営学部、人文学部とは別に、2006年度から発足した、総合教養科目と教職科目の教員から成る組織。

³ それまでは、キャリアサポートセンターが担当部署であった。

⁴ 2008年度からのメンバーは、西川、若槻、中西であり、2009年度から梶木、2010年度から増田、石川が加わった。

⁵ 4名の職員とセンター長(教員)からなり、全学のキャリアサポート委員会を統括している。

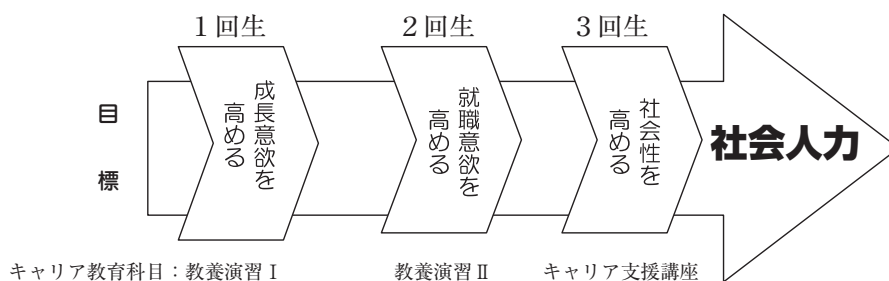
⁶ 2008年度、2009年度のプログラム内容および相違点等については、西川真理子・若槻健・小野博司・金崎茂樹・中西佳世子・梶木克則『『学生力』を高めるための「教養演習Ⅰ」(2)』(甲子園大学紀要No.37.55-67(2009))に詳しい。

1. 「教養演習Ⅰ」とは

1.1 1回生「キャリア教育」科目としての「教養演習Ⅰ」

本学における「キャリア教育」は、2004年度以前は、就職活動が始まる3回生のみを開講されていたが、「3回生から就職対策をしても遅く、1回生から就職に向けての意欲を高めて就職（社会人になるということ）に向けて準備していくことが必要だ」という意見が、キャリア教育に携わる教職員の中で次第に強くなり、2005年度以降、1回生の時から「キャリア教育」が施されるようになった。さらに2008年度以降は、総合教育研究機構の教員からなるワーキンググループが「キャリア教育」科目のプログラムの作成に携わるようになった。そして、これを機に、1回生から3回生まで『段階的』な「キャリア教育」が体系的に実施されることとなった。

まず1回生では、直接的に「就職」について意欲を高めるのではなく、「これから私はこの大学で頑張っ て学んでいこう」という『学生力⁷』、特に、『成長意欲』を高めることに焦点をあて、2回生になってからは、就職活動に備え、仕事のことや、社会人になるために必要なことを学ぶことで、直接的に「就職」について意欲を高めることに重点を置き、3回生では、就職活動が始まる時にスムーズに動けるよう、マナーやスキルを身につけることを目標とした授業を提供している。このように本学のキャリア教育では、『段階的』なプログラムを作成、運用し、毎年実施結果を反省し、改善を行っている。



(図1) 本学の1回生から3回生までの『段階的』キャリア教育

『成長意欲』を高めるためには、「自分はこの大学で頑張っていける」という、自分と大学を信じる気持ち、すなわち、『自尊感情』と『帰属意識』を高めることが必要不可欠だという考えのもと、「教養演習Ⅰ」のプログラムは、『自尊感情』や『帰属意識』を高めることを意識した内容となっている。

また、内容だけでなく、授業形式も、より『成長意欲』を高めるようなものとし、『仲間』と共に学び合い、高まり合うことを大切にした『協同学習』と呼ばれるグループワーク形式で行うことを基本としている。『協同学習』は、最初からグループのメンバー全体で話し合う典型的なグループワークではなく、まずは自分で考え、次に他人と考える、という形をとることにより、「自分で考える力」をつけることを目指している。そして、自分の考えを話す力、他人の考えを聞き、理解する力、そして、他人のいろいろな考えを聞いたうえで自分の考えをまとめる力といったトータルな「考える力(思考力)」に加え、コミュニケーション能力やチームワーク力などもこの形式をとることにより高まっていくことが期待される。さらに、グループのメンバーは、学生たちができるだけ多くの『仲間』と知り合えるように、毎回変えている。また、授業進行役のWGのメンバー1名に加え、教室には複数の教員、2010年度にはティーチングアシスタント(以下、TA)の学生が各グループを見回り、必要に応じてサポートするファシリテーターの役割を務めた。教室内の教員やTAは、学生をサポートする役割だけでなく、『仲間』としての役割も果たしている。学生たちが同じ1回生の学生だけでなく、何人かの教員や先輩と知り合うことで少しでも多くの『仲間』と出会い、「この大学には、相談できる『仲間』がいてくれる」という安心感から『帰属意識』を高めることが狙いだ。

また、2008、2009年度は、第1回から第14回まで毎回、その回のワークを記録する『ワークノート』を配布し、

⁷ 日経ナビ編集部編著『大学1,2回生の間にやっておくこと 学就BOOK』(2008)では、「学生力」とは「成長意欲」と「学生基礎力」からなるものとされ、「成長意欲」は、①目的意識、②価値観、③ストレス(耐久力)、④友人関係、⑤経験、「学生基礎力」は、①読む力・書く力、②聞く力・話す力、③考える力、④基礎学力、⑤マナーからなるものだとされる。

ワークの状況を記入させ、最後には、その授業で一番印象に残ったこととその理由を記入して、提出させ、WGのメンバーが分担してそのワークの内容と感想をチェックし、コメントを付けて、次回の授業開始時に返却し、ファイリングさせる、という方法を探ってきた。学生たちには『ワークノート』に記入された内容が毎回の評価になることをあらかじめ伝えたが、これは、学生たちが積極的にワークに取り組むよう、促す効果を狙ったものである。ここで、WGによるコメントは、学生たちを励ますような内容を心がけており、監視の機能ではなく、「見守っているよ、応援しているよ」というメッセージを伝えることを目的としている。

1.2 実施時期およびクラス編成

大学への『帰属意識』を高め、『自尊感情』を育むことにより、学習意欲を高め、ひいては『就職意欲』を高める、という趣旨から、「教養演習Ⅰ」はできるだけ早い時期に行うことが望ましい、ということで、2008年度以前は、講師の関係で前後期に1回生を二分して実施していたものを、2009年度からは1回生全員に対して前期に開講することが実現した。

『帰属意識』を高めるためには学部の枠を越えたできるだけ多くの学生たちが知り合い、『仲間』が増えるほうがよいので、全学部の学生の混合クラス編成にしたかったが、残念ながら、2010年度も管理栄養士養成課程である栄養学科のカリキュラムに余裕がなく、全学部の学生との交流は実現できなかった。しかしながら、2009年度までは現代経営学部と人文学部および栄養学部のフードデザイン学科が混合クラスで他の学部と交流できるのに対して、栄養学科は学科の中での交流にすぎなかった⁸が、2010年度は、フードデザイン学科教員からの要望⁹に応じて、フードデザイン学科が栄養学科のクラスのほうに入るようにクラス編成を行うことで、栄養学科とフードデザイン学科の学生たちの交流が実現した。したがって、2010年度は、現代経営学部と人文学部の混合クラス1クラスと栄養学科とフードデザイン学科の混合クラス2クラス体制で、それぞれ水曜日4、5時限に「教養演習Ⅰ」の授業が開講されることになった。

(表1) 2009年度と2010年度のクラス編成

2009年度	前 期		2010年度	前 期	
水Ⅳ	栄養・フードデザイン 現代経営、人文 36名	栄養・フードデザイン 現代経営、人文 36名	水Ⅳ	現代経営、人文 31名	
水Ⅴ	栄養・栄養 39名	栄養・栄養 39名	水Ⅴ	栄養(栄養・フード) 79名	栄養(栄養・フード) 78名

ただし、時間割、クラス分け決定後に入学者数が確定するため、「教養演習Ⅰ」の栄養学科の履修者が、2009年度の85名から129名(44名増)となり、水曜日5時限の栄養学部のクラスは、1クラス当たり、2009年度の40名弱から80名弱と大幅に増加してしまい、当初予定していたグループワーク用の教室に入りきれなくなり、机や椅子が移動できない講義用の教室を使わざるを得なくなった。このことに伴い、新たに大学院生3名と学部生1名にティーチングアシスタントとして、各クラスに2名ずつ加わってもらうことにした。したがって、4時限の現代経営学部と人文学部の混合クラスには、進行役を含め、1クラスに3名、5時限の栄養学科とフードデザイン学科の混合クラスには、1クラスに6名のファシリテーターが入ることになった。

⁸ 栄養学科は出席番号順にXYZの3班に分かれ、授業は、基本的にこの3クラス分けて行われ、2つに分かれる授業の場合には、Y班がさらに前後で2つに分けられ、XYaとXYbの2クラスで授業が行われるため、X班の人はYb班とZ班の人、Ya班の人はZ班の人、Yb班の人はZ班の人、Z班の人はXとYaの人と授業の場では交流する機会がなかったが、「教養演習Ⅰ」では2008年度以降、3つのクラス間の交流が実現している。

⁹ 同じ栄養学部でも一緒に受講できる授業がほとんどないため、栄養学科とフードデザイン学科の学生が交流する機会を「教養演習Ⅰ」の場で与えてほしい、ということであった。

2. 2010年度「教養演習Ⅰ」における改善

2.1 プログラム内容の変更

2010年度のプログラムを2009年度（2008年度）プログラムと比較したものが次の（表2）である。

（表2）教養演習Ⅰのプログラム

2009年度			回	2010年度		
項目	概要	担当者		項目	概要	担当者
ガイダンス	この科目の必要性和概要説明、自己紹介カード作成	機構	1	ガイダンス	キャリア教育の必要性及び科目の概要説明と自己紹介	機構
大学生活①	相手の意見を聞き、自分の意見を述べる	機構	2	自己理解①	入学前の自分を振り返り、大学生活の目標を立ててみる	機構
大学生活②	大学と高校の違い	機構	3	大学生活①	自主的に学ぶ（授業の受け方、ノートの録り方）	機構
大学生活③	学部への帰属意識の高揚を図る	学部	4	大学生活②	大学を知ろう（Ⅰ）教職員にインタビューする	機構
大学生活④	自発的に学ぶことの重要性	機構	5	大学生活③	大学を知ろう（Ⅱ）インタビューの結果を発表する	機構
自分探し①	事実を客観的に踏まえ、自分の意見を持つ	機構	6	大学生活④	先輩から話を聞く（Ⅰ）在學生	学部
自分探し②	自己の潜在能力・興味等の分析	機構	7	大学生活⑤	先輩から話を聞く（Ⅱ）卒業生	学部
人間関係①	自己を確立し、人間関係の構築について学ぶ	学外講師	8	自分磨き①	「社会人力」とは何か（社会人準備段階としての大学生が大学時代に身につけるべき力、マナー）	学外講師
人間関係②	人・組織との協調を図り、自己啓発について学ぶ	学外講師	9	自分磨き②	コミュニケーション能力（Ⅰ）傾聴力	学外講師
将来を考える①	大学・学部での可能性を探る＜就職編＞	学部	10	自分磨き③	コミュニケーション能力（Ⅱ）グループディスカッション	機構
将来を考える②	大学・学部での可能性を探る＜資格編＞	学部 機構	11	自分磨き④	コミュニケーション能力（Ⅲ）新聞を読む	機構
将来を考える③	将来展望を考える	学外講師	12	自分磨き⑤	目標設定と時間管理	学外講師
将来を考える④	社会性や働く意識を喚起する	学外講師	13	自己理解②	現在の自分の能力チェックと大学が提供している「自主学習」サービスを知る	機構
自分探し③	自己分析から大学で何をするか	機構	14	大学生活⑥	前期試験に向けて	機構
理解度テスト	ファイルを見て振り返ってみる	機構	15	理解度テスト	入学してから半年間の自分とこれから（1回生後半）の自分（目標設定）、教養演習Ⅰの振り返り	機構

（表3）（表4）が2010年度と2009年度のプログラムの対照表であるが、（表3）に見られるように、2010年度のプログラムにおいて、2009年度とほとんど変更のない回は、第1、3、6、7、10、11回の6回であり、（表4）に見られるように、2010年度の第8、12、13回は、2009年度実施の内容を統合するなど改善した回である。そして2010年度から新しい内容が取り入れられた回は、第2、4、5、9、14、15回の6回ということになる。この章では、2010年度に変更（改善）したところを見ていく。

(表3)2009年度と内容がほとんど同じ回における2009年度との対応 (表4)2009年度と内容が異なる回における2009年度との対応

2010年度	2009年度
第1回	第1回
第3回	第5回
第6回	第4回
第7回	第10回
第10回	第2回
第11回	第6回

2010年度	2009年度
第2回	—
第4回	—
第5回	—
第8回	第3回、第13回の改善
第9回	—
第12回	第9回の改善
第13回	第7回、第14回の改善
第14回	—
第15回	—*

*「教養演習Ⅰ」についての感想の部分だけ2009年度(一部)と同様

2.1 プログラムにおける個々の改善

2.1.1 「自己分析」の見直し

2009年度は、第7、8、9、12、13、14回において「自己分析」を行う場面が入っていたため、受講者から「自己分析が多すぎる」「同じようなことをした回があった」という意見が多く見られたので、2010年度には、「自己分析」は必要不可欠だが、重なることのないよう、全体の内容を調整した。具体的には、2009年度で、第7回で自分の能力や興味について分析し、第14回でそれを用いながら、自分の能力や、これまでの経験、取得した資格などについて振り返り、これから大学で何をしていくか目標を立てる、ということを行っていたものを、2010年度には、第13回一回にまとめた。また、第7回と非常によく似た自己分析を行っていた第8回を2010年度には実施しないこととした。また、第9、13回では、社会人になるための資質や適職についての自己分析テストを実施していたが、受講した学生たちから「就職のことはまだ先のことだから考えられない」といった意見や、逆に栄養学科の学生たちからは「管理栄養士を生かした仕事と決めているので、適職検査をする意味がない」といった意見が多く見られたため、就職ということを意識させるための自己分析は、1回生のときには時期尚早だと考え、2010年度には実施しないことにした。

2.1.2 「長期目標」から「短期目標」へ(第2回、第15回)

2008、2009年度、2年間の「教養演習Ⅰ」の実施結果、学生の感想を見ると、2.1.1でも述べたように、入学してまだ半年も経っていない学生たちに「就職」のことを意識させることは難しく、『就職意欲』を高めるような内容は2回生のキャリア教育科目のプログラムに委ねたほうがよさそうだと考えられる。第14回は、「雇用の現状」「働くことの意味(大切さ)」「社会人に求められる力(社会人力)」「就職情報の収集のしかた」など、社会人になるために知っておかなければならないことを学ぶ回であったが、この回も「長期目標」が描けなければ自分のこととして考えられない内容だったため、第9、12回同様、1回生のキャリア教育に入れるよりも、2回生に回したほうがよいと考え、2010年度からは「教養演習Ⅰ」のプログラムから2回生開講の「教養演習Ⅱ」のプログラムに移すことにした。

しかしながら、「目標」を持って毎日を送ることは大切なので、まずは、それまでの自分のやってきたことを振り返りながら、「これから半年後」といった「短期目標」について考えさせる回を設けた。それが、2010年度の第2回と第15回である。したがって、「自分を振り返ることにより、これからの目標を立てる」という目的については、2009年度と同様であるが、その「目標」の部分が、1回生の段階ではまだイメージしにくい、「就職」を意識した「長期」的なものから、よりイメージしやすい、「これからの大学生活」、特に、1回生においては、「これからの半年間」という「短期」的なものへと変えたところが2010年度の2009年度との違いである。

2.1.3 「高校生から大学生へ」から「大学生から社会人へ」へ(「社会人力」という考え方の導入)(第8回)

大学の初年次教育では、高校生から大学生になるにあたっての「大学生としての自覚を高める」内容が必ずといっていいほど組み込まれていることもあり、学生たちからは、「もう知っていること」として評価が2年連続

低かったにもかかわらず、「教養演習Ⅰ」でも2008年度に続いて2009年度も大学生としての自覚を高める回を入れたが、やはり学生の評判はよくなかった。しかしながら、将来『社会人』になる準備段階としての大切な時期である『大学生』としての自覚を高めることを学ぶ回は必要だと考え、これまでは「大学と高校の違い」を考えさせることにより、『大学生』としての自覚を高めようとしたのに対して、高校生をひきずるのではなく、『社会人』になるためのステージとして『大学生』をとらえ、『社会人』になるためには『大学生』としてはどうすることが必要か、ひいては、高校生までの自分からどう変わらなくてはならないか、ということを考えさせることにした。その結果が、第8回「『社会人』とは何か」の導入である。したがって、この回は、2009年度の第2回と目的を同じくし、第14回の「『社会人』になるには」ということについて話してもらった内容のうちの「『社会人』に求められる力（『社会人力』）」の部分と重なっている。

2.1.4 「社会人力」の中で「コミュニケーション力」を重視したプログラムへ（第9回）

2008、2009年度のプログラムでも、新聞の社説を読み、要約し、それに対して、自分の意見をコメントとして書く、「事実を客観的に踏まえ、自分の意見を持つ」という回に続き、テーマに基づいたグループディスカッションを行うことにより、「相手の意見を聞き、自分の意見を述べる」という回を、「コミュニケーション力」の大切さを学ぶ回として設定してきたが、2008年度にこれらが続けて実施していたものを、2009年度にはバラバラに実施したため、両者ともに「コミュニケーション力」の大切さを学ぶ回であるということが全面に出ないプログラムとなってしまった。この反省から、2010年度には、「コミュニケーション力」の重要性をより全面に出すために、「社会人力」の中でも特に「コミュニケーション力」が重視されていることを踏まえ、「社会人力」とその大切さについて学ぶ回のすぐあとに「コミュニケーション力」の大切さを学ぶ回を配置し、さらに、「コミュニケーション力」については、学生たちはややもすれば「話す力」を重視しがちだが、社会では「話す力」にも勝るとも劣らず重視されている『傾聴力』について取り上げることとし、第8回の「社会人力とは何か」の次に、第9回「コミュニケーション力①傾聴力」、第10回「コミュニケーション力②グループディスカッション」、第11回「コミュニケーション力③新聞を読む」を続けて実施することにした。この結果、2009年度までは2回生のキャリア教育科目（「教養演習Ⅱ」）のプログラムに入っていた『傾聴力』が、2010年度からは1回生のプログラムに移動することになった。

また、「新聞の社説を読み、要約し、コメントをつける」回は、2009年度にもあったが、「社説の内容が身近な内容でないため、理解できなかつた・興味が持てなかつた」という理由で、要約以前に読む気力を失ってしまった学生が少なくなかつたため、今回は社説の内容にも気を配り、内容で拒絶し、要約に進めないようになることを避けた。また、2008年度、2009年度と、「要約のしかたを教えてほしかった」という意見が複数あったので、この回は「要約力」の大切さをわかってもらう回であり、要約のしかたを学ぶ回ではないと考えるものの、要約のしかたのポイントも説明することにした。

2.1.5 「目標設定」、「タイムマネジメント」について学ぶ回の導入（第12回、第14回）

2009年度のWGと学外講師との反省会で、学外講師から「タイムマネジメント」の回を設けたほうが良いという意見があり、また、2009年度に、第12回の「将来の展望を考える」という回で「目標設定」を行かせたが、具体的なイメージがまだ描けなかつた学生が多かつたため、2010年度は、「目標設定」の大切さと目標設定のしかたについて学ぶ必要があると考え、2010年度は、第12回に「目標設定とタイムマネジメント」の回を設け、学外講師に担当してもらうことにした。また、第14回にタイムマネジメントの実践（応用）として、「前期試験という目標を設定して計画を立てる」という回を設けた。

2.1.6 「自主学習」を促す回の改善（第13回）

2009年度は、「大学・学部での可能性を探る〈資格編〉」として、学習意欲、特に、「自主学習」に対する意欲を高めてもらおうと、大学や学部で取得できる資格について、学部独自の資格については学部教員、一般的な資格についてはWGが紹介したが、説明にとどまり、そこから学生たちが資格を取得しよう、資格取得のために勉強しよう、ということまで持っていくことはできなかつた。そこで、2010年度は、「自主学習」として、総合教

育研究機構が開講している授業以外の講座¹⁰や資格試験を紹介し、興味を持った講座や資格試験の担当教員のところに話を聞きに行く、という回を設けることにした(第13回)。具体的に、学習する対象を(仮に)決め、担当者からより詳しい話を聞き、担当者との関係も親しくなることにより、学習への意欲が高まることを狙ったものである。

2.1.7 『帰属意識』の強化(「大学を知ろう」の回の導入)(第4回、第5回)

大学、学部への『帰属意識』を高めることを目的として、2009年度には、「先輩から話を聞く」という回を設けたが、それに加え、先輩だけでなく、教職員のことも知り、また、グループワークで力を合わせてインタビューしたり、発表したりすることにより、『帰属意識』をより高めようと、2010年度では、第4、5回に「大学を知ろう」という回を設けることにした。具体的には、4名のグループで教職員にインタビューに行き、その様子をTAは写真を撮り、次の回にはインタビュー内容を1枚の紙にまとめ、それをPDFにして、写真とともにスライドに映して、発表するというものである。

2.2 『キャンパス・キャリア・ファイル(CCF)』の作成(「ワーク」から「振り返り」へ)

2008年度からの「教養演習Ⅰ」は、2007年度以前と内容がかなり変更されただけでなく、それまでは各回で講義の内容をまとめたプリントが配布されていたのに対し、毎回「ワークシート」を配布し、「協同学習」で考えた結果をそこに書き込んでいき、それを毎回ファイリングして『ワークノート』を作っていく、という形式をとった。これは、学生が積極的にワークに参加することを主たる目的としていた。また、最後に、授業の感想を書かせ、WGがチェックし、感想を書いて返すということを繰り返し行った。これも、私たちが学生たち一人ひとりを見ていて、応援している、というメッセージを送ることにより、学生が授業に熱心に参加し、ワークにより熱心に取り組むことを期待してのことであった。

2010年度にこの『ワークノート』をもとにした『キャンパス・キャリア・ファイル(CCF)』を作ったことは、内容の改善とともに大きな変化だといえる(図2)。これは、学生の学習および成長の記録を1回生の時から蓄積し、3回生の就職活動の時のPRに役立てようというものである。また、それだけでなく、これらの記録を蓄積していく中で、学生たちの『成長意欲』がより高まることも期待できる。このCCFは、最終的には、データベース型のeポートフォリオにする計画だが、この「教養演習Ⅰ」における紙版のCCFの1回生版をその前段階として位置づけている。

したがって、2008、2009年度に作成した『ワークノート』がベースになっているものの、「記録」ということが第一目的となるため、「何を残すのか」「何を記録すればあとあと役に立つのか」ということが重要課題となり、学生に記入させる項目についてはかなり思案した。

「記録」の一環として、『ワークノート』の最後の学生の記述欄では、授業の感想を書かせていたのに対して、CCFでは、1週間の振り返り、1週間で自分が頑張ったこと、について書かせることとした。もちろん、教員のコメントを書いて返すことは、学生の『学習意欲』を高めるために、2010年度でも行うこととした。

¹⁰ 総合教育研究機構では、「学習編」「教養編」「資格編」「就職編」の4つの分野に分かれている「ステップアップ講座」という講座を、全授業時間帯に複数開講し、学生たちが空き時間を有効に使えるようにしている。また、日本漢字能力検定、実用英語検定、秘書検定、ビジネス文書検定、TOEIC、日商PC検定なども実施している。

¹¹ 「文部科学省平成21年度学生支援推進プログラム」による。



(図2) キャンパス・キャリア・ファイル (CCF)

このCCFは、現在は、1回生前半までの記録となるが、将来的には、1回生から3回生までの記録を積み重ねていきたいと考えている。そして、少なくとも、半期ごとに、「これまでの自分の振り返り」と「これからの目標」を記入させ、記録を蓄積していきたいと考えている。2010年度のCCFでは、第2回と第15回がそれにあたり、第2回では、①これまでの人生を振り返り、まずは、自分が頑張ったことと苦手だったことを書き、次に、②これまでの経験をもとに自己PRをした。次に、①これから大学でチャレンジすること3つと、②大学卒業時の自分のイメージを書いた。第15回では、①まずは、第2回で書いたチャレンジすること3つについて、どれだけ達成できたかを書き、②大学に入学してから半年間の経験から自己PRをした。次に、今後チャレンジすることについて、①1回生後期の目標②残りの大学生活での目標に分けて書いた。

第2回、第15回の一連の試みについて学生からは、「目標を立てるとやる気が出る」「目標を立てることでやりたいこと、やるべきことがはっきりした」「紙に書くことで目標意識が高まった」といった感想が見られた。

3. 結果

3.1 単位取得率

「教養演習Ⅰ」の単位取得率は、次の(表5)のようになっている。

(表5) 2009年度「教養演習Ⅰ」単位取得率

(%)

	栄養学部		現代経営学部	人文学部	全学部平均
	栄養	フードデザイン			
2005年度前期	91	/	59	58	74
2005年度後期	71		9	24	40
2006年度前期	94		—	61	77
2006年度後期	89		52	—	70
2007年度前期	79		—	75	77
2007年度後期	85		77	—	81
2008年度前期	100		—	96	90
2008年度後期	95	96	—	—	96
2009年度前期	100	86	95	85	94
2010年度前期	98	96	71	92	96

2010年度は、2009年度に比べると、現代経営学部が95%から71%とかなり下がっている¹²ものの、フードデザイン学科と人文学部は単位取得率は上がっており、2007年度以前に比べれば、全体で94～96%の学生が最後ま

¹² 現代経営学部は2011年度から学部が廃部されることもあり、2010年度の入学者は7名で、うち2名も早い段階で退学したため、このような数値となった。

でこの科目を履修したということと、必修科目でないにもかかわらず、入学時のオリエンテーションでの「教養演習Ⅰ」履修指導の徹底により、履修登録がほぼ100%となっていることは大変喜ばしいことだといえる。また、今年度も、履修率がほぼ100%であるこの「教養演習Ⅰ」において、欠席が続いたり、受講態度やCCFの記入内容において問題を感じた学生については学部知らせることにより、学部で早い段階で適切な対応を促せたことが何回かあった。

3.2 授業全体の評価

次に、本学で半年ごとに全科目に対して実施されている「授業評価」の結果を見てみる。

集計はクラスごとになるため、水曜4時限に実施された現代経営学部、人文学部の合同クラスと、5時限に実施された栄養学部（栄養学科とフードデザイン学科）のクラスの2つに分かれる。その中の、1)「あなたは授業に積極的に授業に取り組みましたか」、2)「この授業は受講して有意義だったと思いますか」、3)「この授業は総合的に満足できたと思いますか」の3つの設問に対して、「そう思う、どちらかといえばそう思う」、「そう思わない、あまりそう思わない」と書いた学生の割合を2009年度と比較して整理したのが次の(表6)である。

(表6) 2009年度、2010年度「授業評価」における学生の評価結果 (%)

		そう思う+どちらかというと思う		そう思わない+あまりそう思わない	
		水曜4時限 2010:現経+人文 2009:現経+人文+ フード	水曜5時限 2010:栄養+フード 2009:栄養	水曜4時限 2010:現経+人文 2009:現経+人文+ フード	水曜5時限 2010:栄養+フード 2009:栄養
1) 積極的に授業に取り組んだか	2010	70.0	70.0	5.0	7.3
	2009	55.0	66.2	16.7	15.6
2) 授業は有意義だったか	2010	55.0	53.3	15.0	14.7
	2009	51.7	67.5	6.7	10.4
3) 授業は総合的に満足したか	2010	70.0	56.0	15.0	10.7
	2009	55.0	75.3	13.3	11.7

2009年度に比べ、「積極的に授業に取り組んだ」とする学生が全体的に多くなったことは喜ばしいことである。一方、現代経営学部と人文学部の学生の、授業に対する評価と満足度が上がっているのに対し、栄養学科の学生の満足度が下がっているのが気になる点である。その要因としては、1クラスの人数が2009年度の約2倍となり、講義形式の教室となり、グループワークがしにくかったことがあるのではないかと考える。

次に、この授業に対する、学生の評価をもう少し細かく知るために、「授業評価」の自由記述欄と第15回に行った「教養演習Ⅰ」に対する意見(感想)を見てみると、一番多かったのが、「友だちができて(増えて)、よかった」「グループワークがよかった」というものであった。また、2008、2009年度同様、グループワークを通じて、「自分の意見が言えるようになった」「コミュニケーション能力が高まった」と書いている学生も多く見られた。

「いろいろな人の話が聞けてよかった」「在学生や卒業生といった先輩の話聞いたことがよかった」という、2008、2009年度と同様の感想に加えて、「先生や職員さん、助手さんたちと話して親しみを感じた」「先生に質問に行きやすくなった」という、2010年度ならではの感想もあった。また、2008、2009年度同様、「(自分が書いた感想についての)先生のコメントが楽しみだった」と書いてくれた学生もいた。

2009年度は、教養演習Ⅰについての感想欄に空白が多い学生が多く、心配したが、2010年度は量的にかなり書けていた。各年度の特徴かとも思われるが、2009年度は試験監督を職員に委ねたのを、2010年度は私たちWGで行ったのが効果があったのかもしれない。

3.3 『帰属意識』は高まったか

前節でも述べたが、第15回の教養演習Ⅰについての感想欄や「授業評価」の自由記述欄を見ると、グループワークを通じて、大学の中に知り合いが増え、友だちができたことを肯定的にとらえている学生が2010年度にも多く見られた。大学に話せる友だちや教職員、つまり、自分の「仲間」がいるということは大学へ『帰属意識』を持つための重要な要素の一つだといえよう。

また、2009年度同様、「在学生の話を聞く」の回は大変評価が高く、「授業への不安がなくなった」「勉強のしかたがわかった」「自分も頑張ろうという気持ちになった」「これから先の行動の指標ができた」などという感想が多かった。卒業生の話を聞いた回においては、「学生時代の過ごし方がわかった」「将来の夢がふくらんだ」「学生時代がんばろうと思った」などという感想があった。また、3.2でも述べたように、教職員たちへのインタビューを通じて、教職員に対する親しみを感じたとしている学生も多かった。

本学には、第一志望として本学を希望して入学したわけではない学生が少なくなく、入学当初は、大学や学部に対する期待、ひいては『帰属意識』が高くない学生が少なくない。また、行きたくなかった大学に入学した自分に対してだけでなく、その大学、学部にいる他の学生たちに対しても低く評価している嫌いがある。しかしながら、このように、目標(夢)を持ってしっかりとやっている在学生や、社会で立派に活躍している先輩たちの姿を目のあたりにしたり、教職員に対する学生への期待や思いを聞いたりすることにより、この大学、学部でやっていっても大丈夫だという安心感が得られ、『帰属意識』が高まることが期待できる。また、仲間を認め、「自分もこの大学・学部で頑張っていこう」という前向きな気持ちは『自尊感情』を高めることにもつながってくるだろう。

また、毎回授業開始時に返却される前回の『キャンパス・キャリア・ファイル(CCF)』の教員のコメントを楽しみにしている学生や、「コメントに励まされている」といってくれる学生が今年も複数いた。私たちWGの教員やTAの学生たちがこの授業やCCFでのやり取りを通じて、学生と関係を深めることが、学生の大学への『帰属意識』を高める一助となっているといえよう。

3.4 『自尊感情』は高まったか

2009年度から、『自尊感情』の高さをより客観的に図る尺度として、平石(1993)¹³の「自己肯定意識尺度」を用い、教養演習Ⅰの最初と最後の回に同じ調査を行い、値を比べることにより、『自尊感情』の変化を見てみることにした。6つの尺度とそれぞれの尺度の項目内容は(表7)のとおりである。

回答形式は、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階評定尺度であり、それぞれ、5点、4点、3点、2点、1点とし(但し、逆転項目は、反対の配点である)、それぞれの項目内容について選択させ、尺度ごとに合計得点を出し、被験者全員の尺度ごとの得点の平均を求めた。本学の学生の初回、最終回の結果と、平石(1993)で、623名の大学生を対象に行った結果を表にしたものが(表8)である。

¹³ 平石賢二(1993)「青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)－重要な他者からの評価との関連－」名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－40, pp.99-125

(表7) 自尊感情を量るアンケート項目とそれぞれの得点結果

自己肯定意識尺度

() 内は得点で、初回の得点 / 最終回の得点である。

領域	尺度	項目	得点 (初回/最終回)
対自己領域	自己受容 (15.17/15.16)	1. 自分なりの個性を大切にしている	(3.72/3.85)
		2. 私には私なりの人生があってもいいと思う	(4.48/4.48)
		3. 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる	(3.58/3.47)
		4. 自分の個性を素直に受け入れている	(3.74/3.78)
	自己実現的態度 (23.54/22.02)	5. 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	(3.73/3.40)
		6. 情熱をもって何かに取り組んでいる	(3.34/3.27)
		7. 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる	(3.64/3.50)
		8. 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている	(3.47/3.47)
		9. 張り合いがあり、やる気が出ている	(3.23/3.01)
10. 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない●		(3.07/2.62)	
11. 自分には目標というものが無い●		(3.71/3.36)	
充実感 (27.10/25.11)	12. 生活がすごく楽しいと感じる	(3.71/3.52)	
	13. わだかまりがなく、スカッとしている	(3.07/2.89)	
	14. 充実感を感じる	(3.44/3.23)	
	15. 精神的に楽な気分である	(3.04/2.78)	
	16. 自分の好きなことがやれていると思える	(3.56/3.33)	
	17. 自分はこのびのびと生きていると感じる	(3.58/3.48)	
	18. 満足感がもてない●	(3.34/2.91)	
	19. ここから楽しいと思える日がない●	(3.97/3.67)	
	対他者領域	自己閉鎖性 ・ 人間不信 (17.61/19.11)	20. 他人との間に壁をつくっている
21. 人間関係をわずらわしいと感じる			(2.42/2.81)
22. 自分は他人に対してこころを閉ざしているような気がする			(2.72/2.88)
23. 自分はひとりぼっちだと感じる			(2.32/2.38)
24. 私は人を信用していない			(2.21/2.38)
25. 友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい			(2.10/2.33)
26. 友人と話していても全然通じないので絶望している			(1.55/1.82)
27. 他人に対して好意的になれない		(1.94/2.12)	
自己表明 ・ 対人的積極性 (20.94/21.64)		28. 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる	(3.41/3.26)
		29. 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている	(3.01/2.97)
		30. 疑問だと感じたらそれらを堂々と言える	(2.90/3.17)
		31. 友だちと真剣に話し合う	(3.58/3.55)
		32. 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる	(2.79/3.17)
		33. 人前でもありのままの自分を出せる	(2.76/2.98)
		34. 自主的に友人に話しかけていく	(2.97/3.26)
被評価意識 ・ 対人緊張 (20.82/20.43)		35. 人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている	(3.72/3.42)
		36. 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている	(3.59/3.33)
		37. 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる	(3.04/2.96)
	38. 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている	(2.90/2.83)	
	39. 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている	(2.49/2.61)	
	40. 自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている	(2.75/2.90)	
	41. 人に気をつかいすぎてつかれる	(2.80/2.94)	

●印の項目は、逆転項目

(表8) 自己肯定性尺度得点の平均と標準偏差

() 内は標準偏差

		年度	本学初回	本学最終回	平石 (1993)
対自己領域	自己受容	2010	15.17 (3.49)	15.16 (3.66)	16.25 (2.75)
		2009	15.11 (2.59)	16.69 (2.80)	
	自己実現態度	2010	23.54 (6.63)	22.02 (6.76)	22.52 (6.09)
		2009	23.29 (5.42)	24.16 (6.10)	
	充実感	2010	27.10 (7.37)	25.11 (7.62)	25.38 (6.82)
		2009	27.24 (6.68)	27.65 (7.54)	
対他者領域	自己閉鎖性・人間不信	2010	17.61 (6.87)	19.11 (8.03)	17.97 (6.35)
		2009	18.16 (7.21)	18.83 (7.65)	
	自己表明・対人的積極性	2010	20.94 (6.34)	21.64 (6.85)	23.25 (5.50)
		2009	21.59 (5.56)	23.73 (6.22)	
	被評価意識・対人緊張	2010	20.82 (6.85)	20.43 (7.66)	20.60 (6.19)
		2009	19.74 (5.99)	19.92 (6.46)	

●印の項目は、逆転項目

2009年度に比べ、対自己領域、対他者領域ともに、「自己受容」「自己実現態度」「充実感」「自己表明・対人的積極性」といった「自己肯定性」が低いことに気づく。特に、「充実感」においては、第1回に比べ、第15回のほうが全体的に数値がかなり減少している。この要因としては、第15回の「今後のチャレンジすること(後期)」を記入するところで、2009年度に比べ、「単位を落とさないようにする」「日頃からきちんと勉強する」ということを挙げている人が圧倒的に多いことが関係しているように思える。日々の勉強や初めての大学での試験に対する不安が、特に栄養学部の学生たちには例年よりも多く見られ、このことが「充実感」があまり感じられないことにつながっているのではないかと筆者は考える。

4. 各回の評価

最終回(第15回)には、教養演習Ⅰの受講しての感想(振り返り)についても記入させており、「役に立ったと思う回」と「役に立たなかった回」を選び、その理由を書かせている。ここでは、その結果を用いて、プログラム内容が適当であったかどうかを検討してみたい。

「役に立ったもの」「役に立たなかったもの」に選ばれた回に対して、「役に立ったもの」「役に立たなかったもの」に選ばれていれば何位であろうと1点として集計し、何人の学生が「役に立ったもの」「役に立たなかったもの」として挙げているかを見るために集計したもの(A欄)、1位には3点、2位には2点、3位には1点という得点を付けて集計し、「役に立ったもの」「役に立たなかったもの」それぞれについての評価度を点数化して表わしたもの(B欄)をまとめたのが(表9)である。比較のために、(表10)に2009年度(2008年度)の結果(ただし、A欄のみ)も挙げている。

(表9) 「理解度テスト」の設問に基づいた2010年度の各回の評価
(回の下段の()内が2009年度の実施回を表わす)

(人)

回		1 (1)	2 (-)	3 (5)	4 (-)	5 (-)	6 (4)	7 (10)	8 (-)	9 (-)	10 (2)	11 (6)	12 (-)	13 (-)	14 (-)	
役に 立った	2010	A	26	21	59	33	22	82	41	91	57	31	27	16	3	7
		B	70	49	148	69	43	181	77	171	102	44	48	27	6	11
					③			②		①	④					
役に 立た ない	2010	A	8	6	21	20	12	5	11	15	16	36	19	34	25	49
		B	17	16	55	43	26	10	29	38	34	85	35	58	49	115
											②		③		①	

(表 10) 「理解度テスト」の設問に基づいた 2009 年度、2008 年度の各回の評価
(2008 年度は 2009 年度の回に対応させているため、回の下段の () 内が 2008 年度の実施回を表わす) (人)

回	1 (1)	2 (8)	3 (2)	4 (4)	5 (3)	6 (7)	7 (5)	8 (9)	9 (10)	10 (11)	11 (12)	12 (13)	13 (14)	14 (6)	
役に 立っ た	2009	27	45	18	51	47	22	25	45	24	47	18	15	25	23
	2008	11	14	11	4	43	32	29	17	5	42	17	16	18	29
役に な か っ た	2009	19	37	65	13	17	47	60	21	21	21	29	32	16	18
	2008	11	18	30	24	10	21	28	22	19	11	17	27	14	11

4.1 評価が高かった回

「役に立った」上位 3 回に選ばれたのが多かったのは、第 8 回、第 6 回、第 3 回、第 9 回である。2009 年度にもほぼ同じ内容で実施されたものの中で、2009 年度よりも評価が上がっていると思われるのが第 11 回である。これらについて、受講者が「役に立った」ととらえた理由について見ていき、学生はどういう内容を「役に立った」と考えるのか、学生にとってどういう内容が役に立つのか、ということを考える材料にしたい。

4.1.1 第 8 回「社会人力とは何か」

「大学生としての自覚を高める」という目的は同じでも、「高校生からの大学生」ではなく、「社会人になる前段階としての大学生」と捉え、「社会人として求められている力、マナー」を学ぶことから大学生としての在り方を考えさせるように内容を変えたことによる効果は、筆者が想像した以上であった。

学生たちはこの回を「最も役に立った回」と見なし、「社会で何が求められているかがわかった」「社会に出てから必要とされていることがわかり、これから学生時代に身につけていかなければならないことがわかった」「マナーの大切さがわかった」「社会人として基本的なマナーが学べてよかった」といった肯定的な感想が多く見られた。また、「わざわざプロの講師の先生が来てくれて、プロから学べてよかった」といった感想も複数あった。

社会人になるために大学生としてどうあるべきか、ということを考えること、キャリア教育のプロの先生に学べたことが学生たちには大学生としての自覚を促す大きな助けとなったことと、今学ぶことが将来につながるということが明確だったことが「役に立った」と実感させたのだろう。

4.1.2 第 6 回「在学生から話を聞く」

「在学生から話を聞く」ことにより、『帰属意識』を高める、というこの回は、2009 年同様、「役に立った」とした学生が多かった。評価が高かった理由は、前述したように、自分と同じ大学、学部にいる先輩からの話ということで現実味があり、その先輩の話を聞くことにより、授業や勉強への不安がなくなり、頑張っている先輩、輝いている先輩を目の当たりにして、自分も意欲が高まった学生が多かったようである。

4.1.3 第 3 回「自主的に学ぶ」

この回も、2008 年度から組み込まれている内容で、毎年「役に立った」とする学生が多い一方で、「役に立たなかった」という学生も少なくない回である。「ノートを録ることの大切さがわかった」「ノートの録り方がわかった」「『良いノート』を書きたい、という気持ちになった」「早い時期に授業の受け方やノートの録り方についての話が聞けて、大学の講義にあまり戸惑わずにすんだ」という肯定的な感想がある一方で、「ノートの録り方は人それぞれでいいと思う」「今さら自分のやり方を変えられない」といった意見があるのも例年通りであった。

また、2009 年度は第 5 回 (5 月中旬) に実施したが、「もっと早くやってほしかった」という意見が複数あったので、2010 年度は、第 3 回 (4 月下旬) に前倒ししたが、それでも「もっと早くやってほしかった」という意見がわずかに見られた。

4.1.4 第 9 回「コミュニケーション力①傾聴力」

この回も第 8 回と同じ学外講師担当の回である。「社会人力」の中でも重視されている「コミュニケーション力」、その中でも最近特に注目されている『傾聴力』の大切さと『傾聴力』を高める方法を学ぶ回であった。特に、

「聴き上手」になるための手法として『アクティブリスニング(積極的傾聴)』について、具体的に、かつ、詳しく学べたことについて勉強になったとしていた学生が多かった。「コミュニケーション力」といえば「話す力」と思いがちで、「話すのは苦手」＝「コミュニケーション力がない」とする学生が多いが、「聴くこと」の大切さを学んだことは新しい発見であり、「聴く力」なら付けることができるかもしれない、と学生たちは感じたようだ。

4.1.5 第11回「コミュニケーション力③新聞を読むこと」

「人の話を聞き、理解したうえで、自分の意見を持ち、それを述べること」の大切さを学ぶことを目的としてこの回は2008年度より設定されており、「人の話」の題材として新聞の社説が用いられ、「理解力」を図るものとして、「要約」することを求め、「自分の意見を持ち、それを述べる」力を図るものとして、「コメント」を書かせているが、要約する以前に、社説の内容が身近なものでないために、興味が持てなかったり、拒絶反応を起したりして、読めない学生が多かったため、「役に立たなかった」とした学生が多かった。そのため、2010年度は内容がより身近な内容の社説を選んだ¹⁴。また、2008年度に続き、2009年度も「役に立たなかった」理由として、「要約のしかたがわからなかった」「要約のしかたを教えてほしかった」と書いた学生が少なからずいた。この回は、要約のしかたを学ぶことが目的ではなく、社説を要約することを通じて、人の話を理解することの大切さ、必要性について気づいてもらうことが目的だったが、今回は簡単に要約のしかたを説明する時間も取った。

その結果、「役に立たなかった」理由として、「社説の内容がわからなかった」と書いた学生はごくわずかで、反対に、「役に立った」理由として、「要約のしかたのコツを教わってよかった」とした学生が見られた。その結果、2008、2009年度に比べて、この回の評価が高くなっていたが、要約すること、自分の意見を持つことの大切さや、新聞を読む必要性について書いている学生が2008年度より少なかったのは残念だった。

4.2. 評価が低かった回

今度は、評価が低かった第14、10、12回と、改善したにもかかわらず思いのほか評価が上がらなかった第13回、第4、5回を取り上げ、評価が低くなった要因を探ってみたい。

4.2.1 第14回「前期試験に向けて」

この回は、前の第13回「目標設定と時間管理」を受けての実践の回として位置付け、大学生になって初めての試験に向けて、あらかじめ計画を立てることにより、学生たちがとまどわないようにするために設けられたが、最も「役に立たなかった」と評価されることになった。

その一番大きな理由は、栄養学部では、すでに1年生必修の基礎セミナーの時間に同じことが行われていたということである。また、現代経営学部と人文学部においても、授業時間内に試験が行われ、すでに試験がほとんど終わっていたということで、その結果「役に立たなかった」評価されたと推測できる。

4.2.2 第10回「コミュニケーション力②グループディスカッション」

この回は、「役に立たなかった」とした学生が多い一方で、「役に立った」とした人も少なくない。「役に立った」とした学生の理由としては、「グループディスカッションの練習になった」「ひとの意見を聞くことが面白かった」「いろいろな意見があることが面白かった」「相手の気持ちや立場を尊重しながら話すことの大切さ、難しさを学んだ」といった感想が見られた。一方で、「役に立たなかった」とした学生は、この回は、「無人島に流れ着く」という設定で、グループディスカッションを行うというものであったが、「無人島に流れ着く」という設定が「あり得ない」ということをほとんどの学生が「役に立たなかった」理由としていた。若干、「班の中でグループディスカッションがうまくいかなかった」「ふざけた人がいてまじめにディスカッションできなかった」ということを挙げている学生も見られた。

4.2.3 第12回「目標設定と時間管理」

この回は、前述したように、学外講師にも指摘され、大変重要なものとして今回から1コマを使って取り挙げ、

¹⁴ 「大阪都構想」についての社説。

『社会人力』『傾聴力』同様、学外講師に担当してもらった回であったが、学生たちに評価が低かったのは誠に予想外であった。「役に立たなかった」理由としては、「毎日同じことの繰り返しなのでスケジュールを立てる意味がない」というものや、「時間管理はすでに自分でできている」というものもあったが、「目標を立てても実行できないので無駄」というものや「スケジュール立てない派だから」というものが意外と多かった。

4.2.4 第13回「現在の自分の能力チェックと自主学習」

自主学習を促すことを目的とするこの回は、2009年度の資格の説明が自主学習につながらなかったことから、2010年度は、総合教育研究機構が開講している授業外の講座（ステップアップ講座）や検定試験の説明を受けたあと、自分が興味を持った講座や検定試験の担当の先生に聞きに行く、というように改善したが、思いのほか評価が低くなった。「役に立たなかった」とした理由としては、「ステップアップ講座のことはもう知っている」「もっと早くするべき」という意見が多かった。また、「やる気のある人がすればいい」という意見も複数見られた。

4.2.5 第4、5回「教職員にインタビューする」

この回は、在学生や卒業生の話聞く回と同様、『帰属意識』を高めるために設けた回であった。したがって、「ふだん話せない先生、助手さん、職員さんと話ができよかった」「親近感が持てた」「これから話や質問に行きやすくなった」といった、こちらが期待していた感想も多くみられたものの、全体の評価は、在学生や卒業生の話聞く回よりもかなり評価が低かった。

その理由として、「違う学部の先生ではなく自分の学部の先生の話が聞きたかった」「先生や職員さんよりも先輩にインタビューしたかった」という感想や、「もっと大学のことを知りたい」という意見が見られた。

5. 今後の課題

実施結果を踏まえて、2010年度「教養演習Ⅰ」において、どこを改善しなければならないか、どのように改善すればいいか、現在筆者が思いつく点をいくつか挙げ、2011年度「教養演習Ⅰ」に向けての参考材料としたい。

5.1 学部の1回生前期開講「基礎セミナー」とのすり合わせの必要性

前述したように、第14回「前期試験に向けて」の回が「役に立たない」ことになった最大の理由は、学部の基礎セミナーと内容が重なったからであった。「教養演習Ⅰ」は、全学部1回生全員履修科目であるが、2010年9月に初めて、その内容を全教員に知らせることができたものの、それまでは、「教養演習Ⅰ」でどのようなことがなされているかについて、学部教員はシラバスのレベルでしか知ることがなかった。一方、私たちWGも、各学部の基礎セミナーの内容をシラバスでしか知ることができず、おまけに、実際には「基礎セミナー」はその年度の学生に合わせて、シラバスとは異なる内容で実施されることも多かった。本学の「教養演習Ⅰ」は、キャリア教育科目であるだけでなく、初年次教育でもあるので、各学部学科の初年次教育である「基礎セミナー」とのすり合わせを事前に行い、初年次教育がバランスよく実施されるようにする必要がある。

また、第4、5回の「大学を知ろう」という内容についても、学部教員については、学部ごとに「研究室訪問」などの形で実施し、全学部共通の部分（図書館、保健センター、キャリアサポートセンター、情報処理センターなどの施設）にかぎって学生たちに調べさせ、発表させたほうがいいのかもわからない。また、先輩についても、現在は学部学科をまたいで在学生や卒業生の話聞いているが、学部学科ごとに先輩を招いて、講演方式ではなく、グループごとに先輩を囲んで話をするほうがいいのかもわからない。これも、学部と相談してよりよい方法を探りたいと思う。

5.2 目標設定、時間管理の回の位置づけおよび内容の見直しの必要性

「目標設定」をし、「時間管理」をしていくことは、社会人にとってはもとより、大学生にとっても非常に重要なことであるが、そのことが今回は十分に学生たちに伝わらなかったようである。「コミュニケーション力」の重要性を納得させたように、「目標設定」「時間管理」の重要性も、『社会人力』と絡めて、『社会人力』のひとつとして位置づけて、話をするのがいいかもしれない。学生の感想の中に、「良いスケジュールと悪いスケジュールを比較してほしかった」という感想があったように、「目標設定」「時間管理」がうまくできていなければ、どんな悪いことが起こるのかという例を挙げると、学生にもこれらの重要性を実感させることができるかもしれない。

2回生では、「ライフプラン」という形で、目標を持つことの素晴らしさについてライフプランナーに講演してもらうが、1回生でも「目標(夢)」を持つことの素晴らしさ、という点から話をしてもらうのもいいかもしれない。

5.3 題材の見直しの必要性

第10回「コミュニケーション力②グループディスカッション」では、「無人島に流れ着く」という状況設定が非現実的だったために、そのあとにグループディスカッションで考えにくかった、という意見が多かったが、これは、2009年度に「グループのメンバーで会社を設立した場合、誰がどういう役職に就けばいいか」という状況を設定させたときにも同じような感想が出たことに通じるといえる。まだ経験していない状況は想像できない、という「想像力」の乏しい学生が年々増えている気がする。しかしながら、そのために本来の目的である「グループディスカッション」が円滑に進まない、ということを考えれば、題材はより現実的なものにしたほうがいいのか。第11回の「コミュニケーション力③新聞を読む」で、2009年度よりも題材を身近なものにした結果、学生たちが課題に取り組みやすくなったと思われることを考えると、題材を見直す必要があるかもしれない。

5.4 教員と学外講師の分担のバランス

大学、学部への『帰属意識』を高めさせるには、学部の学生や卒業生に講師として来てもらい、生の声を学生たちに聴かせる必要がある。また、2010年度は、より『帰属意識』を高めてもらおうと、教職員と話す機会(第4、5回)も増やした。

また、社会人になるために必要なことについて学ぶという内容の場合は、社会人教育もしているようなキャリア教育のプロに学外講師として来てもらったほうが、現状に即した説得力のある話を聞くことができる。

しかしながら、一方で、「教養演習Ⅰ」は初年次教育ということもあり、一人一人の学生の状況を継続して見ていく必要があるため、原則として、総合教育研究機構の教員が担当することになっている。

我々WGは、学生たちの『成長意欲』(『自尊感情』『帰属意識』)を高めるには、どういう人にどういう話をしてもらえばいいのかを考えながら、内容と講師を選んでいく必要がある。第11回「コミュニケーション力③新聞を読む」においても、いくつかの新聞社で、記者を大学に派遣して、新聞の読み方について講演してくれる、というサービスを提供しているのだから、そのサービスを利用することも可能かもしれない。

学内の教員だけでなく、学外の人のお話を聞くことは、「いろいろな人の話が聞けてよかった」という学生の感想が多かったように、学生たちにとっては貴重な機会であり、必要な限りそういう機会を作りたいと考える。それとともに、このプログラム全体の目的を達成するためには、話をお願いする学外の人たちにもこの授業の目的および担当する回の位置づけと目的をきちんと伝え、理解してもらったうえで話をしてもらう必要がある。

5.5 その他

1回生前期の学部「基礎セミナー」との調整が必要であることは前述の通りである。1回生前期の学部ごとの「基礎セミナー」だけでなく、この「教養演習Ⅰ」が1回生前期から後期への橋渡しとなる必要がある。CCFの半期ごとの目標およびその達成度の記録をはじめ、1回生後半では、学生のキャリア形成においてどういう能力を身につけておくことが必要なかを明らかにし、各学部の基礎セミナーで実践してもらうことが大切である。

課題達成型(PBL型)授業やグループディスカッション、プレゼンテーションなどのアクティブラーニング型の授業を行うことが望ましいと考えるが、これらの授業を行う際に、題材を学部、学科の専門分野から持ってくれば、専門分野への興味・関心を喚起するきっかけにもなるだろう。

「教養演習Ⅰ」が1回生前期で終わってしまうことを考えると、初年次教育という面では、1回生後半までを一貫したものであるとして、プログラムしていく必要があり、今後学部との連携が望まれるところである。

謝辞

この「教養演習Ⅰ」の授業にティーチングアシスタントとして参加し、1回生の学生たちに対して、私たちの期待以上に先輩として心温かくサポートしてくれた大学院(栄養学研究科)1回生の中塚瞳美さん、中西一起さん、松本裕一郎さん、栄養学部4回生の村上卓也さんと、本授業が円滑に実施できるよう、後方からきめ細やかにサポートして下さった学生支援推進プログラム職員の岩田知子さん、澤崎浪代さん、森由香さんに心より御礼申し上げます。

『ベラヴド』を読む (1)

比名 和子

平成 22 年 10 月 29 日受理

Reading *Beloved* (1)

Kazuko Hina

Toni Morrison's *Beloved*, which explores the meaning of slavery's impact on black people, includes two kinds of narratives, male and female. Even though Sethe and Paul D shares the experience as slaves on the farm ironically called Sweet Home, its influences on them are found incongruent in the genderized, sexualized and wholly racialized society. This paper will consider and analyze how the text depicts the differentiation between the black man and woman.

キーワード：近代性 (modernity)、セクシュアリティ (sexuality)、
父権的権力構造 (patriarchal power system)

このテキストは、登場人物の過去と現在が複雑に交錯し反響しあう、多重的な語りとなっている。多層的に重なる過去の時間が重要なのだが、物語の表層の語りの時間は現在 (設定は1873年夏) から始まり、結末へと向かって直線的に進行する。同時にこのテキストは、セサとポールDという黒人奴隷として同じ時間と空間を共有したふたりの物語となっており、過去の記憶に生きることを引き受けたセサ¹と忌まわしい過去から逃げ続けて各地を転々と放浪するポールDという対照が、このような時間に反映されている。デイヴィッド・ローレンスはこのテキストにおける記憶の働きについて次のように指摘する。

The damage done by dead folks in Toni Morrison's *Beloved* points to the central position accorded to memory, the place where these dead folks are kept alive, in this novel of futile forgetting and persistent remembrance. Operating independently of the conscious will, memory is shown to be an active, constitutive force that has the power to construct and circumscribe identity, both individual and collective, in the image of its own contents. Sethe's 'rememory', in giving substance to her murdered daughter and to the painful past, casts its spell over the entire community, drawing the members of that community into one person's struggle with the torments of a history that refuses to die. (Plasa 87)

セサの記憶は個人的であると同時に集合的であり、彼女の苦闘は黒人コミュニティをも巻き込みかねない。それゆえセサはコミュニティから疎外され孤立する。セサの殺した子どもの霊は、124番地の家に取り憑くだけではなく、記憶から身体性をもって甦るが、ここにはありえない形でリアルなものと超自然とが共存している。モリソンは「現実世界に深く根ざしつつ、同時に超自然的なものを受容する」、また「これは物事を知るもうひとつの方法だ」(Plasa 57)と述べている。奴隷の体験に密接な関わりを持つ作家たちは、西洋文明の英雄的な物語を拒否し、その物語を土台で支える記念碑的な時間を侵食する、とポール・ギルロイは指摘している(197)。このテキストにおける「記憶」の作用は、公正を装いながら実際は「人種の優越性と支配的な文化を隠して黒人とその言語を周縁化し、他者として排斥しようとする記号」(Morrison, PD x)を強制する言語を使って創作せざるをえない黒人作家としての手法でもあっただろう。(スイートホーム農園の黒人奴隷シクソーは英語には未来がない

¹ セサには未来がない。"But her brain was not interesting in the future. Loaded with the past and hungry for more, it left her no room to imagine, let alone plan for, the next day." (83)

と英語を話すのをやめる。) 女性が書くということの困難さについてメアリ・ジャコバスは同様の指摘をしている。

Women's access to discourse involves submission to phallogocentricity, to the masculine and the Symbolic: refusal, on the other hand, risks re-inscribing the feminine as a yet more marginal madness or nonsense. (12)

Though necessarily working within 'male' discourse, women's writing (in this scheme) would work ceaselessly to deconstruct it: to write what cannot be written. (12-13)

女性であり、黒人であるモリソンにとって問題は二重であった²。「アフリカ系アメリカ人の作家として、ジェンダー化され、性差別とあらゆることに人種差別のある世界で、いかに自由になりうるか」(Morrison, PD 4) を考察する必要があった。これはセサとポールDの体験の差異に反映している。

荒このみ氏は、ハリエット・ジェイコブズのスレイヴ・ナラティヴを分析し、同じ黒人奴隷の著作であっても、男性であるフレデリック・ダグラスの場合はすぐに著者として認知されたにもかかわらず、女性のハリエットの場合、編者であった白人のリディア・チャイルドが本当の作者ではないかと長期にわたって疑念をもたれていたと、指摘している(88-89)。このように、父権的イデオロギーの支配する社会では、同じ境遇にありながら奴隷でさえも男女はジェンダーコードによって差異化されている。「女の子が生まれたと知って、私は心が一層重くなった。奴隷制は残酷な制度だが、女性にとってはさらに残酷なのだ。奴隷として課せられる重荷だけでなく、女奴隷には女性ゆえに甘受させられる虐待や苦痛や屈辱がある。」(Yellin 77) とジェイコブズは述べている。'During slavery, the black woman was seen as either only a vagina or womb, objects that were there for sexual gratification or material gain. Her body was used as an assembly line to mass produce more slaves for the plantation.' (Watson 94) であるのだ³。さらに「奴隷の女たちは母親ではない。出生の時から死んでいて、自分自身の子孫に対しても親に対してもどんな義務も負えない」と想定されている(Morrison, PD 21)。一方、男性は男としての誇りも名誉も剥奪されて、「去勢された食用の鶏」(Morrison, PD 24) 同然である。ポールDの男性性に回復不能な最後の一撃を与えたのは、スイートホームの後継者となった教師に家畜のように鉄のくつわを噛まされたポールDの姿を、お気に入りの桶の上から悠然と見下ろすミスターと呼ばれる一羽の雄鶏である。家長然とセサと暮らし始めてやっと今まで誰にも語ることでできなかった屈辱的な過去を振り返る勇気を持ったポールDは、次のように述懐する。

"Yeah, he[Mister] was hateful all right. Bloody, too, and evil. Crooked feet flapping. Comb as big as my hand and some kind of red. He sat right there on the tub looking at me. I swear he smiled. My head was full of what I'd see of Halle a while back. I wasn't even thinking about the bit. Just Halle and before him Sixo, but when I saw Mister I knew it was me too. One crazy, one sold, one missing, one burnt and me licking iron with my hands crossed behind me. The last of the Sweet Home men.

"Mister, he looked so . . . free. Better than me. Stronger, tougher. Son a bitch couldn't even get out the shell by himself but he was still king and I was . . ." (85-86)

"Mister was allowed to be and stay what he was. But I wasn't allowed to be and stay what I was. Even if you cooked him you'd be cooking a rooster named Mister. But wasn't no way I'd ever be Paul D again, living or dead. Schoolteacher changed me. I was something else and that something was less than a chicken sitting in the sun on a tub." (86)

² Anya Heise-von der Lippe は、モリソンの小説は 'explore gender and race as intertwined categories of power, discrimination and victimization which have to be reassessed, undermined and deconstructed in various ways' (166) と指摘している。

³ Reginald Watson によれば、このテキストで "Morrison used images of nature, animalistic descriptions, and rape to exemplify how the black woman was exploited sexually during and after slavery." (93)

奴隷制は、白人にとっては家畜のように人間を所有し売買することだが、黒人にとっては、男性には去勢、父権社会においては男でなくなることを、女性には徹底的に他者、主体の欲望の対象であり性的搾取の存在、母親ではなく子どもを産む生産財であることを強いる制度である。結婚市場における白人のヒロインの経済的価値は自らの美德/純潔を保持することだが、黒人(奴隷)の女性にとってはその価値は‘her reproductiveness and an uncontested assumption of the sexual availability of black females’によって測られるのだ(Heise-von der Lippe 166)。女性であるセサは、殺してしまった娘の母親になろうと必死になっているが、男性であるポールDにとってはファロスの回復が何よりもまず優先される。セサが自己犠牲も厭わずビラヴの母親になることに執着するのは、剥奪され、切断された母/娘の関係を回復するためであって、このテキストで母性が礼賛されているわけではないことに注意すべきだろう⁴。

冒頭、家庭の秘密を孕んだ家は、我が物顔に振る舞う赤ん坊の幽霊に支配され、機能不全に陥り破綻している。124番地と称される「喉を切られた赤ん坊の激しい怒りで麻痺した」(6)家は、地域社会からも完全に孤立し、長年の間、誰ひとりとして訪れる者はいない。

124 WAS SPITEFULL. Full of a baby's venom. The women in the house knew it and so did the children. For years each put up with the spite in his own way, but by 1873 Sethe and her daughter Denver were its only victims. The grandmother, Baby Suggs, was dead, and the sons, Howard and Buglar, had run away by the time they were thirteen years old—as soon as merely looking in a mirror shattered it (that was the signal for Buglar); as soon as two tiny hand prints appeared in the cake (that was it for Howard). … Each one fled at once—the moment the house committed what was for him the one insult not to be borne or witnessed a second time. (3)

ふたりの息子が逃げ出し、義母のベイビー・シュグズも死亡して、セサと娘デンヴァーの暮らす家に、長期間消息不明だったポールDが18年ぶりに突然訪ねてくる。彼はどの家にも長く滞在するべきではないと考えているが、“Still . . . her boys gone . . .” (11) と、男手がないのならと考えなおす。ポールDは男の力を誇示して、家に取り憑いた幽霊を暴力的に追い払う。

“Leave the place alone! Get the hell out!” A table rushed toward him and he grabbed its leg. Somehow he managed to stand at an angle and, holding the table by two legs, he bashed it about, wrecking everything, screaming back at the screaming house. “You want to fight, come on! God damn it! She got enough without you. She got enough!”

The quaking slowed to an occasional lurch, but Paul D did not stop whipping the table around until everything was rock quiet. … The three of them, Sethe, Denver, and Paul D, breathed to the same beat, like one tired person. (22)

ポールDが男として幽霊を追放し、息子たちが逃亡してぼっかりと空いた空白を埋めるように家長の座を占めると、たちまち擬似家族ができ上がり、時間が動き始める。セサとポールDはまるで夫婦のように語りあい、「彼のいる未来や、彼のいない未来という考え」(51)がセサの心を動かし始める。(逆にポールDは過去を振り返るようになる。)そしてこうした絶妙のタイミングで、3人がまるで本物の家族のように外出したその日に、ビラヴは姿を現す。

From all those Negroes, Beloved was different. Her shining, her new shoes. It bothered him[Paul D]. Maybe it was just the fact that he didn't bother her. Or it could be timing. She had appeared and been taken in on the very day Sethe and he had patched up their quarrel, gone out in public and had a right good time—like a family. Denver had come around, so to speak; Sethe was laughing; he had a promise of steady work,

⁴ セサは母親として、女性にとっては人間ですらない悲惨な状況から娘を救うためには殺すしかないという究極の選択を迫られる。それは生きながらの精神的な死か肉体的な死かの二者択一である。その母の苦悩を理解したとき本当の意味でビラヴは姿を消す。

ここでポールDが定職に就こうと考えていることは重要だ。同じく奴隷だったフレデリック・ダグラスが語るように、‘a full-fledged masculine persona’の獲得は、雇用され賃金を稼ぐ能力にこそ基づくのだ(Kang 27)。セサとデンヴァーは当然のようにピラヴドを受け入れ、ふたりが嬉々としてピラヴドの欲望を満たし喜ばせることに夢中になっているにもかかわらず、男性性を回復したはずのポールDは不愉快で、漠然とした不安に駆られる。彼の目にはピラヴドは光り輝き、‘gilded and shining’(77)、苺の苗がつるを伸ばし、実をつけるようになった時期の艶やかな葉のように映る。つるを伸ばしミント色の実をつける苺という比喩には、明らかに性的なコノテーションがある。

フレッド・ボッティングはストーカーの『ドラキュラ』(1897)を分析して次のように指摘する。「ヴァンパイアたちは、文明と野蛮を二分するあらゆる境界線を越え、混乱させ、ヴィクトリア朝の道徳とタブーが禁じている不合理と情熱と欲望を解放して、抑圧された人間の自然のエネルギーを発散させる」、そして「見慣れた姿で、勝手知ったわが家のようにひとの家庭に入りこみ、社会が認めていない暗い人間の本性を、退廃的な社会の表面にひきずりだす」(128)。ピラヴドもヴァンパイアと同じように、ポールDがついにたどり着いたと信じこむ家父長的権威に基づくまやかしの擬似家庭に「勝手知ったわが家のように入りこみ」、禁忌となっているがゆえに不気味な妖艶さで彼を誘惑し、その権威が理想とする家庭の欺瞞性を暴きだす。なぜならピラヴドは、白人中心主義、男性中心主義のシステムによる女性の心身への搾取からその女性性を守られるためにこそ逆説的に殺されたからだ。ポールDはピラヴドの性的な魅力に抗しきれないままに不安を掻き立てられるが、その理由はわかっていない。ピラヴドは欲望の対象としての自己を拒否して、徹底して自らの欲望のままに振舞う。対照的にポールDは、彼女に欲望の対象化されることによってようやく獲得した欲望する主体としての自己を脅かされる。セクシュアリティは権力構造と補完関係にあり、ミシェル・フーコーは次のように提示する。

It is the agency of sex that we must break away from, if we aim—through a tactical reversal of the various mechanisms of sexuality—to counter the grips of power with the claims of bodies, pleasures, and knowledges, in their multiplicity and their possibility of resistance. The rallying point for the counterattack against the deployment of sexuality ought not to be sex-desire, but bodies and pleasures. (157)

フーコーによると、権力構造に対峙する手段は身体と快楽であり、ピラヴドは欲望される受動的な身体を拒否し、欲望する主体的身体とあくなき快楽の追求によってポールDを不安に陥れるのだ。フーコーが指摘するように、セクシュアリティは近代の父権的権力構造と深く結びついているがゆえに、そのような権力をめぐる主体の問題が正面から扱われるテキストでは、セクシュアリティを直視せざるを得ない。例えばワイルドの『サロメ』(1893)はそのようなテキストのひとつであるが、『サロメ』のオペラ版や映画版ではポルノグラフィと見まがうまでに過剰にサロメの淫らな身体が誇張され、まるでサロメが男を誘惑する魔女かヴァンパイアのように描かれるのは宜なるかなである。ヘロデ王はサロメに七つのヴェールのダンスを踊らせ、セクシュアリティの主体であることを自らの権力の証左としているが、サロメはピラヴドと同様に、あくまでも自らの欲望のままにヨカナンへの愛を貫き、権力構造を所与のものと信じる人々を震撼させる。そしてこの劇の演出の多くで(テキストの批評においてさえも)サロメのセクシュアリティ(欲望される女性の身体)がことさらに強調されるのは、サロメが家父長的体制に反旗を翻し、欲望する身体性によってその権力構造の根底を揺るがせるがゆえである。その結果、彼女は男を誘惑する魔女と烙印を押され、権力構造から排除されなければならないのだ⁵。

⁵ 寺沢みずほ氏は「モリソンの諸作品を強烈に彩っているのは、黒人民族主義のイデオロギーと過剰までのセックス礼賛であり、責任や愛着心などにも縛られずにひたすら欲望を追及するセックスに白人中心文化や社会通念に去勢されていない黒人独自のあべき本性をみだてるという形で、性と民族主義とを直結させており、無拘束のセックスは、モリソンの肯定的価値観の核心なのである」(263)ともしっかりと批判をしているが、彼女の非難の中心は女性に向けられている。『サロメ』の場合と同様に、文学的表象であるにもかかわらず(あるいはあるがゆえに)女性の性的欲望を嫌悪し禁忌とするこのような読みは、近代の父権的イデオロギーに構造化されている。これはレイプされるのは誘惑する女性にも責任の一端があるとする言説と呼応する。このようにして権力は再生産されていくわけだ。

ビラヴドが看破したように、黒人でありながらポールDは、「白人男性は、家庭の秩序を維持することによってこそ、世界を支配できるとはっきり理解している」(Gilroy 193) という意味で、主体を獲得したにすぎないということが、セサの子殺しを報じる古い新聞記事によって明らかになる。ポールDは新聞記事によってセサの子殺しを知るが、しかも事件がセンセーショナルというだけでなく、事実の報道を装った言説には人種とジェンダーのバイアスがかかり、その記事におけるセサはもはや共同体から排斥される魔女である。男としてポールDはファロスを回復して、検閲する公権力の側からその事件を解釈する。黒人として長期にわたって白人の公的な力に蹂躪されてきた彼は、再びヒエラルキーから逸脱し排除されることを恐れて、セサから逃げ出してしまう。最終的に、新聞記事(オフィシャルを装う言説)を通してセサの子殺しを知ることにより、男性にとっての理想のホームという彼の夢は瓦解する。もはや伝統的なホームは存在しない。

鶴殿えりか氏は、「近代は、そのために必要でないものの抹消を「徹底的に」行うのである。すなわちそれは、抹消するだけでなく、抹消したという事実をも抹消することを意味する」(173) と指摘する。抹消の事実を隠蔽しようとする公的な記録(歴史)は、それを通時的時間のなかに過去として埋没させてしまうが、記憶(語ること)はそれを眼前の事実として生き生きと甦らせる。セサは自己のアイデンティティとして贖罪ゆえに記憶の時間のなかに生きているし、守られるためとはいえ、抹消されてしまったビラヴドは、あまりの無念さゆえに、『七破風の屋敷』(1851)のアリス・ピンチョンのように、124番地の家に取り憑き、ついには生霊として家族のなかに入りこむ。言うまでもないことだが、殺されるビラヴド(アリスあるいはサロメ)は個人であると同時に集合であり表象である。

このテキストは3部から構成され、124番地の家をポールDが訪れ、秘匿された家庭の秘密を知って去っていく物語の展開は、第1部にすぎない。最後にポールDは再び戻ってくるのだが、このテキストの結末がハッピーエンディングかそうでないのか、セサが救済されるのかされないのか、曖昧なまま終わっている。近代的主体を問はずという困難な試みの答えは容易にはみつからないだろうから。

引用文献

Botting, Fred. "Horror." In Marie Mulvey-Roberts (ed), *The Handbook to Gothic Literature*. London: Macmillan, 1998.

邦訳: ゴシックを読む会『ゴシック入門: 123の視点』英宝社 2006年(本文中の訳はすべてこの本による。)

Foucault, Michel. *History of Sexuality Vol. 1: An Introduction*. Trans. Robert Hurley. New York: Vintage, 1980.

Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 2000.

Heise-von der Lipp, Anya. "Others, Monsters, Ghosts: Representations of the Female Gothic Body in Toni Morrison's *Beloved* and *Love*."

In Diana Wallace & Andrew Smith (eds), *The Female Gothic: New Directions*. New York: Palgrave Macmillan, 2009, pp. 166-179.

Jacobus, Mary. "The Difference of View." In Mary Jacobus (ed), *Women Writing and Writing about Women*. New York: Harper & Row, 1979, pp. 10-21.

Kang, Nancy. "The Love and Be Loved: Considering Black Masculinity and the Misandric Impulse in Toni Morrison's *Beloved*." In Harold Bloom (ed), *Bloom's Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's Beloved*. New York: Infobase, 2009, pp. 25-47.

Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage, 1992. (本文中ではPDと略記する。)

———. *Beloved*. New York: Vintage, 2004.

Plasa, Carl (ed). *Toni Morrison, Beloved: Columbia Critical Guides*. New York: Columbia UP, 1998.

Watson, Reginald. "Derogatory Images of Sex: The Black Woman and Her Plight in Toni Morrison's *Beloved*." In *Bloom's Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's Beloved*, pp. 93-108.

Yellin, Jean Fagan (ed). *Incidents in the Life of a Slave Girl Written by Herself*. Cambridge: Harvard UP, 1987.

荒このみ「否定されるブラック・マリア」海老根静江&竹村和子編『女というイデオロギー』(南雲堂、1999年)所収、pp. 87-104.

鶴殿えりか「モダニティ セクシュアリティ アイデンティティ」『女というイデオロギー』所収、pp. 171-188.

寺沢みづほ「被害者の仮面をかぶった加害者の欺瞞物語: なぞ解き『ビラヴド』」『女というイデオロギー』所収、pp. 259-277.

文法理解を基盤とした英文読解のための方略 —英語が苦手な大学生のために—

増田 将伸

平成 22 年 10 月 29 日受理

Strategies for Better Reading Based on Grammatical Understanding: For College Students Weak in English

Masanobu Masuda

ABSTRACT

The purpose of the present paper is to report strategies, for students who are weak in English, aimed at better reading based on grammatical understanding. In the situation where it is impossible to organize graded classes or remedial classes, it is necessary to cultivate basic English competence within regular classes. Stress is put on three aspects: alleviating what might be called grammar allergy, promoting daily study habits and calling attention to construction of sentences. Although quantitative verification fails to prove the effect of the strategies, qualitative verification shows that students learned to make use of construction in interpreting sentences, and that careful explanation and illustration are helpful for students. The present learning strategies are meaningful in that they interest students in learning English and get students, who have trouble in making practical use of English, to be aware of some methods of reading. The strategies are described in this paper in a specific manner that reflects their actual use in class, since how to apply them is as important as what strategies to use, especially in today's world where diversification of college students is apparent.

キーワード：文法理解、学生に合わせた教授、文法アレルギー対策、構造の意識付け

Key words : grammatical understanding, adapting teaching methods to students, alleviating grammar allergy, raising awareness of structure

1. はじめに

本実践は、英語に対して強い苦手意識を持つ大学生の、文法理解を基盤とした読解を導くために行われたものである。対象となったクラスは栄養学部であるため、実験が多い専門科目の時間割編成の都合上、レベル別クラスやリメディアルクラスが編成できず、正規授業の中で基礎力を付けていくことが必要であった。本稿では、そのような状況下で文法理解を基盤にした根拠ある読解を導くために筆者が取った方略が示される。

本稿で方略を提示するにあたっては、実際の説明や学生とのやり取りの内容が示されるなど、具体性が重視されている。これは、特に学生が多様化している現代では、教える内容を学生に合わせて効果的に伝えるやり方が教授法の理論的な研究に劣らず教育の成否に関わるという考えによる。すなわち、具体的な学生への伝え方を通じて本実践の意義が評価されると考えたということである。

2. 実践概要

本実践は、甲子園大学で2008年度に栄養学部栄養学科の1回生を対象に「総合英語Ⅱ」（初級・必修・通年、週1コマ）の授業として行われた。¹この授業は28～29名から成る3クラスに対して行われた。

¹ 学生は別の教員の授業「総合英語Ⅰ」も受講しており、必修の英語の授業を週2コマ受講している。「総合英語Ⅰ」「総合英語Ⅱ」はともに初級の授業でレベルの差はない。なお、2007年4月～2008年12月の授業実践の概括的な報告がMasuda(2009)でなされている。

2.1. 学習者特性

本実践における学習者特性として、以下の5点が挙げられる。本稿で述べる方略は、こうした学習者特性を踏まえて、彼らにとって効果的な授業をするために考えられたものである。

- ①英語に対して強い苦手意識を持っている学生が多い。中学校・高等学校での英語学習のどこかでつまづいてしまったり英語が全くわからなくなった学生や、英語の成績が悪いために教師に心ない言葉を投げかけられた学生など、英語に対していい思い出がなく、できれば英語と関わりたくないと思っている学生が大部分である。また、甲子園大学では推薦入試に加えて一般入試でも英語が必須ではない（英語か国語の一方を選択）ということも、英語が苦手な学生が多いことの原因要因として考えられる。
- ②成績中位層や下位層では演繹の精度が低い。すなわち、教科書の英文を解釈する際に、より単純な例文を手掛かりとして併記して解説すると、成績上位層は元の文を解釈できるが、成績中位層や下位層では、さらに一步一步ヒントを出していき、考える時間を長めに取ることではじめて解釈できる学生も多い。
- ③自分で学習方略を立てたり優先順位を考えたりすることは苦手である。自分の「英語がわからない」状態を改善したいがやり方がわからないという学生も見られる。
- ④大部分の学生は、指示したことに対してはまじめに取り組む。自らの英語力向上については悲観的ないし無関心であるが、だからといって怠けることは少ない。
- ⑤管理栄養士国家試験合格が学科および学生の大きな目標であるので、専門科目の課題や予習・復習のために、空き時間は専門科目の学習に費やす学生が大多数である。英語に関心がある学生でも、積極的に英語を学ぶ学生は少ない。

2.2. 授業方針

本実践では、「文法理解を基盤にした、根拠ある読解」を目標技能とした。「読解」を目標技能として設定した理由は大きく言うところ二つある。一つは30人弱というクラスの人数であり、もう一つは、栄養学部の学生たちが将来直面する課題になりうるということである。例え日本国内で管理栄養士になって外国人と接することのない生活をするとしても、栄養について新しい知見を得るために外国の文献や資料を読む必要が生じるということは十分に考えられる。そのように必要に迫られて英語に向き合うのが卒業後になるとしても、そのときのために手掛かりとなる解釈技法を伝えておきたかった。

英語が苦手な学生が多く、前節⑤で述べたように自主学習も期待しにくいので、英語学習への入口を開くという段階を目標水準とした。すなわち、英語に対する苦手意識を軽減するとともに基礎技能を習得させ、「英語もちょっとやってもいいかな」という気にさせることができれば成功であると考えた。本実践ではこの方針に徹したが、さらに英語力を高めたい学生や、文法にとらわれない学習をしたい学生のために2回生配当の「総合英語中級」では文法にあまりとらわれないアプローチを取ってバランスを取っている。²

「文法理解」を読解の中心に据えたのは、基礎があやふやな学習者の場合、概要をつかむ読み方だけでは理解を誤ったり、文の構造を雑にしか見ない癖がついたりすると思ったからである。筆者にそう考えさせるきっかけとなった学生の誤訳例の一つである(1)を参照されたい。

(1) People seem to have lost the joy of cooking and eating.

人々は仕事を忘れ、調理し、食べているように見える。

joy を job と混同して「仕事」と訳してはいるものの、それを除けば joy までの部分の解釈はできている。しかしこ

² 具体的には、インターネット上の記事や英会話テキストを素材として用い、パラグラフリーディング、スキミング、会話練習などの応用的内容を扱っている。

の解答では修飾構造の理解ができておらず、動詞に見える要素である have lost, cooking, eating を全て並列に動詞として訳している。この場合、前から句に区切ってだけでなく、句間の関係を理解させる必要がある。

このように、文法構造の理解を伴わない読解は、特に後置修飾を含む文の場合、非常に危ういものとなる。したがって、読解の基礎力を付ける初級の段階では「だいたい見た感じでわかる」という考えを安易に抱かせず、文法構造に注意を向けさせることを重視した。文法構造に注意を向けることで、直感に引きずられた解釈が避けられ、読解が正確になるからである。しかし、高等学校までの英語学習で文法アレルギーになっている学生も多いので、文法を扱いながら英語嫌いの学生を増やさずに理解を促進するためには、それなりの方略が必要である。それらの方略の詳細については第3節に譲る。

2.3. 授業進行

前節で記した方針に基づいて、文法構造の正確な把握を重視する『リーディングのための英文法』（佐藤誠司著、2008年、南雲堂）を教科書に採用した。³ 文法事項を扱った教科書では、文法事項を網羅して例文と演習問題によって文法理解を定着させようとするものも多いのだが、こうした教科書では文法理解が読解から切り離されており、文法理解を実際の運用につなげにくいという欠点があった。また、文法事項が網羅されていることで、暗記すべき事項が多いという印象を学生に与えてしまい、英語に苦手意識を持つ学生を学習から遠ざけようという欠点もあった。一方『リーディングのための英文法』は、書名の通り、文法理解を読解につなげることを念頭において書かれているため、読解において特に重要となる文法項目のみが、その項目を含む100～120語程度の英文とともに取り上げられている。また、項目の配列も理解しやすいように工夫されており、本実践で用いるのに適していた。

進行は、一項目を2回で扱うのを基本とした。1回目に文法事項について解説をしてから翌週に向けて予習を課し、2回目には予習してきているという前提で演習問題や長文の解説を行った。1回目に解説をしてから予習を課すのは、何も教えずに予習をさせてもわからないことが多く、あまり有効ではないためである。また、解説をしてから予習を課すことは、「高等学校までの知識量は問わないが、授業で教えたことは家で活用できるように取り組んでほしい」というメッセージでもある。

12月までは教科書を用いて文法中心の授業を行い、以降はハンドアウトで500語程度の長文読解に取り組んで実践力を磨いた。議論の便宜上、本稿ではそれぞれを「第1期」「第2期」と呼ぶ。

3. 具体的方略

3.1. 文法アレルギー対策

文法アレルギーを持っている学生が多いことに鑑みて、文法を取り上げることで学生に諦念や劣等感を抱かせないように留意した。具体的には、下記①～④の方略を用いた。

- ①文法用語の使用を最小限にし、学生にわかりにくいと思われた表現は日常的な表現で言い換えた。例えば、「that節」と言う代わりに「that + 主語・動詞 (S´V´)」と言い、「関係代名詞節が先行詞を修飾する」と言う代わりに「関係代名詞で始まるまとまりが前の名詞に説明を加える」と言って説明した。
- ②重要事項はキャッチフレーズのように一言にまとめて印象付けを図った。長い説明は学生に拒否反応を起こさせるので、厳密性・網羅性を犠牲にしても単純な形でキャッチフレーズ化した。例えば、文中から従属節を見つけさせるために「thatがきたら次に主語・動詞がくる」という説明をしたが、これはあえて代名詞のthatを無視している。代名詞のthatは何も説明しなくても正しく解釈できることが多いので、学生が英文を解釈する上で困る現象に特化させた説明にして印象付けるためである。こうしたキャッチフレーズを該当する現象が出てくるたびに繰り返すことで、英文解釈において注意すべき点が意識されるようにした。

³ 『リーディングのための英文法』のはしがきでは、具体的な例文と和訳例を示しながら「これら3つの訳文には、意味の上では大きな差はありません。しかし、上の英文の構造を正しくとらえた訳は③だけであり、①や②のような『単語の意味を適当につなげた訳』によって英文を理解しては、読解力は決して向上しません。」と記している。これは本実践の考え方と大いに共通している。

③学生にとって身近な例文を用いて、印象付けを図るとともに、英語との心的距離を縮めさせようとした。例えば関係代名詞を含む複文の導入では、あるタレントを説明する文を一文ずつ学生に挙げさせ、それらの中の二文を関係代名詞を用いて一文にした。また、現在完了の継続用法の導入では、「日本を代表する漫画である『ドラえもん』が今も昔も人気があるということを英語圏の人に伝えるにはどう言えばいいか?」という問いを投げかけ、*Doraemon is popular.* では不十分で、*Doraemon was popular forty years ago, and is popular (even) now.* ではぎこちなく⁴、*Doraemon has been popular for forty years.* と現在完了形を用いることで過去と現在にまたがる事象を正確に表せるということを示した。このように知っている事項が説明の中に出てくると、意外性によって関心を喚起される側面もあってか、顔を上げて黒板に注目する学生の数が増えた。第1期末の学生アンケートでは、このような身近な例文の使用について肯定的評価を明記した記述が4件見られた。⁵ なお、例文を用いた方略でもう一つ効果的だったものとして、複数例文の使用がある。教科書の複雑な文を解説する際には、上記のような単純な類例を二例示し、一つを用いて解説し、その後でもう一つを学生に解釈させた。このように解説の際に演習の機会を与えられ、複数の例文にふれられたことで用いられている構文の理解が深まったようである。

④学生を指名して教科書の文を訳させる際には、学生のレベルや特性を考慮して当てる問題を選んだ。これは、名前の五十音順などで当てる順番を固定すると、英語を苦手とする学生が複雑な文に当たり、苦手意識が増幅される可能性があるからである。したがって、学生が自力で訳せるか、少しヒントを与えれば訳せるくらいの文に当たるように心がけた。このようにすると成績上位層は複雑な文に当たることになるので、学生間のレベル差に対処する手段としての意図もあった。

3.2. 日常的学習の促進

外国語の基礎を定着させるためには継続的な学習が大切であることは明らかである。しかし2.1節③で述べたように、学生自身が学習計画を立てて継続的な学習を行うことは期待しにくいように思われた。そこで、日常的な学習を促進するために外発的動機付けを行った。2.1節④で述べたように、指示されたことに対しては怠けずまじめに取り組む学生が大部分だということからも、外発的動機付けは有効だと考えられた。具体的には三つの手段を用いた。

①期末評価の割合を定期試験40%、小テスト30%、平常点20%、出席点10%に設定した。⁶ 小テストと平常点の割合が高く設定されているので、定期試験前だけの学習では単位取得が難しくなっている。学生には初回授業で、外国語の基礎を定着させるためには継続的な学習が大切であることを伝えるとともに、この割合を示し、単位取得のためにも日常的な学習が大切であると伝えた。

②平常点に相当する授業での訳読の担当を固定せず、ランダムに指名した。これにより、学生は毎週教科書の全ての部分について予習をすることになった。この方法については、期末の学生アンケートで明示的な言及が3件見られた。2件は肯定的な評価で、「先生が厳しかったから、ちゃんとHW（筆者注：homeworkのことか）をやるようになった。英語が苦手でも全然勉強しなかったけど少しやるようになった。」「授業にバラバラにみんなが当たるので、宿題や予習をするので良かったと思う。」というものだった。しかし「突然当てられるとびっくりするのでそこは変えてほしい」という否定的評価も1件あった。

⁴ もちろんこの文は、40年前と現在のことしか述べておらず、40年前から現在に至る間のことを述べていないという点で不十分でもある。

⁵ こうした身近な例に限らず、authentic materialからの例文も学生の関心を引いたようである。例えば関係代名詞のwhatを扱う際に、*The Little Prince*からのWhat is essential is invisible to the eye. という文や、John F. Kennedyの演説からのAsk not what your country can do for you; ask what you can do for your country. という文を用いた。後者は、セミコロンをbutに読み替えることでnot A but Bの説明にも活用できた。

⁶ 授業では積極性を重視して自発的な発言を奨励したので、自発的に発言した学生にはその回数に応じてさらに得点を加えている。

③小テストを実施した。半期に2回実施したので、期末試験を含めて考えると、5回の授業に対して1回は何らかのテストがあったことになる。学習の機会としてほしかったので、実施日とテスト範囲を1～2週間前に予告して実施した。試験に対する拒否反応が心配されるころではあったが、学生は割り切って小テストを受け止めていたようで、目立った拒否反応は見られなかった。また、後期2回目の小テストについては実施の是非について事前に授業で学生に尋ねたが、多くの学生が小テスト実施を希望した。一部の学生の話からの判断ではあるが、定期試験のみに基づいて評価されるのではなく、他に受験機会を増やすことで失敗のリスクを分散することを望んでいるようであった。

問題は、単語(6～12問程度)、英文和訳、和文英訳(各3～6問程度)の三部構成を基本とし、授業冒頭の20分を小テストに充てた。出題文は教科書に基づくが、一部を変更することもあった。これは、訳文を丸暗記し、英文の最初の語と対応させて覚える(つまり、英文自体についてはあまり学習しない)一部の学生を牽制し、構造に注意して英文を見ることを促すためである。また、教科書の文が複雑なときに修飾構造を単純にして出題することもあった。

採点に際しては、重要な語句や構造の理解に対して積極的に部分点を与えることで、学生の努力が得点に反映されやすいように心がけた。努力は報いられるべきだと考え、また今までより高い得点が取れると学習意欲が高まるのではないかと考えたからである。採点後にはコメント・解説付き解答例を配布し、それに即して授業時に口頭でも解説を行った。定着度が特に低かった事項については、予告した上でその次の小テストでも出題した。

3.3. 文の構造の意識付け

英語の苦手な学生にとって、英文は未知語の固まりである。その固まりを句や節に区切ることができれば、解釈の糸口が生まれる。そのために本実践では、簡潔でわかりやすい表現で文型と品詞の認識を導くことに腐心した。まず、「命令文は別としてどんな文でも基本はSV+a。日本語と違って、主語のない文はない。だから、主語と動詞がどれかわかれば文の骨組みがわかる。」と伝えた。当てられた英文が訳せない学生には、後述のように、必ず「主語と動詞はどれ?」と尋ねた。また、主語と動詞がどれかわからない学生には、「助動詞の次にある語は動詞。」「主語や目的語は必ず名詞。この文の中で名詞は?名詞にはaやtheが付いてるよ。」などのヒントを出して、品詞を認識する手段を伝えた。これらのヒントは1年間の授業で何度も、わからない学生が出るたびに用いられたので、複雑な文を解釈する際の基本手順として認識されたのではないと思われる。

また、板書を徹底的に活用した。口頭での解説のみでは構造が理解しにくい文は迷わず全て板書した。その上で、色チョークも活用しながら、安河内哲也氏の解説表記に準じて名詞句・節を[]、形容詞句・節を< >、副詞句・節を()で括った。例を挙げると(2)のようになる。矢印は修飾構造を表す。前置詞を円で囲んでいるのは、前置詞句を意識させるためである。

(2) [The basic characteristics <(of) washoku>] were (originally) determined ((by) the types <(of) food> available).

S V be+pp - 受身

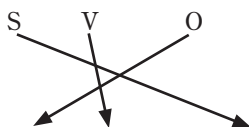
これによって、文の構造と、それぞれの句や節が文中で果たしている機能を可視化することができた。

文の構造に限らず理解手順についても、重要事項ですっきりと板書できるものは板書によって手順を示した。ある程度の長さの話聴くこと自体が苦手なように思われる学生もおり、口頭での説明から重要な点を抽出できない場合があるからである。板書することで大事な点ないしメモを取るべき点だということが伝わり、学生の集中力が上がったという効果もあった。板書の例を挙げると(3)のようになる。

(3) 受動態への書き換え

動作をされる人／ものの立場で書く → 動作をされる人／ものをSにする

Someone locks the door everyday after the class.



The door is locked (by someone) everyday ~.

be+pp - 受身「～される」

- ①能動態のOをSにする
- ②Vの形をbe+ppに変える
- ③動作主を明示したい場合はby～として後ろに付ける
- ④残りの部分⁷はそのまま後ろに付ける

最後に、指名した学生を文の構造理解に導いていくやり取りについて述べておきたい。指名されたが英文がうまく訳せないというときに、「わかりません」と一言で答える学生は多い。しかし、解釈上重要な点について一つずつ尋ねていくとかなり答えられる学生もまた多い。本実践では、「わかりません」の一言で思考停止させるのではなく、解釈上重要な点について質問を重ねることで、解釈段階でどこまではわかっていてどこでつまづいたのかを自覚させようとした。これが自覚できれば、後日の解釈の際の手掛かりとなる。また、英文を完全に理解できない学生は少ないことから、英文についていくらかは理解できている点があるということ自覚させられれば英語アレルギーの軽減になるという考えもあった。

もう一つの効果として、一段階ずつ順を追って質問を重ねることで、複雑な文に出会ったときにどういうことにどの順で注意すればよいかという解釈の手順を学生に示すことができた。全体に対する説明ではなく、個人を指名した際の一問一答形式にすることで、自分の問題として手順を自覚させやすくすることをねらっている。⁸

学生が「わかりません。」と答えたときの具体的な対応手順を(4)のフローチャートで示す。(4)の「」は全て教員の言葉である。

(4) ①「予習はしてきた？」

していない→他の学生に担当を変え、平常点を減点

(努力さえしていない学生は授業を受ける準備ができていないとみなす)

したかわからなかった→手順②へ

↓

②「とりあえず何か言って。」

(完全解答を求めないことを示してプレッシャーを軽減する)

部分的な訳を言えた→その訳を基に、理解が不十分な点について解説

わからない→手順③へ

↓

③「主語と動詞はどれ？」

正解→「うん、それでいいね。」(一つの課題を解決したことを認める)

「じゃあ、Vで終われる？ Vの後ろにまだ何かくっついてまとまりを作る？」

(SVCやSVOの構造を見抜かせる)

わからない→副詞(接尾辞-lyにより認識)と前置詞句を認識させ、()に入れさせる。黒板にも文を写し、該当箇所を()に入れる。

「()に入れたところは文の主成分じゃないから見ずにはっといて、残りの部分だとSVはどれかな？」

⁷ (3)の下線部のような、態の転換に直接関わらない部分のことである。このような部分を動かして他の部分に混ぜ込んでしまう学生も多いので、④の手順を板書に加えている。

⁸ もっとも、その場を切り抜けるとそれっきり解釈手順が頭から抜けてしまう様子の学生がいたことも事実である。

このような対応を経て、特にわからなかった点が明確にわかるようになったように見える学生には、「最初は全くわからないと思ったかもしれないけど、わからないときはこういう風に一つずつ目鼻を付けていくとわかってくる。困難は分割できるので、できるところからやってみよう。」と伝えた。

4. 方略の検証

4.1. 量的検証

実践の効果を検証する量的指標としては、理解の向上を示すものとしてのテスト得点率の推移と、関心の向上を示すものとしての翌年(すなわち2年生時)の「総合英語中級」の受講率が挙げられる。テスト平均得点率の推移を(5)に示す。

(5) テスト平均得点率(%)の推移

[前期]	小テスト① (to 不定詞、動名詞・現在分詞、過去分詞)	55
	小テスト② (関係詞)	64
	前期試験 (小テスト①②の範囲、後置修飾、名詞節)	57
[後期]	小テスト③ (疑問文、it の用法、節を使った表現)	59
	小テスト④ (接続詞、助動詞、受動態)	63
	後期試験 (小テスト③④の範囲、長文ハンドアウト2枚)	49

後期試験を除くと平均得点率が55～64%の範囲内に収まっているので、問題の難易度は適切だったと考えられる。後期試験の平均得点率は低いが、後期試験は前期試験よりも受験科目数が増え、他の科目に多く学習時間を割く必要があることや、長文が試験範囲に入り、学習すべき量が増えたことが原因であろうと考えられる。半期中で比較すると、前期・後期とも2回目の小テストの方が1回目より平均得点率が高くなっている。半期中での学習の積み重ねの効果であると考えられることもできるが、小テストの実施回数が少ないこともあり、断定的なことは言えない。

もう一つの量的指標である翌年の「総合英語中級」の受講率は4% (3/85人)であった。これは前年の15% (17/117人)を下回っているが、前年と違い、1限かつ「科学英語」と同時時間帯の開講という時間割になった影響が大きいと考えられ、純粋に学生の英語に対する関心の反映とはみなしにくい。このように、量的検証からは本実践の意義を示す決定的な結果は示されなかった。

4.2. 質的検証

実践の結果、解釈の技法が徐々に浸透してきたようで、授業中に指名した際にすぐに答えられなくても、ヒントを出した際に反応が早い学生が増えてきた。また形に表れるものでは、試験の際に(6)(7)のように構造を意識した解答が増えてきた。(6)は英文を日本語に、(7)は和文を英語に訳す問題である。

(6) It is certain that the earth's resources are not unlimited.

地球の が でないのは だ。

(7) 子どもが夜に出歩くことは危険だ。(注: 夜に出歩く go out at night)

It go out at night is dengeras. that the children.

(6)は語彙が定着していないものの、仮主語構文の構造を理解した解答である。(7)も、Itとisの間にgo out at nightが入っているために見た目には相当苦しい解答であるが、It is adj. that～という仮主語構文の構造は理解できている。なお、何人かの学生の話によると、このような解答が見られるようになったのは、部分的な理解が表れた解答に対して部分点が与えられることによる。「わからない」で終わらせずに部分的にでも理解を示そうとさせたという点で、部分点を設定した意義はあったように思われる。

また、FD活動の一環として甲子園大学が作成したアンケート(本稿末尾に資料1として添付)の回答を用いて

方略の効果を検証した。アンケートは第1期と第2期のそれぞれの授業の最終回に実施され、17の設問に対する5段階評価および自由記述から成る。総回答数は第1期が78、第2期が72である。以下で回答について論じる際には、「そう思う」「どちらかというと思う」の2種類の回答をまとめて「肯定的回答」と呼ぶ。

本実践の方略との関連では、「授業の進め方・速度は適切だったか(問5)」「板書やパワーポイントは内容理解に役に立ったか(問12)」に対する3クラスの2期の肯定的回答がいずれも78～100%と74～96%の範囲であった。⁹自由記述でも、「わかりやすかった、理解できた」という記述が第1期に30件、第2期に21件、「基礎的な説明、丁寧な説明」を評価する記述が第1期に21件、第2期に19件あった。これらは自由記述の中では最も多いものであったが、総回答数が第1期78、第2期72であることを考えると、これらの点が19～30件の明示的肯定的評価を得たということは少なからぬ意義を持つと考えられる。¹⁰板書について「わかりやすい」と肯定的評価を明記した記述も第1期に4件、第2期に7件見られた。

「英語に対する苦手意識が軽減された」「英語に興味が出てきた」といった趣旨の記述は、第1期、第2期とも4件見られた。本稿末尾に資料2としてそれらを添付しているが、件数は少ないものの、本実践で用いた諸方略が効果的に機能したことをうかがわせる記述内容である。英語に対する苦手意識の軽減という本実践の目標がある程度は達成されたと考えうであろう。

小テストについては具体的に記述した回答が少なく、学生にどう受け止められたかがアンケートからは読み取りにくい。テストをもっと簡単にしてほしいという記述が第1期に2件、回数が多すぎるといふ記述が第2期に1件あった。「テストになるとわからなくなる」という記述も第1期に2件見られた。

また、(4)で示したように解説を個々の学生の理解状態に合わせて行ったことについて肯定的評価を明記した記述も4件(第1期に3件、第2期に1件)見られた。「私自身の欠点を見つけ、適確なアドバイスを下さった」と個人に合わせた解説の適確さを評価する記述に加えて、「生徒の事を考えて、理解させようとしていた」「理解してない生徒には一緒に考える様にする事で分らせると思いますか…。先生の優しさが伝わりました。」のように、この方法が情意面で好影響を与えたことを示す記述も見られた。「総合的に見て満足だったか(問17)」に対する肯定的回答も73～88%あり、本実践が学生から肯定的に評価されたことがわかる。

ただし、「授業内容はむずかしかったか(問6)」に対する回答では肯定的回答が20～36%に留まり、否定的回答(「あまりそうは思わない」「そうは思わない」)が36～43%となっていることから、授業の難易度や学生間のレベル差への対処については再考の余地がある。自由記述でも、「もう少し難しい問題を解きたい」「もう少し速く進めてほしい」という記述が第1期に各2件、第2期に各1件見られた。また、「受講して有意義だったか(問10)」に対する回答では、肯定的回答が第1期は3クラスで50～71%だったのに対して第2期では76～83%であった。この回答の変化は、第2期では文法の基礎に留まらず長文読解を扱ったことによると考えられる。したがって、今後は基礎の説明と実践的・応用的な内容をよりうまく組み合わせていきたい。

5. まとめ—本実践の意義および課題

本実践では、英語に対して強い苦手意識を持つ大学生に対して、正規授業の中で文法理解を基盤にした根拠ある読解を導くために用いられた方略が具体的に示された。方略は、文法アレルギーの軽減、日常的学習の促進、文の構造の意識付けという三つの側面を特に重視したものであった。量的検証においては、試験回数の少なさなどのためにはっきりとした効果は示されなかったが、質的検証において、文の構造を意識するようになった様子が見られ、また丁寧な説明や板書が肯定的に評価されていた。これらのことからうかがえるように、英語運用の方法がわからない学生に対して読解技法の一端を意識させられたことは本実践の意義として評価できるだろう。また、学生に合わせた対応が情意面で好影響を与えたということも意義の一つである。ただし、より応用的な内容を加えることが今後の課題として残された。実践効果測定のためのより適切なアンケート質問項目の吟味や実践結果の統計的検証も今後の課題である。

他の課題として、読解技法の運用精度の向上と、英語学習へのさらなる動機付けが挙げられる。前者については、週1コマ、通年30回の授業時間内ではあるが、演習量を増やすことで運用精度を上げるという可能性を探り

⁹ 本実践ではパワーポイントは使用していないので、学生は問12に回答する際には板書について回答したと考えられる。

¹⁰ これらに次いで多かった自由記述は、「楽しかった、興味を持てた」(第1期10件、第2期4件)である。なお、「高校では訳しか言ってくれなかったから、詳しく説明してくれて嬉しい」という声も聞かれた。

たい。本実践で丁寧な説明が肯定的に評価された一方で、一部の学生にアンケートで指摘されたように、説明を丁寧にすると授業進度は遅くなり、授業時間内の演習量は減ってしまうので、丁寧な説明と演習量確保の適切な兼ね合いを見極めることが必要である。折にふれて学生に尋ねると、現状より進度を速めることに対しては否定的な反応が多いので、自宅課題を増やすことで演習量を増やすことも検討したい。応用的内容を含んだ課題を出す、現在の授業に物足りなさを感じているかもしれない成績上位層に対する刺激としての効果も期待される。

後者は、授業期間が終わっても学生が自らの意思で英語と向き合う動機付けができないかということである。前節で論じたように、本実践は英語に対する苦手意識の軽減において確かに一定の効果を果たした。しかし、だからといって学生たちが英語に関して自ら何かをするようになった様子はあまり見られないということもまた事実である。学生の専門分野の英文や時事問題に関連した英文を副教材として取り上げる頻度を増やすなど、英語により興味を持たせる方法をさらに考えたい。

* 本稿は、大学英語教育学会関西支部 2009年度春季大会（2009年6月27日、於 京都外国語短期大学）での口頭発表「英語の基礎力が弱い大学生のための『弱者の戦略』の検討」を基にして加筆・修正を施したものである。大会およびそれに先立つ京都大学大学院人間・環境学研究所山梨正明研究室言語フォーラムでの発表でご意見をお寄せくださった皆様に深く感謝する。本稿中の不備は当然ながら全て筆者の責によるものである。

参考文献

Masuda, Masanobu (2009) "Toward a Situation-based College English Education: A Case Study of a Learner-centered Class." 『大学教育研究ジャーナル』第6号. pp.141-149. 徳島大学.

資料1 アンケート設問

I. 学生本人について

1. あなたの出席率はどうでしたか。
2. あなたは授業に積極的に取り組みましたか。
3. あなたの受講態度は適切でしたか。

II. 授業について

4. 成績評価の基準が明確に示されたと思いますか。
5. 授業の進め方・速度が適切だったと思いますか。
6. 授業内容はむずかしかったと思いますか。
7. 授業内容の量は多かったと思いますか。
8. 課題・宿題・レポートは内容理解にとって役に立ったと思いますか。
9. 受講生の態度が授業のさまたげになったと思いますか。
10. 受講して有意義だったと思いますか。

III. 担当教員について

11. テキストや配布資料は内容を理解するのに役に立ったと思いますか。
12. 板書やパワーポイントは内容を理解するのに役に立ったと思いますか。
13. カセットテープ、CD、DVD、ビデオは内容を理解するのに役に立ったと思いますか。
14. 講義は聞き取りやすかったと思いますか。
15. 質問や要望に適切に対応したと思いますか。

IV. 授業環境について

16. 施設・設備は適切だったと思いますか。

V. 総合評価について

17. この授業は総合的に見て満足できたと思いますか。

自由記述

- ①この授業でよかったこと
- ②この授業で改善する必要があること

③その他の意見・要望など

資料2 「英語に対する苦手意識が軽減された」「英語に興味が出てきた」という趣旨のアンケート記述

(第1期)

- 基礎からやってくれたので高校でやっていなくても少しずつ訳ができるようになったり、英語になおせれるようになった。
- 文法などでも、例文を出して1つずつ説明していただいていたので苦手だけど、その場で自分でも理解することができた。EXERCISESの前に、その間をとくための解説をしていただいていたのでやりやすかった。
- 苦手な英語が少し理解出来るようになった。英語への興味が少し出てきたと思。[原文ママ]
- 英語は苦手だし、嫌いだけれど、テキストだけでは分からない細かな説明等があって分かりやすく、見るのも嫌というほど英語嫌いじゃなくなった。

(第2期)

- 英語が苦手と理解不能だったけど基礎からできてわかることができた。
- 英語の楽しさが少しわかったような気がします。これからもコツコツがんばります。ありがとうございました。
- 中学・高校からつまづき気味だったが少し理解出来た。
- 英語はすごく苦手だったけど、ていねいに教えて下さったので少しずつでも理解する事ができたのでよかったです。例文なども、まぜて説明していただいていたので、分かりやすかったです。

鳩摩羅什の生涯とゆかりの町の調査報告
—疏勒・尉頭・龜茲・樓蘭・敦煌・涼州・長安—

山田 勝久

平成 22 年 10 月 29 日受理

A Report on the Life of Kumarajiva and the Towns Associated with him
—Kashgar, Tumushuk, Kuqa, Loulan, Dunhuang, Liangzhou and Changan—

Katsuhisa Yamada

4世紀中頃、シルクロードに優れた翻訳家が出現しました。父はインド人、母は西域人です。姓を鳩摩羅、名を什といい、天才的な語学力を身につけていました。さらに、古今東西の哲学や文学も修得し、晩年は長安の都で、仏典の漢語訳に精励しています。釈迦の真意を体したその優れた翻訳は、現在、世界10ヶ国の言語に翻訳され出版されています。鳩摩羅什ゆかりの町や村を訪ね、その光芒と生涯を考察してきましたので、写真を添付して報告します。

キーワード：シルクロード・鳩摩羅什

Abstract

The paper reports the investigation at the town and the village associated with Kumarajiva who was born at Kuqa in the middle of the fourth century.

He became a priest at a young age, growing up, he became a superior translator. He was familiar with various philosophies and literatures of all ages and countries. Late in life he had translated the Buddhist scriptures written in Sanskrit into those written in China at Changan. As he could pick up the real meaning of what Buddha says, the Chinese scriptures have been translated into 10 different languages.

Keyword : Silk Road, Kumarajiva

はじめに

日本と中国は、海によって連結された一衣帯水の間柄です。そのため交流の歴史は古く、『山海経』の記述に見られるように、両国の往来は遅くとも今から2300年ほど前から始まっています。その後、著された『論衡』・『後漢書』・『魏志』などにも、その間の友好交流の歴史が綴られています。

しかし、両国の関係は双方が対等に交流したのではなく、日本が一方的に中国の優れた文化を取り入れるというものでした。こうした日本側の姿勢を、『日本書紀』巻22は、「大唐国は法式備わり、定まれる珍の国なり。常に逢^{なら}うべし」と敬意を表して記しています。

中国文化の受容に欠かせなかったことは、限られた期間で、新知識や新技術を学ぶことでした。そのため若き青年たちは、全力をあげて学問に励んでいます。たとえば、2004年3月に西安市の八仙庵の骨董品市場で発見された「井真成」の墓誌⁽¹⁾によれば、玄宗朝の長安にあって「学を強めて倦まず」、すなわち、真剣に中国の文化を学んだことが石刻されています。

また、『冊府元龜』には、遣唐大使の真人広成ら一行、計590人が乗っていた船が、大風に吹かれて蘇州の海岸に漂着した折、刺史の錢唯正はその報告を聞き、部下を現地に派遣し激励したとあります。その他、『続日本紀』・『旧唐書』・『唐語林』等々にも、中国が日本人に厚情を与えた逸話が紹介されています。

古代の交流時においては、貿易も活発に行なわれていました。日本の正倉院には、中国から伝来した楽器、例えば琵琶、阮咸、尺八、横笛、笙、鼓など、18種類81点が大切に保存されています。漢籍は、『日本国見在書目録』に記されているものだけでも、『論語』・『春秋』・『孝経』など40家1579部16790巻に及んでいます。



墓誌は西安の東の郊外、滻水の西岸の工事現場から出土した。



2004年10月、中国の西北大学博物館の賈麦明副館長によって、遣唐使の井真成墓誌が発見された。

ところで、日中の文化交流の中心は公的な使節だけでなく、私的な交流、すなわち民間交流も次第に活発になっていました。なかには、日本に居住し貿易に専念する者も出はじめました。

中国人が海外で活躍する淵源は、遠く2,000年以上前の漢代にまで遡ることができます。前漢の武帝時代の路博徳の活躍、後漢の光武帝時代の馬援による遠征は特に有名です。航海技術の発達と優れた造船技術をもって、本格的に諸外国で活躍したようすは、『後漢書』や『萍洲可談』『真臘風土記』等に紹介され、勤勉で有能な中国人が、その国の土着民に非常に敬意をもって迎え入れられたことが記されています。

しかし、日本における中国人の在住は比較的新しく、1868年以後のことで、交易のため神戸に来た商人が始まりです。明治になって横浜や大阪や函館に華僑が住みはじめ、現在、その子孫が我が国に約65万人住んでいます。こうした華僑は、その地域の発展に貢献し、文化の進展にも寄与してきました。とくに、中華街に居住する中国人は、近隣の日本人と友好的に生きてこられました。

しかし、日本軍国主義は、こうした善良な人々をも迫害しました。たとえば、第2次世界大戦中、日本の特別高等警察は華僑⁽²⁾を激しく弾圧し、拷問、殺害しました。検挙理由は、すべて「外謀容疑」となっていますが、確かな証拠があつたことではありません。

ところで、華僑出身で日本のスポーツ界や経済界等で活躍する人が多くいますが、その一人に陳舜臣という作家がいます。代表作に『阿片戦争』・『太平天国』・『秘本三国志』・『小説十八史略』などがあります。1924年に神戸市で生まれ、大阪外国語学校(現・大阪大学外国語学部)印度語科に入学し、印度語と波斯(ペルシャ)語を専攻しました。

陳舜臣の系譜をみると、後漢の偉人として有名な陳寔の末裔で、魏の陳羣、陳秦も祖先になり、陳家の35代目の子孫です。一族は、河南省潁川から福建省の泉州に移り、その後、台湾を経て日本に移住しました。

私が初めて陳舜臣と会ったのは、1979年10月でした。中国の歴史や文学や哲学を専攻する、大学教員が所属する「日本中国学会」の学術大会の折です。陳舜臣は出席した中国研究者約600名の前で記念講演されました。私は、その学識の深さに驚き、尊敬の念を深くしたものです。以来、30年余の歳月が流れましたが、私はいつも陳舜臣の作品を愛し、その優れた人間性を高く評価してきました。

ところで、私の専攻はシルクロード学です。今まで12カ国53回にわたり、東西文化交流の遺跡を求めて西域の町や村を訪問しました。インドやパキスタン、またアフガニスタンや新疆ウイグル自治区や甘粛省には、鳩摩羅什ゆかりの遺跡や逸話が数多くあるのには驚きました。まさに一人の人間として、また民間人としての羅什の活躍は目を見はるものがあります。そこで私は、鳩摩羅什の歩いた同じ道を幾度となく歩いた研究者の一人として、現地での調査報告をしたいと思います。



釈尊が0歳から17歳まで住んだ釈迦族のカピラエ城跡(ネパールのルソビニ)

1. 鳩摩羅什(344年～413年。一説に350年～409年)

父の鳩摩羅炎は、古代・天竺国(インド)の北部地域の貴族の出身です。母の耆婆は、古代・西域36カ国の一つ、亀茲国(中国・新疆のクチャ)の国王・白純の妹です。仏教がインドから中国に伝来した後漢から南北朝時代の初期、仏典を漢訳した194人の中で、「絶後光前」(後世にもなく、前代にもないほど優れていること)と讃えら

れる、最も優れた仏典の漢訳者です。また、インドにおける大乘教学の正統派である龍樹の哲学をふまえて、仏教を誤りなく中国へ伝えた偉大なる哲学者・思想家でした。

鳩摩羅什は、幾多の艱難辛苦を乗り越え、長安に至り、晩年の8年間で、「維摩経」「法華経」「般若経」「大智度論」「中論」など、35部294巻（一説に50余部300数十巻）という膨大な量の仏典を漢訳し、中国仏教史に不滅の金字塔を打ち立てました。その漢訳経典は古今の翻訳史上、稀に見る名訳として、韓国や日本や世界に流伝し、今日なおその光を失っていません。

2. 父・鳩摩羅炎について

鳩摩羅炎は、北インドのある国の代々宰相の地位を約束された名門貴族の出身です。具体的に国名を示すのは不可能ですが、鳩摩羅一族の分布地域とその思想が、当時ガンダーラに盛行していた説一切有部の系統であることを考察すると、北インドと推断できます。父の鳩摩羅達多も志操が高く⁽³⁾、その名は国中に広まっていました。鳩摩羅炎もまた父に劣らず、聡明にして節度ある人物でした。40歳頃、自らその榮譽を捨てて出家し、カニシカ王の時代に西域に仏教は伝えられていましたが、まだ仏教の真の素晴らしさを知らない国の人々にも、幸せになる法理を伝えたいと願い、西域諸国へと旅立ちました。最終的には、長安の都での仏教流布も夢みていたようです。

鳩摩羅炎は、世界の屋根と呼ばれる白雪輝くパミール高原の険しい山河を越え、タシュクルガン（塔什庫爾干）に入り、疏勒国（喀什）を経て天山南路を、東方へと進んでいきました。想像を絶する困難な旅であったと思われます。鳩摩羅炎が、約束された宰相の地位を捨ててまで旅に出ていることを知った亀茲国の国王・白純は、彼を深く敬慕し、わざわざ国境まで出迎え国師への就任を頼みました。

その頃の国師は、仏教の指導者であることは当然として、政治・軍事・経済・哲学・文化、そして諸国の情勢に通じた人がつく榮譽ある地位でした。変転つねなき国際情勢の中で、一国が生き抜くためには、優れた国師を得ることが国家の命綱だったのでした。



鳩摩羅炎の故郷インドの村。昔も今も変わらぬ風情を漂わせていた。

亀茲国の王宮は三重の城壁に囲まれ、宮殿の壮麗さは長安城に似て、まるで神殿のごとくまばゆかったと伝えられています。国王・白純の妹の耆婆は、心清く、たぐいまれな才媛でした。意志が強く白百合のように気高く、そのため近隣の西域諸国から縁談の申し込みに相次いでいたようですが、どうしたことが断り続けていました。ところが20歳の時、鳩摩羅炎を見るや一目惚れしてしまいました。初めは受け付けなかった鳩摩羅炎も我が身の年齢を考え、遙か漢土まで旅する自信がなくなったのかも知れません。また、自らがパミールの嶺々を越えた厳しい実体験を思うと、その何倍もの困難を伴う中国への旅路を乗り越える勇気がなくなったとも考えます。さらに、漢語圏という全く言語の異なる地域まで辿り着いたとしても、布教どころか、生きることさえおぼつきま

せん。そこで、結婚して我が子に自らの使命を託そうとしたのか、やがて還俗して、耆婆と結婚します。二人は白純王の暖かい庇護のもとスバシ城で幸せな生活を送り、西暦350年、鳩摩羅什が誕生⁽⁴⁾します。

ところが耆婆は、急に出家の道を強く望むようになりました。還俗させられた夫、羅炎は大反対しますが、耆婆は7日間絶食、出家が許されなければ死をも決意していました。鳩摩羅什は妻が死ぬのではないかと不安になり、とうとう出家を許したという逸話が残っています。周囲の反対を押し切ってまで、人生の真実の道を求めようとした母の真剣な求道の姿は、幼い鳩摩羅什の胸に深く刻まれていきました。



鳩摩羅什が生まれたと推定される天山山脈の南麓の亀茲国（クチャ）のスバシ城跡

3. 鳩摩羅什、出家。神童ぶりを発揮

鳩摩羅什は9歳の時、仏道修行のため、母に連れられて亀茲から疏勒へ、そして莎車からタシュクルガンに出ています。そのあとクンシェラブ峠を越えて、バス、グルミット、フンザ、キルギット、チラス、タコットを経て、上座部仏教の中心地・北インドの罽賓国（現在のカシミール地方）に入りました。なお、唐の玄奘のインドまでの旅のルートは、時代が200年以上も後になるので、鳩摩羅什や法顕と比較できません。併せて、インドへ出発した時の年齢も大いに異なり、鳩摩羅什は9歳、法顕は60歳過ぎ、玄奘は29歳です。鳩摩羅什はその年齢の若さ、また母と一緒に旅ということもあり、安全を重視してカシュガル経由のコースを選んでいた。法顕は、自らの高齢を考え、時間との戦いであったので、敢えて一番早い道、すなわちタクラマカンを南北に横断しています。玄奘はまだ29歳、できるかぎり各国の諸事情も見たいと思ったのでしょうか、天山山脈を越えて中央アジアのサマルカンドまで足を延ばしている。現在の国名では、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、アフガニスタン、パキスタンを経てインドに入国しています。

ところで3人が目指した天竺については、『魏書』西域伝、罽賓国の条に「罽賓国は善見城に都す。・・・地は平らかにして温和、苜蓿、雑草、奇木、檀槐、梓竹あり。五穀を種う」とあります。農耕に適した豊かな地域であったことが分かります。罽賓国では、当代きっての高僧・バンドダッタ（槃頭達多）に師事します。羅什の勉学ぶりはすさまじく、山積みされた経典を次々と読破し、高僧と法論を重ねて思索を深めていきました。乾いた砂地が水を吸い込むように、またたく間に上座部仏教を究め、留学3年にして、罽賓国王の面前で他宗教（外道）の論客たちと法論をさせられても、負けることはありませんでした。

12歳になった羅什は修学を終えたので、母とともに亀茲国に帰ることになりました。しかし、途中、更に1年間、疏勒国で修行することになりました。各国語に通じた才能と外典の諸学をも駆使した学識深い説法は、疏勒国の人々を驚嘆させ、その俊才ぶりは広く西域諸国にも知れわたることになります。

鳩摩羅什はこの地で、生涯の師匠・ヤルカンド（莎車）の王子だったスーリヤソーマ（須利耶蘇摩）に出会い、大乘の教えを学びました。後に鳩摩羅什は、「私がかつて上座部仏教をすばらしい教えだと学んでいたのは、まるで黄金を知らない者が、銅をすばらしいものだと思い込んでいるようなものだ」（僧肇『法華翻経後記』）と、その衝撃的な出会いを述懐しています。

疏勒国での仏道修行を終えた鳩摩羅什は、母とともに尉頭から姑墨へと天山南麓の流沙の道を東に進み、故郷を目指しました。驚いたことに、亀茲国王・白純がわざわざ国境近くの温宿まで迎えにきていました。

故郷に帰った羅什は⁽⁵⁾、大乘仏教の真髄を説き上座部仏教を破折し、亀茲国をアビダルマ仏教、いわゆる小乗仏教から大乘仏教へと転換させていきます。「西域に鳩摩羅什あり」の名声は中国にも及び、その高名を慕って諸国から学僧が雲集し、講説の場はいつも満席でした。この時期の亀茲国は、シルクロードのオアシス路の中継都市として、もっとも繁栄を謳歌した時代です。



亀茲国（クチャ）の西北 12 キロ、漢代に築かれたクスルガハ烽火台。左は天山山脈に河源を有するクチャ川。

4. 母、鳩摩羅什に「中国へ大乘仏教の教えを伝えよ」と託す

ところで母・耆婆は42歳頃に、いつまでも我が子のそばにいては、何かとたよってしまうので、その成長を期待する上からも離れた方が良くと思い、再びインドへと旅立っていきます。今生の別れに際し鳩摩羅什に、「この大乘仏教の甚深の教えを、東土の中国へ伝えてください。そのような大仕事は、あなたの力でしかできないことです」と言いました。

当時、西域から中国への旅は容易ではなかった時代です。言語も文化も違う遙か東方へ仏教を伝えることは、困難を極める命がけの大事業でした。しかし、鳩摩羅什は、「私は必ず中国へおもむき、偉大な大乘仏教の教えを広く伝え、迷妄の衆生を悟らせてまいります。自分が炉で焼かれ、釜で煮られるような苦しみを味わったとしても恨みません」と母に誓っています。その決意を聞いた母は、心安らかに旅立ち、母と子はその後、生涯会うことはありませんでした。母の消息も途絶え、夫の羅炎とともに史書から姿を消しています。おそらく耆婆は、

仏教の中心地ともいべき罽賓の地で、純真に仏道修行に励み、その数奇な生涯を終えたと推察されます。

夫の羅炎は、妻の女性としての人格を尊重し、その一途な生き方を認めたものの、愛する妻もいなくなり、我が子の鳩摩羅什も去ったあとは、すでに還俗したこともあって出家することも許されず、空しく残年を孤愁のうちに閉じたと思われまふ。ただ、我が子が長安の都で訳経僧として大きく雄飛している姿を臉に浮かべるたび、その胸中は暖かくも美しい光彩に包まれたことと想察されます。

ところで、長安に都をおいた前秦王朝の皇帝・苻堅は、仏教の撰取に熱心で、鳩摩羅什をぜひ中国に招いて仏法の真髓を聞きたいと願っていました。そこで、亀茲国に使者を送り礼を尽くして羅什を招聘しますが、国王の白純は断り続けます。

苻堅は「賢哲は国の大宝なり」との詔勅を出し、鳩摩羅什を手に入れるため、西暦382年、將軍・呂光に7万の兵を与え、はるか西方の亀茲国に向かわせました。遠征軍は途中、楼蘭や焉耆や吐魯番の軍を加え



鳩摩羅什ゆかりの敦煌白馬塔

8万余になりました。たった一人の人物を呼び寄せるために、約8万の大軍が動いたという歴史的事実は、鳩摩羅什がいかに偉大な人物であったかを証明しています。呂光軍は、15ヶ月もかかって平沙万里を越えて亀茲国にたどり着き、亀茲城を落城させ鳩摩羅什を生け捕りにしました。

西暦384年、呂光軍は長安をめざして、亀茲国を離れます。亀茲国での戦利品を満載した呂光軍が、敦煌に到着した時、羅什が亀茲から乗ってきた愛用の白馬が死んでしまいました。その供養のために建てた高さ12メートル余の白馬塔が、今も敦煌に残り威徳に満ちた光輝を放っています。

昭和54年8月に私が白馬塔を訪ねた時は、塔はトウモロコシ畑の中に孤影悄然と聳え、その周りには農民がのんびりと小麦を積んでいました。ところが、3年前に訪ねた時は、白馬塔は強固な鉄柵と立派な白壁の塀で囲われていました。入り口には白馬塔の由来を記した大きなカラフルな看板があり、見学は有料、多くの売店が建ち並び、門前町のように賑やかになっていたのには驚きました。

5. 涼州（武威）で17年間抑留される

西暦385年、敦煌を出発した呂光軍は、河西回廊を東進、酒泉で待ち受けていた涼州軍を打ち破り、涼州の姑藏城（今の武威）に入りました。ところがこの町で、漢土でのクーデターによる主君・苻堅の死と、前秦王朝の滅亡を知ることとなります。帰るべき場所を失った呂光は、この地に後涼国を建国し、自ら王位に就きました。

鳩摩羅什も以後、52歳までの17年間という長い間、黄河上流の中国の辺境の地・涼州で生活し、呂光の相談相手として仕えることを余儀なくされます。もっとも当時の長安は、打ち続く戦乱と飢饉で疲弊し、入城しても迎える人としてなく、生命の保証もなく、とても落ち着いて訳経できる状況ではありませんでした。

この涼州時代、鳩摩羅什の高名を慕って、各国から仏法者が集ってきました。若き英才の僧肇^{そうじょう}など、羅什に教を請うために長安から涼州に来る僧侶も出てきました。鳩摩羅什はこれらの者を訓育するとともに、彼らから漢語、中国古典、漢土の年中行事、風土の習慣、民族性まで学んでいます。

鳩摩羅什は、これまでに漢訳された経典が難解であるのみならず、主旨を取り違えた誤訳が多いことを憂えていました。仏教は、風俗や習慣、考え方なども中国とはまったく違う天竺という風土で成立しました。そうしたなか、釈尊の真意をいささかも損なうことなく、漢土の人にも分かりやすく翻訳しなければならないと考えていたのです。



鳩摩羅什が17年間住んだ涼州の町にある大雲寺（弘藏寺）

涼州時代の鳩摩羅什は、単に經典の内容を理解するだけでなく、その文の底に秘められた哲理まで究め尽くし、一切経を掌中にしました。この辺境の地での真剣な研鑽と精進によって、仏典翻訳の必要な知識が大いに養われ、後の羅什の名訳が生まれるための重要な基盤となっていたのです。

6. 後秦国王より長安に迎えられ、仏典翻訳を開始

西暦401年、仏教に深い関心を示していた後秦の国王・姚興は、鳩摩羅什を長安に迎えるため、黄河を渡り6万人の軍隊を河西回廊の後涼国に遠征させました。後秦軍に敗れた後涼軍は、死者1万、離反者2万5千人を出し、その年の9月に国王の呂隆は降伏しました。仏教を深く信ずる姚興は、不殺生の考えが強く、呂隆を許し、涼州刺史・建康公に任じています。ただし、人質として、母・弟・子などをはじめ、文武の重臣50余家を長安に送るように命じていますが、もともと、他国への侵略が目的ではなく、羅什一人を手に入れる戦いだったので、寛大な処置をとったのです。

姚興は羅什を国師の礼をもって迎えました。また、羅什に仏典の正しい漢訳を期待し、長安の北にある逍遙園に、いわば国立仏典翻訳研究所を創設し、翻訳事業の手伝いにあたる優秀な人材を500人集め、国家的事業として、全面的に援助しています。

鳩摩羅什は堰を切ったように翻訳を続け、8年間で、35部294巻ともいわれる膨大な量の仏典を漢訳しています。10日たらずで1巻を訳し終えるという怒濤のスピードです。当時、經典の翻訳は、はじめに經典を梵語(サンスクリット)で諳んじ、それを弟子が筆受、その書き取った経文をもとに漢訳の作業を進めていく方法でした。しかし、既に漢詩も流暢に作れるほどに漢語を習得していた羅什は、梵語の原典を手にとると、その場で直ちに美しい漢文に訳すことができました。そして旧訳の誤りを正し、なぜそう自分は訳すのか、この梵文にはどのような深義が秘められているのかを、噛んでふくめるように講義していきます。更に、参列者から質問を受ければ納得するまで解説、すべて羅什の訳が優れていることを確認した上で、弟子が筆受して經典を編んでいくという方法でした。



涼州（武威）の鳩摩羅什寺塔

梁の『高僧伝』には、羅什の翻訳と人柄について「言葉がそのまま文章となり、削ったり改めたりすることなく、表現比喩は美しくて簡約にして、玄妙深遠でした。羅什の人柄は心情があくまですっきりとし、強固な確信の持ち主であり、臨機応変に物事を理解し、比肩し得る者はいませんでした。生まれつき慈悲深くて、博愛に心がけ、己を虚しくして人々を善導し、終日倦むことがなかった」と記されています。

翻訳場⁽⁶⁾は、500人が受講する講義場になり、時として、羅什の講義を聴取したいと、2,000人から3,000人がつめかけたと言われています。羅什は、それまで中国人には難解であった大乘空観の真髓を簡潔にして流麗、文学的にも優れたものに翻訳していきました。受講した誰もが羅什の目の覚めるような訳経に感動・敬慕し、参列した弟子の一人・僧叡は「今や羅什の新訳を得て、晴れ渡った崑崙山上から下界を俯瞰し得たようだ」と、伝えています。

参列した弟子たちは、仏の真意を汲みとった珠玉のごとき名訳(意識)に接し、仏教流布への固い決意に燃えていました。そして、稀有の師・鳩摩羅什に今世で巡り会えた喜びをかみしめ、勇んで各地に散って羅什訳の仏典を弘通しています。

7. 鳩摩羅什訳の經典の一部は、世界 10 カ国に翻訳され出版

鳩摩羅什は西暦409年8月20日、長安大寺にて死去。享年60歳⁽⁷⁾、母との約束も、師・スーリヤソーマとの誓願もすべて果たした偉大な生涯でした。臨終の直前、鳩摩羅什は「願わくは、私が心血を注いで翻訳した經典を広く弘め、後世にも伝えてほしい。また、私が翻訳し大乘仏教の真髓を伝えたところに誤りがなかったならば、死後、身は薪で焼かれるが、舌だけは焼けないで形をとどめるであろう。もし焼けてしまったならば、訳した經典を捨てるように」と言い残します。遺体は火葬されましたが、舌だけはしばらく灰にならなかったと語り伝えられています。今日、涼州の鳩摩羅什塔に、その舌が祀られています。私は幾度となくこの鳩摩羅什塔を訪ね、羅什の生涯に思いを馳せ、その威徳を偲んできました。

中国仏教は鳩摩羅什訳によって飛躍的に発展し、その經典は韓(朝鮮)半島や日本など世界各地へと伝えられました。我が国の正倉院文書の仏典(聖語藏)の中にも、鳩摩羅什訳は、約60部300巻が収蔵されています。死後1,600年を経た現代も、その漢訳仏典⁽⁸⁾の一部は、英語版、日本語版、イタリア語版、ギリシャ語版、ドイツ語版、タイ語版、ラオス語版、中国語(繁体)版、フランス語版、韓国語版と、世界の10カ国語に翻訳され、多くの人々の注目を浴び尊崇されています。なお、鳩摩羅什の父の鳩摩羅炎の故郷であるインドでは、2011年2月3日から5日まで「鳩摩羅什、国際學術討論會」が開催されました。私も出席しましたが、鳩摩羅什の偉業は、中国、アメリカ、インド、日本、ヨーロッパなど世界の研究者200余名が出席するなど、大成功で飾られました。今後、ますます民族や国境や言語を超えて注目されると思われます。



長安(西安)の北にある逍遙園の一角にあった草堂寺の鳩摩羅什石塔

注釈

- (1) 西安の西北大学・文博物院博物館の賈麦明副館長によれば、2004年3月、西安市東郊にある古董店で偶然、商店街の道路沿いに立てかけてあった石板の文字に、「日本」とかいてあったので、1000元（日本円で約15000円）で購入したという。日本人の遣唐使井真成の墓碑であった。その墓誌の三行目に「朝難與儔矣。豈圖強學不倦聞道未終」とある。井真成は長安の官舎にあって、朝から晩まで勉学に努めたことが分かる。
- (2) 第2次大戦中、日本の華僑は各地で大きな弾圧を受けた。たとえば、神戸に於いては、戦争中3回の一斉検挙があった。とくに、1937年9月の弾圧は、まことに苦難に充ちたものであった。獄中での苦しい拷問と生活ぶりは、『落地生根』研文社、2000年2月刊に詳しく記されている。
- (3) 慧皎の『高僧傳』巻2には、「家世國相、什祖父達多、個儻不群名重於國。父鳩摩羅炎、聰明有懿節。將嗣相知、乃辭避出家」とあり、羅炎の優れた才能がうかがわれる。
- (4) 鳩摩羅什の生誕年には、諸説がある。唐の智弁『開元釈教録』は、西暦344年説。梁の慧皎の『高僧傳』は出生年を記さず、死亡年を3説併記している。すなわち、弘始7年(405)説、弘始8年(406)説、弘始11年(409)説である。
- (5) 鳩摩羅什が龜茲国にいたのは、東晋の太元2年(384)までである。なお、『出三蔵記集』では、罽賓国から龜茲国に帰還したのち、再び沙勒・莎車に行き、そこで仏陀耶舎の教えを受けて、大乘仏教へ転じたと記している。
- (6) 僧肇の『法華翻經後記』には、「於長安大寺草堂之中、與生肇融叡等八百餘人、四方義學英秀二千餘人、俱譯斯經、與衆詳究。什自執梵本口譯秦語。姚興自執舊經、以相讎校定新文。文義俱通、妙理再中矣。」とある。
- (7) 鳩摩羅什の長安に於ける死亡年には、諸説がある。『鳩摩羅什法師誄』には「癸丑之年(413)、年七十、四月十三日薨于大寺。」とある。ところが、『成実論後記』には、「大秦弘始十三年(411)歲次豕韋、九月八日、尚書令姚顛請出此論、至來年八月十五日訖。」とあるごとく、411年8月の時点で、羅什の生存を確認している。
- (8) 漢訳された經典の總数については不明であるが、唐の『貞元大藏録』には1238部、5351巻が収められている。正倉院の聖語藏は1130余部、4900余巻と記され、そのうち、鳩摩羅什訳の經典は55部329巻収蔵されている。

(文中の写真は筆者撮影)

京都伝統産業のものづくり経営に関する一考察 —川島織物を事例として—

渡邊 喜久

平成 22 年 10 月 29 日受理

A Study on the Product Development in Kyoto Tradition Industry — Case Study on Kawashima Textile —

Yoshihisa Watanabe

This paper is the investigation on Product Development in the Kyoto Traditional Industry. The research is mainly on the Goal of Product Development which Kawashima Textile Industry made. The Kawashima has been making the best effort to have the production target.

キーワード：京都伝統産業：Kyoto Traditional Industry 川島織物：Kawashima Textile
京都型ビジネス：Kyoto Business Type

1. はじめに

日本の製造業は、高度な生産技術に裏付けられた高品質な製品開発によって、飛躍的に発展してきた。京都には独特な伝統産業による、ものづくり経営を生かして長期不況の今日、ユニークな企業が多い。

ニンテンドー DSやWiiなどの独創的な商品を生み出し、世界のゲーム機器業界の先頭を走る任天堂。本業の電子機器のみならず、アメーバ経営により大きな注目を集める京セラ。すでに1950年代に「企業は社会の公器である」という社憲を打ち出し、日本のCSR (Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任) 活動の先端を走るオムロン。日本型ベンチャー企業として「おもしろおかしく」を社是とし、環境関連機器などで独自の事業展開を図る堀場製作所。M&Aを巧みに生かした新たな企業成長モデルを作り上げて話題を集める日本電産。日本で初めて企業ノーベル賞を生み出した島津製作所。この他にも、ワコール、千吉、村田製作所、大日本スクリーン、ローム、イシダなど、その企業のユニークさは枚挙の暇がない。

2. 京都伝統産業の歴史的役割

延暦13年(794)平安京に遷都以来、明治維新(1868)までの約1100年の間、京都は日本の政治経済上の中心であった。1192年の鎌倉幕府、1338年室町幕府、1603年江戸幕府の開設等により、朝廷の政治的支配力は削減され、とりわけ江戸幕府開府以降二百数十年の間は、京都は政治力を喪失していった。

しかしながら、古代・中世・近世を通して京都が首府であったことに伴う経済上の利点は大きかった。天皇家と貴族階級のもとには、全国から富が集められた。荘園を持つ寺社についても、同様であった。朝廷およびそれを取り巻く勢力は、外来の知識や文物に接する機会も多く、消費水準は高く、高級な商品の需要者・消費者であった。そのため京都では高度の手工業が発達し、その製品は上流階級や市民に供給され、場合によっては地方へ販売された。天皇所在地としての京都そのものが、高級商品の需給においてビジネスチャンスを提供する場であった。

すなわち、京都は外国からの技術・情報・文物を集積し、さらに日本国内の諸地方からも同じく、技術・情報・文物を集積し、それらの幾分かを日本の諸地方へ送り出した。江戸初期の鎖国までは日本海側の諸港、北九州の諸港や、琉球との関係で薩摩が外国との交易があり、京都・江戸が対外関係を独占していたわけではなかったが、京都が文化・経済の最先進都市であったことは間違いない。

そのため京都は諸地方に文化的・経済的影響を与えながら、諸地方から憧憬の目でもって見られ、かつ模倣し追いつくべき目標とされた。歴史上、いずれの時代にも、いずれの地域間、国家間でも見られた現象の一つである。

事実、産業面においては、京都の諸産業の技術が諸地方に導入され、その土地の特産物となっていく例が無数にある。京都の絹織物、いわゆる西陣織物はその代表的事例である。西陣織物の技術が外部で模倣されないように、職人による移動の禁止などによって、秘密保持の努力がなされたが、近世の大藩のように領域の閉鎖性のない都市であったから、西陣織の技術は日本各地へ次々に伝承していき、それらの地域は西陣の粗悪品を供給する産地になるとか、西陣のライバルとなって現れたりするようになった。

このような現象は西陣織のみに限られることではなく、京都の伝統的工芸品について、多かれ少なかれ当てはまる。伝統的工芸品産業振興会編の京都関連「伝統的工芸品」一覧表を示して見よう。(図表-1)。京扇子や京人形は名前からみても京都の産物とわかるが、南部鉄器・越前打刃物なども京都からの影響があったことが知られる。

先進地の情報と技術が後進地に伝播する現象は歴史的に、地域的に国際的に生起し、いろいろな形で変動を引き起こしている。日本の最先進都市京都もまた、この流れのなかにあった。

<図表-1> 京都関連「伝統的工芸品」一覧

品目	工芸品名	産地	沿革
陶磁器	京焼・清水焼	京都	平安遷都前。現在の姿は17世紀以降。
漆器	京漆器 金沢漆器	京都 石川	平安初期。唐の技法を基に独自の技法を確立 17世紀。三代藩主利常が名工五十嵐道甫を京都から招いたのが始まり。
	香川漆器	香川	19世紀、玉者象谷が京都、輪島で漆器技術を習得。
木工品	京指物 井波彫刻	京都 富山	平安期、室町以降、茶道文化とともに発展。 17世紀、京都の彫刻師より技術を習得。
金工品	南部鉄器	岩手	17世紀、藩主利直が京都、甲州から釜師、鋳物師を招き、茶の湯釜、 武具を作らせたのが始まり。
	越前打刃物	福井	14世紀、京都の刃工師千代鶴国安が来往し刀剣・釜作りの技術を 地場の鍛冶師に伝えたのが始まり。
仏壇・仏具	京仏壇 新潟白根仏壇 三条仏壇 京仏具	京都 新潟 新潟 京都	9世紀。仏壇発祥の地。 元禄年間、京都から製造技術を導入。 元禄3年建立の東本願寺別院造営に参加した職人が製造を開始。 9世紀頃、仏具発祥の地。
諸工芸品	京扇子 京団扇 京石工芸品 京人形 江戸木目込人形	京都 京都 京都 京都 東京 埼玉 兵庫	奈良期。現在の技術確立は16世紀。 奈良期。18世紀までに現在の技法が確立。 平安遷都時。 平安時代、宮廷を中心に雛人形が発祥。 18世紀に京都で発祥。
	播州毛ばり		天保年間、地元の行商人が京都より持ち帰り、製法を広めた。
織物・染色 品ほか	西陣織 京友禅 京鹿の子絞り 京小紋 京刺繍 京くみひも 京黒紋付染 桐生織 名古屋友禅	京都 京都 京都 京都 京都 京都 京都 群馬 栃木 愛知	5,6世紀に始まり、平安遷都後、官営工業で発展。 8世紀。手描友禅は17世紀に宮崎友禅斎が確立。 10世紀頃の宮廷の紋染めに始まる。 7世紀。武士の袴に端を発す。 平安遷都時の織部司に遡る。 平安時代。江戸時代に産地を形成。 発祥は17世紀。 発祥は8世紀。18世紀に西陣より技術を導入し産地として発展。 18世紀、藩主宗春の時代に京都から伝播。

(資料) 伝統的工芸品産業振興協会『伝統的工芸品ハンドブック』

3. 京都の革新的企業家の系譜

京都産業の歴史的役割を果たした、かつての革新的企業家の活動を振り返ることは現在の京都にとって、とりわけ必要だと思われる。そこで、多数の革新的企業家が輩出した中で、三つの時代に分けて概観してみたい。近

世（江戸期）、近代（明治一昭和戦前期）、現代（昭和20年以降）である。^①

戦国時代末から近世初期にかけて活躍した角倉了以は、当時の初期豪商の代表的タイプである。住友家二代の住友友以（理兵衛）は江戸前期の京都出身の大阪商人である。三井高利（越後屋）は江戸前期に江戸市場へ乗り込んだ革新的企業家である。下村正啓（大丸）・飯田新七（高島屋）・藤井（藤井大丸）は江戸中期から明治にかけて台頭した商人であって、角倉や三井ほどに目立つ革新性はないが停滞期の商人として、地域と顧客に、より密着した商法を実行した点に新味が感じられる。

次に近代に移る。明治維新によって日本は大きく変わる。天皇親政といわれた体制のもとで開国が確認され、政権所在地は東京へ移された。政治家も、企業家も来るべき時代への見通しを持たねば行動できなかった。この混沌とした時代をリードしたのは、まず政治家であり、官僚であった。政治家としては山本覚馬、官僚としては植村正直、等が挙げられる。技術者としては田辺朔郎、島津源蔵（島津製作所）、商人としては大倉恒吉（月桂冠）、大宮庫吉（宝酒造）などである。

現代はまず敗戦から出発する。京都市の産業は、平和産業の色彩が強かったから、戦争中の軍需生産の強化は京都の伝統的産業から労働力や機械設備を奪い取る形で進行した。高級織物用の西陣織物機械は、弾丸や軍艦や大砲の部品を作るための材料として強制的に徴発され、残るものは手機のみであった。敗戦後も、資金と資材の不足、電力事情の悪化など悪条件が重なり平和産業の復興は、はかばかしくなかった。

このような敗戦後の京都経済の中から登場してきたのは、重化学工業よりも、知的集約産業に属する企業であった。その代表的事例として、ワコール、任天堂、京セラを取り上げ、それらと伝統的企業の千吉とを比較してみたい。

①ワコール（塚本幸一、1920年生まれ）

塚本幸一の経歴を見ていて感銘を受けるのは、その行動力である。その行動力の背景には着想がある。着工を実行に移す能力は、例外なく革新者の備えている能力である。ただ、その人のおかれている状況により、その発露の仕方が違う。

塚本の場合目立つのは、その行動の広域性と転換の早さ、実行の速さである。大正9年（1920）仙台生まれ、6歳の時京都へ移住し、8歳のとき滋賀県へ移り、昭和13年（1938）八幡商業学校を卒業し、就職に失敗して父の事業の手伝いをした後、同15年末現役入隊し、同20年（1945）の敗戦時陸軍軍曹となった。帰国後アメリカ兵と日本娘が仲良くしているのを見て、ネックレスや装飾品の販売を思いついた。かねて繊維関係の仕事に興味があったので、ブラジャーに入れるパットの製造・販売を思いついた。日本女性のバスの低いのに目を付け、洋装化の過程で生まれることを予測し、パット付きのブラジャーにまで需要が起こるの見通し、その企業化に着手した発想と実行力は非凡である。

②京セラ（稲盛和夫、1931年生まれ）

京セラの創始者稲盛和夫は鹿児島市出身である。鹿児島大学工学部応用化学科を卒業して、京都松風工業に入社した。同社は当時、陶器製の電気絶縁材料の碍子を製造していた。研究部では将来に備えて、電子工業用セラミックの開発を手がけていた。稲盛は入社翌年、わが国ではじめて弱電用高周波絶縁材料のフォルステライト磁器の人工合成に成功した。稲盛のニューセラミックは合成製品で品質も一定し精度が高く、天然の鉱物岩石を材料としたセラミックに比べて優れていた。彼は日立製作所の依頼によりセラミック真空間の開発を手がけたが、日立や松風の幹部と意見が合わず、入社三年目で退社した。

一緒に辞めた青山政次や、宮本電気の西村専務（当時）の援助によって昭和34年（1959）4月、資本金300万円の京都セラミックを設立した。良質のフォルステライト磁器を製造したので、松下電器からも注文があり、アメリカでも販売し生産するようになった。

国頭義正は同社の成功の要因を三つあげている。第一、ニューセラミックは電子工業に必須の材料で、時流に乗ったこと。第二、稲盛は単なる技術者ではなく、優れた商才の持ち主であること。アメリカへの売り込みによって好評を得、日本での評価を高めた。日本人の弱点を利用した商法である。第三、アメンバー経営という各部門

^① 本節は、以下の文献・資料を参考にした。国頭義正『京都商法』講談社（1973）。京都市編『京都の歴史 第五巻 近世の展開』学芸書林（1972）。京都市編『史料京都の歴史』平凡社（1980）。日本経済新聞社編『京都』<都市シリーズ>（1992）。『京都の中堅130社』（1996）その他諸氏の伝記によっている。

の独立採算制を採用し、小単位の部署の時間当たり利益計算方法を作用して合理化を図った。

良質の商品を作り、強力なセールスをして、市場を拡大する一方、生産管理を隅々まで行き渡らせた。技術革新と市場開拓と生産管理における新機軸の結合であった。

③任天堂(山内溥、1927年生まれ)

任天堂の創業者は溥の曾祖父の山内房次郎である。房治郎は明治22年(1889)、カルタやトランプを製造販売する合名会社山内任天堂を設立した。カルタは京都の伝統産業であるが、限られた市場相手の家内工業的な小規模生産であった。

溥は家業は自分の仕事ではないと考え早稲田大学法学部に入り、将来は法曹界の大物になるつもりであったという。ところが昭和25年突然の父の死により、学業半ばで京都へ呼び戻され、家業を継がなければならなくなった。やむを得ず継いだ家業であったが、溥は祖父積良の指導で実務を勉強した後、家業の改革に取り組んだ。具体的には三つの方策を実施した。第一は、分散していた作業場を一か所に集め、工場生産方式にする。第二に合名会社を株式会社に改組し、将来は株式を公開する。第三は、正月にしか売れないカルタ・トランプ類を四季を通じて売る方法を考える。

一番難しい第三点については、デイズニートランプを作り、民放番組を通して宣伝しトランプの売り上げを急上昇させた。昭和38年(1963)ごろ、これが頭打ちになったので、総合室内ゲーム機へと転換した。アメリカのトップ企業見ミルン・ブラッドレー社と業務提携して新しいゲーム機を導入し、他方理科系の大学生を採用して自力の製品開発を目指した。プラスチックの腕をハンドルで操作して人形をとる「ウルトラハンド」や、光学電子技術を応用したクレ射撃システム「レーザークレ」、テレビゲーム機、ゲーム用ソフトなどで業界首位となる。その後セガ・エンタープライゼスの急迫に合うという状況であるが先進企業にはついて回る試練である。

任天堂は、花札・カルタ・トランプという最も古いタイプのゲーム用品から、最新のマイクロエレクトロニクスを採用したゲーム機へ転換を遂げ、世界の市場を相手に大量生産の大企業へと押し上がった。

任天堂成功の秘訣は、技術の発展を頭に入れながら、新しい市場を掘り起こしていった点にある。山内溥の市場探索能力は抜群であった。京都出身で野性的な気風の強い早稲田を選んだところに山内の境遇を克服しようとする姿勢がうかがえるし、その結果彼は古い業界から抜け出て、全く異種のゲーム産業を創造した。

④千吉(西村大治郎、1918生まれ)

千吉(千切屋吉右衛門)株式会社の先祖は奈良時代工匠神人(宮大工)であった。平安遷都の時、京へ移住し御所造営にあたった。弘治元年(1555)に分家し、本家の家業を譲り受け今日に至った。現在では白生地卸だけではなく、染呉服製造卸にも携わっている。そして他社に先駆けて、プレタ着物やDC(デザイナーズ・キャラクター)の着物を手がけて、着物のメッカ京都室町筋のリーディング・カンパニーとして活躍している。1985年にはコシノ・ジュンコきもの、1992年にはケンゾーきもの、1994年には島田順子のきもの等を発表した。また美人画の上村松園の描いたブランドなども提供した。図案作成にはカラーグラフィック・ディスプレイ技術やコンピューターグラフィック技術を採用して、売れ筋商品を提供しようとしている。家業は昭和9年(1934)株式会社化され、昭和10年代の平和産業受難の時期を経て、同23年社業を再開した。

会長であった西村大治郎は神戸大学出身、京都織物卸売商業組合の理事長を平成3年3月まで22年間勤めた同業界の重鎮である。このような強力なリーダーの下にある同社の成績はここ数年伸び悩みである。しかし、これは千吉に限られたことではない。西陣織をはじめとする京都の伝統産業が直面している問題である。

これらの状況をふまえて、京都経済人が配慮しなければならないと思われる事柄を整理しておきたい。この革新的な京都の企業家はそのほとんどすべてが、日本全体のレベルからで見ても大きい成果をあげた革新者である。そこでこれらの人々の特長について再整理を試みたい。

<図表-2> 企業者活動の要点

氏名	新技術・新情報（革新の源泉）	市場との関係	出身
角倉 了以	土木技術を河川開削に利用	内陸の物産を都市市場へ搬出（船運の将来性の評価）	京都
住友 友以	銅精錬技術の習得と普及	店舗を市場に接近させ、垂直統合（採鉱と輸出）	京都
三井 高利	新商法の採用。 公金為替の活用	庶民市場の掘り起こし 旧型商人との対立（伊勢商法）	伊勢
下村 正啓	堅実な商法	地域社会との密着	伏見
飯田 新七	停滞的な旧市場のなかで開業	客に対して誠実な商法 顧客の尊重	敦賀、京都 で養子
藤井 キク	停滞的な旧市場の中から台頭	コスト切り下げのための勤労	大津
川島 甚兵衛	綴織の再興の祖、美術織物	実用織物の改良、海外輸出	京都
島津 源蔵	輸入理化学器械の国産化、外国人・教授の活用	当初市場はせまく注文生産的（新製品開発）	京都
田辺 朔郎	新技術の実用化	都市改造に寄与	東京
大倉 恒吉	酒造方法の改革 ビン詰の成功	旧型問屋から新型問屋へ移行 知識人の需要開発（PR重視）	伏見
大宮 庫吉	焼酎生産の価格。株式会社制度 活用による大企業化	新需要の掘り起こし PR上手	宇和島
塚本 幸一	日本人向き洋装下着の開発	拡大する市場を予測し開発	近江
稲盛 和夫	陶器からニューセラミックスへ 絶縁体の転換	新市場を予見し開発。 アメリカ市場開拓	鹿児島
山内 溥	カードという遊具から電気電子 活用の遊具への転換	旧来市場の行き詰まりを予測し、 青少年の市場を創出。	京都
西村 大治郎	最高の図案の活用、最新のデザイン 機器の利用。	潜在していた着物愛好者の掘り起こし。	京都

<出所> 安岡重明『京都企業家の伝統と革新』同文館（1998）、京都市編『史料京都の歴史』平凡社（1980）
京都市編『京都の歴史第五巻近世の展開』学芸書林（1972）等より作成

4. 京都の伝統産業と京都型ビジネス

明治維新によって「王政復古」のスローガンのもとに、天皇と貴族階級は復活したように見えたが、実権は藩閥政府が握り、天皇は江戸へ移住し、事実上の遷都となり、京都市民を驚愕させた。近世二百数十年のうちに政治は江戸に、経済は大阪に握られてしまった上に、天皇所在地としての地位まで奪われてしまった。この時から京都は天皇所在地に伴う恩恵から離れて生きていかなければならなくなった。新政府から産業基立金など若干の援助はあったが、京都府知事の主導のもとに改めて「産業立国」を目指さねばならない境地に追い込まれたのである。このとき京都が直面した困難の一つに、技術体系の変更という問題があった。京都産業が古代・中世・近世を通して全国に君臨しえたのは、その高度の手工業技術を駆使したことによる。ところが開港によって競争相手として立ち現われたのは、機械制工業技術を基礎とする諸産業であった。機械制工業技術による安価な商品は、ただちに西陣織や京扇子の競争相手として現れたわけではないけれども、衣服の洋装化、生活習慣洋風化の普及により、市場のあり方そのものの変更を迫ったのである。京都の精緻な手工業技術の商品世界は、そのまま旧世界の遺物となりかねない状況となった。

このような流れのなかでは、京都の諸産業は基調としては精緻な手工業的技術を温存した「工芸的」性格の商品を生み出す産業として存続するが、その商品の市場が広がる可能性は乏しいといえよう。

しかしながら、京都は伝統産業が息づく都市である。西陣織、友禅染などの和装をはじめ、清水焼、楽焼などの京焼、そして京漆器、京扇子、団扇、京人形、京版画、京料理、お香など、数え上げればきりが無い（図表-1）。

日本文化をこれだけ取り揃えている都市は、京都の他には存在しない。そして、これらの京都文化を支えている老舗の多くが現存し、200年、300年続く企業も稀ではない。100年以上存続している企業だけでも、京都府では1600社を超え、その多くが京都市に集中している。この数は、長寿企業が多い日本のなかでも突出しており企業の継続性という側面からも、京都の企業は際立っている。

そこで、京都の伝統産業と京都企業の関連事例を列挙してみよう。

- ①伝統的手工業製品を現代工業の要求と適合する新製品に改良する。陶磁器の絶縁体からニューセラミックへ。(京セラ、村田製作所)
- ②室内で手や指を使用する遊び道具である花札、トランプ、ゲーム盤からコンピュータゲーム機への転換。(任天堂)
- ③織物の製造方法において近代技術を導入して帯、着物から多方面に商品開発を試みる。織物における手動機械から、動力による織布生産・力機械化。(川島織物)
- ④市場の変化を予測し、それに応ずる新規の商品開拓により成功するが、その技術的・センス的要素は、伝統産業によって培われている。(ワコール)
- ⑤旧来の製造方法を変えないで、外来技術の摂取を通して製品の近代化を計った産業。酒造業、焼酎製造業、清酒の四季醸造、醸造のオートメーション化(月桂冠、宝酒造)

なぜ京都は、このようなユニークな企業と伝統文化とが共存する類を見ない都市となったのだろうか。この疑問を解明するためには、京都の持つ独創性と継続性がキーワードとなる。京都の底に流れる本質に迫るためには、京都の職人が長年にわたって育んできた独特の文化、「職人文化」を知らなくてはならない。

5. 伝統産業のなかの職人文化

第一は「顔を見る経営と切磋琢磨」である。京都では、システム的な発想で人を管理することは嫌がられる傾向があり、経営者が直接、人の顔を見ながら経営する企業が多い。これは京都風の間人重視の経営であり、そのなかで働く従業員は、競争というよりも切磋琢磨により、自分の能力を高めることが求められている。この傾向は、伝統産業の場合は特に顕著で、職人は西陣織や友禅染の内なるネットワークのなかで、自分の技を磨くこと求められる。そして、職人の切磋琢磨による高度な技に支えられ、美しい着物と帯が完成をみる。

第二は「独創性による付加価値向上」である。京都人は、とにかく人の真似をすることを嫌う。これは裏を返せば、独創性の追求に最大のエネルギーを集中させるということであり、これにより付加価値を高めようとする。この裏には、京都のビジネスにおいては、「企業の適正規模」という概念が重要視されており、むやみな量の拡大は控え、むしろ独創性を高めることにより企業の成長を達成しようとする考えが隠されている。

第三は、「継続のための革新」である。伝統のなかの革新、といった言葉が京都を表現する際によく使われる。確かに京都の伝統から革新的な要素は外せないが、京都の伝統産業が革新に取り組むのは、利益の向上のためというよりは、むしろ事業を存続させるためという色合いが濃い。これは、200年、300年続く老舗にとっては、目先の利益よりも、事業を次の世代に引き継ぐことの優先度が高くなるからである。これは、京都企業一般にも当てはまる傾向があり、「京都の企業は革新的だ」という言葉は確かにそうであるが、これを通常のイノベーションしてとらえると、京都の真実は見えてこない。何よりも、事業を継続させるために革新を行うというのが京都のやり方なのである。

京都の企業には、ものづくりの本場、本家という意識があるから「新製品」「新技術」「創造性」を重視する。人の真似をすることほど恥ずかしいことはないということである。そして、京都の企業は高付加価値の製品を作る。京都企業の経営戦略は、何かと問われたら「違いの創出」ということになるだろう。

これは、ゲーム機器業界で圧倒的な強みを誇る任天堂の前社長(現相談役)で、任天堂を現在の地位にまで引き上げた山内溥の口癖は「よそと同じことはしない」ことであるという。山内氏自身も以下のようにのべている。

「いままでこんな遊びがあった、これを改良・改善すればなんとか商売になるのではないかと、という発想では絶対うまくいかない。だから他社の類似品は出さないというのが任天堂のモットーであり、わたしが心掛けてきたことなのです。新しいパターンを求め、創造することにすべてのエネルギーを費やしてきたのも、そこにあり

ます」。⁽²⁾

このような独創性を重視する京都企業の裏には、京都人の「本物志向」があることは疑いがないだろう。堀場製作所取締役社長の堀場厚は、海外留学・勤務などの経験が豊富なおうえに、京都経済同友会の代表幹事を務めた実績を持つなど、京都財界のニューリーダー的な存在である。堀場氏は「本物志向」が京都文化の本質であるとまで言い切るのである。

「京都文化の一番のポイントは、本物志向だと思います。規模でなく中身で勝負しようというのがこの土地に流れている。量でなく質で勝負というのが価値観のなかにあるわけです。京都で経営者が集まる会で誰が上座に座るか。京都の場合、伝統産業でも、近代産業でも、長く営々と続く一流企業であれば、たとえそれが20名の従業員の会社であっても上座に座る。たとえ上場企業で何千名の人を雇っていて、何千億円売り上げていても、その会社の業界における格がそれなりなら下手に座る。ごく自然に京都ではそういうことがなされているわけです」⁽³⁾

京都の経営者が環境の変化にもかかわらず、同じ関西でも大阪の企業とは異なり、本社を京都において地域にこだわり、ここから決して離れようとしないうる背景には、このような要因も存在しているからである。

6. 伝統とテクノロジーの融合

「伝統とテクノロジー」を融合させる例として、村田製作所と京セラを挙げてみたい。京都の都市としての強みは、伝統産業とハイテク産業が同居するところにある。そこで、この両者の実際のつながりについて、伝統産業からハイテク産業への流れと、ハイテク産業から伝統産業へのながれの、二つの水流に分けて、その事例を挙げて見ることにする。

京都の産業史をひもとくと、伝統産業が現在の京都を支えるハイテク産業を生み出してきた一つの流れが浮かび上がってくる。この典型が、陶磁器産業と村田製作所の関係に見られる。村田製作所は、現在では積層セラミックコンデンサで、世界シェアの三分の一以上を握り、その電子部品は携帯電話、ノートパソコン、薄型テレビなどに幅広く使われ、「村田製作所がなくなったら、世界の携帯電話の生産量がその日から半減する」(サムスングループ、イ・ゴンヒ元会長)とまでいわれるメーカーである。この村田製作所の操業の経緯を振り返ってみると、伝統産業である陶磁器産業と切っても切れない関係が浮かび上がってくる。

村田昭(村田製作所創業者)の父は、石川県に生まれるが、父母を早く亡くした事情もあり京都に来て呉服屋で丁稚奉公をしていた。その後、妹夫婦が陶器屋をやっていた関係から、田舎の田畑を売って資金を作り、村田製陶所を興した。そこでは、主として碍子(電気を絶縁するために用いる陶磁器器具)を生産し、これは船舶用の電灯ソケットなどに使われた。村田昭は、碍子製造の家業を帳面付けや外回りの営業面から手伝っていた。しかし昭はこれに飽き足らず、碍子事業のさらなる拡大を図ろうとするが、この計画を父に話したところ、「注文をもらうには同業者の得意先に行くことになり、同業者より安くしないと注文はもらえない」これが得意先を荒らすことになることになると反対された。そこで、昭は同業者がやっていないもの「人のできない独自性のあるもの」を開発する方向へと舵を切った。この独自製品を重視する姿勢は、現在に至るまで、村田製作所の製品開発の基本方針になっており、ここでも独創性を重視する京都企業の原点が浮かび上がってくる。

村田製作所は、このよう経緯を経て、特殊磁器の開発、生産を本格的に始めた。そして、飛行機に使われる電熱用の碍子や、現在でも村田製作所の主力製品となっているセラミックコンデンサなどを次々と開発した。⁽⁴⁾

このように村田製作所の設立とその後の展開において、京都が提供した陶磁器産業のインフラが大きな役割を果たした。これは、村田に限られることなく、稲盛和夫が設立した京セラにも京都の陶磁器産業との興味深いつながりが見られる。

鹿児島県出身の稲森は、鹿児島大学からの卒業を控えて、仕事探しをしていた。稲盛の第一希望は専攻の第一希望は専攻の関係から石油化学の分野であり、これに関連する企業の多くに応募した。ところが、稲盛は希望した会社から、受け入れの結果は得られなかった。そこで、鹿児島大学の指導教授に相談した結果、京都の碍子製

⁽²⁾ 高橋健二『任天堂商法の秘密—いかにして「子ども心」を掴んだか』祥伝社1986年173頁)

⁽³⁾ 村山裕三『京都型ビジネス独創と継続の経営術』NHKブックス(2008)堀場厚、同志社大学大学院講演(2005年7月23日)

⁽⁴⁾ 村田昭『私の履歴書 経済人30』日本経済新聞社(2004)

造の大手である松風工業に就職した。ここで稲盛に任された仕事が、特殊磁器のニューセラミクス、特に高周波絶縁性の高いフォルステライト磁器の研究だった。稲盛はこの新しい仕事に没頭し、松下電子工業からの注文を受けて、テレビ用ブラウン管の電子銃の絶縁用セラミック部品の開発にも成功する。しかし、その頃までには松風工業自体が斜陽化しており、その士気の低下も著しかった。このような会社に嫌気がさした稲盛は、仲間を引き連れて独立、起業した。これにより、1959年に設立されたのが「京都セラミック」今の京セラである。⁽⁵⁾

7. 伝統産業の継続のための革新

伝統文化とビジネスを結びつけ、時代に合った手法を編み出す京都の知恵と伝統。この典型が明治初期に見られる。この時代、東京への遷都が行われ、京都は精神的にも、また経済面からも勢いを失う。ところが、ここで京都は海外に目を向けることにより、文化の存続を試みている。海外からの技術導入で伝統産業を再生し、また、海外市場で京都の伝統工芸を展開することに新たな活路を見出そうとしたのである。

海外からの技術による伝統産業の再生は、西陣織でも起こった。西陣では、明治初期には開国と東京遷都により二重の大打撃を受けた。開国により生糸が海外向けに輸出され始めると、生糸不足が西陣織の生産地を直撃し、また、遷都により宮中などを中心とする大きな需要層を失った。このような危機的な状況のなかで西陣が目に向けたのは、海外からの技術導入だった。西陣織業者により設けられた西陣物産会社は、絹織物の技術が進んでいるフランスに、技術導入の目的で職工を派遣することにした。これに選ばれたのが佐倉常七、井上伊兵衛、吉田常七の三人で、技術研修と機械購入の目的を持って、フランスのリヨンに渡った。その内の二人は一年弱の滞在を経て、技術を取得するとともに、ジャカードなどのフランス製機械を携えて帰国した。

ジャカートは、紋紙（一種のパンチカード）に開けられた穴を用いて、自動的に縦糸を持ち上げられるように工夫された機械で、これは従来の手で縦糸を持ち上げる手法と比べて、労力が大幅に軽減された。このジャカートが西陣で普及し、織工程の機械化による飛躍的な生産性の上昇をもたらし、西陣は高級絹織物生産地としての地位を維持することができたのである。⁽⁶⁾

8. 伝統産業ものづくり経営—事例研究（川島織物）—

西陣織物の製造メーカーである川島織物は、1843（天保14）年初代川島甚兵衛が呉服悉皆業を始めてから、167年の歴史がある。川島織物の長い年月の継続のための革新を考察するためには、西陣織物業の生産システムについての理解が必要である。西陣織物業の製造工程は、長年の史的展開を経て、現在では高度に細かく分業化・専門化され、各種工程を分担する関連業種により社会的分業組織が形成されている。

これに対して川島織物は、複雑な西陣織物の関連業界より離れて、独自の事業展開を行っている。原糸購入より製品に至るまでの撚糸・染色・製織・仕上げの各工程の全設備を工場内に備え、社内一貫作業により、品質管理の作業下のもとに生産している。社内ではデザインの考察や織物地合いの工夫、また、古今東西の織物参考品8万点を納めた織物文化館や、物理・化学試験等の研究設備を持ち、各種の繊維、染色技術の研究、染・織の耐久強度テストを行い、品質管理に徹底している。

川島織物の事業は、伝統的な美術工芸織物と和装帯地の製作を事業の核として、最新の技術と時代のニーズに即した新分野の創造のために、全製品の技術開発、生産に取り組んでいる。中でも美術工芸、帯地部門は、西陣機業では珍しく前工程の糸染めから整経、製織まで全工程を工場内に集約している。高級帯地で知られる綴織は、伝統工芸士を含む熟練職人が、経糸（たて糸）を手繰り、1本1本緯糸（ぬき糸＝横糸）を通して柄を織り込んでいくのである。

一方、自動車などの内装材は、国内全メーカーの主要製品をはじめ、鉄道、旅客機、高級客船などに向けて出荷している。JRグループの新型新幹線や各地の高級特急車両など新分野に次々進出している。自動車のシート地の開発は、近年、安全性や操作性だけでなく、社内の空間が1つのインテリア空間として考えられるようになってきた。中でも1番人に近い素材である繊維のシート地にこだわり、織物の持つぬくもりや、快適性を要求するユーザーが増えているという。それだけに、染織のクリエイターたちは、人々にやすらぎ、ぬくもりを与えられ

⁽⁵⁾ 稲盛和夫『私の履歴書 経済人36』日本経済新聞社（2004）

⁽⁶⁾ 拙稿（1997）（西陣織物業の生産システム）『東海学園大学研究紀要』第2号（1997）を加筆・修正している。

る織物づくりをしていかなければならない。

現在のわが国の綴織は、中国の技法を倣って江戸時代の中頃から始まったのであるが2代川島甚兵衛は明治19年に渡欧した際に、西洋のゴブラン織を見て、其の威容に驚くとともに、わが国の綴織の技術の素晴らしさを再認識したのである。そして、帰国してわが国独自の図様と色彩で建築空間を装飾する近代的な綴織錦を創出した。以降、綴織は内外の博覧会に出品されて絶賛を得たのである。この技術が今日の川島織物の綴織とタペストリーや綴帯の世界をつくりあげていった。川島織物の事業特性は、日本の織物文化を伝達し創造していく「美術工芸部門」である。宮内庁御用達品や美術工芸品・祭礼余品用品の復元・製作。その成果が、多くの名建築の内装、オフィス、ホテル、政府・官公庁、劇場、公共施設の内装から、タペストリー、綴帳まで広がっている。さらに、一般住宅用のカーテン・カーペット・壁装と事業展開している。

京都北山の一角、市原の地に美術工芸織物を製作する川島織物の工場がある。ここでは、綴帳や綴織の帯を制作している。特に巨大な織物の綴帳を制作しているところは全国でも有数である。綴帳以外には綴織のタペストリーや刺繍も含めて、全国各地の祭礼用の懸装飾の調や復元制作も行い、西陣織500年の伝統の技術を生かした川島織物の美術工芸織物制作に結集している。平山郁夫や東山魁夷画伯などの有名画伯による絵画をもとにした綴織のタペストリーは原画とはまた違った特有の魅力がある。したがって、川島織物の綴帳は綴織の技法で制作したものが主であって、有名な画家の原画も多く、全国の公共施設や文化ホールに設備される。このような巨大な綴帳は数百色、時には千色以上の糸を使って織り上げるが、それにはまず原寸大原画の忠実な下図を描いて、織幅25mに及ぶ手織機で数十人の人数で、数か月の期間を費やして織り上げるのである。大きさばかりでなく、撚糸、織り、縫製と作業のすべてが見ていて圧巻というほかはない。⁽⁷⁾

9. 新織物設計システム (NTDS) の開発

西陣は長い歴史の中で、染色、撚糸、整経、図案、意匠、紋、彫、紋編、機料など、分業化という形態で発展してきた。川島の織物設計者も、以前は意匠図を検収したり、組織図をすべて指図し、紋紙を発注していた。しかし、納期短縮などの時代の流れや設計者の世代交代により表組織だけ指図し、裏組織を紋業者で作ってもらう形に変化してきた。

デザイン織物の最も大切な組織作りや組織の組み合わせ、原料と組織の融合を織物設計者自身が行えるようにすると同時に、データの蓄積と設計者のスキルアップを図ることを目的として、1997年、新織物設計システム (NTDS: New Textile Design System) の開発を開始した。このシステムは織物設計者だけでなく、デザイナーや織物設計者の初心者も簡単に織データを設計でき、次のような特長がある。

- ①社内で紋データが製作できる。
- ②出来上がった紋データを、ネットワークやインターネットメールを使って製織室や協力工場にも転送できる。
- ③NTDS自体は紋業者システムのインテリア専門簡易版であり、紋業者が作るものと同じものができる。
- ④NTDSを利用することにより、試作の検証と確認が短時間に可能となる。
- ⑤短時間、少工数でのトライアル&エラーを可能とし設計者のスキルアップにつながる。

その後、研究を重ねた結果、1999年に現在のNTDSの基本様式が完成した。このような努力が功を奏し、従来、外部に支払っていた紋データ作成費が年間数千万円も削減できたと同時に、1回の試作でトライアル&エラーが可能となり、試作回数の削減につながっている。現在では、中国工場へのデータ送信や国内協力工場へのデータ送信などにおいて、コスト削減と同時に大幅なリードタイムの削減にも貢献している。⁽⁸⁾

10. 車両用内装裂地のグローバル化—世界最適生産体制—

海外進出は1978年のオーストラリア・フォード社への輸出から始まる。その後、国内自動車メーカーの海外工場からの受注が続き、南アフリカの日産、ニュージーランドのマツダ、同ダイハツ、スバル、ニュージーランド・フォード、西ドイツのダイムラー・ベンツと広がっていった。さらに厳しいコスト政策に対応するため、海

⁽⁷⁾ 拙稿「京都伝統産業の製品開発に関する一考察」『東海学園大学研究紀要』第4号(1999)より加筆・修正している。

⁽⁸⁾ 『川島織物創業145年から163年までの歴史』株式会社川島織物セルコン(2007)

外のシートメーカーとの提携がスタートした。

1983年、かねてから接触があった台湾の自動車シート地メーカーで、モケット機25台余を保有する「福基絨毯織造股有限公司」と技術提携を結ぶことになった。続いて1986年、米国ミリケン社と自動車内装用織物の業務提携を締結した。この提携を歓迎したのが日本の通産省であった。翌年、メルボルンに現地法人「カワシマ・オーストラリア」を設立、1988年にはオークランドに「カワシマテキスタイル（ニュージーランド）」が発足し、グローバル化のうねりが1990年代に向かって着々とその体制を整えるのであった。

中国における自動車シート地の生産拠点を確保し、高品質を確保するには糸染および後加工工場の自営が必要と判断し、1986年、台湾・基隆市に本社を置く、「福基織造股有限公司」へ資本参加して設備投資資金の調達と経営指導を強化、川島織物の関連会社とした。

川島織物の強力な技術指導や財務面での支援と、台湾における自動車業界の成長があいまって、福基織造股有限公司は、川島織物の資本参加から9年間で売上高は約6倍にまで伸長した。中でも自動車シート地の売上高は19倍となり、業界No.1のシェア（約60%）を獲得した。売上高の向上や経営合理化努力によって収益力も高まり、1990年に1,300万元（4,600万円）だった経常利益は1994年には2,500万元（8,900万円）となり、毎年コンスタントな利益計上が可能となった。その後、中国本土での生産拠点として1991年に青島福華紡織有限公司を設立し、規模を拡大した。

さらに、1994年に青島福華紡織有限公司に福基織造股有限公司ならびに日本商社との3社で資本参加し、長春に長春福基装飾材料有限公司を、翌年には上海に上海福海龍織物有限公司を設立し、3拠点で自動車事業を展開、さらに、1995年には上海・青島・長春の合弁事業を統括管理するため、上海に駐在員事務所を開設。これらの取り組みが、その後の上海への独資工場設立の足掛かりとなった。

自動車産業では世界最適生産、世界最適調達の流れが一段と加速してきた。川島の自動車ファブリックは、国内ではトップシェアを誇っていたが、一方で、自動車メーカーの国内生産から海外生産へ大きくシフトしていた動きに対しては、十分対応ができていなかった。そこで、自動車事業部では、国内、中国およびフィリピンとの核生産拠点の機能分担を明確化し、役割に応じて生産ラインを見直すなど整備・合理化を進めていくとともに、自動車の巨大マーケットである米国には新規進出を、すでに合弁会社を設立していた中国には、独資で本格進出することを決定した。

2010年6月、川島織物セルコン、トヨタ紡織、トヨタ通商の3社は、輸送機器用の内装材事業の統合による新会社を設立した。更なる競争の激化や、グローバル化の一段の進展が予想される中で、3社それぞれの強みを生かした相互補完や相乗効果を発揮することで、事業競争力を高める。そして、グローバル展開の強化を図り、世界最適生産体制、世界トップレベルを目指すこととなる。⁹⁾

11. おわりに

京都伝統産業のものづくり経営（京都型ビジネス）には、古い時代からの文化的・科学的要素の継承がある。この要素を現代に生かすためには、それなりの努力と工夫が必要である。

京都のビジネスは、欧米で経営学の体系が確立される、はるか以前から存在していた。そして、京都にはアメリカが建国される前から続いている企業も数多い。この事実をどのようにとらえるかは、重要な問いかけである。現在、金融危機により世界を牽引してきたアメリカ経済が一つの終わりの時期を迎えており、この時に日本経営の原点ともいふべき、京都型ビジネスの現在的な意味合いについて考えることには意義があるだろう。

京都企業の分析をする際には、欧米で構築された経営学の手法を使う試みが通常であった。もちろん、この手法を使うことにより、多くが解明されてきたことに疑問の余地はない。しかし、この一方で、欧米で発展した経営学の枠組みからはみ出す部分、あるいは、とらえきれない部分が、京都型ビジネスには存在している点は見逃すわけにはいかないだろう。本稿では、欧米とは異なる価値観をベースにした京都伝統産業の経営術を、歴史的な観点からと、川島織物を事例として浮かび上がらせる試みをした。

本稿を書き進める中で、京都型ビジネスの根底にあるものは何であるか、考察すれば「人に尽きる」ということであった。京都の伝統産業の独創性、ビジネスの継続性、文化を続ける力、これらすべては人が起点になって

⁹⁾ 聴取調査 株式会社川島織物セルコン 織物文化館・史料室（2010年6月29日）

いる。京都ビジネスは「人に始まり、人に尽きる」のである。

この経営における人の要素が軽んじられ、経済のシステムだけが暴走する怖さは、今回の金融危機で露呈したといえよう。ここでは、金融工学を駆使した様々な手法が考案され、これらが人間の手を離れて膨張していった。この結果、経済危機が引き起こされ、世界経済は大きな分岐点に立っている。このような結果から、日本の経営者が金融危機の荒波を超えて、あらたな時代の経営を考えるには、人を起点においた京都型ビジネスから多くの示唆やアイデアを得ることができると考えられる。

*本稿は、「2010 工業経営研究学会国際大会」(2010・8・28 台湾／東海大学)における研究発表の報告内容を基にして、加筆・修正したものである。

<参考/引用文献>

- 村山裕三『京都型ビジネス—独創と継続の経営術』NHKブックス(2008)
- 安岡重明『京都企業家の伝統と革新』同文館(1998)
- 国頭義正『京都商法—勝ち残る会社の秘密—』講談社(1973)
- 稲盛和夫『アメーバ経営—一人一人の社員が主役—』日本経済新聞社(2006)
- 高橋健二『任天堂商法の秘密—いかにして子ども心を掴んだか』祥伝社(1986)
- 川島甚兵衛『川島家と其事業』(1931)
- 『錬技抄 川島織物145年史』株式会社川島織物(1989)
- 『川島織物創業145年から163年までの歴史』株式会社川島織物セルコン(2007)
- 渡邊喜久 共著『創造的中小企業』日刊工業新聞社(1996)
- 渡邊喜久「西陣織物業の活性化問題に関する一考察」『日本経営診断学会年報』(1997)
- 渡邊喜久「西陣織物業の生産システム」『東海学園大学 研究紀要』第2号(1997)
- 渡邊喜久「京都伝統産業の製品開発に関する一考察」同第4号(1999)

心理臨床に「素材」の視点を導入する意義と方法について —女子大学生の症例への ETC 理論からの検討—

市来百合子

平成 22 年 10 月 31 日受理

The Significance of Art Materials and Media in Psychotherapy and Assessment — A case study examined through the Expressive Therapies Continuum —

Yuriko Ichiki

概要

本研究の目的は、「素材」(Materials and Media)の視点を心理臨床に導入する意義と方法について検討するものである。心理臨床場面において用いられる「素材」を内的なイメージを外在化させるための媒体として捉え、素材相互の関係性やそれらの機能について探求する研究はこれまでなされてこなかった。本研究では、米国のアートセラピー領域で引用されることの多い The Expressive Therapies Continuum 理論 (Kagin & Lusebrink 1978) に基づいて、心理臨床場面におけるクライアントと「素材」の相互作用を検討し、クライアントの心理的課題や支援の方向性を見立てるために有用な構成度に関する枠組みを提示した。またパニック障害の女子大生の事例において同様に ETC 理論から「素材」選択や創作様式および内容を検討し、問題解決の様式や内的リソースなどの見立てに役立つ情報を得た。

キーワード：素材 アートセラピー The Expressive Therapies Continuum

This study examines the significance and the methods of applying the perspective of using art materials and media into the field of clinical psychology. There has not been a study inquiring the relationship between the materials or their functions, nor has there been research examining the treatment of the materials used in clinical psychology situations as internal images as a means to externalize them.

This study investigates the interaction between clients and art materials in the theory of Expressive Therapies Continuum (Kagin & Lusebrink, 1978) widely used in art therapy in the United States in clinical situations and provides a explicit framework in understanding clients' coping style and resources. Useful information on the client's ability above were illustrated from examining the art materials and media in the creative process used by a case study of a female university student with Panic Disorder, based on the ETC Theory.

Key word : Materials and Media, The Expressive Therapies Continuum, Art Therapy

1. 問題

心理臨床には、非言語的なコミュニケーションによって、クライアントのイメージや象徴性、創造性の促進から治癒に導くものが多種多様にある。カラダを媒体にしたダンスムーブメント療法や音を媒体とした音楽療法のような芸術療法の下位分類とされるものから、夢分析、誘導イメージ、自由連想、フォーカシング、壺イメージなど様々である。その中で、視覚芸術 (visual art) という括りで考えると、描画療法が大き

な位置を占めている。

描画はセッションに取り入れやすく、心理療法の経過をみたり、描くこと自体が様々な治療要因を持っている上に、描画テストとして標準化された手続きとして施行することも多く、心理臨床の実践として非常に有効な手段となっている。

ではその描画療法では実際には何を道具として用いているのだろうか。描画療法では心理療法と心理テストの機能を明確に分離できるものではないために、描

画テストの主要な道具である鉛筆を媒体として使うことが比較的多いのではないと思われる。もちろん鉛筆以外にも、風景構成法であれば、サインペンやクレヨン、色鉛筆、コラージュでは雑誌の切り抜きとはさみとのり等が用いられている。このように描画という二次元的な媒体が多く使われるのは、治療者、クライアントともなじみがあり、導入が簡便であるということ、そしてそれを準備したり、管理する作業時間がそれ以外のものを準備するより短いということが考えられるであろう。

ここで、二次元だけでなく様々な材料を使うアートセラピーについて考えてみたい。アートセラピーは、現在では各国でアートセラピストと呼ばれる職域があり、それぞれの協会組織も学術的な蓄積も発展途上にあると言える。心理臨床領域で描画を取り入れることとの違いは、アートセラピーでは、「アート(視覚芸術)」の技術や知識を持つセラピストによって、クライアントの非言語的な表現を促進し、その創作過程に係わっていく点である。その専門知識とは、二次元的な画材だけでなく、三次元の造形も含む素材に関することも含まれており、それらがどのような特性を持ち、どのような制作に向いているか、あるいはその耐久性や表現の可能性、扱い方などを知っていて適切に技術的な介入ができることを指すものである。

具体的には、アートセラピーではどのような媒体や材料を用いるのだろうか？2010年に、アートセラピー領域において「素材」(materials and media)に関する、これまでの総括とも言える著書が出版された。著者のアートセラピストであるMoonは、その冒頭に次のように述べている。

広い意味において、「素材」(materials and media)は、意味を生成するための構成要素である。それは、個人的な考え(private ideas)、思考(thoughts)、感情(feeling)概念(concept)と外在化され表現されているところの感覚的な(sensual)形態との仲介をするものである。伝統的な美術の「素材」であろうと、その辺りに落ちている「もの」であろうと、工芸やコンピュータによるグラフィック表現であろうとも、その特徴とは、感覚に基づいた(sensory-based)、有形で(tangible)、書き言葉や話し言葉の言語と同等の価値をもつものである。「素材」は、膨大な種類と数があるが故に、非常に発達した、微妙な綾や知性的なコミュニケーションを生じさせる可能性を秘めていると言える(Moon, 2010. Introduction XV)(筆者邦訳)。

上記の考え方にならい、筆者も本稿の中で、「素材」

を二次元的表現のための道具(鉛筆やクレヨンなどの画材)だけでなく、粘土のような三次元的な「素材」や工芸的な「素材」、また写真やコラージュなどの媒体となるものを使った活動全般に伴う道具として「素材」を定義づけ、本稿では括弧なしの素材と記す。

アートセラピーの成立初期に活躍したUlman(1980, p4)は、“Art is the meeting ground of the inner and outer worlds…”アートにおける作品とは内的世界と外的世界の出会う場所と述べているが、まさに素材とは内的な精神活動を、実体を伴った有形物にするための最も重要な媒体である。音楽やダンスとは違って、手に触れることができる素材を通して心理的イメージを外在化するところにアート(視覚芸術)を用いた心理療法特有の特徴がある。

心理的葛藤や願望などは、素材を通過し、創作過程という格闘の場を経て外界に映し出される。つまり、言葉になる以前の感覚を実態化させる作用を持つ。ギザギザ感やイライラ感が針金アートで表現されたり、攻撃的なエネルギーが粘土を通して解放されていくことは、アートセラピーの中では日常的に見られる事象である。心理療法の一技法であるフォーカシングで言えば、前言語的なフェルトセンスを具現化させる機能を素材は有していると言えるであろう。

Moon(2010)は、その著の中で、素材がアートセラピーの中核をなす役割であるにも関わらず、その研究がされてこなかったと述べている。日本では心理療法の中で用いられた素材として、3次元の粘土を用いた研究が最も多く(上瀧, 1994, 内藤, 2000, 白石 1998, 2000)、その他フィンガーペインティングや切り絵など(川上, 1997, 瀬瀬, 2008)個々の素材を使った技法やその機能についての論文は散見されるものの、素材相互の関連、あるいはアセスメントにおけるそれについて心理学的な視点からの探求はほとんどなされてこなかったと言える。

そこで本稿では、まずMoon(2010)によって、アートセラピーの素材に関する考え方の中で最も引用されている(the most commonly cited framework)と評されているExpressive Therapies Continuum(以下ETC)理論について次の3点から検討する。1)4つの段階での素材との相互作用 2)素材の構成度(structure)を示したスペクトラム 3)素材を規定する変数(Media Dimension Variables(以下MDV))。

さらに、筆者の考えるところのアートを用いる臨床場面に重要な3要素である、素材・色数・課題(内容)のスペクトラムについて論じ、クライアント理解のために応用しやすい枠組みを提示する。

本研究で言う心理臨床で素材を扱う場面とは、心理

療法とアセスメントの双方を含んでいる。心理療法場面では、介入として素材をどう提供するかという視点とそれに対してクライアントがどのように反応するかを検討する。

一方アセスメントでは、クライアント理解を深化させるために、取り決められた素材の特性とそれによって引き出される心理的反応を理解し、他の素材との比較から再考することである。

最後に、筆者の担当した自験例において上記のETC理論に基づいた視点で検討する。

II. Expressive Therapy Continuum (4つの表象レベルと素材の構成度を示すスペクトラム) について

Moon (2010) は、素材に関する理論を1) 発達の理論 2) 精神力動的理論 3) システム理論4) 関係性理論 (Relational theory) の4つに分け、それぞれについて論じているが、システム理論の中で最も洗練された理論として紹介しているのが、ETC理論である。

このETC理論は、もとはKagin & Lusebrink (1978) によって提唱され、後にLusebrink (1990, 1992, 2004) によって詳述されていったもので、芸術療法一般 (Expressive therapies) における表象様式を発達的な順序性を仮定し、4つの段階に分類し論じたものである。Kagin & Lusebrinkの1978年の論文においては、特に視覚芸術を使うアートセラピーの中での素材との相互作用や設定についてその4つの段階を詳しく述べ

ており、それを邦訳し、整理したものが次の表1である。

これは、発達心理学者のJ. Burner (1966) の認知発達の順序性を理論化した3つの表象の様式、1. 行動表象 (enactive), 2. 映像表象 (iconic), 3. 記号表象 (symbolic) の理論に依拠したものであり、それぞれの段階はETCのはじめの3つのレベルに相当している。最後の創造的レベルは、表現様式としてはそれぞれのレベルの統合であり、没頭しながらも修練や計算をしつづいた自己実現として最高レベルのアート活動と位置づけている。

KaginとLusebrink (1978) は、全段階において、素材との相互作用をより明確に示すための「素材を規定する変数」(MDV) を提示したが、その中の一つが、素材の物理的特性についてのスペクトラムの考え方であり、この部分を指してMoonは、「最も引用されている枠組み (the most commonly cited framework)」と呼んでいる。

これは、いわば素材の構成度 (structure) を示すものであり、一方の極を抵抗性 (resistive)、もう一方の極を流動性 (fluid) で表す一軸のスペクトラムである (図1, 2)。Moonの説明によると、まず抵抗性 (resistive) のある素材は、作品に境界線や構成をもたらし、それを使いこなすのに修練を要する。また認知的処理 (cognitive process) や自我構成力 (ego-organizing capabilities) を支援する働きがある。一方流動的 (fluid) な素材は、グチャグチャした感覚

表1. Expressive Therapies Continuum (ETC) 理論について

筆者による邦訳及び要約

<p>1) Kinesthetic/Sensory level (運動・感覚レベル)</p> <p>この段階では、素材を通してからだを動かすことによる心理的エネルギーの解放がもたらされる。ここではその素材の材質や課題の様式によって行動の方向性が決まる。素材の体験とは視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚に基づいている。このレベルに特徴的なhealing的な要素とは、混沌とした心的状態に素材から自然に引き出された運動によって個人の中にリズムが生まれることである。例) フィンガーペインティング、粘土を投げる、大きな紙にスクリブルをする。その活動への没頭は最大で、Reflective distanceは最小限にとどめられる。</p> <p>2) Perceptual/Affective level (知覚・感情レベル)</p> <p>形態を見てとる段階であり、複雑で混沌とした創作活動やその作品から図地の関係、すなわち‘よい’ゲシュタルトを発見する。形が見えることで情緒的な反応も生まれ、それに命名する段階である。知覚レベルの極所においては、情緒的な重要性や何かの内容というよりも、形態を作りだす体験であり、感情レベルの極所においては、感情の表出と解放がある。例) 気持ちを表すペインティング、粘土で自由に形をつくる。</p> <p>3) Cognitive/Symbolic level (認知的・シンボルレベル)</p> <p>形態を見るだけでなく、抽象的な考え、あるいはそこにはないものでも記憶をたどり、思考に結びついて情報処理が行われる。認知的なレベルでは、論理的な分析、問題解決、現実志向的な情報処理が行われ、シンボルのレベルでは、より直感的な概念形成、メタファー、内的 (inner) で自己関与的 (self-related) な情報処理が行われる。鉛筆やコンピュータグラフィック、創作過程がはっきりしているようなタイプの素材は認知的な操作が優勢となる。認知的レベルの場合、計画性をともなわないといけないので、Reflective distanceは最大となる。</p> <p>4) Creative level (創造的レベル)</p> <p>他の3レベルとの接点になるもので、それぞれのレベルを統合した段階である。自己実現をもたらす段階で、内的体験を素材との十分な相互作用を経て外在化させる過程である。その素材の特性をよく理解し、実現化するレベルである。Reflective distanceはその時どきで、没頭から計算までを自由に行き来する。</p>
--

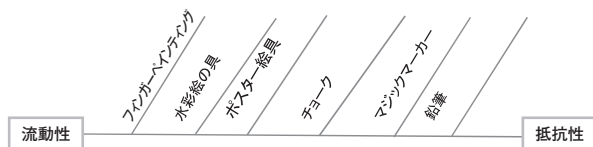


図1. 2次元の素材のスペクトラム Lusebrink (1990)

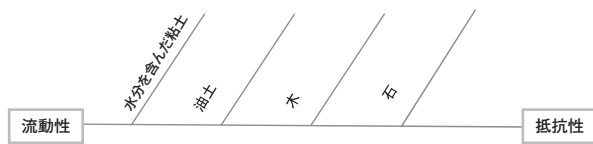


図2. 3次元の素材のスペクトラム Lusebrink (1990)

(messier)で楽しい探索感覚を引き起こすものであり、感情表現やリビドー的な心性を引き出しやすいとしている。

実際筆者は、米国の臨床経験の中でアートセラピストたちが、この考え方を暗黙知として心にとめながら、クライアントをスムーズに自己表現に導入していくところを観察してきた。つまり、このスペクトラムを念頭に、一方は非統制的で退行的な画材、もう一方は統制的で構成度の高い素材と位置づけ、自分たちが提供する素材はその両者の間の連続体の中でどのあたりなのかと考える姿勢が臨床場面において有用なのであろう。日本の心理臨床場面においても、例えば、急性期の統合失調症の患者に左よりのフィンガーペインティングを使うことやイライラしている子どもに鉛筆で細密画を模写させる課題を与えることに違和感を感じる臨床的なセンスはここから来るものであり、確かに素材をこのように直線上のどこにあるのかを押さえることは、クライアントと素材の相互作用を理解するのに役に立つと考えられる。

III. 素材に関する多軸的な理解の必要性

—MDV (素材を規定する変数) の導入—

しかしながら、素材をこのように一直線に定位するだけでは、素材にまつわる活動や作業全体を正しくは理解できない。Kagin & Lusebrink (1978) は、それ以外の「素材を規定する変数(筆者訳)」(Media Dimension Variables)を示しているが、Moon (2010) は、それらを次のように概説している。まず、1) 課題の複雑性(task-complexity)は、その課題を遂行するために必要な身体的、精神的作業工程の多少を指す。2) 作品との距離感(reflective distance)とは、作者が創作中に、素材と相互作用しながら、どの程度作品と距離を保って創作していくかということである。3) 素材へのアクセスが直接的か間接的かどうか(mediated or non-mediated)は、素材と作者の間で道

具を使うか否かである。そして4) その素材固有の特性(その量がどのくらいか、あるいは境界のはっきりした素材かどうか)についての変数である。

例えば、同じ絵具でも流体(fluid)かどうか、すなわち水分が多いかどうかによって直線上を移動するわけだが、それだけでなく、活動に用いる量にも依る(上記の(4)に該当)。また指を使えば、フィンガーペインティングとなり((3)のnon-mediatedに該当)、左の退行的な活動となるが(運動K/感覚Sレベル)、それを筆で使えば、間接(mediated material)的な素材へと変わり、「作品との距離感」(reflective distance)は増し、軸上は右寄りとなろう。そこに形体を見つけて完結していく行為は、知覚(P)レベルにあると言えるが、それが油絵具であれば、ペトロールなどの画用液の調合によって乾き具合と時間の算段も必要となり、高度な認知(C)レベルの活動となる(上記(2)が増す)。

このように素材について考える際に、素材のスペクトラムはMDVの一つとして概ねの特性をセラピストに示してくれるものの、その使い方や設定などにより活動全体のクライアントに与える影響は異なり、多次元的に考えることが必要である。

Moon (2010)の表現によると、これらのMDVを総合的に判断して、その素材を用いた活動が、認知的な枠組みを色濃く示している活動(cognitive-based structure experience)なのか、あるいは、即興的で(spontaneous)で感情が動かされる(emotive)ような活動なのかを考える必要があるとする。

IV. 治療者の介入とクライアントの反応における3要素のスペクトラム

では実際の臨床場面では、どのような素材をどのように提供するべきなのかと考えた場合に、心に留め置くべき点は何であろうか？

次の表2, 3は、1995年に関と市来らが、日本描画療法・描画テスト学会でワークショップを行った際に、上記のLusebrinkのスペクトラムを再検討し、二つの方向性(単純な—高度な)を組み入れて、具体的な素材を種類別に定位したものである(関、内藤、山下(市来)1995)。

ここで言う高度な素材とは、芸術的に高度な作品を生み出すという意味ではなく、それを扱うための経験や習得が前提となってくることを意味する。単純な素材ほど直接的な感情表現に向いており、「高度な素材」ほど認知的な操作(計画性)とコントロールが要求される。

この二極は、前述のMDVの条件を包括したもので

あり、臨床的な使用に役立つことを優先して考案した。高度な素材であればあるほど、作品と素材の距離感(reflective distance)は増え、道具を用い(mediated)、作業は複雑になり得て、(task complexity)、単純な素材はその逆である。

このような具体的な素材のスペクトラムを心に留置くことがまずは必要であろうが、同時に素材の概念を実際の活動につなげるためには、次の「色数」と「創作の課題(内容)」の視点もふまえておかなければならないと筆者は考える。

図3は、その3方向から活動全体の構成度について把握するためのものである。円の内側にいくほど、課題の構成度やクライアント(cl)自身の統制性が高まり、外側に行くほど自由度が高くなり解放的なエネルギーを誘発すると考える。

色数のもつ影響は、本稿では述べていないが、素材自体が色の要素を有していることを考えると、不可欠な要素である。構成度から言うと、単色を提供する方が構成度が高く、色数が増えるほど自由度が高くなると思われる。またもう一つ、素材が創作過程の中で関係を持つ要素は、「創作の課題(内容)」である(市来2009)。アセスメントでは、例えば樹木画は課題画

であるために、自由画よりも構成度が高いと考えられる。どの描画テストや課題がより構成度が高いかは、他稿に譲るとして、課題内容は実際の臨床場面を支える重要な条件の一つである。

例えば、樹木画は描く内容が決まっています鉛筆という単色で描くために課題としては、円の内側、つまり構成度の高いものである。一方、The Diagnostic Drawing Seriesという描画法の1枚目は、12色のソフトパステルで描く自由画であり、枠組みとしては自由度の高い構成度の低い課題を提供していることになる。同じ描画アセスメントでも、クライアントに提供する検査や課題の構成度は異なるのである。

またこの図3を見ていくと、クライアントに提供された活動や介入(円の中心に行く矢印)に対して、クライアントからの反応として内から外への矢印があることに気づくであろう。すなわちセラピスト(以下Th)が3方向から介入し、場면을構成するのに対して、クライアントがそれぞれの要素に対してどの程度の構成度で応え返すかをみるのが重要なのである。

例えば、色数で言えば、多色を提供されても1色しか選ばないクライアントは自己統制的あるいは、精神的エネルギーが低い、または情動にまき込まれるのを回避している状態にあるのではないかと推察される。また自由画を課されたクライアントが具象画で描くのと抽象画で描くのとではクライアントの統制機能の違いによると仮定することもできる。

素材でも、退行的とされる素材をどのように扱い、それに反応するかでクライアントの状態を仮定することができるのである。これらのことについて次に市来(2005、2009)の研究の結果から論じていきたい。

表2. 素材のもつ2つの方向性(関ら、1995)

単純な素材	高度な素材
非統制性的	統制的(技法的)
退行的	計算的
触覚的	視覚的
直接的	間接的
投影的	構成的
柔らかい(流体)	硬い(個体)
荒い	細かい
太い	細い

表3. 素材のスペクトラム(関ら、1995)

紙のサイズ	単純な素材		高度な素材		
	大	中	中	小	小
固形描画材料	クレパス	クレヨン	パステル	色鉛筆	鉛筆
液状描画材料	マーカー(太)		マーカー(細)		ペン
筆	太筆		中筆		細筆
絵の具	フィンガーペイント	ポスターカラー	不透明水彩	油絵	透明水彩
木	積み木		ウッドチップス		木彫り
粘土	プレイドウ	紙粘土		油土	陶土
pre-artとしての行為、たたく、塗りたくる、積む、押し付ける、手による直接的表現。修正が可能			技術的に洗練された行為。筆やカッターなどを用いた間接的表現。一般に修正が難しい		

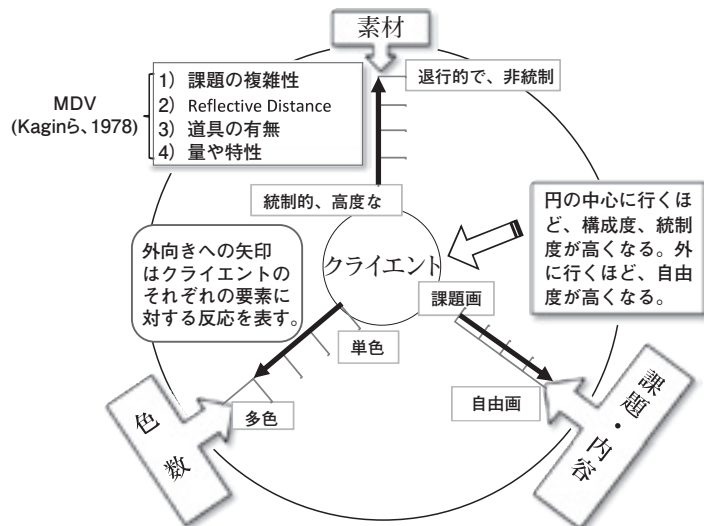


図3. アートを用いた臨床場面の3要素

V. スペクトラムから考えられるクライアント理解

市来、金井、内藤 (2005) と市来 (2009) は、素材の違いが描画テストに与える影響を調べるために、対極にあると思われるソフトパステルと色鉛筆による The Diagnostic Drawing Series という描画検査の創作過程の比較研究を行った。この場合は、アセスメント場面に限定しているので、上記に照らすと色数や課題が同じように与えられた場面における素材の違いということになる。

その結果、概ね二極性の素材の特徴がそれぞれの創作過程の中に見られた。つまりソフトパステルでは、触覚を刺激し、遊びの感覚が生まれて前言語的な感覚が表現された。一方で鉛筆では写実性や距離感が意識され細かく描きこまれた。しかし、それ以外にも素材から本来引き出された特性と異なる使い方を創作過程が認められた。

例えば、鉛筆は統制的な素材とされているにも関わらず、ある被験者はシャッシャッと快音をたてて陶酔的に塗りこみ、その様はむしろ自己を解放させるような塗り方であった。一方、違う被験者はソフトパステルの特有の粉っぽさに不快感を示し、パステルの端をもって角を鉛筆のようにして描いた。

統制的な素材を使う時の難しさは、遠近感などの細かい描写や計画性を要求されることであり、反対に退行的な素材を扱う時のそれは、没頭しすぎて感情表現が進みすぎる恐れであろう。それらに対して素材の使い方を変えて、作品との距離 (reflective distance) をとり、その困難に対処したり、また、反対に距離を縮めて自己の表現のニーズを満たそうとする行為は、各人のスタイルであり、また逆に言えばそれがリソース

でもある。臨床場面の枠組みが、素材、色数、創作の課題 (内容) においてどのような構成になっているか、そしてそこでクライアントが素材とどのように相互作用しているかを理解することで、上記のような有用な情報を得ることが出来るのである。

更にこの点について、筆者の自験例を通して、素材との相互作用の視点から治療過程について考察する。

VI. 症例からの検討

24歳女子大学生Aとの学生相談のケースである。訴えは「外出時緊張して不安。一人で学校に行けない」というもので、相談日には保護者同伴で大学に登校し、後に、パニック障害の診断がついた。高校のとき通学途中の電車の中で、めまい、死の恐怖を感じて以来、高校は一時不登校となる。大学入学時は下宿をしていたが、数ヶ月で症状が悪化し、母と一緒にいないと不安なため同居するようになった。体の訴えが多く、のぼせ、冷汗、現実でないような感覚がある。そうなり始めてから痩せ始め、前任のセラピストから婦人科を薦められて治療を行っている。初回、自分の性格については「気分にもうらがある」「人の機嫌をとる」「押さえ込むほう」「他人と喧嘩せず顔色をみる」と述べている。

心理検査：TEG AC (↑)、CP (↑) YG : B' 型
PFstudy GCR=50 % 欲求不満に対して自分から積極的に問題解決を図ろうとするが、無罰反応が低く他責固執傾向がやや高い。

このAとは、1年半 (全32回) に渡り、1回1時間、月2~3回程度、「学校に一人で来れること。不安が今よりも減少すること」を目標に面接を行った。筆者の使う面接室には、アートの材料の乗ったワゴンがあり、自由に使うことができていた。面接

の構造について話し合った際に、カウンセリングとしてしゃべりたければそれでも構わないが、他の方法としてここにある材料で絵を描いたり作ったりしながら自分の気持ちを明確にする方法があることを提案し、Aはそれに同意した。結果的には、約2/3のセッションで何らかの創作を行った。

Aは、最初ワゴンの素材を見ながら、小さい時から手芸や工芸が好きだったし、いろいろ作ってみたいと述べたので、基本的に素材の選択はクライアントに任せ、テーマや技術が必要な場合は援助した。面接は、初めに近況や気になることを聞き、その後はアートをやるかどうか本人が選択して、作った場合は最後にそれを一緒に眺めて言語化を促した。

ここでは、紙面の関係で治療過程全般については述べず、クライアントの選択した素材や創作過程から理解できること、またそれと治療過程との関連に限定して検討を行う。

1. ETC理論からの症例の理解 その1

Aが自ら選択した素材は、ETC理論で言えば比較的右側よりのもの、すなわち統制的で構成度の高いタイプの素材が多かった。例えば、ウッドチップスを積んでくっつける、綿棒に色をつけて束ねる、ストロー状の発砲スチロールに色紙を巻いたものを切って何かをつくる等である。これらはいわば、小さな固形物であり、それを接続して何かをつくる「工作」的な活動でもある。ETC理論から考えると、その創作様式の多くは、知覚(P)レベルを基本としており、選んだ素材をつなげたり、遊んだりしているうちに、形体が浮かんできてそれを表現するというスタイルである。

彼女の活動の特徴の一つは、様々な素材に抵抗なく手をつけるが、一つ一つの創作にあまり入れ込むことなく、短時間でさっさと作りあげるやり方である。本人も「時間が気になって、のりとか使えないタイプ。グルーガンはすぐに接着できて便利。セロテープで思ったところをパツパツとくっつけたい」と述べているように、素材やテーマに時間をかけて没頭するという様子ではなく、浮かんだイメージを即席で仕上げたい様子で、欲求不満耐性に関する課題が推察された。

ThはAの発想の自由さに心を動かされる一方で、作り方においてコントロールの強いAの防衛をそのまま受けとめるようにした。

また、作品の内容の解釈ではなく、創作過程を丁寧に言語化する中で、何が不満か、困難を感じたか、どうしたいか、またどのようにすでに乗り越えているかなどについてクライアントのリソースを探するような視点を心がけた。

創作のスタイルについては、何度か話題に上り、自

分の中のコントロール性についても「先が見えないと不安なので」と話したので、Thは「それも大事なことよね」と返した。と同時に、次の段階、すなわち防衛を解き、感情レベルの表現に近づくことがクライアントの課題であると思われたので、左よりの素材や課題を、折をみて薦めた。Aは、それほど抵抗なくThのわずかな促しで、フィンガーペインティングや大きな紙にハケで塗る、模造紙上のボディトレースなどの活動に挑戦していった。その様子は非常に慎重で、緊張がほぐれず、また少しの量の素材しか手にしなかった。フィンガーペインティングでは、本人もそれに気づき、「何かまだ足りない」とセッションを振り返った。また違う回には最後の振り返りで、「今日はスカッとしたい」という訴えから始めた大きな紙へのハケによる色塗りなのに、「そこに入りきれない自分がいて、いつも躊躇してしまう自分がいる」と述べ、自分の中のテーマに気づいた様子であった。また、ボディトレースの次の回に欠席したことについて指摘すると、「何か切れそうで切れない感じ、出したくても出し切れない何か。」「してもらえるとと思うと、ダメになる。」テーマが思い起こされ、「エネルギーの出し入れの下手さ」があることについて少しずつ洞察していけるようになっていった。ハケで塗るセッションの後、外出が可能になったので、「Thのすすめによって感情の解放にチャレンジし、カラダを使った自己表現が少しでも可能になったことで外出できるようになったのかもしれない」とThはリフレーミングした。これらの体験とふりかえりが奏功したのか、治療過程の後半では日常場面でも少し飛び込んでやってみることや、思い切っておしゃれすること等の変化へとつながり、大学に一人で登校することが可能になっていった。

Aが選んだ素材や創作過程を、ETC理論の枠組みで見ると、彼女がどこで留まり、その困難をどのように克服しようとしていたのかということを理解することができた。Aは、心身面でのエネルギーの変動が激しく、体調の波に振り回されることが多かった。いつも何らかの無力感を抱えながら、作るものはコントロールできる範囲のものであり、じっくりした創作に集中することは困難で、最終的に簡単な手続きを選ぶことが多かった。しかしそのように作品と距離をとること(reflective distance)はある意味で、自分を守るためのコーピングでもあり、その自分のコントロール性に気づきながらも、それをきちんと言語化できずにいた。それをThが言葉にしながら受容していったことで、Aはそれを確認し受け入れて、次の現実の行動変容へのきっかけとなったと思われる。更に、Thの奨めを受け入れてリスクを負い、感情の解放をもた

らす活動にも参加したことは、もうひとつのリソースでもある。その点をセラピー中に返し続けたところが、変容のきっかけになったのではないかと思われた。

またAの場合は、感情の解放を求めつつも、実施には作品との距離 (reflective distance) のとれる構成度の高い素材を使った安全感の中にいたからこそ、必要なイメージは内容的に解き放たれていったのではないかと思われた。その必要なイメージとは何であったかについて次に述べる。

2. ETC理論からの症例の理解—その2—

Aがスペクトラムの右寄りの素材を使って手短かに創作を済ませると述べたが、だからと言って、彼女がいわゆる「いい加減に」あるいは「自分の意識上にある作りたいものだけ」を作っているのではないことは、「ここに来ると意外なものを作ってしまう自分でも驚く事が多い」と述べたことからわかる。

ここで注目に値するのは、Aがそのような右側よりの素材を使い、統制的な表現様式で創作しながらも、非常に未分化で感情の揺さぶられる表現を結果的に体験していくところにある。ある時は、それが次の回にまで影響を与え、ある時には自分のテーマへの気づきをもたらすきっかけとなるものであった。Aのこれらの創作は、たいてい直感的に作られ、それが何か言語化できないような類のものであり、ETCの4段階で言うところのシンボリック (S) レベルでの表象様式であると思われた。

例えば、全過程の中でウッドチップスを積み木のように積んでグルーガンでくっつける作業を2回のセッションで行ったが、1度目は、ウッドチップスを階段状に作り、その上に丸いチップスをのせた (図2)。その時には、それが何かよくわからないが形が好き、と述べるに終わったが、その次の回には、フラフラで現れ、飼っていた雌のペットが前回その作品を作った日に、死んでとてもショックで今までにないほど泣き崩

れてしまったと述べた。今考えると作品は天国の階段へ向かうペットの魂だったのかもしれないこと、しかし次の日にはケロっとして気持ちも動かず、母と一緒に公園に埋めたこと、メスは発情するとくさいなどが語られた。Thには、Aが妙にメスのペットが死んでも大丈夫であるということを強調しているように思え、また発情にまつわるセクシャルな描写などが彼女らしくないと感じた。Thは、当時妊娠しており、それまでも何度かAから女性性にまつわる挑戦的ともいえるメッセージを受けとめていた。彼女自身が自分の女性性をどのように受容するかというテーマを抱えており、複雑な心境の中、メスのペットが死に、それを母と一緒に葬り、発情したメスはくさいという内容の発言に様々な伏線が潜んでいるのではないかと感じられた。つまり、素材や活動の仕方は統制的であったが、そこにまつわるテーマは非常に深遠で無意識的な内容が含まれていたのである。

またウッドチップスの2回目は、症状が消え突然学校に行け出す時期のものである。テーマは「学校」(図3)で、当時、新しい医師とのカウンセリングが始まり、その話をしながら手を動かし、これもまた短時間で作り上げた。「学校」の前にいる怒った顔は、学校に入れなくしている自分の中の患者であるとしながらも、自分にとってサポートしてくれる人々もまた学校に存在すると述べた。これまでの不登校経験を考えると、彼女が「学校」を創作することがいかに難しく、そのテーマがどれだけ重いかを推し量る事ができる。しかし、この作品を契機に彼女の不登校に関する症状は一挙に解消し、大学に何とか一人で行けるようになったのである。

また、もう一つの創作過程は、綿棒の両先に赤色を塗ったものを持参して、その続きをやりたいと持ってきた時のことである。数本の綿棒の真ん中をゴムでくっつけて「花火」に見立て、それを箱の中に入れてセロテープではり、箱の内側を夜空の黒に塗った。この「暗



図2. テーマ：昇天

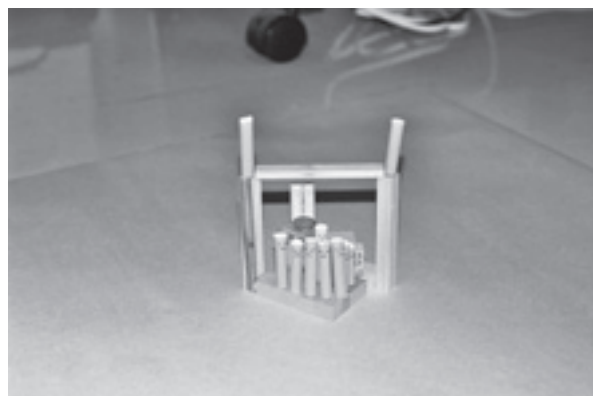


図3. テーマ：学校

闇の中の小爆発」は、怒りのテーマを抱えていた彼女の頼りなげな攻撃性を象徴する作品となる。同じように、秘めた攻撃性を表現したものとして、初回の時につくったワニ（自己像）がある。ストロー状の発泡スチロールを色紙で巻いたものを切り貼りして作られたワニには、その凶暴であるべき「歯」がうまくくっつかず、Thとともにいろいろな接着剤でその「歯」を何とかくっつけることを援助した。それに象徴されるAの力のない怒りのテーマがそれ以来、何度となく形を変えて現れるのである。

これらはすべて、スペクトラム上の右側よりの統制的な素材で、しかも構成度の高い簡単な工作であるにも関わらず、Aの治療過程では重要な節目となる創作であり、その背景には深遠なイメージと無意識の深い感情が投影されていた。

もちろん、それらの作品を作った時にそれにまつわる感情をすぐに明確化したり、解釈したりするわけではなく、むしろAもThも作品を前に言葉少なに語るが多かった。結果的には、Aは、右側の統制的な素材を使いつつ表現するというその防衛や問題解決の処理を受け入れられることで、安全な創作が可能となり、背景にある未分化な感情が無意識のうちに投影されていたのではないかと考える。つまり逆説的には、Aが必要な感情を表現するために、右側の統制的な素材を無意識に選択したと解することもできるのかもしれない。

Lusebrink (1992) は、素材選択と介入について、興味深い例を挙げて説明している。それは、アートセラピーにおいてK-F-D（動的家族画）を描かせる場合、クライアントは認知（C）レベルで家族のメンバーそれぞれにもつ複雑なイメージを表出していくのだが、と同時に家族のメンバーそれぞれに対する感情的な葛藤や思いにも対峙し処理しなければならない。鉛筆はその特性として、境界線を作っていくものであり、日常なじみがあり、感情を引き出さないタイプの素材であり、そうであるが故にK-F-Dという複雑な課題をこなし得る道具にもなっている。しかし、もしそれでも感情が揺さぶられるようであれば、鉛筆で描かずもっと構成的な素材、すなわち色紙を抽象的な形に切り抜いたもので表現するよう要請するほうがよいかもしれないと述べている。そのほうが、情緒的な混乱を避けつつ、家族と向き合いながら表現することが容易くなる可能性があり、この課題から距離をとる（reflective distance）ことが可能になるかもしれないとしているのである。

Aの場合は、自ら「作品との距離感」（reflective distance）を作動させ、内的なイメージをシンボル化させ

て表現するに至ったことが推察される。

VII. 終わりに

本研究ではアートを用いた心理臨床場面で提供される素材のスペクトラム上の位置や創作過程における「素材を規定する変数（MDV）」、そしてそれらの表象様式のレベルをETC理論に基づいて検討することによって、問題解決のスタイルやリソース、そして課題などを理解できることを検討してきた。

素材との相互作用に視点を向けることによって現状の把握や心理的課題等の見立てが可能になり、それによって治療方針や目標を設定し、その時々クライアントの状態に合わせて柔軟に介入を変更していけるのではないかと考えられた。

今後はそのために素材の違いによる表現行動や表出物の比較研究、そしてそれを臨床に適用しやすい方法に関する研究が望まれるところである。

謝辞：この研究を行うにあたり、様々なご助言を受けた金井菜穂子氏（市立奈良病院）、内藤あかね氏（甲南大学）とご指導を受けた高橋依子教授（甲子園大学）に対し、心から謝意を表します。

VIII. 参考文献

- Bruner, J.S. 田浦武雄&水越敏行訳 教授理論の建設 黎明書房 1983.
- 市来百合子・内藤あかね・金井菜穂子 画材のちがいによる描画表現と過程一質的研究法による探求— 日本心理臨床学会 第24回大会 発表論文集 ポスター発表 392, 2005.
- 市来百合子 描画検査場面における画材の違いによる創作過程の変化 甲子園大学紀要 第37号 153-160, 2009.
- Kagin, S. L., & Lusebrink, V. B. The Expressive Therapies Continuum. *Art Psychotherapy*. 5 (4), 171-179, 1978.
- 川上智似子 精神分裂病へのFinger-Paintingを用いたアプローチについて 臨床描画研究XII 139-166, 1997.
- 織瀬千晶 切り絵制作を通して自己表現を可能にした不登校女子との面接過程 臨床描画研究 Vol23. 212-227. 2008.
- 上瀧新子 「閉ざされた身体感覚」を訴える女性との合同粘土制作 日本芸術療法学会誌 Vol25, No.1 1994.
- Lusebrink, V. B. *Imagery and visual expression in therapy*. New York: Plenum Press. 1990.
- Lusebrink, V.B. A system oriented approach to the expressive therapies: The expressive therapies continuum. *Arts in Psychotherapy*, 18 (5), 395-403, 1992.
- Lusebrink, V. B. Art therapy and the Brain: An Attempt to understand the Underlying Process of Art Expression in Therapy. *Art Therapy: Journal of the American Art Therapy*

- Association, 21 (3), 125-135, 2004.
- Moon, C, H. Materials and Media in Art Therapy. Taylor and Francis Group, New York, 2010.
- 内藤あかね 粘土と心理療法 甲南大学学生相談室紀要 第8号 53-72 2000.
- 関則雄・内藤あかね・山下(市来)ゆりこ アートセラピーにおける「素材」の意味-学会でのワークショップの経験から- 臨床描画研究X 141-150, 1995.
- 白石潔 粘土二分法(1) 臨床描画研究 XIII 186-195, 1998.
- 白石潔 粘土二分法(2) 臨床描画研究 XV 138-169, 2000.
- Ulman, E. Art therapy viewpoints. New York : Schocken Books. 1980.

就職支援に向けたeポートフォリオの活用について

梶木 克則

平成22年10月29日受理

Practical use of the e-Portfolio system to the career support

Yoshinori Kajiki

eラーニングによる個別学習の次の段階として注目されているのが、eポートフォリオである。学習を含めたいろいろな成果物を蓄積し、それらを見せられる形にして、自分のキャリアとして就職に生かせるようにする点が今後評価されると考えられている。これまでそうした成果物を就職の際に評価するといったことが一般的ではなかったが、今後蓄積された成果を見せられるように用意しておき、うまく見せることで就職の自己PRに生かせ、就職後もキャリア形成につながっていくと期待されている。eポートフォリオとは、学習の結果、得た情報、身につけた能力、経験などを、デジタル形式のデータとして蓄積し、加工し、成果物とすることができるツールである。そうした基本の機能に、目標設定や公開・討論などの機能を合わせることで、よりよい就職を目指してのキャリア形成につながるツールになる。本論文では、eポートフォリオ(e-Portfolio:ePF)のコンセプトと特徴について述べ、就職支援に向けて本学に導入されたePFの使い方の一部について述べる。

キーワード：eポートフォリオ、就職支援、キャリア形成、成果物

1. はじめに

専門教育の場としての大学において、2000年ごろからeラーニングを用いた個別学習が導入され始め、特に教養科目の分野で多く使われ始めている。企業では社内研修の一環や社内教育の省力化のメリットが大きく、確実に実績が上がってきているが、大学のeラーニングについてはそれほど成果が上がってきているとは一概には言えない部分がある。大学の場合、eラーニングに向いている科目とそうでない科目があり、自主的に取り組みやすい内容、たとえば資格に関係するような過去問にできるだけたくさん当たっておくことが求められる場合については、個別に進められる内容であるため、eラーニングの形態にしやすいと言える。一方でeラーニングによる授業形態の多様化が進む中で、就職支援への対応が迫られている。各大学では大学卒業後の就職に向けて、初年時から就職に関係する科目を設け、就職に対する心構えや就職試験対策を始めるようになった。こうした経緯もあり、eラーニングの次の段階として、就職支援に向けてのキャリア形成に役立つeポートフォリオが注目されてきている。

eポートフォリオは、学習の結果や得られた知識や情報を電子媒体で蓄積し、他の人に評価してもらえるように編集し、成果物の公開と討論を通じての改善、目標設定と計画立案、目標達成度のチェックなど、一

連のキャリア形成のサイクルを電子的に支援するツールである。さらに、学習者が自ら行動して知識を獲得するという、学習者の自主的行動や自発性を重視する点に特徴がある。したがって、eラーニングと同様に、学習者の自主的な行動が伴わなければ、学習の成果も蓄積されず、いろいろな成果物を電子媒体として蓄積していくことも困難となり、ポートフォリオとしての基本が成り立たない。そうした意味で、教員が積極的に関わりながら、積極的にeポートフォリオを活用する環境づくりが肝要である。

本論文では、eポートフォリオ(ePF)のコンセプトと特徴について述べ、就職支援に向けて本学に導入されたePFの使い方について述べる。

2. 就職支援

専門教育の場としての大学において、以前は専門分野の教育と研究を教授する機関であったが、しだいに就職のための専門分野を決める猶予期間であったり、就職の前の社会勉強を行う4年間になってきている。そうした意味合いから、各大学では大学卒業後の就職に向けて、初年時から就職に関係する科目を設け、就職に対する心構えや就職試験対策を始めるようになった。

本学でも初年時から就職に向けたカリキュラムが組まれており、来年度からは文部科学省の施策でキャリ

ア科目の必須化が義務付けられている。これまでの取り組みからみて、初年時での就職支援としては、大きな2つの項目として「大学生活」と「自分磨き」を置き、授業の受け方やノートの録り方から、大学というものを知るためのインタビューや先輩から話を聞くまでと、社会人やコミュニケーション能力、目標設定と時間管理までを指導している。来るべき就職活動に向けての心構えなどの準備を整える時期と言える。2年時には、就職準備と就職活動の2項目に分け、就職の意義から自己分析と仕事を見つけるための業種と職種の違いの説明までと、筆記試験や自己PRや模擬面接などの説明までを、外部講師を招いて行っている。就職活動が始まる3年生を前にして、就職に対する意識を高めていく時期である。1年時と2年時の科目名は、それぞれ教養演習Ⅰと教養演習Ⅱとなっており、どちらも半期の科目である。3年時には、11月頃から実際の就職活動が始まる時期であり、通年の科目としてより実際に即した内容になっている。教養演習ⅠとⅡの内容と重複する部分もあるが、企業の選び方から自己分析、SPI対策とエントリーシート書き方までを前期に行い、後期からは就職ナビへの登録から企業の人事担当者に話を聞く、ビジネスマナーや面接対策とグループディスカッションまでが含まれている。就職活動が始まる直前の実践的な講座内容になっている。

このように初年次からきめ細かな就職支援のための授業が用意され、2年次から3年次へと段階的により具体的・実践的な内容に変わりながら進められていく。あとは、エントリーシートや面接の際に問われる自己PRや志望動機やこれまでに学んできたことを語るかどうかである。こうしたことは、対策講座であらかじめ指導を受け、用意している内容であるが、その元になる資格や成果物や経験などがないと、具体的に示すことができないし、説得力に欠けることになる。こうした広い意味での成果物を蓄積し、目に見える形にして、就職活動に生かそうとする取り組みが最近盛んになってきている。これを電子化しようとしているものがeポートフォリオである。

3. eポートフォリオ

ポートフォリオはいろいろな意味を持つ言葉で、使われる分野が違えば扱われる対象もかなり違ったものになる。学校教育について言えば、小学生の時に残したいろいろな学習の成果物を指す。学年が小さい時には、こうした成果を学年終了時に家に持ち帰り親に見せたものである。それが、高校、大学と進むにつれて学習内容と専門性が増し、受験勉強の偏差値や試験の点数だけが意味をなし、成果物として残す習慣がなく

なってしまった。そして就職活動の面接の段階になって、自分の能力や経験や成果を相手にうまく伝える場面で、能力としては資格などを示し、経験はエピソードを交えて話すことで伝わる。しかし、相手に成果を示すことは非常に難しく、言葉で説明するにも見せるものがないと説得力に欠けてしまう。そこで、学習の成果も含めた大学での成果を蓄積し、就職の段階で効果的に見せられるように編集して、用意しておくことができれば最適である。

最近ではいろいろな情報を電子媒体で保存・処理できるようになり、情報の入力と出力のための情報端末も携帯型のものからデスクトップ型のパソコンまで利用できるようになってきた。以前は、いろいろな情報を紙媒体や写真・映像フィルム、音楽テープなど専用の媒体に保存しなければならなかったが、最近ではほとんどの情報をデジタルデータに変えて、パソコンやネットワーク上に保存できるまでになった。こうしたマルチメディアを利用できる環境が整った現在では、ポートフォリオとして蓄積したい情報をほとんど全てデジタルデータに変えて蓄積することが可能になってきたと言える。こうして最近盛んに利用されるようになってきているのがeポートフォリオである。

3.1 ポートフォリオとは

ポートフォリオ (Portfolio) の本来の意味は、「紙挟み」や作品ファイルといった意味の言葉である。また、経済の分野では、一般的には投資や金融などの意味で使われている言葉である。教育の分野では以前から作品を貼り出して見せたり、残す習慣はあったものの、成果物として長く蓄積して将来に生かすという方向性はなかった。それが最近になって、ポートフォリオ学習として、そうしたやり方が盛んに行われるようになってきた。例えば、小学校や中学校での「調べ学習」において、児童や生徒らが自分達で集めた情報や観察ノート、デジカメで撮った写真、メモ、図画・工作などの成果物を集め、整理し、蓄積する、ということが行われてきている。また、社会人教育においても、デジカメで撮った写真を蓄積・整理し、体系化することで新たな発見を得ようとする試みが行われている。特に学習活動や学習の履歴、得られた知識から、有用な情報としての成果物にまとめることを教育ポートフォリオと呼んでいる。

3.2 eポートフォリオとは

これまで一般的に作品や成果物は、紙媒体のままファイリングして保管されてきたが、最近では、デジタルデータとして保存し、加工することが容易にでき

るようになった。また、デジタルデータであれば、整理や加工、編集が簡単にできるという利点がある。従来の専用媒体で蓄積していたものをデジタルデータに変えて、ポートフォリオをより効率的に運用しようとするのが、eポートフォリオである。

教育の分野で、特に大学教育においては、卒業後の就職も視野に入れてeポートフォリオを活用しようと試みられている。そうした長い期間での利用も考え、学習の成果の蓄積だけではなく、より広い経験やスキルの蓄積も含め、段階的な就職支援ができるように改良されてきている。その段階的なプロセス作りとして、目標の設定をまず行い、計画を立て、それに基づいて実践し、結果の評価を行うことが盛り込まれている。さらに、そのプロセスの中で、自分の成果を公開し、コミュニティのメンバーや担当教員に評価してもらったり、情報交換や議論を経て、修正・改善していく仕組みを持っている。

具体的に大学でeポートフォリオを運用する場合には、学生自身がとった講義ノート、文献、論文、メモなどのいろいろな情報を蓄積し、整理・統合化し、見せることができる形にすることが重要である。そのためにも、それに至るプロセス・サイクルを重視しなければならない。先に述べた、目標設定、計画、実践、振り返りというサイクルの中に、自ら得た情報を集め、整理し、再構築することで成果物を得るというプロセスを組み合わせる

本学でも平成22年夏に、神戸情報大学院大学の田村先生のご協力を得て、オープンソースのeポートフォリオを導入することができた。

3.3 ePFの基本的な使い方

本学に導入されたシステムは、eラーニングを構築できるmoodleというシステムとeポートフォリオのために開発されたmaharaとを合体させた構成になっており、いろいろな情報の蓄積だけではなく、学習の記録も効果的に残すことができる。さらにmaharaは、SNSの機能も内蔵しており、いろんな人との意見交換ができる仕組みを持っている。

このePFが目指すところは、いくつかのゴールを設定して、それに向けた長期・中期・短期の計画を立てながら、学習の成果と評価、就職に向けた経歴と取り組みなどを蓄積しながら、どれくらいゴールに近づいているかをチェックし、目標達成を支援することである。この時点ではまだ試験運用中であり、トップ画面のロゴも本学向けにはなっていないが、学生のIDでログインした場合には、図1に示すような画面が表示される。



図1 本学ePFの学生用の画面(試験運用中)

図1の画面にある8個の入り口が、これまでに述べた4つのサイクルに対応しており、より細かいメニューにはその上のボタンから入っていくことができる。このトップの画面はePFのmaharaに当たるものであるが、奥の画面ではeラーニングシステムのmoodleの画面にも切り替わりながら、両方をシームレスに利用することができる。

4. 就職支援に向けたePFの活用

本学に導入されたePFは、就職支援を目指したプロジェクトの一環として導入されたもので、キャリア科目で蓄積された成果物をePFに入力することから始める予定である。

図1の学習目標のボタンからは、図2aに示すマイゴールの画面に入り、ここでパーソナルゴール、アカデミックゴール、キャリアゴールの3つを入力することができ、図2cのようにプロフィールの画面の一部に表示することができる。



図2a マイゴールの入力画面



図 2 b マイレジュメの入力画面



図 3 b マイファイルへの説明とタグ



図 2 c プロフィールの表示

4.1 情報の蓄積

e ポートフォリオの中心となる機能として、情報の蓄積があり、図3のマイファイルの画面からいろいろな情報を保存できる。保存の際にはフォルダを作り階層構造化して分類できる。さらに保存したファイルには、見出しのための説明とタグを付加することができ、タグは検索する際のキーワードになる。図3aに示す画面で、ファイルのアップロードやフォルダの作成などの管理を行う。図3bに示すように、ファイルを保存する際には、名称、説明、タグを入力する。



図 3 a マイファイルの保存

4.2 情報の整理・公開

ポートフォリオは本来、情報の蓄積が主たる目的であるが、集めた情報を整理し、新たな知見を見出すことが重要である。さらには他人からの評価や意見を仰ぐことで、新たな方向性を見出せる。こうした観点から、集めて整理した情報を公開する機能が用意されている。



図 4 a プロフィール全体の表示例

図4aの画面の右下にマイビューという見出しで、学習記録やこれまでに保存した情報を成果として整理し、見やすくレイアウトする。さらにその内容についても、図4bのようにテキストや写真や動画も含めて、見やすくレイアウトすることができる。

見やすくレイアウトした成果物を他の人に評価してもらうために送信することができる。図4cとdに示すように、評価してもらうために誰に送るかを選択し、送信することで通知が届き、その人だけに成果物を見てもらうことができる。



図 4 b 文章と写真と動画による成果の一例

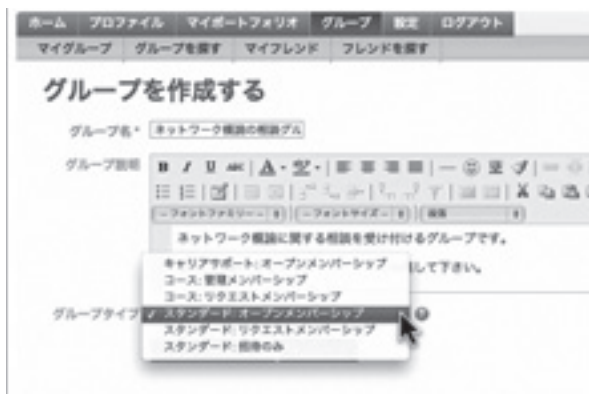


図 5 a グループを作成する画面



図 4 c 評価のための送信方法



図 5 b グループを探す画面



図 4 d 評価のための送信先の選択



図 5 c グループへの参加の画面

4.4 教員からの評価

先の節で述べたように、学生から送信されたレポートを教員が評価しコメントを送り返す。そうしたやり取りを通じて、成果物の内容を改良し、中身のある作品に仕上げているようになっている。

4.3 コミュニティでの討論・振り返り

ePF 独特の機能としてコミュニティへの発信やディスカッションの機能が備わっている、学生と教員とは区別されるが、それらに関係なくグループを作って、討論できる仕組みが整っている。図5aに示すようにグループ名を決めて、メンバー一覧の中からグループに入れたい候補を選び、承諾を得ることでグループを作ることができる。いろいろなグループができ、他のグループに参加したい時には、グループへの参加願いを出して問い合わせる。こうしてコミュニティを形成し、意見交換ができる場を整えていくことができる。



図 6 本学 ePF の教員用の画面 (試験運用)

図6は教員のトップ画面であり、右下の学習活動確認のボタンから入り、図7aのようにレポートを提出している学生の一覧をみて名前を選び、提出されたレポートの内容を確認して、評価をコメントとして返信する。こうした評価を求める操作は、教員に対してだけではなく、グループへ公開して意見を求めることもできる。

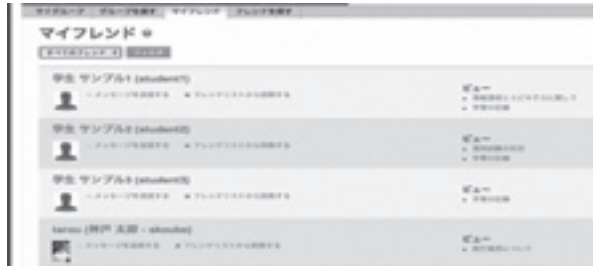


図7a 学習活動確認から学生のリストを表示



図7b 学生のビューからレポートを開く



図7c レポートを見て評価

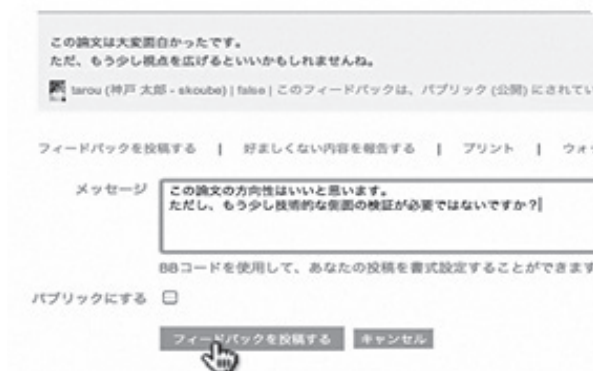


図7d 評価（コメント）を返信する

4.5 その他の機能

最初に説明した4つのサイクルの内の計画については、学生のトップの画面の中に学習計画という入り口があり、履修する科目を選んで、階層的により細かなスケジュールまでを管理できるようになっている。履修できる科目については、教員側からeラーニングの機能で提供される科目になり、授業計画に沿ったカリキュラムが組まれる。

また、キャリア・サポートという入り口から、ロールモデルを選んで、自己の保有スキルのスキルレベルを登録すると、求められるスキルレベルとのギャップをグラフ表示してくれる。診断チャートを見て不足しているスキルを確認し、学習目標に活かすことができる。これは、キャリア形成を支援する為の機能である。

5. まとめ

本学に導入されePFは、この時点ではまだ試験運用の状態であるため、実際の画面ばかりではなかったが、ePFの大まかな働きを伝えることができたと思う。ePFの利用者は言うまでもなく学生であり、学生が自主的に利用してくれないと何の成果も蓄積されない。これは、eラーニングが自主学習であり、なかなか普及していかない実情を見ると、同様の経緯をたどる恐れが大いにある。ePFの場合には、将来の就職に向けた大きな目標を掲げ、それに向かって計画を立て、他の人からも意見をもらい、計画を見直し、スケジュール管理をしながら、目標に向けてのサポートが肝心であると考えられる。そうした意味で、教員によるこまめなチェックとフィードバックが、ePFを継続させる要であると思われる。

参考文献

- [1] 田村武志、多田勉、久国正吉、傍島邦穂。教育ポートフォリオ型e-Learningの開発、信学技報、TechnicalReport of IEICE、ET2004-34、pp.29-34 (2004-09)
- [2] 久保田真一郎・杉谷賢一：「eポートフォリオシステムMaharaの画像閲覧プラグインAlbumboxの開発」教育システム情報学会第35回全国大会、27-I2-2、(2010)

過去の否定的経験と大学 / 大学院教育に関する調査研究

金網 知征 谷口 麻起子

平成 22 年 10 月 29 日受理

Retrospective study of the relationships between the past negative experiences and the university under-and over-graduate education.

Tomoyuki Kanetsuna Makiko Taniguchi

要 約

本研究はいじめ関与経験を中心とする過去の否定的な経験と大学及び大学院の専攻動機との関連について、後方視的に検討することを目的としている。本論文では調査中のこの研究の一部について報告を行う。まずいじめ関与経験については、被害経験と加害経験とでは感情や相談経験などに違いがあることがわかった。被害経験については、自他に対する不信感や深刻な傷つきを経験していた。そしてこの傷つきは相談によって解消されるのではなく、さらに深刻なものになる可能性が推測された。またいじめ被害経験者の大半が現時点ではいじめ被害経験を肯定的に捉えているものの、これは相談経験によってではなく、被害経験者の内省によるものであると考えられたことから、被害経験についてさらに考えていくために心理学を専攻するものと推測された。対して加害者は、加害経験を当時も現在も肯定的に捉えていた。加害経験者は加害経験について他者と話し合うことが少なく、経験を振り返って考えることもないと推測され、いじめの加害経験と心理学専攻との間にもあまり関連がみられなかった。

Abstract

This retrospective study aimed to examine the relationships between the past negative experiences, especially bully-victim incidents, and the motivational factors for major choice of university under- and over-graduate courses. As the study is still on the stage of a pilot survey, only some provisional results will be reported and discussed on this article. Regarding the experiences of bullying, there are marked differences on their emotions and the experiences of consulting others between people who have experience of being victims and of being aggressors. People who were once victims, experienced the loss of trust towards others and serious hurting. These experiences might also get worse if their consultation was failed to stop bullying. Although majority of them found their experience positively at present, this view appears to be stem from their introspection of their experiences, and this introspection may also lead them to study psychology so as them to have further introspection of their experiences. In contrast, people who were once aggressors, tended to find their experiences positively both then and now. They were also found not to consult others, or have introspection of their experiences, and therefore to have weak connection between their experiences of bullying and their motives to study psychology.

キーワード：いじめ (bullying)、否定的経験 (negative experiences)、専攻動機 (motivation of major)

1. はじめに

筆者らの所属する心理学科では、新入生に対してオリエンテーション面接を行う際、心理学のどのようなことに関心があるか、またどのようなことを学んでいきたいかということを探っている。そしてその答えの中には、自身の不登校やいじめといった、いわゆる「否定的経験」をしたことから、その経験を生かして心理

臨床家になりたいというものが少なくない。このことから否定的経験の影響の大きさ、心理学を専攻すること及び自身が援助者になることが、否定的経験に対する1つの対処法・解決手段と捉えられている可能性があるといえよう。そこで否定的経験のうち、大きな社会問題ともなっている「いじめ」を取り上げ、いじめ経験を現在どのように捉えているのかということ、そ

して否定的経験をすることが、なぜ心理学を専攻することに結びついていったのかということ調査することとした。さらに否定的経験に対して心理学が果たせる役割、心理学教育上の問題についても検討することとした。本論文ではその予備調査について報告する。

2. 問題と目的

(1) いじめ関与経験と心理学専攻との関連について

「いじめ」とは加害者・被害者間の力の不均衡と、行為の持続性ないし反復性を特徴とした攻撃行動の一形態であり(森田, 1985; Olweus, 1993; Smith and Sharp, 1994)、日本においては「同一集団内の相互作用過程において優位に立つ一方が、意識的に、あるいは集合的に、他方に対して精神的・身体的苦痛をあたえること」(森田, 1985)と定義されている。日本では1980年代中頃にいじめを原因とする児童生徒の自殺事件が大々的に報道されたことをきっかけとして社会問題化して以降20年以上にわたり、行政や研究機関、あるいは学校や地域コミュニティによる実態調査及び予防的・介入的取り組みが積極的に行われてきた(Morita, 1996; Morita, Soeda, Soeda, and Taki, 1999)。それらの研究によると、ある子どもがいじめ被害にあったときに、その子どもが長期的あるいは固定的の被害者となってしまうか否かは、その子どもがいじめに対していかに対処できるのかという「自助能力」が大きく影響することが示されている。いじめの被害を受けた際に効果的に対処できなければ、被害は長期化し、より深刻な影響を受けることになるのである。しかしながら、多くの被害者が周囲の友人、あるいは教員や親などに相談したり助けを求めたりできず、ただやられるままに我慢しているという実態が示されている(Whitney and Smith, 1993; Smith and Shu, 2000; Houndoumadi and Pateraki, 2001; 森田, 2001; Kanetsuna and Smith, 2002)。

いじめに対して自助能力が弱く、効果的に対処できなかった者については、身体性症状、不安、抑うつ、自尊心低下、孤独感、集中力低下、不登校などの症状を示すとの報告があり(Boulton and Underwood, 1992; Olweus, 1993; Rigby and Slee, 1993; Byrne, 1994; Boulton and Smith, 1994; Slee, 1994; 1995a; 1995b)、また加害者についても、共感性の欠如、抑うつ、幸福感の欠如などの症状がみられることが示されている(Besag, 1989, Salmon, James and Smith., 1996; Rigby and Slee, 1993)。このことから、被害者としても、加害者としても、何らかの形でいじめに関与した経験のある者は、その後もその経験に囚われ、心理的負担を負い続ける可能性のあることは否定できない。また、

何らかの自助能力をもっていじめを、少なくとも表面的には、克服できたかのように思われるいじめ関与経験者についても、その後その経験をどう捉えていくのかは、その個人の心理的、社会的成長に大きく影響するものと思われる。

例えば、欧米では、ヨーロッパにおけるいじめ研究の先駆者であるD. Olweus (1993)が、いじめ加害者の追跡的研究より、学校でいじめをしていた生徒が青年期に達した時に、公式の犯罪記録に載るような深刻で常習的な犯罪を犯す割合は、普通の子どもの4倍であったことを報告している。また、Huesmann et al. (1984)はニューヨーク州の小学3年生(8歳)の中から攻撃性の強い児童25人と弱い児童25人を選んで30歳までモニターを行った結果、攻撃性の強い児童は30歳になるまでに犯罪者になる確率が高いだけでなく、学問的、社会的、経済的、職業的な達成度が他の児童より低いことを報告している(竹川, 2006)。これらの報告は、いじめの背景にある心理的な問題が解決されない限りは、後々の人生にもその問題が影響を与え続けることを示唆するものと言えよう。

すなわちいじめ関与経験のある人はいじめ関与経験の背後にある心理的課題に、経験後もなんらかのかたちで取り組むことが求められると考えられるのである。取り組み方は様々であろうが、その中に心理学を学ぶ、あるいは心理学的援助を行う者になるということがあるのではないか。なぜなら心理学は心の問題を扱い、また心にアプローチする援助方法を構築することによって、心理的問題を解決することを目指す学問だからである。

実際、渡部ら(2001)によるとカウンセラー志望者は、カウンセラーを志望しない者よりいじめられ経験が多く、いじめられ経験が心理カウンセラー志望動機と関係していることが推測された。また塩尻・福田(2005)はカウンセラー志望動機を質問紙調査した結果、「他者探求の動機」、「外的利得動機」、「自己投入的動機」、「内的利得動機」の4つを見出したが、中でも「自己」にまつわる諸問題の解決が動機の一部を形成していること、そして特に学校不適応経験を生かしたいという動機があることが考察されている。そして上野(2010)では質問紙調査によって大学生及び大学院生のカウンセラー志望動機には「貢献」、「自己満足」、「経験」、「自己成長」があり、数の上では最大ではないが、「経験」が大学生及び大学院生に共通する、カウンセラー志望動機の重要な要素であると述べている。さらに「貢献」、「自己満足」、「自己成長」の背景に個人的「経験」が関連している場合もあると思われるが、この点については質問紙だけでなく、インタ

ビュー調査などで動機を掘り下げていくことで詳細に検討できるものと期待される。

そして個人的な経験がきっかけで心理学を志す背景として、カウンセラー志望者は教師志望者に比べて内的葛藤経験が多い(塩尻・福田, 2005)という資質が指摘されていることから、内的葛藤経験への対処方法として心理学が選ばれていることが推測される。しかしこの点については他専攻学生との比較によってさらに検討する必要があるだろう。

これらの先行研究をふまえると、いじめ経験を含む様々な「経験」が心理学専攻の動機として大きな要素を占めるのではないかと考えられる。ならば、そもそもいじめ関与経験が現在どのように捉えられているのかを調べる必要があり、それをふまえた上でいじめ関与経験と心理学専攻との関連、経験への対処手段として心理学に何が期待されているのかを検討していくことが重要であろう。さらにこれらの点を検討することは、心理学教育をどのように行っていくのかという大学教育の問題を考える意味でも重要である。

ところで1996年よりいじめ問題を含む学校現場での子ども達の抱える問題への対策の一環として、文部科学省からスクールカウンセラーが配置されたことを考えると、「相談」がいじめに対する有効な対策・解決手段として期待されているといえる。問題対処行動はしばしば「問題焦点型対処」と「情動焦点型対処」という類型で考えられるが、これをいじめ場面において被害児童が実行可能な対処行動と照らし合わせて考えると、前者は「加害児童に直接止めるように言う」、「やり返す」、「先生や友達に助けを求める」などであり、後者は「無視する」、「平気な振りをする」、「泣く」、「逃げる／避ける」などであろう。しかしながら、前述したように、いじめ場面において、被害者と加害者の間に常に力の不均衡が存在し、被害者が自身の身を守ることが難しい状況であるならば、「相手に止めるように言う」や「やり返す」という対処行動は実行が難しいと考えざるを得ない。Kochenderfer and Ladd (1997) はアメリカの5～6歳児を対象に行った調査で、いじめが止んだ児童の多くが「先生や友達に助けを求める」という対処をしていたのに対し、いじめが継続した児童の多くは「逃げる」、「やり返す」という対処をしていたことを報告した。イギリスではSmith, Shu, and Madsen (2001) が10～14歳の児童を対象とした調査で、被害児童に最も頻繁に用いられる対処方法は「無視する」であり、続いて「相手に直接止めるように言う」、「先生に助けを求める」、「やり返す」であったと報告している。これらの報告から、自助能力が低く自分自身では解決が難しい被害者

が唯一取れる有効な解決策が他者への相談ではないだろうか。しかしながら、実際には、いじめ被害者の多くが自身のいじめ被害を誰にも相談できずにいるのが現状である。Whitney and Smith (1993) はイギリスの調査で約半数の被害児童が誰にも話さずに黙っていることを報告しており、また同様の報告はSmith and Shu (2000)、Houndoumadi and Pateraki (2001) やKanetsuna and Smith (2002) でも見られる。日本においても森田(2001)は6割以上の被害児童が誰にもその被害を話さなかったことを報告している。被害者が被害を誰にも相談しない理由には諸説あるが、例えばHoundoumadi and Pateraki (2001)は誰かに相談することでいじめ被害がより深刻なものとなることへの不安や恐れを挙げている。戸田(1997)はいじめの被害者はいじめられる原因が自分にあると考え、誰かに相談することに対して強い羞恥心を感じていると主張している。また、森田(2001)は、3割以上の児童は自身のいじめ被害を教員に報告したが事態は何も好転しなかったことから、教員への信頼感を失ったと報告していることを明らかとした。このように、もし相談によって適切な援助が得られていないならば、例えば自助手段として自ら心理学を学んだり、あるいは心理的援助者となっていじめ関与経験に取り組んでいたりするということも考えられ、相談経験が心理学専攻と関連しているとも推測される。いじめ関与経験者がそもそも相談をしているのか、また相談経験が援助となりえているのか、さらに相談経験の中身によって心理学に何が期待されているのかを検討することで、相談がいじめ問題に対して有効といえるのか、いじめ関与経験への対処方法として心理学に何が期待され、また心理学がその期待にどのように応えていけるのかを考えることができるだろう。

(2) 経験が心理臨床家志望の動機となることについて

(1)でも触れたように、心理臨床家を志す動機の主要なものとして、「経験」が挙げられる。しかし個人的な経験は心理臨床家になる上で、様々な問題を引き起こす可能性が大きいのである。心理臨床家にとっての個人的な体験については、「自己と他者の区別の上で、経験があることはむしろハンディ」(成田, 1999)であり、個人的な願望だけで心理臨床家になれるというものではなく、心理臨床家になることについて、本当に自分が必要と迫られているかどうかを考えねばならない(河合, 2000)。つまりいじめなどの否定的な経験で苦悩したこと、あるいはそれらについて相談したことがきっかけで心理臨床家を志すだけでは不十分であり、自分の経験を他者の経験と重ね合わせない認識

能力、あるいは心理臨床家になるということ、自らを深く知ることを通して問う姿勢が心理臨床家になるためには必要なのである。

この点についての実証研究として、上野(2006)では否定的な事態が契機となって自分に目を向けざるを得なくなり、臨床心理学を学ぶことでさらに自分の体験をよく考えるという傾向が推測され、さらに関連領域専攻の学生及び大学院生に比べ、臨床心理学専攻の大学生は否定的体験に対してアンビバレントであるという結果も出ている。つまり否定的経験が臨床心理学専攻のきっかけとなって実際に臨床心理学を学んでいることで、経験に対する心の揺れ動きが推測されるのだが、授業を通してその心の動きがどうなっていくのか、経験はどう位置づけられていくのかといったことについて、詳しいことはわかっていない。

さらに個人的な経験は、臨床実践での困難とも結びつく可能性がある。このことについて上野(2010)はインタビュー調査を行った。例えば強い不快感情を伴う体験が動機になっていると、その体験と類似した実践場面に遭遇したときに自分のパフォーマンスに不安が高まったり、自分の感情のコントロールが困難になったりするといった関連が推測されるという。

もちろん心理臨床家になる動機としてそれがふさわしいかどうかといった価値判断はできないし、個人的な経験によって引き起こされる問題があるからといって心理臨床家になれないということでもない。重要なのは個人的経験が心理学を専攻することや心理臨床家を志望することと関連する場合があること、心理臨床家になっていくプロセスで個人的経験とそれにまつわる諸問題に直面していく必要があることを意識していることである。さらにこれらのことを考慮した上で、心理臨床家を養成する大学・大学院教育を行っていくことが重要であろうが、この点については研究レベルでの議論はあまりみられていない。心理臨床家志望者も臨床心理士養成指定大学院も増加し、量でなく質が問われるようになってきている現在、個人的経験が教育を通じて、どう心理臨床家になるプロセスに位置づけられていくかを研究することは、大いに意味のあることだろう。

(3) 本研究及び本論文の目的

(1)、(2)をふまえ本研究の目的は、以下の4つとした。第一に、いじめの経験者がいじめ関与を当時どう捉えていたか、そして現在はそれをどう捉えているかということ調査することである。第二に、いじめ関与経験を相談することでどう感じたか、またその相談経験が心理学専攻と関連しているかを検討すること

である。そして第三には、いじめ関与経験を中心とする過去の否定的体験と、大学及び大学院での心理学専攻の志望動機との関係を明らかにすることである。最後に心理学系大学・大学院教育を通して、いじめを中心とする過去の否定的体験を客観視できる能力がつくものなのか、また自分というものを深く知るという体験がなされていくものなのかを、いじめ関与と経験の変化と、その学生が受けてきた教育内容との関連から検討していくことを第四の目的とする。

本論文では上記に挙げた4つの目的のうち、第一～第三の目的にあたる部分の予備調査結果について報告を行う。

3. 方法

調査対象者

関西圏私立四年制大学心理学系学部・学科・研究科在籍の学生146名(学部1回生：男性8名、女性5名；2回生：男性34名、女性46名；3回生：男性10名、女性17名；4回生：男性7名、女性15名；博士前期課程1回生：男性0名、女性2名；2回生：男性0名、女性1名；博士後期課程：男性1名、女性0名)を対象に無記名自記式質問紙による調査を実施した。

質問紙

(1) いじめ被害関連項目

- ①いじめ被害経験の有無(1.「はい」、2.「いいえ」の2件法)；
- ②いじめ被害経験時の感情(1.「つらくて落ち込んだ」、2.「学校が嫌になった」、3.「勉強が嫌になった」、4.「不安になった」、5.「先生が信用できなくなった」、6.「友達が信用できなくなった」、7.「死にたくなった」、8.「相手が憎らしくなった」、9.「他の人をいじめたくなった」、10.「負けたくないと思った」、11.「自分がいじめられるのは仕方ないと思った」、12.「他人が怖くなった」、13.「自分が嫌になった」、14.「その他」の14項目複数選択式)；
- ③いじめ被害経験時の相談行動の有無(先生、家族、友達、カウンセラー、その他、の5項目に対して1.「はい」、2.「いいえ」の2件法)；
- ④相談時の相談相手の行動(先生、家族、友達、カウンセラー、その他の5項目に対して、1.「何もしてくれなかった」、2.「無くそうとしてくれたが状況は悪化した」、3.「無くそうとしてくれたが状況は変わらなかった」、4.「無くそうとしてくれて、いじめが少なくなった」、5.「無くそうとしてくれて、いじめが無くなった」、6.「親身になって話を聞いてくれた」、7.「その他」の7項目複数選択式)；

- ⑤相談後の感情 (1.「気持ちが軽くなった」、2.「さらに不安になった」、3.「相談したことを後悔した」、4.「その他」の4項目複数選択式)；
- ⑥いじめ被害に関する相談経験の影響：いじめ被害時の相談が現在の自分に及ぼしている影響について自由記述式で回答を求めた。

(2) いじめ加害関連項目

- ①いじめ加害経験の有無 (1.「はい」、2.「いいえ」の2件法)；
- ②いじめ加害経験時の感情 (1.「やったあとと思っていた」、2.「仕返しされるかもと不安だった」、3.「面白かった」、4.「先生や親にしかられるかもと不安だった」、5.「相手がいじめられるのは当然と思った」、6.「嫌な気持ちだった」、7.「かわいそうと思った」、8.「何も感じなかった」、9.「その他」の9項目複数選択式)；
- ③いじめ加害経験時の相談行動の有無 (先生、家族、友達、カウンセラー、その他の5項目に対して1.「はい」、2.「いいえ」の2件法)；
- ④相談時の相談相手の行動 (先生、家族、友達、カウンセラー、その他の5項目に対して、1.「話をしたが、相手はそれ以上のことは特に何もしなかった」、2.「相手はいじめをやめさせようとしたが、よりいじめをするようになった」、3.「相手はいじめをやめさせようとしたが、自分はいじめをやめなかった」、4.「相手はいじめをやめさせようとして、自分もいじめをする回数が減った」、5.「相手はいじめをやめさせようとして、自分もいじめをしなくなった」、6.「相手は親身になって話を聞いてくれた」、7.「その他」の7項目複数選択式)；
- ⑤相談後の感情 (1.「気持ちが軽くなった」、2.「さらに不安になった」、3.「罪悪感をもつようになった」、4.「その他」の4項目複数選択式)；
- ⑥いじめ加害に関する相談経験の影響：いじめ加害時の相談が現在の自分に及ぼしている影響について自由記述式で回答を求めた。

(3) 大学教育関連項目

- ①学部学科研究科専攻動機 (1.「資格・就職に有利」、2.「他者からの勧め」、3.「自身の否定的経験」、4.「他者の否定的経験」、5.「学問的興味・関心」、6.「環境的要因」、7.「いじめ関与経験」、8.「自身の肯定的経験」、9.「他者に憧れて」、10.「その他」の10項目複数選択式)；
- ②学部学科研究科専攻動機の具体的説明の自由記述；
- ③現在大学で履修している授業で自身に影響を与えた

と思われるものとその理由を自由記述式で求めた。

手続き

心理学系学部生及び大学院生を対象に質問紙を配布した。著者勤務大学内における質問紙配布は、著者の担当する授業にて質問紙を配布し、後日学内に設置した回収箱に提出してもらうという方法をとった。また、他大学における質問紙配布については、事前にEメールか電話にて協力の要請をし、協力を得られた大学においては、質問紙を郵送し、協力大学の教員に配布してもらい、質問紙回収後に再度返送してもらうという方法をとった。

さらに質問紙の最終ページにてインタビュー協力者を募集し、協力が得られた学生を対象に、過去の否定的経験と大学学部学科／大学院研究科専攻志望動機との関連についてさらに詳しい聞き取り調査を実施した。

4. 結果と考察

本研究は現在予備調査中であり、調査対象者数も少ないことから、一部の結果のみを報告する。

(1) いじめ経験の有無

下記表1の通り、いじめの被害経験率は「経験あり」の者が45%と半数近くいた。

表 1. いじめ経験有無

経験あり	経験なし	不明
65 (45.1%)	80 (54.8%)	1 (0.7%)

約半数がいじめ経験ありという結果は、渡部ら(2001)によるいじめられ経験の調査結果と同じである。実際のいじめ報告件数とは異なるが、文部科学省の行っている平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査によると、いじめ認知学校数は小学校で7,437校／22,476校(33.1%)、中学校で6,230／10,952校(56.9%)、高校で2,321／5,831校(39.8%)と、ほぼ4割の学校でいじめが認知されていることをあわせると、いじめ問題というのは半数の生徒および学校が直接関わっている問題であり、いじめが大きな社会問題であることが数字上でもわかる。

(2) いじめ被害経験時の感情

下記表2の通り、いじめ経験時の感情については、「つらくて落ち込んだ」(66.2%)が最も高頻度の回答であり、次いで、「学校が嫌になった」(64.6%)、

表 2. いじめ被害経験時の感情

落ち込んで 落ち込んで	学校が嫌 になった	勉強が嫌 になった	不安にな った	先生が信 用できな くなった	友達が信 用できな くなった	死にたく なくなった	相手が 憎らしく なった	他の人 をいじめ たくな った	思っ たより 思わな い	仕方 ない と思 った	他人 が怖 くな った	自分 が嫌 にな った	その他
43 (66.2%)	42 (64.6%)	7 (10.8%)	36 (55.4%)	12 (18.5%)	28 (43.1%)	20 (30.8%)	25 (38.5%)	1 (1.5%)	23 (35.4%)	13 (20.0%)	22 (33.8%)	29 (44.6%)	8 (12.3%)

「不安になった」(55.4%)、「自分が嫌になった」(44.6%)、「友達が信用できなくなった」(43.1%)と続いていた。

これらのことから、いじめ被害経験によって不信感や自己否定感など、人が生きる上での基盤となる自他への基本的信頼感が、深刻に傷ついていると考えられる。いじめへの適切な対処がなかった場合は、身体症状、不安、抑うつといった症状がみられるといった報告 (Boulton and Underwood, 1992; Olweus, 1993; Rigby and Slee, 1993; Byrne, 1994; Boulton and Smith, 1994; Slee, 1994; 1995a; 1995b) について先に紹介したが、これほどまでの傷つきがあれば後々までその影響があることは無理もなかろう。このことからいじめをなくし、いじめ被害者に心理的ケアを行うことがいかに重要であるかということが、あらためて強調されよう。

(3) いじめ被害経験時の相談の有無及び相談相手

下記表3が示す通り、いじめ被害を経験したものの半数以上が誰かしらに相談した経験を持っていた。また、表4の通り、その相談相手として最も多かった回答は、「先生」(41.9%)であり、次いで「家族」(37.7%)、「友達」(28.3%)であった。

表 3. いじめ被害経験時の相談の有無

相談した	相談しなかった
43 (66.2%)	22 (33.8%)

表 4. いじめ被害経験時の相談相手

先生	家族	友達	カウンセラー	その他
26 (41.9%)	23 (37.7%)	17 (28.3%)	7 (12.1%)	2 (4.4%)

6割以上の被害児童が誰にもその被害を話さなかったという報告がある (森田, 2001) が、今回はいじめ被害経験を相談した者が6割以上いた。しかし一方でいじめ被害について相談せず、1人で問題を抱えていた者も多かったが、これは (2) でみたような、他者への不信感が関連しているとも考えられる。つまりいじ

めによって他人が怖くなったり、先生や友達が信用できなくなったりすれば、相談しようという気にはなれず、(2) でみたような深い傷つきを自分で対処せざるを得なくなるだろう。このことから第三者がいじめについて発見する視点を持ち、いじめ被害者に関わっていくことの必要性が示唆される。

相談による影響は次の (4) で検討するが、深い傷つきについて援助を求めようとする姿勢がみられるということは、そこで適切な援助ができればいじめによる被害を食い止め、早いうちにケアできるということである。援助を受けた者がどう対処することが望ましいのか、特に相談相手として選ばれやすい先生や家族がどのように傷つきを受けとめればよいのかについて、検討することが重要であると考えられる。例えば横湯 (2005) は、心理臨床家の立場から、いじめの被害者である子どもからの相談事例を基に、いじめによる心的外傷からの回復のためには、できるだけ早い時期に回復のためのケアあるいはカウンセリング等がなされる必要があり、何よりも大事なものは当事者の「いじめられている」という訴えを信じる大人の感性と、いじめが人間としての尊厳を打ち壊す奴隷の支配そのものであるという認識による、毅然とした大人の態度であると主張している。

(4) いじめ被害相談時の被相談者の行動と相談者のその後の感情

被害者からいじめの相談を受けた相手の行動については表5に示す通り、「親身になって話を聞いてくれた」が各相談相手とも最も高い数値を示していた。また、いじめを「無くそうとして」なんらかの働きかけを行ったとの回答も少なくないが、実際に「いじめが減った」あるいは「いじめが完全に無くなった」という回答よりも、「状況は変わらなかった」という回答が多いことから相談したことが、そのままいじめの解決につながったわけではないことが分かった。また、相談したにもかかわらず、「何もしてもらえなかった」と感じている者も少なくないことが見て取れる。

さらに、表6より、いじめ被害相談後の感情として、

「気持ちが軽くなった」という回答が最も多いことから、いじめそのものが解決していなかったにしても、誰かに相談することで、なんらかの肯定的な感情をもったことが伺える。しかしながら、「さらに不安になった」、「相談したことを後悔した」という回答も少ないながら見られることにも注意する必要がある。

表 5. いじめ被害相談時の被相談者の行動

	何とも くれな かった	状況は 悪化し たが	無くそ うとし たが 状況は	無くそ うとし たが 減った	無くそ うとし たが 無くな った	親身に なっ て話を	その他
先生	6 (23.1%)	3 (12.0%)	6 (24.0%)	4 (16.0%)	4 (16.0%)	5 (20.0%)	1 (4.0%)
家族	5 (21.7%)	1 (4.3%)	5 (21.7%)	2 (8.7%)	2 (8.7%)	8 (34.8%)	0 (0.0%)
友達	4 (23.5%)	1 (5.9%)	3 (17.6%)	2 (11.8%)	0 (0.0%)	6 (35.3%)	1 (5.9%)
カウンセ ラー	2 (28.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (42.9%)	2 (28.6%)
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (100%)	0 (0.0%)

表 6. いじめ被害相談後の感情

	軽く持 ちな がった	不安ら にな った	相談を した 後悔し た	その他
先生	13 (52.0%)	3 (12.0%)	7 (28.0%)	2 (8.0%)
家族	17 (73.9%)	1 (4.3%)	2 (8.7%)	3 (13.0%)
友達	9 (52.9%)	1 (5.9%)	2 (11.8%)	3 (17.6%)
カウンセ ラー	3 (42.9%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	2 (28.6%)
その他	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (50.0%)

3割以上の児童が自身のいじめ被害を教員に報告したにもかかわらず、事態は何も好転しなかったことから、教員への信頼感を失ったという報告(森田, 2001)について先に述べたが、ここでもいじめの問題について相談したにも関わらず、さらに不安になったり相談したことを後悔したりした結果がみられ、被害者の不信感は一層増したと思われる。相談によっていじめの問題が全て解決することは難しく、また不信感にしても簡単に和らぐものではないが、相談を受ける側の適切な姿勢・行動がきわめて重要であることが示唆されよう。

その相談を受ける側の行動であるが、カウンセラー以外の半数は、いじめを無くそうとするアプローチ、つまり問題焦点方対処方法をとっていた。対してカウ

ンセラーはいじめそのものに対してのはたらきかけは行わず、話を聞くという心理的なサポート、つまり情動焦点型対処を3名とはいえ半数が行っていた。いじめへの対処は、いじめそのものに対しての危機介入と、その人に寄り添うという心理的サポートの両方が必要であることをふまえると、危機介入が抜ければいじめによる被害が続いたり、被害経験時の深刻な傷つきが長期化したりすることになる。また心理的サポートが抜ければ傷つきを自分ひとりで抱えたり、いじめの背景にある心理的課題に取り組むことが難しくなったりする可能性がある。これらのことが相談によって「さらに不安になった」、「相談したことを後悔した」という回答とつながっているのかもしれないし、その後、心理学を学ぶことで対処していこうということにつながっていく可能性もあると考えられる。この点については(11)で検討を行う。

(5) 過去のいじめ被害経験に対する現在の感情

表7が示すとおり、過去のいじめ被害経験に対して、「良い経験であった」(49.2%)、「勉強になった」(49.2%)と肯定的な感情を持っているものが半数近くいることが分かった。しかしながら、「思い出したくない」(29.2%)、「情けない」(16.9%)のように、肯定的体験とは捉えていないものも少なくなかった。

表 7. 過去のいじめ被害経験に対する現在の感情

情 け な い	恥 ず か し い	思 い 出 し た く な い	良 い 経 験 で あ っ た	勉 強 に な っ た	そ の 他
11 (16.9%)	4 (6.2%)	19 (29.2%)	32 (49.2%)	32 (49.2%)	15 (23.1%)

被害時の感情が深刻であったにも関わらず、半数がいじめ被害経験を現在は肯定的にとらえているという結果から、被害時から回答時までの間に、いじめ被害経験について自分なりに捉え直したことが推測される。とすれば、いじめ被害経験者は自分の辛い体験を内省していく力や内省経験があると考えられ、カウンセラー志望者は内的葛藤経験が多い(塩尻・福田, 2005)という先行研究結果と共に、内省力が心理学専攻につながった可能性が推測される。

またいじめ被害経験についての相談経験の有無と、現在のいじめ被害経験の捉え方については、明確な関連はみられなかった。このことから、相談の有無に関わらず自らの内省力によっていじめ被害経験を捉え直

したという上記の推測が裏付けられる。さらに相談経験には表6に示すような影響があるとはいえ、その影響は長期化しないということも推測される。

(6) いじめ加害経験の有無

下記表8より、いじめ加害経験者は全体の2割弱であった。なお、無回答者が1名いた。

表 8. いじめ加害経験の有無

経験あり	経験なし
25 (17.1%)	120 (82.2%)

(7) いじめ加害経験時の感情

下記表9より、いじめ加害時の感情として最も多かった回答は「面白かった」(40.0%)であり、次いで「相手がいじめられるのは当然と思った」(36.0%)であった。被害者に対して同情的な意見である「かわいそうと思った」や「嫌な気持ちだった」も少数意見としては見られた(それぞれ、28.0%と12.0%)。

表 9. いじめ加害経験時の感情

やったあと 思っていた	仕返しされる かもと不安 だった	面白かった	先生や親に 叱られるかも と不安だった	相手がいじめ られるのは 当然と思った	嫌な気持ち だった	かわいそう と思った	何も感じ なかった	その他
1 (4.0%)	1 (4.0%)	10 (40.0%)	1 (4.0%)	9 (36.0%)	3 (12.0%)	7 (28.0%)	5 (20.0%)	4 (16.0%)

(8) いじめ加害時の話し合いの有無と話し合いの相手

表10より、いじめ加害経験者のうち、約3割のものが誰かとそのことについて話し合いをもったと回答している。また、表11より、その話し合いの相手として最も多い回答は「先生」(24.0%)であり、次いで「友達」(16.0%)、「家族」(12.0%)であった。

表 10. いじめ加害経験時の話し合いの有無

話し合いをした	話し合いはしなかった
8 (32.0%)	17 (68.0%)

表 11. いじめ加害経験時の話し合いの相手

先生	家族	友達	カウンセラー	その他
6 (24.0%)	3 (12.0%)	4 (16.0%)	0 (0.0%)	1 (4.0%)

表8より、いじめ加害経験者数は多いとはいえないが、表9より、いじめ加害については正しいこと、楽しいものにとらえられていると考えられる。また表10より、いじめ被害経験に比べていじめ加害経験はいじめ関与経験について他者と話し合うことが少ないが($\chi^2_{(1)} = 8.45, p < .01$)、これはいじめ加害について悩んだり困ったりすることが加害者にはないからだと考えられる。加害側がいじめ加害経験を肯定的に捉えており、また他者と話し合う機会が少なければ、加害者側の考えが変わることはいじめがおさまることは考えにくく、それだけいじめの長期化の可能性と、被害者への心的負担が大きくなるという問題が起きるだろう。したがって第三者がいじめを発見して早急に介入ことがより重要であることが考えられる。

(9) いじめ加害経験に対する現在の感情

下記表12より、いじめ加害経験に対する現在の感情としては、「情けない」(48.0%)や「恥ずかしい」(28.0%)のような後悔を示す回答と、「勉強になった」(44.0%)や「良い経験であった」(24.0%)のように肯定的に捉えている回答とおおよそ半々であった。

表 12. いじめ加害経験に対する現在の感情

情けない	恥ずかしい	思い出し たくない	良い経験 であった	勉強 になった	その他
12 (48.0%)	7 (28.0%)	2 (8.0%)	6 (24.0%)	11 (44.0%)	8 (32.0%)

表9と表12より、加害経験時ではいじめ加害経験をポジティブにとらえていたが、現在はネガティブに捉える者が半数いると考えられる。これは時間の経過あるいは心的成長と共に、相手の立場を考慮したり、いじめ加害経験を客観視したりする能力が育ってきたからかもしれない。「良い経験であった」、「勉強になった」という感情も、この経験を通じて他者のことを考える契機になったというプラス面も推測されるが、表9にみられたような、いじめを正当化するような感情が現在ももたれているとするならば、いじめの根本的な解決はなされていないことになる。

(10) 専攻志望動機

現在所属している学部・学科への専攻の志望動機については、下記表13が示すように、「学問的興味・関心」(78.1%)が最も多い回答であった。次いで多かった回答は、「環境的要因」(38.4%)、「他者からの勧め」(30.1%)、「資格・就職に有利」(20.5%)であった。また、「自己の肯定的経験」(19.9%)、あるいは「自己の否定的経験」(16.4%)や、「いじめ関与経験」(19.9%)と回答するものも少なくなかった。

またなんらかの「経験」が動機となっている者とそうでない者は表14、15より半分ずつであり、なんらかの経験を動機とする者としなない者でのいじめ被害経験の有無、被害相談経験の有無について有意差はみられなかった。

表 13. 専攻志望動機

資格・就職に有利	他者からの勧め	自己の肯定的経験	他者の否定的経験	学問的興味・関心	環境的要因	いじめ関与経験	自己の肯定的経験	他者への憧れ	その他
30 (20.5%)	44 (30.1%)	24 (16.4%)	18 (12.3%)	114 (78.1%)	56 (38.4%)	29 (19.9%)	29 (19.9%)	21 (14.4%)	41 (28.1%)

表 14. いじめの被害経験の有無と専攻志望動機における「経験」の割合

	志望動機経験あり	志望動機経験なし	合計
いじめ被害経験あり	37 (56.9%)	28 (43.1%)	65 (100.0%)
いじめ被害経験なし	35 (43.8%)	45 (56.3%)	80 (100.0%)
合計	72 (49.7%)	73 (50.3%)	145 (100.0%)

表 15. いじめの被害相談経験の有無と専攻志望動機における「経験」の割合

	志望動機経験あり	志望動機経験なし	合計
被害相談経験あり	25 (58.1%)	18 (41.9%)	43 (100.0%)
被害相談経験なし	47 (46.1%)	55 (53.9%)	102 (100.0%)
合計	72 (49.7%)	73 (50.3%)	145 (100.0%)

他の専攻との比較が必要であるが、心理学専攻者の半数が何らかの「経験」を専攻の動機としてあげてい

ることは注目に値する。経験を一時のこととして終わらせず、心理学を通じて考えていくことを選択させるほど、ある経験がその人にとって重要であり、また心理学専攻が内的要因によって動かされてきたものであることが推測される。ならば心理学教育の役割は、心理学の思考を通していかに自分の経験を考え、人生のプロセスに位置づけさせるかという、一種の心理療法の役割を担っていることが考えられる。

その一方で、「学問的興味・関心」が8割近くと志望動機の大半を占めるのは、心理学は人が生きる上で誰もが関係する心理を扱うという性質ゆえかもしれない。しかし興味・関心の背景に個人的経験が影響している可能性もあり、この点についてはインタビュー調査中である。

11. いじめ関与経験と専攻志望動機との関連

いじめ被害・加害経験と志望動機との関連について、クロス集計したところ、いじめ被害経験については、被害経験ありと被害経験なしのもので「学問的興味・関心」、「環境的要因」、「いじめ関与経験」について有意な差が認められた(学問的興味・関心： $\chi^2_{(1)} = 3.37, p < .05$; 環境的要因： $\chi^2_{(1)} = 5.54, p < .02$; いじめ関与経験： $\chi^2_{(1)} = 10.91, p < .01$) (下記表16参照)。

一方、いじめ加害経験については、加害経験ありのものと同加害経験なしのものとの間に、いずれの志望動機項目についても有意な差は見られなかった(下記表17参照)。

いじめ被害、加害経験がないにもかかわらず「いじめ関与経験」を動機として選択している者がいるが、これは直接的にはいじめに関与していないが、間接的あるいは主観的には関与した場合を指しているのかもしれない。例えばクラスの中でいじめられている子がいることを知っていたにもかかわらず、自分はどうすることもできなかった(あるいは、しなかった)という場合である。この場合は筆者らの意図では本来「他者の否定的経験」カテゴリーとなるところだが、「いじめ関与経験」に入れられた可能性があるため、語句の定義を明確にすることが今後の課題となるところである。

さて表16より、いじめ関与経験者は経験のない者よりいじめ関与経験を動機とする者が多かったことから、いじめ被害を受けた者はその傷やいじめ経験について、心理学を通じて自らの経験を問い続けることが専攻動機につながったと考えられる。またいじめ被害経験者は環境的要因を動機とする者が少なかったが、

これは経験が内的要因であるのに対し、環境的要因は外的要因と考えられることから、いじめ被害経験者は自らの経験を問い続けざるを得ないという、その人の内的な問題により目が向き、心理学を通じて心理的課題に取り組んでいこうとしているとも考えられる。そして「学問的興味・関心」が少なかったことには、その問いが「興味・関心」というレベルを越えるほどの深さをもつものであるからであろう。とすればここでも心理学の1つの役割として、自らの在り方を問い、考え続ける力を養うということが求められると考えられる。

対して加害経験で有意差がみられなかったのは、そもそも加害経験自体がその当時ポジティブにとらえられていたこと、加害経験によって傷ついたり罰を与えられたりすることがあまりなく、経験について問い直す必要がないためであると推測される。いじめ加害経験について現在視点は変わっているものの、いじめ加害を行うという側面が自らにあることをそれ以上は問おうとしないということは、いじめを予防していく上でも、また自らについて、あるいは人間の心理について考えていく上でも不十分といえるのではないか。心理学教育を行う上で、否定的な側面に目を向けていくということを考慮する必要があると思われる。

5. まとめと今後の課題

本論文では、いじめ関与経験に対する当時及び現在

の感情、いじめ関与経験についての相談の実態、及びいじめを中心とする個人的経験と心理学専攻動機との関連について行った、質問紙調査の一部を報告した。まずいじめ関与経験については、被害経験と加害経験とでは感情や相談経験などが異なることがわかった。被害経験については、自他への不信感など深刻な傷つきを体験していたが、その傷つきが相談によって解消されるのではなく、さらなる不信感を抱くこととなる可能性が推測された。また現在被害経験を肯定的に捉える視点があるものの、それは相談経験によってではなく、被害経験者の内省によるものであると考えられた。このことから心理学を専攻することの背景には、心理学を学ぶことでさらに被害経験について考えていこうとする姿勢があるのではないかと推測された。

対して加害経験者は、いじめ加害そのものを肯定的に捉える視点が当時も現在もあることがわかった。また加害経験者は他者と話し合うということも少なく、心理学の専攻動機とは結びつきにくいこと、そしていじめが加害経験者の姿勢の変化によって解消するということは少ないのではないかとということが考えられた。

個人的経験と心理学専攻との関連については、個人的経験を心理学専攻の動機とするものが半数おり、ある経験がその人にとって重要であり、また心理学専攻が内的要因によって動かされてきていることが推測された。特にいじめ関与経験者は学問的興味・関心の域

表 16. いじめ被害経験と専攻志望動機のクロス表

	資格・就職に有利	他者からの勧め	自己の否定的経験	他者の否定的経験	学問的興味・関心*	環境的要因*	いじめ関与経験***	自己の肯定的経験	他者への憧れ	その他
被害経験あり	11 (16.9%)	23 (35.4%)	13 (20.0%)	8 (12.3%)	46 (70.8%)	18 (27.7%)	21 (32.3%)	14 (21.5%)	10 (15.4%)	15 (23.1%)
被害経験なし	18 (22.8%)	21 (26.6%)	10 (12.7%)	10 (12.7%)	66 (83.5%)	37 (46.8%)	8 (10.1%)	14 (17.7%)	11 (13.9%)	26 (32.9%)

(注) *は5%水準、**は2%水準、***は1%水準

表 17. いじめ加害経験と専攻志望動機のクロス表

	資格・就職に有利	他者からの勧め	自己の否定的経験	他者の否定的経験	学問的興味・関心	環境的要因	いじめ関与経験	自己の肯定的経験	他者への憧れ	その他
加害経験あり	5 (20.0%)	5 (20.0%)	7 (28.0%)	2 (8.0%)	19 (76.0%)	9 (36.0%)	8 (32.0%)	3 (12.0%)	3 (12.0%)	7 (28.0%)
加害経験なし	25 (20.8%)	39 (32.5%)	16 (13.3%)	16 (13.3%)	94 (78.3%)	47 (39.2%)	21 (17.5%)	25 (20.8%)	18 (15.0%)	34 (28.3%)

を越えて、自らの経験について問い続けるために心理学を専攻しているものと考えられ、心理学に心理療法の役割が期待されているものと考えられた。

今後の課題は心理学以外の専攻者との比較によって、上記の特徴について心理学専攻者特有の点をさらに詳しく検討することである。また個人的経験がどのように心理学の専攻に結びつき、実際に心理学を学ぶことでどのように変化していくのかというプロセスについて検討することである。これら2点については現在調査中であるため、稿をあらためて報告したい。

〈謝辞〉

質問紙に回答いただき、また率直なご意見を寄せてくださった本研究の調査協力者の方に感謝申し上げます。

またご多忙のところを調査実施にご協力くださった、先生方にも厚く御礼申し上げます。

引用／参考文献

- Besag, V. (1989). *Bullies and Victims in Schools*. Milton Keynes: Open University Press.
- Boulton, M.J. & Smith, P.K. (1994). Bully / victim problems in middle-school children: Stability, self-perceived competence, peer perceptions and peer acceptance. *British Journal of Developmental Psychology*, 12, 315-329.
- Boulton, M.J. & Underwood, K. (1992). Bully / victim problems among middle school children. *British Journal of Educational Psychology*, 62, 73-78.
- Byrne, B.J. (1994). Bullies and victims in a school setting with reference to some Dublin Schools. *The Irish Journal of Psychology*, 15, 574-586.
- Houndoumadi, A. & Pateraki, L. (2001). Bullying and bullies in Greek elementary schools: Pupils' attitudes and teachers' / parents' awareness. *Educational Review*, 53, 19-26.
- Huesmann, L.R., Eron, L.D., Lefkowitz, M.M. & Walder, L.O. (1984). The stability of aggression over time and generations. *Developmental Psychology*, 20, 1120-1134.
- Kanetsuna, T. & Smith, P.K. (2002). Pupil insights into bullying, and coping with bullying: A bi-national study in Japan and England. *Journal of School Violence*, 1, 5-29.
- 河合俊雄 (2000) 心理臨床の理論 岩波書店.
- Kochenderfer, B. J. & Ladd, G. W. (1997). Victimized children's responses to peer's aggression: Behaviors associated with reduced versus continued victimization. *Development and Psychopathology*, 9, 59-73.
- 森田洋司 (1985) いじめ集団の構造に関する社会学的研究 大阪市立大学社会学研究室.
- Morita Y. (1996). Bullying as a contemporary behaviour problem in the context of increasing 'social privatisation' in Japan. *Int Bureau Educ*, 26, 311-329.
- 森田洋司 (2001) いじめの国際比較研究 金子書房
- Morita, Y., Soeda, H., Soeda, K., & Taki, M. (1999). In P. K. Smith, Y. Morita, J. Junger-Tas, D. Olweus, R. Catalano, P. Slee (Eds.) *The Nature of School Bullying: A Cross-National Perspective*. London & New York: Routledge.
- 成田善弘 (1999) 精神療法 In 氏原寛・成田善弘編著 カウンセリングと精神療法 20-34 培風館.
- Olweus, D., Catalano, R., & Slee, P. (Eds.) (1998). *The Nature of School Bullying: A Cross-National Perspective*. London & New York: Routledge.
- Olweus, D. (1993). *Bullying at school: What We Know and What We Can Do*. Oxford: Blackwell.
- Rigby, K. & Slee, P.T. (1993). Dimensions of interpersonal relations among Australian school children: Implications for psychological well-being. *Journal of Social Psychology*, 133, 33-42.
- Salmon, G., James, A., & Smith, D.M. (1996). Bullying in schools: self reported anxiety, depression, and self-esteem in secondary school children. *British Medical Journal*, 317, 924-925.
- 塩尻智也・福田広 (2005) カウンセラー志望者の志望動機について - 自我同一性、過去経験及び進路選択からの分析 - 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第19号 103-109.
- Slee, P.T. (1994). Situational and interpersonal correlates of anxiety associated with peer victimization and self-esteem in secondary school children. *British Medical Journal*, 317, 924-925.
- Slee, P.T. (1995a). Bullying in the playground: The impact of inter-personal violence on Australian children's perceptions of their play environment. *Children's Environment*, 12, 320-327.
- Slee, P.T. (1995b). Bullying: Health concerns of Australian secondary school students. *International Journal of Adolescence and Youth*, 5, 215-224.
- Smith, P. K. & Sharp, S. (1994). *School Bullying: Insights and Perspectives*. London: Routledge.
- Smith, P. K. & Shu, S. (2000). What good school can do about bullying: Findings from a survey in English schools after a decade of research and action. *Childhood*, 7, 193-212.
- Smith, P. K., Shu, S. & Madsen, K. (2001). Characteristics of Victims of School Bullying: Developmental Changes in Coping Strategies and Skills. In J. Juvonen & S. Graham (Eds.). *Peer Harassment in School*. New York: Guilford.
- 竹川 郁雄 (2006) いじめ現象の再検討 - 日常社会規範と集団の視点 - 法律文化社
- 戸田有一 (1997) 教育学部生のいじめ/いじめられ経験といじめに対する意識 鳥取大学教育学部紀要 6号 19-28

上野まどか (2006) カウンセラー志望者の特性、及び苦悩の体験に対する態度 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 15, 60-61.

上野まどか (2010) カウンセラーを志望する大学院生の動機と臨床実践で感じる困難との関係 明治学院大学大学院心理学研究科 心理学専攻紀要 第15号 9-26.

Whitney, I. & Smith, P. K. (1993). A survey of the nature and extent of bully / victim problems in junior / middle and secondary schools. *Educational Research*, 35, 3-25.

渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀 (2001) 心理カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検討 - 援助規範意識との関連から - 明治学院大学文学研究科 心理学専攻紀要 第6号 15-23.

横湯 園子 (2005) いかに、いじめのトラウマと回復につきあうか In 土屋基規・P.K. スミス・添田久美子・折出健二 (編著) いじめととりくんだ国々-日本と世界の学校におけるいじめへの対応と施策 ミネルヴァ書房.

播州高砂の「大蔵元」について

中川すがね

平成 22 年 10 月 29 日受理

Historical research of merchants named “Ohkuramoto” in port Takasago of Edo period

Sugane Nakagawa

要旨

近世に加古川の河口港として栄えた高砂の大蔵元は、加古川上流から下る領主津出し米や商人荷物の荷受けを独占的に行った「特権商人」として知られる。近世前期には廻船による塩・米の廻漕に従事し、隔地間流通により富を得ており、加古川流域の流通と全国的な流通は、大蔵元において連結されていたのである。

近世後期には、塩と米の価格低落により廻船による隔地間流通は困難となり、大蔵元の業務の中心は加古川下りの領主米と商人荷物の荷受に移行した。大蔵元は宝暦8年(1758)に株仲間化し、仲間の取り決めや領主との交渉など前例も含めた規定集を連判帳として整えた。しかし津出し米の減少や河口港今市との競合に打撃を受け、領主から蔵元の地位と引替に貸付を迫られ、仲間としての統制が失われるに至った。

キーワード：大蔵元、播磨、高砂、姫路藩、加古川、廻船、米、塩、蔵元、商品流通、荷受問屋、年貢米、特権商人

Abstract

The merchant named “Ohkuramoto” in port Takasago are carriers of large ships, in the first half of Edo period. They bought the salts produced in local, and transported it with ships. And, the salts were sold off for a high price in Edo and the Sea of Japan coast. They bought rice there, and sold it high in a different region.

In the latter half of Edo period, Their main work was to receive the commodity (Annual rice tax and A variety of forest products) carried from the Kakogawa upstream by the riverboat, and to have mediated the buying and selling. However, the amount of the collection of cargo commodity decreased, and they had much financial difficulty. In order to improve financial health, they formed the guild that limited the number of people, and decided the rule of the transaction system. However, the work of them that competes with other merchants, kakogawa shippers to send goods from the upstream of violating the rules. The feudal lords were demanding money instead of giving them “Kuramoto” jobs, thus, a conflict arose even within the “Ohkuramoto” guild.

Keyword : Ohkuramoto, Harima, Takasago, Clan Himegi, Kakogawa, rice, salt, Cargo ship, kuramoto, commercial distribution, wholesale consignee, annual rice tax, privileged merchants

はじめに

近世の播磨国高砂は加古川の河口港の一つとして繁栄した。本論では高砂の大蔵元といわれる商人について検討する。

西向宏介氏は、19世紀に地域市場が幕藩制的市場をいかに変質させ解体させるかという問題意識から、地域市場としての加古川筋流域を検討した^{註1}。すなわち大門蓬萊家など「当該地域の一部商人が振手形を授受しえたことは、地域市場の発展に深く関わる動き」であり、印南郡沿岸からの魚肥移入と篠巻・実綿の移出において、19世紀の北前船による新たな

全国市場の展開と連動するとしている。高砂大蔵元はそれに対立する領主的ないし幕藩制的市場を担う「姫路藩特権的商人」と捉えられている。

ただ高砂の大蔵元がいかなる意味で特権的で、どのような流通の担い手なのか、これまでの研究は十分とはいえない。高砂の大蔵元が領主米の集散に関わったことはすでに知られているが、19世紀の流通構造の変化をみるためには、近世前期にまで遡って大蔵元のありかたの変化を検討しなくてはならない。その上で、近世後期の大蔵元が直面した問題とは何か、明らかにしたい。

第1章 近世前期の大蔵元

第1節 高砂の蓄積基盤の変化

「高砂雑志」^{註2}に、高砂の商業の変化について以下のような興味深い見解が記されている。

或人曰、夫高沙ハ海舶河舟輻輳交易之地にて、其上廻船数有て北海又西國え通へハ誠に囊中より物を取出す様にて度毎に数千金の利を得ざる事なけれハ、此余榮にて比屋繁昌の事今更云ふ不及。河上より米穀及雜物等高瀬なる船にて積來運送賣買時を不移蔵敷口錢取之、是等ハ物の数ならね共古人遠慮有て蔵元株なるものを定め、仲間法式を建、諸大名方えも嚴重に應接なす事実に古人の智慮卓識にあらざれハ不能也。

つまり「高砂雑志」の著者で大蔵元柴屋一統の三谷恒守の意見では、高砂に繁栄をもたらしたのは地元の大型廻船による遠隔地流通であって、加古川上流から運ばれる商品の荷受業務は、「物の数」ではなかった。しかし大蔵元が株仲間化して仲間の規定を定め、領主とも厳しく交渉してきたことは卓見だったと三谷も認めている。

高砂の蓄積基盤が廻船活動から加古川舟運へと移動し、大蔵元の仕事も変化したという指摘は注目される。また大蔵元の株仲間化を単なる特権化としてではなく、仲間の規定を定めることで領主と対抗してきたととらえる考え方も興味深い。

第2節 近世前期の高砂の大型廻船

本節では、前節で述べた近世前期の高砂の廻船活動について検討する。

寛文8年(1668)改「播州記録私覚集」^{註3}の「商船数之覚」によれば、姫路藩領の船は1234艘、その内高砂の船は266艘ある。高砂の船の内、300～650石積13～20端帆の大型廻船が5艘あり、中近距離航行を行う渡海船として100～210石積7～13端帆75艘、10～95石積3～8端帆186艘があった。

この17世紀後半の西廻航路開発前後の時期から18世紀前半までが高砂の廻船業の全盛期である。天明8年(1788)「慶長六年以降伝聞等記録綴」^{註4}には、以下のような伝承が記されている。

扱今之高砂へ移りてより繁昌いたし、大船を廻船といふ、凡四五百石より八百、千石、千式百迄之廻船百拾艘程有りし由、一艘二艘より十一艘迄も持たる有、高砂賑敷事也、然処六七十年以来段々衰微いたし、家数式千八百軒も有りし所、今ハ式千軒不足様ニ罷成候、右ハ船数減り候而漸大艘六艘斗ニ相成候ニ付、船手持

之もの他所罷出、先々ニ而住所仕候ニ付、家数人別共格別減り申候

すなわち、高砂にはかつて4、500石から1200石も積む大型廻船が110艘程あり、多数の船を持つ船主もいたが、享保(1716～36)頃から廻船数が減り、船手稼ぎの者が流出して人口も減少したというのである。

また前掲「高砂雑志」によれば、最も繁栄した元和・寛永の頃高砂の人家は4000軒余もあったというが、「慶長六年以降伝聞等記録綴」は享保期頃2800軒ほどで、それから減少して天明8年には2000軒以下となつたとしている。高砂の人口としては、1765年8377人、1775年8097人、1809年7015人、1868年6096人というデータがあり^{註5}、減少傾向にあることは確かである。ただこれは高砂固有の現象とはいえ、姫路城下の人口も同傾向であることは注意しなくてはならない。

安永2年(1773)正月に御船役所に提出された船帳の写^{註6}では、廻船は500～750石積の8艘である。また「慶長六年以降伝聞等記録綴」によれば、天明8年段階では廻船は6艘のみで、幕末の「高砂雑志」では廻船は皆無だった。近世後期の高砂の海運業は、200石未満の貨客船である渡海船が中心である^{註7}。

第3節 塩の隔地間流通

17世紀後半には、高砂の大型廻船が遠距離を航行して隔地間流通を担った史料が残されている。「高砂雑志」には、大蔵元柴屋(三谷)三郎右衛門家の祖先の来伝(1652～1741)の伝が載っている。

家に持處の運艦都て四艘、内一葉丸ナル者を自身に配して是に乗。或年年米を積、十二月大晦日夜江門をさして遠江灘を乗る。(中略)翌々正月二日無恙江戸着船、大利を得。(中略)亦、或時志摩州鳥羽水門發す此時塩を積、湊を出、頻りに塩の俵を捨流す。外船是を見て天氣に見所是あるにや、來傳恣なすと皆不審して船を不出、獨江府に至。此時しも塩拂底して人各青面におよぶ。かゝれハ價騰躍して心にもなき格別の利培を得る。

これは柴屋来伝が、所持する4艘の廻船の内一葉丸に自ら船頭として乗り込んで、米や塩を他より早く江戸に届けたことから巨利を得たとする伝承である。大晦日に船を出すことは不吉という考えがあったらしいが、来伝は恐れずに出航し、他の塩船を出し抜くために積荷の塩を流すという謀計も企んでいる。来伝の生没年からこれは17世紀後半のことだろう。

西廻航路開発前から江戸には上方から毎年塩船が入津し、そのなかでも高砂の西隣の荒井村の名を冠した荒井塩は重要な商品だった。武蔵国川越の商人、榎本弥左衛門忠重(1625～86)が残した「万之覚」^{注8}には、慶安3年(1650)以降荒井塩の記事が含まれている^{注9}。ここに出てくる荒井塩の販売量は荒井村塩浜の産出量より多く、周辺の上灘目の塩浜の産出塩を含んでいた。高砂の塩浜も隣村である荒井村の塩浜と一体化しており、万治2年(1659)には高砂浦の太郎右衛門が荒井の塩浜6反3畝余を所持するなど、その所有関係は入り組んでいた。荒井の塩浜は慶長期(1596～1615)以前に遡るので、高砂の塩浜も古くからあったと推定されるが、寛文8年(1668)改「播州記録私寛集」の姫路領塩浜の書上には高砂の塩浜は記載されず、高砂の町場形成とともに一旦廃絶したとみられる。その後延宝9年(1681)までに3町1反3畝余の古浜が作られた^{注10}。また延宝9年に姫路藩主松平直矩が沖新浜を作らせて塩浜総面積は20町6反4畝余となっており、その生産塩は荒井村の塩浜の例から類推して年2万石前後と考えられる。高砂には塩問屋が作られ、加古川を遡及して内陸部に運ばれるとともに、来伝など高砂の廻船主により江戸に回漕された。高水準の塩価のもと、生産地と消費地間の価格差を利用して投機的な利益を得たのである。

また上灘目の塩は日本海側の北国にももたらされていた。瀬戸内塩は正保3年(1646)に庄内藩領に陸上げされた例があり、寛文期以降は上方廻米の増加によりその帰荷として移入が増え、能登塩を圧倒したといわれる^{注11}。庄内酒田港では天和2年(1682)に播磨塩が上方から多数もたらされているという記事があり、越後直江津でも元禄10年(1697)には斎田・竹原・播磨・荒井の塩が入っている^{注12}。

高砂の大蔵元塩屋(三浦)甚兵衛家は製塩を業として、17世紀に遡る道栄の時代から日本海側への塩の廻漕を行って財を築いた。その廻船の立ち寄り先は、出雲崎(新潟県)の間屋播磨屋市右衛門、新潟の船問屋玉木彦兵衛、加茂(新潟県)の船宿納屋喜太郎、庄内酒田(山形県)の船宿加賀屋六兵衛などである。また元文5年(1740)に、塩屋甚兵衛信成は旅先の加茂で瓦屋三右衛門・小松屋吉右衛門・柴屋船頭など高砂の知人に出会い、酒田では高砂の廻船主の川端伊右(左)衛門に会っており、北国は高砂の廻船活動の主要な舞台であったと思われる。塩屋甚兵衛の持船は、宝暦12年(1762)5月20日にも温泉津(鳥根県大田市)に入津したことが船宿加賀屋藤左衛門の客船帳「諸廻船御往来改記帖」^{注13}からわかる。この船は船頭卯平以下14人乗りの大型船で、塩を庄内へ積み下る途中

であった。

以上のことから、近世前期の高砂の繁栄の礎が、製塩と大型廻船による江戸・北国といった遠隔地への塩の輸送にあったことは間違いないだろう。

また高砂の廻船は、塩の帰荷として庄内米など北国米や材木を買い入れていた。元禄14年に、高砂の船頭植右衛門以下14、5人乗の大型廻船が庄内で1899本の材木と米163俵を購入して積み上っていた途中、但馬柴山沖(兵庫県香美町)で遭難して石見黒松浦(鳥根県江津町)に漂着した例がある^{注14}。

高砂には近世初頭から加古川上流の米がもたらされているので、北国米は帰荷として商業目的で買われたものだろう。先に挙げた柴屋来伝の例でも、江戸回漕米は播磨米ではなく北国米である可能性がある。江戸は当時米の一大消費地であり、17世紀後半には和泉国湊村の廻船業者新屋が北国米を買って江戸に回漕し、干鰯を上方に持ち帰る活動をしていた例がある^{注15}。

また享保3年(1718)には、高砂の船頭次右衛門の廻船が商売のため酒田に空船で下り、繫船中に洪水により遭難している^{注16}。これは米の運賃積みのため下ってきたのであり、高砂の廻船が北国で運賃積みも行っていたことがわかる事例である。

第4節 大蔵元の廻船活動

石見温泉津・出雲鷺浦・酒田飛鳥・佐渡真更川船宿土屋三十郎^{注17}などの客船帳や鞆の太田氏正巳氏所蔵客船帳^{注18}には、高砂の7～17人乗の大型船の船主・船頭の入津記録がある。ただし1720年代に但馬今子浦に入津した炭屋源右衛門の船を除き^{注19}、ほとんどは1730年代以降の記録に現れる。こうした客船帳類に出てくる高砂の船主を、表1にまとめた。

これを見ると、先に述べた大蔵元塩屋(三浦)甚兵衛の他に、大蔵元魚屋三郎助(三之助)・三郎兵衛やその親族である魚屋治郎八ら魚屋(伊沢)一統、大蔵元柴屋太郎兵衛・大蔵元柴屋七太夫・大蔵元柴屋善太夫ら柴屋(三谷)一統、大蔵元二見屋太兵衛などの名前があることが確認できる。川端屋伊右(左)衛門ら川端屋一統も大蔵元川端屋宗兵衛の関係者の可能性があるが、確認できない。

この内、魚屋三郎助(三之助)・三郎兵衛は延享元年(1744)以降酒田飛鳥の津国屋の客船帳^{注20}や、前掲温泉津加賀屋藤左衛門「諸廻船御往来改記帖」などに入津が記録されるようになる。しかし高砂神社蔵「永代覚牒」には、享保15年(1730)正月25日夜の火事で焼けた魚屋三郎兵衛の船として900石の相生丸、800石の若戎丸、600石の地福丸の名が挙げられている。

表1 客船帳などにみる高砂の船の船主と船 ※年月・寄港地・船名・乗組水主数・(上り・下りの別) を記載した。

船主/年代	1711年～	1721年～	1731年～	1741年～	1751年～	1761年～	1771年～	1781年～	1791年～	1801年～
塩屋長三郎		1730.08 鷺浦13(材木)	1738.03飛鳥灘 吉丸11 1738.04 飛鳥灘吉丸15・ 戎丸11・住吉丸 15 1739.05飛鳥 稲荷丸10							
塩屋平四郎 (千四郎)			1739.07 飛鳥灘吉丸9 1740.08 飛鳥灘吉丸17	1745.08 飛鳥灘吉丸14 1746.04飛鳥14						
塩屋甚兵衛						1761.05温泉津 14乗(塩庄内上)				
塩屋安吉						1761.05温泉津 10(塩積庄内下)				
塩屋四郎兵衛									1795.07温泉津千 歳丸13(庄内上)	
魚屋万治郎			1738.04 飛鳥万歳丸13 1738.04 飛鳥灘吉丸11							
魚屋伊沢三郎 助(三之助)				1744.05 飛鳥自在丸11 1744.07飛鳥13 1745.04 飛鳥大黒丸13 1746.03飛鳥13	1752.06飛鳥 自在丸13 1753.05飛鳥13					
魚屋伊沢三郎 兵衛					1759.05 温泉津自在丸 13(能代下) 1760.02 温泉津自在丸 13(庄内下)	1762.05温泉津 万歳丸14(庄 内下) 1763.08温泉津 万歳丸14 1766.03温泉津 万歳丸14(秋 田下) 1770.03温泉津 戎丸7(庄内下) 1770.06温泉津 小戎丸7(庄内 下)	1775.05 温泉津自在丸 13(庄内下) 1778.06 温泉津伊勢丸 (秋田下)	1783.05温泉津 戎丸7(庄内下) 1787.06温泉津 万歳丸14(庄 内下)	1791.05 温泉津小戎丸7 (因幡下)	
魚屋四郎兵衛				1740.03 飛鳥永楽丸15 1740.08 飛鳥永楽丸11						
魚屋治郎右衛門				1740.03 飛鳥伊勢丸11 1740.08 飛鳥伊勢丸15						
魚屋治郎八				1744.07飛鳥11 1745.07 飛鳥千歳丸15 1740.08 飛鳥千歳丸11						
川端屋伊右 (左)衛門			1738.04 飛鳥天神丸12 1738.05 飛鳥明神丸10	1744.06 飛鳥明神丸14 1745.05飛鳥12			1775.05温泉津天 神丸12(秋田下)	1781.04浜田長 浜天神丸		
川端屋伊之助			1738.04 飛鳥住永丸15							
川端屋与左衛門				1750.07飛鳥12	1759.05 温泉津天神丸 12(秋田下)		1774新潟佐野 客船帳	1783.07 温泉津住吉丸 10(秋田下)・ 福吉丸9(能代 下)		
川端屋与三治郎								1781.04 浜田天神丸		
柴屋甚右衛門			1731.06温泉津11							
柴屋七郎右衛門			1738 飛鳥宝刀丸10	1750.07 飛鳥明吉丸10						
柴屋七郎左衛門			1738.04飛鳥13 1740.04 飛鳥幸丸9							
柴屋治右衛門			1738.04 飛鳥宝来丸10							
柴屋喜一郎			1738.04 飛鳥男野丸12							
柴屋甚七			1738.04 飛鳥福吉丸15							
柴屋善太夫			1738.04 飛鳥日吉丸11							
柴屋七太夫			1738.04 飛鳥愛宕丸15 1739.07 飛鳥難浪丸15 1740.08 飛鳥満徳丸19							

船主/年代	1711年～	1721年～	1731年～	1741年～	1751年～	1761年～	1771年～	1781年～	1791年～	1801年～
柴屋源六			1739.07 飛鳥渦徳丸11 1740.08 飛鳥渦徳丸17						1802.04 浜田長浜	
柴屋太郎兵衛			1740.03 飛鳥増福丸13	1745.05 飛鳥勇力丸13 1746.07 飛鳥13 1749.04 飛鳥和光丸13 1750.07 飛鳥明吉丸13						
柴屋七郎助					1753.04 飛鳥和光丸13 1754.04 飛鳥有力丸13・ 和光丸13			1783.06 温泉津竜王丸 13 (庄内下) 1783.06 温泉津和光丸 11 (庄内下) 1783.06 温泉津明吉丸 10 (庄内下)		
炭屋源右衛門	1721.07 今子浦11	1738.04 飛鳥伊勢丸10								
炭屋伊左衛門						1763.03温泉津万 歳丸13乗(秋田下) 1765温泉津住吉 丸13乗(秋田下)				
二見屋太兵衛			1783.04 飛鳥神永丸12							
加茂屋(加古) 儀兵衛		1739.08 飛鳥八幡丸15 (秋田沖荷物投 棄浦状) 1740.08 飛鳥八幡丸15								
水屋市兵衛		1738.05 飛鳥住栄丸9	1744.07 飛鳥11							
小松屋伝吉			1744.05 飛鳥八幡丸9							
塩屋五郎兵衛			1739.05 飛鳥報 徳丸9	1759.05 温泉津徳風丸 12 (能代下)	1765 温泉津報徳丸 11 (越後下) 1767.06 温泉津慶徳丸 12 (庄内下) 1767.08 温泉津徳風丸 12 (秋田下) 1769.03 温泉津徳風丸 12 (秋田下)	1773.08 温泉津徳風丸 11 (庄内下) 1774新潟佐野 客船帳 1776.08 温泉津小灘吉 丸7 (能代下)・ 報徳丸11 (越 後下) 1778頃.08 温泉津報徳丸	1783.06温泉津 慶徳丸13 (庄 内下) 1788.09温泉津 報徳丸14 (庄 内下)	1791.08 温泉津報徳丸 13 (庄内下) 1793.04 温泉津小灘吉 丸7 (庄内下)		
松鶴屋治三郎			1738.04 飛鳥利徳丸11 1738.04 飛鳥万歳丸15 1740.03 飛鳥利徳丸9 1740.09 利徳丸飛鳥11	1744.05 飛鳥12						
松鶴屋太治郎			1740.03 飛鳥増福丸111 1740.09 飛鳥増福丸14							
枝川平右衛門			1744.05 飛鳥10							
瓦屋宇右衛門				1745.05 瓦屋? 飛鳥11	1751.04 飛鳥天王丸11 1753.03 温泉津11 (庄 内下) 1753.04 飛鳥天 王丸11 1760.02 温泉津天王丸 11 (庄内下)	1762.05 温泉津 112艘 (庄内下) 1766.07 温泉津天王丸 11 (庄内下) 1767.03 温泉津天王丸 11 (庄内下)	1774新潟加賀 屋客船帳 1774.09 温泉津万歳丸 11 (越後下) 1780.05 温泉津徳風丸 12 (秋田下) 1780.07温泉津 慶徳丸12 (秋 田下商いあり)	1782.04 温泉津万歳丸 14 (庄内下)		
かまたや勘兵衛						1765.01 浜田八幡丸				
かまたや善三郎						1767.01 浜田塩壳				
狩網屋市右衛門										1804.01 浜田外ノ浦 1804.04 浜田外ノ 浦下干鯛買上 1805.01 浜田外ノ浦 1805.04 同下干鯛 買上 1809.01 浜田外ノ 浦冥加丸04.20下 1810.05 浜田長浜 伊勢丸

これからも、高砂の大蔵元らが現存の客船帳に記録される以前から廻船業に従事していたのは確実である。

もちろん船主がすべて大蔵元とは限らない。塩屋五郎兵衛家は、文久2年(1862)に清次郎が大蔵元仲間に加わるまでは、高砂の有力な干鰯問屋にして小蔵元である。同家の廻船も、1730年代から90年代にかけて庄内・秋田地方との間を往復している。これは魚肥の買い出しをしていた可能性が高いだろう。

高砂では貞享3年(1686)・宝永3年(1706)に塩浜の田直しが行われ、最後まで残った延宝9年(1681)開発の沖浜9町7反5歩も宝暦期(1751～64)には生産量が減退して、明和元年(1764)にはまだ8052石の塩が取れていたものの、同5年には浜新田に直され、高砂の塩浜は消滅した。

それでも1760年代以降もしばらく高砂の廻船活動は続いている。塩屋安吉の船は庄内、かまた屋勘兵衛・善三郎の船は浜田へ塩を売りに下っている。日本海側への塩の回漕がある程度続いたのは、周辺の上灘目地域で製塩が続行していたが、瀬戸内では生産過剰で売却が困難になっていたこと、また魚肥買入のため北国に船を派遣するようになっており、その往路の荷物としてではないだろうか。

19世紀に入ると、北国の諸湊の客船帳類から高砂の廻船の記録は消える。山陰浜田外ノ浦の清水家「諸国御客船帳」^{註21}に高砂船の入津記録はあるが、その用向きは干鰯の購入ないし運賃積みである。それ以前の塩・米を中核とする隔地間流通とは異なっており、船の大きさもおそらく小型化している。

高砂の廻船が消失した理由としては、近世後期の塩・米の価格低下が考えられる。それにかわり、商品価値が増したものとして播磨での商品作物栽培の拡大にともない需要が増した魚肥があったのではないだろうか。しかし魚肥は、大坂から高砂に流入し、高砂の渡海船が瀬戸内周辺に買い出すこともあり、瀬戸内沿岸の諸湊に北前船などがもたらすものもあった。地元の塩の買い積みに較べると、不利な条件にある。高砂の大型廻船が減少し、大蔵元が廻船による隔地間流通から荷受業務へと蓄積基盤を移していく理由は、そのあたりにあるのではないだろうか。

第5節 加古川舟運と大蔵元

近世前期の大蔵元と加古川舟運の関係を示す史料は少ないが、加東郡滝野河岸の船座阿江家の文書のなかに、高砂の領主蔵元や荷受問屋に関する史料がわずかながら含まれている。

加古川舟運は下流から上流に向かって段階的に成立し、慶長11年(1606)以降のほど近い時期に、上流

本郷から河口まで約50キロメートルの通船が可能となった^{註22}。それ以降、加古川舟運は、丹波水上郡・東播磨の多可・加東・加西・美囊・印南・加古の諸郡の物流を支えたのである。陸送により由良川と連結され、山陰や摂津有馬郡の物資も加古川を下った。

高砂で商人荷物の荷受がいつから始まったかは不明である。万治3年(1660)には、摂津有馬郡大川瀬村のおこし炭が加古川中流の大門口岸を經由して「高砂宿川崎屋三郎兵衛」に送られている^{註23}。また寛文4年(1664)には丹波福知山の商人が加東郡新町河岸を經由して「高砂ニ而我等宿忠三郎」に荒苧を積み送り、さらに上方に送らせた^{註24}。このように、17世紀半ばには加古川舟運により丹波・奥播磨の林産物や米を河口の高砂の舟宿に運ばれていることが確認できる。また寛文8年には後の大蔵元、炭屋二(次)郎右衛門と赤穂屋善五郎が、加東郡滝野舟座と新町の争いに、嚆人として調整に入っている^{註25}。この時期には、後の大蔵元の一部は加古川舟運と関係し、荷受を行っていたのである。

延宝3年(1675)4月の「滝野村荷宿帳」^{註26}は、加東郡滝野河岸の船座座本の阿江家以外の荷宿(問屋)の書き上げである。これによると、半十郎以下8名は多可郡20カ村の御城米を荷受するほか、多可郡各村や高砂・今市・加古川といった各地の商人のべ57名に向けた「多可郡・加西郡商人」の荷宿をしていた。たとえば二郎兵衛は多可郡3カ村城米の荷宿のほか、多可郡・加西郡商人16人の荷宿を勤めている。この16人の内には高砂の甚兵衛と今市の九郎兵衛・長左衛門が存在している。甚兵衛と長左衛門は、高砂・今市の豪商である塩屋(三浦)甚兵衛・鈴木長左衛門である可能性があり、興味深い。またこのことから、多可郡・加西郡から滝野河岸の荷宿を介して高砂・今市といった河口港へ商品が送られていることがわかる。おそらくその帰り荷としては塩や干鰯が送られたのだろう。

第6節 領主蔵元としての大蔵元

大蔵元は加古川上流の幕府城米、大名・旗本などの年貢米で高砂湊から津出しされる領主米を荷受し、江戸・大坂等に回漕した。

近世前期に高砂に津出しされた領主米の全体像がわかる史料はない。丹波国水上郡の柏原藩3万6000石の年貢米は二代藩主織田信則時代の元和元年(1615)には新町に出されたという史料があり^{註27}、初期から高砂に川下げされて大坂に廻米されていた。慶安3年(1650)に三代藩主織田信勝が死去すると、その所領は幕府領となり、代官藤林市兵衛支配下で一時期地払・銀納が命じられたが、「此御売米大坂江上せ、あるひ

ハ其村庄屋・百姓買請川筋江出シ売申分共ニ田高村舟越、又ハ馬越にて出シ申分共」も、瀧野・新町へと出ているという^{注28}。丹波では米の市場が未発達だったことから、地払米の多くは高砂に川下げされたのである。寛文期(1661～73)には丹波幕府領御城米も川下げされて高砂から江戸・大坂に送られるようになり^{注29}、寛文8年には滝野・新町の間で丹波の御城米・大名米・商人米・雑穀の荷分けが行われている^{注30}。

また寛文6年の滝野舟座の阿江九郎兵衛の「乍恐御返答」によると、松平伊賀守(丹波亀山藩)・松平美濃守・織田弥十郎(旗本・丹波領)・九鬼孫次郎(摂津三田藩飛地)・川勝丹波守(旗本・丹波領)の年貢米及び家中米も瀧野・新町に出されて川を下り、松平忠房が福知山に入部(慶安2年)すると、その年貢米も大分高砂に出されたという。

また幕府領の多い多可郡でも、代官中村左右衛門支配の嶋村組・黒田組の御城米は、明暦2年(1656)以前から高砂に瀧野・新町から高砂蔵元に川下げされて江戸に廻米されていた^{注31}。

ところが元禄期(1688～1704)には丹波で注目すべき変化がみられる。元禄7年10月15日の新町村舟持の「乍恐御訴訟申上候」^{注32}は、近年丹波で田方綿作が広がり、百姓が年貢を銀納したことから米が不足し、丹後・但馬の米までも買い留め、新町に米が出てこないと訴えている。丹波での商業的農業の展開が年貢米・商人米を減少させて、加古川筋への丹波米の移出を減らしたのである。綿作にしても、最初の実綿を加古川筋に送り出していたが、やがて繰綿と綿実に分けて売り出すようになり、丹波での綿布や油の生産や独自の流通も盛んになった。こうした産業の成立は、丹波の農産品・原材料の供給地としての性格を変え、米需要を生じさせて米市場を成立させた。とりわけ18世紀半ばには大坂米価が下落したこともあって、領主にとってわざわざ運送費を払って加古川筋から大坂廻米するより、丹波での年貢地払や銀納が有利になる状況があったのである。

寛保3年(1743)に滝野舟持が申し合わせた「定」では、「近年奥方より出来候荷物無数罷成」とあり、領主米に限らず丹波からの商品量が減退していたと考えられる。滝野などを介して丹波の荷物を荷受する高砂の大蔵元にも当然影響を与えただろう。

第7節 大蔵元仲間と株仲間化

高砂大蔵元の個々の動静はともかく、近世前期の大蔵元仲間の動きはほとんどわからない。天保13年(1842)に大蔵元年番が姫路藩町方役所に提出した仲間の規定の証拠書類として、文禄11年(1594)10月・

明暦4年(1658)8月・延宝4年(1676)9月の申合書3通と明和7年(1770)10月・安永2年(1773)10月・天明4年(1784)8月の申合規定3冊があるが^{注33}、内容は不明である。

高砂は慶長5年に姫路に入部した池田輝政が東加古川西岸の河口港として注目して整え始め、第一次本多時代の元和～寛永期(1615～44)に港と市街が整えられたというのが通説であるので、文禄11年段階から大蔵元の仲間的なものがあって申し合わせをしたとは考えにくい。しかし明暦4年は加古川の瀬違えが行われて高砂に至る東加古川が本流となり、高砂など姫路領村々と西加古川の今市の間で、新造の今市・中嶋川の川流えに関する一札が作られた年である。この事態に際し高砂の大蔵元らが何らかの申し合わせをした可能性はあるだろう。

大蔵元仲間の動向として確かなのは、宝暦8年(1758)から大蔵元運上ないし冥加銀として銀3枚(129匁)を姫路藩に上納していることである^{注34}。この時「新入并株譲売買等停止之儀御願奉申上、願之通被仰付」と後年の記録に記される^{注35}。すなわち21株の株仲間としての大蔵元仲間がこのとき成立したのである。

第2章 近世後期の大蔵元

第1節 大蔵元仲間の変化

高砂の蓄積基盤の変化と軌を一にして、大蔵元メンバーも変化した。表2は、宝暦3年(1753)に株仲間化して以降の高砂の大蔵元仲間の変遷を、仲間の記録や幕末の「高砂雑誌」の「蔵元転輪」から推定したものである。

表2の1の塩屋甚兵衛から8の炭屋玖右衛門までは、「高砂雑誌」で株仲間成立以降元治元年(1864)まで大蔵元として続くとされる家であるが、9以降の株は途中で移動している。特に文化11年(1814)には「仲間之内困窮之儀も有之候二付」^{注36}という理由で、仲間から株譲渡を願い出て許され、赤穂屋繁蔵・二見屋太郎兵衛・英賀屋嘉右衛門の株が移動した。その後、文化12年に柴屋善左衛門、文化13年に川端屋宗(惣)右衛門が株を手放している。そのあとも文政期(1818～30)にかけて大蔵元株は流動化し、入れ替わりながら仲間が預かる明株も増加した。赤穂屋は寛文期(1661～73)の善五郎以来の大蔵元であり、柴屋善左衛門も柴屋一統の本家の家筋で先祖は大廻船主であり、かつては三木松平右近将監(館林藩飛地)の年貢米1万石他諸領主の蔵元でもあった^{注37}。こうした旧来の大蔵元が、化政期に相続いて経営不振を訴えて大蔵元から撤退するのである。

そしてそれにかわり仲間に新規参入した者の多くは

表2 大蔵元の変遷（『高砂市史』第2巻より転載）

元 株	文化6年 (1809)	文化7・8年 (1810・11)	文化9年 (1812)	文化10年 (1813)	文化11年(1814)～ 天保6年(1835)の変遷	天保7年 (1836)	元治元年 (1864)	備 考
1 塩屋(三浦)甚兵衛	塩屋平太郎	(同)	(同)	(同)		塩屋甚兵衛	塩屋甚兵衛	開株以来継続
2 柴屋(三谷)七太夫	柴屋七太夫	(同)	(同)	(同)		柴屋七太夫	柴屋七太夫	開株以来継続
3 柴屋(三谷)三郎右衛門	柴屋三郎右衛門	(同)	(同)	(同)		柴屋三郎右衛門	柴屋三郎右衛門	開株以来継続
4 炭屋(馬場)六右衛門	炭屋六右衛門	(同)	(同)	(同)		炭屋六右衛門	炭屋六蔵	開株以来継続
5 米屋(中須)又右衛門	米屋又右衛門	米屋甚太郎	(同)	(同)		米屋又右衛門	米屋又右衛門	開株以来継続
6 魚屋(伊沢)喜右衛門	魚屋三郎兵衛	魚屋万次郎	(同)	(同)		魚屋紀太郎	魚屋季蔵	開株以来継続
7 米屋清兵衛	米屋清兵衛	(同)	(同)	(同)		米屋瀬兵衛	米屋清兵衛	開株以来継続
8 炭屋玖(久)右衛門	すみ屋久右衛門	すみ屋久兵衛	(同)	(同)		炭屋玖左衛門	炭屋久右衛門	開株以来継続
9 川口屋又三郎	川口屋又三郎	(同)	(同)	(同)	(文政7)→塩屋次右衛門	塩屋(小西)次右衛門	塩屋次右衛門	
10 柴屋(三谷)太郎兵衛	柴屋太郎兵衛	(同)	(同)	柴屋善左衛門	(文化12)→塩屋四郎兵衛 (文政11)→〔質物〕 →塩屋彦左衛門	塩屋(菅野)彦左衛門	安田屋長兵衛	
11 (赤穂屋善五郎)	あこ屋八右衛門	(同)	(同)	あこ屋繁蔵	(文化11)→加古川屋長兵衛	加古川屋定次郎	塩屋(菅野)彦左衛門	
12 二見屋太兵衛	二見屋太兵衛	(同)	(同)	二見屋多兵衛	(文化11)→魚屋仲兵衛 (文政6)→塩屋吉兵衛 (文政12)→木綿屋(岸本)吉兵衛→枝川屋新左衛門	枝川屋(津田)助次郎	枝川屋助二郎	
13 川端屋総兵衛	川ばた屋常蔵	川ばた屋惣右衛門	(同)	川ばた屋宗右衛門	(文化13)→網屋太右衛門 (天保元)〔藩に株取上〕→仲間引受 →網屋利助	網屋(小林)利助	網屋利助	
14 英賀屋太兵衛	あが屋嘉右衛門	(同)	(同)	(同)	(文化11)→小間物屋儀兵衛	小間物屋(河合)儀兵衛	小間物屋儀兵衛	
15 木下屋利兵衛	木下屋利兵衛	(同)	木下屋利助	木下屋利兵衛		木下屋利兵衛	柳屋宗兵衛	
16 鍵屋源右衛門	鍵屋源右衛門	(同)	(同)	(同)		鍵屋源右衛門	(不明)	
17 鍵屋(入江)孫右衛門	鍵屋孫右衛門	鍵屋庄之助	(同)	(同)		米屋孫右衛門	備後屋重兵衛	
18 柴屋善太夫	柴屋善太夫	(同)	(同)	(同)		柴屋七郎兵衛	大門屋源次	
19 加茂屋孫左衛門	加茂屋勝之助	(同)	(同)	(同)		加茂屋孫次	塩屋清次郎	
20 (坪屋要助)	つば屋小市郎	(同)	つば屋重左衛門	(同)		坪屋(梶原)長左衛門	仲間買入れ	
21 (炭屋)	炭屋熊之助	(同)	(同)	すみ屋文之助		炭屋次郎右衛門	仲間買入れ	

※「大蔵元定法・運賃蔵敷極仲間連判帳」・「高砂雑誌」・「(大蔵元定法)」より作成した。ただし史料の性格上変遷の全てを網羅しているものではなく、史料間に矛盾もあるため推定の部分を含んでいる。

また人名については、同一人物でも表記が異なる場合がある。元株については「高砂雑誌」の記載を採用したが、他の史料により()として一部追加または変更している。

干鯛商であり、すでに小蔵元となっていた者もいた。表2の塩屋彦左衛門・網屋利介・小間物儀兵衛・塩屋清次郎は干鯛問屋で、網屋利助・坪屋長左衛門・塩屋清次郎は大蔵元と小蔵元を兼ねたことが確認できる。また弘化2年(1845)には柴屋善七郎の株が加東郡大門河岸の酒屋惣兵衛に質入れされていたのが、柴屋が身上不如意となったため、質流れで惣兵衛持となった。こうして高砂外に1株が流出したが、酒屋惣兵衛の倅が高砂町に引越して大門屋源次という名で大蔵元を営んだ。

嘉永5年(1852)に大蔵元仲間は17人にまで減少していたが、後述するように領主蔵元職を争奪するなど仲間としてのまとまりが崩れたため、翌年にかけて株譲渡の再禁を高砂町大年寄に運動している。この結果は明らかではない。文久2年(1862)には小蔵元の塩

屋五郎兵衛家の清次郎が加茂屋孫次郎株を譲り受けて大蔵元になっているので、株譲渡が禁止されたわけではないようである。

第2節 大蔵元の「蔵元定法・蔵舗運賃極連判帳」

近世後期の蔵元の業務は「御城米始諸大名様方御津出御米蔵元」・「諸方商人諸荷物請払蔵元」と記されている。つまり大蔵元は領主米の蔵元であると同時に諸品荷受問屋であるという二重の性格を持つ。

大蔵元は年一度定期的な寄合を持ち、仲間に関わる問題を話し合い、規定を定めていた。この規定は一般的に「蔵元定法・蔵舗運賃極連判帳」(以下連判帳)と称され、小蔵元・高砂の町役人も立ち会って連印した。ただし立ち会いが中絶して、連判帳が作られなかった時期もあったようである。たとえば天保6年(1835)

表3 大蔵元規定に関する史料

	記載年度	史料名	所蔵	伝来経緯	定※1	覚※2	奥筋荷物改之事※3	定※4	覚※5	運賃定	高砂浦地法申上候控	大蔵元仲間諸事覚
A	嘉永5年(1852)～安政4年(1857)の連判	「蔵元定法・運賃蔵鋪極仲間連判帳高砂町」	高砂市立図書館	工楽文庫印あり	15項目	5項目	4項目(Cのみ3項目だが内容同)	26項目	22項目	大坂行運賃80項目(Aのみ天明3年改訂の文言あり)、	享保18年～文化9年	文化11年～嘉永7年
B	文化6年(1809)～文化10年までの連判	「(大蔵元定法)」	中須家文書	(大年寄中須又右衛門控か)	14項目 Aの尼崎判津出米が手船で行われること・運賃改定時は客方にかけてあうこと、Aにない小蔵元の干鯛代引宛として米を荷受けすることを禁止する項目追加	6項目 Aにない領主米で上灘筋直渡の米も地船で運び、それができない時の仲仕賃等の規定の項目が追加(4定から)		25項目 Aの領主米で上灘筋直渡の米も地船で運び、それができない時の仲仕賃等の規定の項目なし(2覚へ)		尼崎・兵庫・明石・室津・紀州・北国・江戸・沖積上荷賃(Aのみ・撰津・魚崎は尼崎と同一あり)	享保18年～寛政4年	天明2年～寛政3年
C	天保7年(1836)8月連判	「大蔵元定法・運賃蔵鋪極仲間連判帳」	菅野家文書	大蔵元塩屋清次郎写	13項目 Bの蔵元株の新人・譲渡を禁止する項目なし	6項目		24項目 Bの蔵敷は運賃定のところ規定との項目なし				享保18年～天保6年
D	万延元年(1860)	「庚申八月改運賃蔵鋪覚」	菅野家文書	上同								
E	文久元年(1861)7月	「大阪近辺運賃蔵敷定」	菅野家文書	上同								

には大蔵元仲間が不取締りという理由で大年寄は立ち会わず、嘉永3年(1850)9月に大蔵元仲間年番が会合に大年寄の立会を求めている^{注38}。

現在判明している連判帳としては、表3のA～Cの3種類がある。連判時期は「(大蔵元定法)」(以下大蔵元B)^{注39}が文化6～10年(1809～13)と最も古く、ついで「大蔵元定法・運賃蔵鋪極仲間連判帳」^{注40}(以下大蔵元C)が天保7年(1836)8月の連判であり、「蔵元定法・運賃蔵鋪極仲間連判帳」^{注41}が嘉永5年～安政4年(1857)と最も新しい。しかしAには天明3年(1783)段階の規定や運賃が記され、Bより古い内容を含む。表3からもわかるように、A～Cは内容的に共通するものも多いが、変化している点もあり、作成された時期の差が目される。

連判帳A～Cは以下のような構成である。冒頭の「定」(以下、※1とあらわす)は大蔵元仲間の根幹となる規定で、領主米・商人荷物を地船である高砂の渡海船で運ぶことや、領主蔵元・商人蔵元の変更に関する作法、諸荷物の船への直積みの禁止などが含まれる。

次の「覚」(※2)は末尾に「前々より定法ニ有之候所、近来猥ニ取扱いたし候儀有之由相聞へ候間、相互ニ心得違無之様取扱可致」という文言があり、背けば大蔵

元・小蔵元とも株を取り上げるという重要事項で、荷物の船積みに関する規定である。

「奥筋荷物改之事」(※3)は商人荷物に関する規定で、大蔵元の荷受の独占権が主張されている。

「定」(※4)は、領主米・商人荷物の荷受業務において大蔵元が取得する蔵敷・口銭・貸付利子・手数料などの規定で、A～Cともほぼ同じである。

「覚」(※5)は、領主米蔵納・廻米に関する仲仕賃・上荷賃・欠米などの規定で、A～Cとも変化がない。

そのあとに高砂の渡海船の運賃の規定が記されるが、いずれも高砂から他所へ荷物を運ぶ運賃である。大坂行荷物の品目が圧倒的に多く、連判帳Aの記述から、天明3年(1783)8月に1駄1分ずつ値上げされた以降のものであることがわかる。大坂以外への運賃の品目は少なく、領主米が中心である。

天明3年段階では領主米も含め大坂行のみが定められており、その後大蔵元の荷受する領主米が兵庫や江戸(姫路藩)など大坂以外の各地に廻漕されるようになってはじめて、これらの地への渡海船運賃を大蔵元仲間として定めるようになったと考えている^{注42}。運賃の額そのものはA～Cでは変わらない。

その後「高砂浦地法申上候控」と「大蔵元仲間諸事覚」が続く。前者は享保18年(1733)以降の大蔵元

と領主との交渉の記録で、後者は仲間内の事件の決着など事件の書上であるが、B以外は続けて書かれており、整えられていない。

また連判帳ではないが、大蔵元が定めたものとして万延元年(1860)「庚申八月改運賃蔵鋪覚」・文久元年7月「大阪近辺運賃蔵敷定」(以下運賃規定D・E)^{注43}が残っている。これは大蔵元仲間による渡海船運賃規定であるが、ここでは連判帳A～Cにはない大坂から高砂への渡海船の運賃も定められて、品目や運賃もやや変化している。

次に、これらの規定類をもとに近世後期の大蔵元の業務や状況について検討していこう。

第3節 領主蔵元の動揺と仲間不取締り

①高砂への津出し米

前章でも述べたように、領主米の高砂津出しは元禄期(1688～1704)頃から動揺し始めた。大蔵元の米屋又右衛門は大和宇陀藩時代から織田家の館入となり、元禄8年に出雲守信休が丹波2万石に移封されて柏原藩を再立すると、初年から蔵元として廻米御用を勤めた。「記録」より高砂町方明細帳抜書^{注44}にある「高砂川下り御米」の領主の書き上げから整理した表4の安永2年(1773)の高砂津出し米の一覧をみると、この年柏原藩は高砂への津出しを行っていたことがわかる。しかしその後「御国元二而御売捌ニ相成、御廻米中絶」し、高砂津出しが再開されたのは嘉永5年(1852)になってからである^{注45}。しかもこれは後述するように高砂大蔵元塩屋甚兵衛の貸付銀の担保米であり、米屋又右衛門は蔵元ではなかった。

尼崎藩飛地蔵米については、文化11年(1814)以来高砂大蔵元小間物屋儀兵衛が蔵元である。赤穂郡の蔵米は文政6～7年(1823～24)に高砂に廻米されたが、その後は赤穂郡で地払され、多可郡蔵米も天保14年(1843)以降加東郡滝野河岸で地払されるようになった。小間物屋の蔵元名目は変わらなかったが、高砂への津出しはなくなっていたのである。

表4によれば、安永2年の「高砂川下り御米」の領主は、幕府代官3人、御三卿3家、播磨・丹波に領地のある大名13家・旗本4家で、計23家である。また高砂への年貢津出高のデータとしては、元治元年(1864)に高砂湊築築費用として高砂に津出しする領主に出銀を依頼した際の見積もりが「高砂雑志」にある。これによると、高砂に津出ししている幕府代官支配の高は3万石、姫路藩を除く私領の領知高が13万2,500石、姫路藩高砂蔵納分の領知高が10万石である。仮にこの4分の1程度が年貢米として高砂に出されるとすると6万5,000石ほどになり、3分1なら8万7,000石程

度である。

また「高砂雑志」には、明治初年の高砂への津出し米(姫路藩以外)の書上もあり、総計6万5050石とされる。その内容と米高・蔵元も記されているので、これも表4に記した。姫路藩津出し米4万石前後が他にありとされているので、明治初年の高砂への津出し米は10万石程度となる。

この内訳は、大名領12家からの津出し米が3万3550石と全体の半ばを占め、もと幕府3代官支配の「天朝料」から1万2,000石、御三卿の内上知された清水家を除いた田安・一橋家領から1万2,000石と、各々2割弱、残りの7,500石が7旗本の津出し米である。代官も含め領主数は24で、安永と比べると旗本領からの零細な津出しが増えているが、これは明治初年の特別な状態かもしれない。大名としては三草藩丹羽氏や小野藩一柳氏といった播磨の小大名もあるが、尼崎藩・明石藩の飛地や下野壬生藩烏居氏や遠江浜松藩井上氏など遠隔地大名の飛地が目立つ。加古川流域およびその近隣は20をこえる領知が存在する非領国地域で、舟運を利用して広範囲の年貢米が高砂にもたらされていたことを示す。なお明治初年には津出し米の1割弱が丹波からの津出しであるが、津出ししている領主は3大名・2旗本と、安永2年より大名領の数が減っており、丹波米の高砂津出し量はかつてはもっと多かったのではないだろうか。

宝暦4年(1754)正月の「播州御領分加東郡吉井組西御年貢高砂入用帳」^{注46}の例では、美囊・加東郡にある幕府領4組の年貢米10,418石余、その内吉井組では3,185石の年貢米が高砂から大坂へ廻米されている。一代官の津出し米が1万石をこえていることを考えると、多可・加西郡他も含む加古川流域の幕府領全体からの津出し米も、明治初年の1万3,000石という数字を上回っていたと考えられる。

②領主米蔵元としての業務

大蔵元は名前の通り高砂の堀川沿いに蔵を所有し、領主米津出し米の蔵納や渡海船による回漕の世話などの津出しの世話をし、蔵敷・口銭等を受取っていた。連判帳A～Cによれば、領主米蔵敷は1石につき米5合で、越年すると2合が加わった。大坂蔵屋敷などに廻米される場合は、売買行為がないため口銭を取っていなかったと考えられる。

近世後期には、大坂での米価安や摂津灘目の酒造地帯での酒米需要もあって、年貢米が高砂で入札売されたり、灘目への直渡しされることが増えていた。こうした場合は、大蔵元は商人米蔵敷と同じく1石につき銀3分を受け取ることが「定」(※3)に規定されている。口銭については、他所の商人に直渡しされる場合

表4 高砂へ年貢を津出しする領主及び明治初年の津出高（『高砂市史』第2巻より転載）

	安永2年(1773)	明治初年	津出米	幕末の御蔵元
幕府代官領	平岡彦兵衛支配	天朝領	石	米屋又右衛門 魚屋季蔵 大門屋源次
	森対馬守支配		2,800	
	稲垣藤左衛門支配		3,200	
御三卿領	田安家領(10万石内加西36村12817石)		4,000	魚屋季蔵 米屋又右衛門・魚屋季蔵
	一橋家領(10万石内印南・加東・多可・加西・飾西・揖東56村19631石)		8,000	
大名領	清水家領			
	明石藩松平氏領(8万石明石・美囊)		7,000	米屋又右衛門・枝川屋助二郎 塩屋甚兵衛 塩屋甚兵衛 網屋利助 柴屋三郎右衛門・網屋利助 柴屋七太夫 塩屋甚兵衛 塩屋次右衛門 塩屋次右衛門 枝川屋助二郎 枝川屋助二郎 魚屋季蔵
	下総古河藩土井氏領(8万石内美囊・加東・多可・加西29村9992石)		3,500	
	摂津三田藩九鬼氏領(3万6000石内丹波6000石)		500	
	摂津尼崎藩松平氏領(4万石内多可・赤穂・宍粟50村13180石)		900	
	下野壬生藩鳥居氏領(3万石内美囊・加東28村8294石)		3,800	
	播磨小野藩一柳氏領(加東30村11099石)		4,700	
	播磨三草藩丹羽氏領(美囊・加東・多可・加西33村10379石)		3,750	
	丹波柏原藩織田氏領(20000石)		1,500	
	安房北条藩水野氏領(15000石内丹波7000石)	上総鶴牧藩水野氏領(15000石内丹波7000石)	200	
	丹波亀山藩松平氏領(50000石)	遠江浜松藩井上氏領(6万石内美囊・加東26村6810石)	3,400	
	上野館林藩松平氏領(63000石内飛地25000石)	陸奥白河藩(棚倉藩)阿部氏領(6万石内加東18村5847石)	3,300	
	丹波篠山藩青山氏領(60000石)	武蔵忍藩松平氏領(10万石内加古・多可・加西15村6967石)	1,200	
丹波福知山藩朽木氏領(32000石)				
旗本領	穂積八木氏領(加東・加西12村4000石)		1,300	枝川屋助二郎 炭屋六蔵 炭屋六蔵 網屋利助
	家原浅野氏領(加東11村3500石)		1,700	
	高木一柳氏領(美囊16村5969石)		2,600	
	屋度鈴木氏領(1200石内加東4村500石)		600	
		丹波新郷安藤氏領(7000石内丹波飛地)	500	
		畑枝久留氏領(2000石内美囊7村1000石)	400	
		丹波佐野佐野氏領(3500石の内丹波飛地)	200	
計			65,050	

※出典：「記録」より高砂町方明細帳抜書・「高砂雑誌」

①領知高については、石川健次郎「明治初年における播磨の領有関係」・小川恭一編『寛政譜以降旗本家百科事典』1-6。

②人名については、同一人物でも表記が異なる場合がある。

の規定はない。高砂で地払される場合は、蔵元である大蔵元が手配して米仲買に入札させ、落札者から敷銀として100石につき銀500匁を受け取り、5日以内に代銀を納入させる定めである。この口銭として、大蔵元は地払米1石につき銀4分5厘、代銀掛代賃として銀1貫目につき3匁を受け取った。この口銭の額は高砂での米穀の売口銭・買次口銭と等しい。高砂での入札売は大蔵元にとって、蔵敷に加え口銭を取得できる有利なものであったことがわかる。

また米仲買が期限までに代銀を入銀できなかった場合は蔵元の立て替えになるが、これには「商人衆へ取替銀」として銀1貫目に1日銀五分の日歩の利息が付された。ところが天保6年8月に米仲買の米代納入の遅れが問題となっており、この時往古定法の通り敷銀を即刻受け取り、期限内に代銀引替で米を積み出すことが確認されている^{注47}。

また高砂への領主米津出しには、高砂の仲仕・上荷

舟・渡海船など多数の関係者が存在した。その手配は大蔵元が行い、その賃銭や運賃も大蔵元の寄合で定められた。高砂の渡海船仲間は姫路藩の大坂廻米については船帳の順に行うなど、大蔵元仲間から独立した面をもっていたが、大蔵元は特定の渡海船と出入関係を持っており、地払米の回漕では出入の渡海船を優先した。津出しや地払をスムーズに進めるために、大蔵元は渡海船や仲仕・上荷舟と出入という私的な関係を結んで雇い入れていたと考えられる。ただ大蔵元が高砂の多くの人間の雇用主として大きな力を持ったことは確かであるが、領主や荷主など外部に対しては決められた運賃・賃銭を守らせ(人々の利益を計る)側面もあったことは重要である。大蔵元の連判帳が本来的に小蔵元や高砂の大年寄・町年寄が連判して承認すべきものであったことは、高砂の「地法」が高砂全体の利害に関係するものであったことを示している。

さて米の津出しや廻米は、領主が派遣する役人や掛

かり庄屋ら立ち会いのもとで行われた。そのためそうした人々の宿泊や世話も大蔵元の仕事となった。「定」(※3)には津出し御用で滞在する庄屋らの飯代を1日米3升と定めて請求している。また津出し関係で村方へ貸付をすることがあり、その利息を年2割と規定している。大蔵元は津出しをする村々に対して金融サービスを提供していたのである。

表5は、前掲宝暦4年(1754)正月「播州御領分加東郡吉井組西御年貢高砂入用帳」と、嘉永2年(1849)11月付の御三卿清水家の播磨領2郡の年貢米「西御年貢米高砂湊御蔵納諸入用帳」^{注48}から、高砂での費用と考えられるものを抜き出して整理したものである。二つの史料は、後者の米高が2倍以上で、蔵元用達料が前者には書かれていないなど書き方も異なっているので、単純な比較はできない。しかし前者は大坂への廻米で、後者では津出し米のほとんどが高砂で入札により多方面に地払されたことを考えれば、後者で高砂詰の庄屋の差配料が際だって多く、芻米を蔵元が引き受けた費用なども計上されていることが理解されるだろう。

清水家領の年貢米の内5136石5斗5合は、嘉永4年9月末から11月にかけて、数百～数千俵単位で入札にかけられ、高砂の米仲買安田屋長兵衛・餅屋市右衛門・塩屋次右衛門・釣屋吉兵衛・狩網屋久右衛門らに売却された。手間がかかるため詰めている庄屋も多く、滞在も長い。落札値は1石平均108匁7分余で、同時期の大阪肥後米相場91・8匁～102匁7分より高い。

またこの年1,800石ほど廻米も行われたが、廻米先は西宮常念元三郎と兵庫商人である。売却価格は入札平均価格の5分増しに高く設定されており、摂津灘目の米価の高さがわかる。

③蔵元の「手入れ」

近世後期には領主蔵元就任をめぐる争いが起こり、

大蔵元仲間の内部で対立する事態があった。この対立を検討することで、大蔵元が直面した問題が浮かび上がってくる。

何らかの手段を弄して他の大蔵元の領主蔵元職を奪うことは「手入」といわれ、連判帳A～Cを通して「定」(※1)で「古来より定法」(A)として禁止され、違反者は大蔵元仲間から除かれるようになっていた。そもそも加古川流域は非領国地域で、領主の交替も多く、蔵元もしばしば交替した。しかし領主方ないし領知村々の希望で蔵元を差し替えた時でも、後の蔵元が先の蔵元に掛け合い、両者納得の上で大蔵元仲間へ届け、領主調達銀や村方への貸付銀があれば、あとの蔵元から先の蔵元にそれを弁済するのが決まりである。しかし「定」(※1)でも「近年風義悪敷、相互ニ手入致シ候様相聞候」とあるように、近世後期にはしばしば手入が行われた。

問題が表面化したのは天保13年10月だった。この月、大蔵元仲間は高砂町大年寄に願書を出し、手入や贈賄により他人の蔵元職への侵害をする者の株札取り上げを願った^{注49}。ところがこの願書で大蔵元仲間の内枝川屋助次郎・網屋利助・木下屋利兵衛は連印しなかった。そのため大蔵元仲間年番は連印させるように高砂町大年寄に願書を出し、これが姫路藩町方役所に上げられている。願書には「近來不法仕候心組之者御座候ニ付調印不仕」とあり、調印を拒んだ3人こそ手入の張本人であるかのように読み取れる。姫路藩の指示により、大蔵元年番は枝川屋ら3人に明暦以来の大蔵元仲間の規定を見せて説得し、11月にようやく全員の調印が完了した。

なお問題の3人の内枝川屋と網屋は新規参入の者であり、特に枝川屋はこの後も他の大蔵元と争いを起こしている。そもそも文政12年に枝川屋新左衛門・助次郎親子が塩屋吉兵衛株を譲り受け大蔵元仲間加入を願った際にも、大蔵元仲間は人柄が悪いなどの理由を

表5 年貢米津出しの費用

宝暦4年(1754) 加東郡幕府領吉井組 3185石余の津出し 蔵元壺屋長左衛門				嘉永4年(1851) 清水家領 6936石余の津出し 蔵元小間物屋儀兵衛・魚屋紀太郎			
内容	米高*石	銀高*匁	摘要	内容	米高*石	銀高*匁	摘要
越年米蔵敷	0.2705		1石につき2合8848	蔵敷	34.6825		1石につき5合
蔵元手代渡		13.5		蔵元用達料	20.8095		1石につき3合
仲仕賃	20.7025		1石につき6合5匁	芻米蔵元へ引受の間米	3.125		芻米1石につき5升
				北浜仲仕・支配人7人分賃米	15.6015		御蔵入仲仕賃1石につき1合5匁他
				南浜仲仕・支配人5人分賃米	13.5202		御蔵入仲仕賃1石につき1合5匁他
			諸費用	19.9771		1石につき2合88	
役人・詰庄屋蔵元逗留費		159.22	高砂旅籠代1日1匁5分	高砂詰庄屋差配料		2011.586	1石につき銀2分9厘
計	20.973	172.72		計	107.7158	2011.586	

つけて反対した^{注50}。しかし大年寄に説得され、一旦大年寄に株を譲りそれから枝川屋に譲るという変則的な過程を経て、枝川屋は大蔵元仲間に加わった。

枝川屋はその後次々に領主蔵元に参入した。天保13年に館林藩松平右近将監飛地領1万石が明石藩松平兵部太夫の領地となった際に、身上不如意の柴屋善七郎に替わり枝川屋が蔵元に採用され、米屋又右衛門とともに蔵元職を勤めた。また天保15年に幕府代官竹垣三右衛門支配の御城米の蔵元を柴屋善七郎・同三郎右衛門が勤めてきたのに、手入をして新たに蔵元に加わったと、後に批判されている^{注51}。

大蔵元仲間全体をまきこんで姫路藩に訴える騒ぎになったのは嘉永3年9月のことだった。明石藩の蔵元の内米屋又右衛門が蔵元職を取り上げられ、枝川屋単独で勤めることになったのである。米屋又右衛門は同年11月に、連判帳「定」(※1)の通り、弘化3年(1846)以来の明石藩への調達金の立て替え弁済を枝川屋に求めたが、埒があかなかつたので、大蔵元仲間へ訴え、仲間として姫路藩町方役所に提訴した^{注52}。

取り調べのなかで作成された米屋又右衛門の嘆願書や枝川屋の申告書から、米屋が明石藩飛地領の蔵元をおろされるまでの事情がわかる。先述したように弘化元年以来2人で蔵元をつとめてきたが、同3年に明石藩役人に命じられ米屋は銀20貫目を調達し、その功績により1人で蔵元に勤めることになった。同じ年、枝川屋も藩への調達金のため領分の者が加東郡の商人から銀12貫目を借りるのに連印させられており、それは断れば「御蔵元御取上ニ茂可有成哉」と聞かされたからだというのが、連印したにも関わらず突然明石藩から蔵元を罷免されたのである。米屋は弘化4年にも10貫目の調達を命じられ、一旦断つたものの「御蔵元御免ニも相成可申様子」であったので、仕方なく他借して調達した。嘉永元年に枝川屋が蔵元に復帰したが、これについて枝川屋はいろいろ運動して蔵元に復帰したが、不安なので冥加銀として15貫目を献金したとしている。

その後嘉永3年になって、米屋又右衛門は蔵元を罷免された。米屋はそれを枝川屋が献金により手入したためとし、枝川屋は米屋が大坂廻米の欠俵について説明できなかったためとしている。このように両者の言い分は異なっているが、大蔵元同士の争いの根本が明石藩が借財導入のため蔵元職を左右したところにあったことは明らかである。

姫路藩の裁許は以下のようなことになった。米屋は弘化3年に枝川屋が蔵元を断られた際に、枝川屋に掛け合い納得させた上で蔵元を勤めるべきであったのにそれをしなかったのは仲間の規定に背いているとして

押し込めに処せられた。枝川屋は単独の蔵元となったからには先の蔵元たる米屋の調達銀を弁償すべきなのに断つたのは規定に背いている上、度々不法を働いているのは「土地人気ニ抱り、御政事差障被相成」という理由で、大蔵元職を差しとめて領主蔵元職も停止し、やはり押し込めとされた。また大蔵元大年寄や大蔵元年番も取り扱いが悪かったとして注意をうけた。関係者全員が処罰されたのである。その後、米屋の調達銀を枝川屋が10年賦で返済する示談が取りまとめられ、嘉永4年には枝川屋の領主蔵元への復帰が許可された。

ついで嘉永5年には、米屋又右衛門と塩屋甚兵衛の間で丹波柏原藩織田氏の蔵元職をめぐる争いがおこり、姫路藩に訴訟が持ち込まれた^{注53}。この年、先に述べたように長らく中絶していた柏原藩の高砂への津出しが再開されたのであるが、元々の蔵元の米屋ではなく塩屋が蔵元とされた。米屋はその断りが塩屋からなかったのが規定に背いているとして、大蔵元仲間へ訴えたのである。

この蔵元変更も、塩屋が柏原藩にした調達金が理由となっており、塩屋側は借銀担保であるからには商人米同様と主張した。結局柏原藩の意向もあり姫路藩は塩屋を柏原藩の蔵元としたが、塩屋から仲間に過料を出させた。

以上からわかるように、近世後期の領主は、財政窮乏のなかで高砂の大蔵元から金を借り出すため蔵元職の指名を利用した。大蔵元側も近世後期には領主米の高砂津出高が減っていたこともあり、蔵元職を保持するためそれに応じざるを得なかったのである。特に大蔵元仲間へ新規加入した枝川屋らにとっては、領主蔵元に参入するためには献金などさまざまな手段を講じる必要があった。これを旧来の蔵元に手入と批判されたのであるが、塩屋甚兵衛のような旧来の大蔵元も、大名貸を行うことで担保として領主米の確保を図り、幕末期には大蔵元仲間は仲間としての統制を失うにいたつたのである。

第3節 諸品荷受問屋としての大蔵元

①大蔵元の荷受の範囲

本節では、近世後期の大蔵元の「諸方商人諸荷物請払蔵元」としての側面を検討する。表6は、大蔵元連判帳等の渡海船運賃の項目に記された商人荷物の一覧である。これと滝野・田高船座の米以外の取り扱い荷物を整理した表7と比較すると、近世後期に高砂から移出された商品の大部分が、滝野を経由して加古川上流の奥播磨・丹波から送られてくる林産品であることが明らかである。加古川中・下流域の商品などもあつ

表6 大蔵元史料に載る商人荷物の一覧 ※主要なものについては()内に運賃/船頭渡賃を記した。

		「大蔵元定法運賃蔵鋪極仲間連判帳」(連判帳C)	万延元「庚申八月改運賃蔵鋪覚」(運賃規定D)		文久元年7月「大阪近辺運賃蔵敷定」(運賃規定E) 下りは万延元と品目が同じなので省略
		上り	上り	下り	上り
大阪近辺	農林産食品	商人米・雑穀(1石1.5/1.2/0.3)		穀類(10石8/3)	雑穀類(1石1.5/0.45)
		酒(1駄1.9/1.5)		醤油実・実入四斗樽	茶(1駄2.3/0.7)
		かんびょう(1駄2.6/2)	かんびょう(1駄2.6/2)	切昆布	酒(1挺1/0.35)
				あらめ・テングサ	かんびょう(1駄2.3/0.8)
		生栗(1駄2.1/1.5) 大坂上荷	生栗(1丸1.1/0.8)	薩摩大島砂糖(10斤入0.18/0.07)	松茸
		貨荷主より半額出 搗栗・大栗		青物(凡10貫目0.52/0.1)	生栗(1俵1/0.4)
		山のいも(1駄2.4/1.8)			
		こんにゃく玉・氷こんにゃく(1駄3.3/2.5)		みかん籠・いも籠(いも籠1つ0.4/0.16)	山のいも(1駄2.5/0.8)
		醤油(1駄2.1/1.6)		菓子	氷こんにゃく(1本0.7/0.3)
		生柿・串柿		豆腐粕・干粕	
	粕		素麺		
			酒入四斗樽・粕入四斗樽		
	繊維・布類	木綿古手・古綿(1駄2.2/2)	木綿(6丸1駄2.5/2)	近江さらし	木綿(60反入1丸0.53/0.25)
		繰綿(1駄3.6/2.7)		呉服物	古手古綿類
		実綿(1駄3/2.4)		毛皮	
		綿実(1駄1.6/1.25)			
	紙類	すき込み		半紙	
				紙くず	
	荒物	ござ・むしろ		畳表・畳・古畳	ござ
縄			青笹(1束0.25/0.1)		
			ほくち・火打石		
道具・小間物・建具	骨柳		から傘(10本入0.2/008)	指物類	
	戸障子	硯箱	戸・フスマ	杵	
	重箱	はけめ重・ひのき重	すげ笠・加賀笠	下駄	
	膳類	入子	大釜・鍋	明樽	
	下駄・栗下駄	まくら	すいのう		
	油白(1つ2.7/2.3)	八寸・九寸	鉢箱・箆筒・長持・櫃類		
		宗和膳・かく縁・才足膳・角切膳	戸棚・店戸棚(0.7/0.28)・段梯子		
		杵	つづら		
		布櫃	文庫・櫛台・雛壇		
			仏壇		
			飯つき		
			酒明樽・油明樽・醤油明樽		
			酒屋道具・油屋道具		
			紺屋かた板・藍壺		
			駕籠・乗物		
			唐箕・水車・竜骨車		
			本入紙包		
			金物紙包		
	焼物	焼物水つぼ・すり鉢	焼物水つぼ・すり鉢	碗	立杭物(6丸2/0.7)
油	灯油(1駄2.1/1.6)		瀬戸物・京物		
	蠟		油(1斗入0.25/0.1)	油(4斗入1/0.35)	
鋳物	古かね(1駄2/1.5)		しっくい土	古かね	
	緑ばん(1駄2.4/1.8)		硫黄		
	土鉄・銅・鉛・人形土(1駄1.9/1.3)		鉄		
薬・香料・染料	抹香・松真花	毛黄蓮(1駄3.3/2.5)	藍玉・地藍(1駄0.9/0.45)		
	黄蓮(1駄3.3/2.7)	黄蓮(1駄2.6/2)	石灰・わら灰・合灰		
	薬種(1駄2.4/1.8)	膠(1丸1/0.7)	芫安		
竹木類	筆軸・竹類・竹の皮(1駄2.6/2)	板(1駄1.5/0.9)	薬種(1箇0.5/0.2)・人参(1丸0.3/0.12)		
	杉・檜皮・屋根板・板・材木類				
	漆実	中切板			
燃料	炭(大俵10俵2.6/2)			炭(1駄1.5/0.6)	
	薪(1駄1.5/1.15)				
肥料	油粕(1駄1.7/1.25)		油粕		
			干鰯(1駄1.2/0.25)・鱈類		

(次頁に続く)

		「大蔵元定法運賃蔵鋪極仲間連判帳」(連判帳C)	万延元「庚申八月改運賃蔵鋪覚」(運賃規定D)		文久元年7月「大阪近辺運賃蔵敷定」(運賃規定E) 下りは万延元と品目が同じなので省略
		上り	上り	下り	上り
貨幣				銭(10貫文0.3/0.15)・銀(1貫目0.4/0.2)	
明石	米(1石0.9/0.6)	米(1石0.9/0.6)			雑穀類(1石0.75/0.45)
	茶・荒物(1駄?/1.1)	茶・荒物			茶・荒物(1駄1.3/0.7)
	線香・抹香(1駄1.45/0.8)	線香類			竹の皮(1駄1.3/1.3)
		鍬の手			
		入子			
		八寸・膳類			
		竹の皮(1駄1.6/1.1)			
		かじ炭			
	下駄				
	すじ板				
室津丸亀	米(1石1/0.7)				
西宮兵庫		竹の皮(1駄3/2.5)			竹の皮(1駄1.3/1.3)
		茶(1駄2.8/2.3)			茶(1駄2.7/0.7)
		角水こんにやく(1本0.8/0.6)			氷こんにやく(1本0.7/0.3)
西宮兵庫	米・雑穀(1石1.5/1.2)	穀もの雑穀(1石1.5/1.5)		雑穀類(1石1.25/0.45)	
御影	米(1石1.25/0.95)	穀もの雑穀(1石1.2/0.95)			茶(1駄2/0.7)
	山のいも(1駄2.25/1.62)	山のいも			
	材木・杉葉	材木・杉板			
	※大坂運賃の9割	※大坂運賃の9割			
御影		松板			
尼崎堺	米・雑穀(1石1.6/1.3)				雑穀類(1石1.8/0.45)
					ござ立杭物(6丸2.5/0.7)
					茶(1駄2.5/0.7)
和歌山	米(1石1.9/1.6)				
北国	木綿・古手・茶(1駄14.5/13.6)				
江戸	米(1石10.59/9.6) 木綿(100反7.4/7.2) 線綿 氷こんにやく 酒 油 茶 炭 塩(1駄6/5.7) 半紙(1丸2.25/2.1)・すき込(1丸3.3/3.1) 材木竹(10石85/81) 小荷物(10貫目4.5/3.7)				

表7 安永2年の滝野・田高船座の米以外の取り扱い荷物と文化2年の五分一銀取り立て荷物

船座運上付荷物	栗 柿 柏 こんにやく 玉 くるみ 木ノ実 ごま 菜種 えご 綿実 荒芋 えごま 真綿 紙 かが 銅 鉄 いも 松茸 しやな たばこ 茶
五分一銀取立荷物	竹 木 炭(起炭・鍛冶炭) 薪 抹香 杉松木ノ皮類 柴 戸 障子 指物 松灰 花灰 油白 長持 たんす 箕 いかき 切竹木之類

※出典 阿江幸子氏所蔵 安永2年「覚」・文化2年「五分一銀相滞候者共書出」。

たはずだが、記載が少ない。加古川下流域は比較的姫路藩領の村が多いことから、姫路藩専売制(木綿・篠巻)による流通統制の影響が考えられる。また薪など品物によっては高砂の薪問屋など専門問屋が荷受したと考えられる。また近距離の場相、陸送による高砂以外への移出の可能性もある。

なお先述したように、天明3年(1783)以降、領主米が大坂以外の各地に廻漕されるようになってから、これらの土地の渡海船運賃が定められるようになったと考えられる。明石・兵庫には加古川上流の林産物も廻漕されており、丹波茶や線香は大坂行には登場せず、独自の流通ルートがあったが、品数は限られる。大坂以外への移出は限られているといえよう。

万延元(1860)・文久元年(1861)の運賃定D・Eでは、大坂からの下り荷物の運賃規定が加わる。大坂からは高級な家具や金物などの高度の加工品や、唐薬種・砂糖などの貿易品、干鰯、貨幣などに特徴がある。もちろんそれ以前から大蔵元は大坂の商品を荷受している。しかし連判帳A～Cには、高砂に入ってくる商品に関する規定は驚くほど少ない。「定」(※①)に、「尤沖之口より入レ候荷物モ問屋着無之、外方江直渡し候儀不罷成候、蔵元問屋着致し候荷物たりとも、致水揚相改候而船積可申付事」(連判帳A)とある。これは湊から入ってくる沖口荷物を川舟へ直積みしてはならないという規定である。また「定」(※④)でも、高砂に入ってくる商品に関しては、魚肥・塩の蔵敷を除き

規定がない。つまり大蔵元の連判帳では、加古川を下り高砂から移出される米と奥播磨・丹波の林産品に中心があり、大蔵元が加古川流域で担った流通とは本来的にそういったものだったのではないだろうか。それにも関わらず幕末に運賃の規定がなされたのは何らかの意図が感じられる。

②商人荷物荷受の業務

大蔵元は荷受した商品の売買の斡旋を行い、蔵敷・口銭を取った。売買に直接携わらなくても、蔵入したものを買い手が荷主と相対で買い代金引替で引き取る時や、船直積みでも、口銭を買い手から徴収することになっている。

これに関連して、大蔵元が加古川上流から荷受けする綿・紙・茶・材木・竹皮・荒物などは蔵敷なしと書かれていることに注目したい。高瀬舟による着荷が比較的少量であったことから、蔵敷を口銭に含めるなどして取らなかつたということも考えられるが、あまりに蔵敷の規定が少なすぎる。これはなぜだろうか。

この理由としては、まず蔵入れしてせりで売却する手間をとらず、すぐに処分していたことが考えられる。たとえば、大蔵元が荷主に対して仕入問屋化しており、荷受といいながら、実際は買い取りに近い形で確保し、即時に売り捌くといったことである。連判帳には、荷主に対する「為替付」、すなわち荷主が大蔵元への着荷以前に、荷主に代銀を月利1%で前貸しを行う規定がある。実際に天保9年(1838)に滝野船座阿江九郎兵衛が先の支役の不正を訴えた書類のなかに、丹波三井庄村兵右衛門が茶荷物を高砂大蔵元木下屋利兵衛に積み送ったところ、木下屋が貸した為替付の前貸金5両を滝野船座の先役が取り込んだという告発がある。同様に大蔵元が滝野舟座に着荷した段階で蔵預書を担保として船座を通して荷主に前貸した例が数例みられる^{注54}。

また連判帳で米穀の「買次口銭」が売口銭と同額で定められていることも注目されるだろう。これは高砂の大蔵元が大坂の米問屋など他所の商人から注文を受けて加古川上流の商人米を買い次いだことを示す。

また逆に、荷主が買い手との間に特定の関係を結んで、高砂についた段階では仕入荷ないし仕切込の荷物として行き先が決まっており、高瀬舟から渡海船に積み直されて買い手へ直送されるということも考えられる。これについても連判帳A～Cとも定(※4)とも「蔵元着之荷物、荷主より外方へ直商内被致候而、蔵元へ荷物代銀引替ニ請取渡具候様申来り候ハハ、定法之通口銭請取可申事」とあるので、可能性はある。

いずれにしても加古川流域において商品流通が買い手による荷主に対する前貸を伴うものとなって加速化

されており、大蔵元が荷受けした商品を蔵に入れてせりを実施して売りさばくような本来的な荷受業務は行われなくなっていたのではないだろうか。

③加古川上流の荷主との抗争

近世後期の大蔵元は商人荷物の荷受においても問題を抱えていた。このことがよくわかるのが、天保9年(1838)に高砂の大蔵元が取引方法を変更して、取引先の加古川筋荷主に掛け合った一件である。取引変更を記した規定の内容は、以下の通りである。

規定

一、諸荷物蔵鋪・運賃・仲使賃等、先規より銀定之処、近年通用錢ニ而請取候様成行、仲間之儀者不及申、積船・仲使ニ至ル迄一統難渋に付、向後相改、先規之通都而銀ニ而請取可申事

但シ諸荷物蔵入之節之仲使賃も此度相改、御荷主より請取可申事

一、穀物者不及申、干鰯類并都而諸荷物蔵入之俣越年ニ相成候ハハ、越年蔵敷請取可申事

一、諸荷物蔵出シ無之候共、御荷主名前替り候得者、後チ名前之方より茂急度蔵鋪請取可申事

但シ御荷主名前替り不申共、致升廻し取引相済候ハハ、御買主よりも又蔵鋪請取可申事

一、諸荷物代銀懸出シ之儀者、先規定之通売主より定之口銭可請取事

但シ代銀売主江取引之上残銀有之、其残銀懸出シニ相成候ハハ、銀高壺貫目ニ付銀五匁ツ、請取可申事

一、兵庫津送り穀物類運賃壺石ニ付定之通壺匁八厘宛請取可申事

但シ御影村限り上灘江之運賃、是又定通壺匁式分ツ、請取可申事

一、大坂行穀物運賃定之通壺石に付壺匁式分宛、外ニ此度相改、大坂川上荷船賃御荷主より請取可申事

一、穀物類蔵鋪壺俵に付壺分五厘ツ、請取可申事

一、角荷氷り蒟蒻壺箇ニ付蔵鋪三分宛請取可申事

一、酒壺挺ニ付蔵敷式分五厘ツ、請取可申事

一、油粕壺玉ニ付蔵鋪・仲使賃共三厘五毛ツ、請取可申事

一、大坂下り荷物干鰯類壺駄に付壺匁ツ、并ニ鯉壺駄ニ付壺匁分宛請取可申事

右之通此度改仲間一統堅^{〔スミケン〕}為申合致規定候、若違乱於有之者御願奉申上、大蔵元株仲間中江預り、諸荷物之請払差留可申候間、此段銘々御荷主中江吃度御断、決而違乱被致間鋪候、以上

天保九戊戌年九月

大蔵元仲間^{注55}

この規定において大蔵元が主張していることを一つずつ、連判帳などと比較しながら検討しよう。

まず、(1) 諸荷物の蔵敷・渡海船運賃・仲仕賃は「先規ハ銀定」であったのに、「近年通用銭」で受け取るようになってきている。これは高砂の大蔵元のみならず仲仕にいたるまで一同困っているの、今後は先規のように銀で受け取ることにするという主張である。連判帳A～Cの「定」(※4)では、商人荷物の蔵敷・運賃・仲仕賃等はすべて銀目で規定されている。ところが、それを荷主が東播磨の加古川流域の銭相場である「通用銭」に換算して支払う慣習が成立していたのである。

通用銭相場とは地域で決められる銭相場で、大坂の銭相場に連動しつつも地域の事情に応じた相場が形成された。近世後期の銭価下落状況下では、銭高に仕掛けをして決められている。

天保九年に高砂の間屋・蔵元が銀目への復帰を通過してきたのは、先に述べたように「先規」に戻るということもあっただろうが、この年前半期に幕府の銭価引き上げ策のためにかえって大坂銭相場が銭1貫文につき銀8匁代から9匁代といよいよ銀高銭安に移行したことが影響したと考えられる。運賃等は銀目で定められていたから、高砂の大蔵元らは荷主から銭高仕掛けのある通用銭相場で換算して銭目の運賃等を受け取っては大きな損失を出しただろう。

(2) 荷物蔵入れの際の仲仕賃はこれまで大蔵元が負担してきたが、今後は荷主より受け取ると主張している。連判帳A～Cの覚(※5)において、領主米の仲仕賃は荷主に請求されているが、商人米の仲仕賃の規定はない。後に荷主らがこの規定に反対して作った「東播五郡村々申合之事」^{注56}でも、「是迄蔵敷之内ニ而間屋より相被働候仲仕賃并掛廻し賃」とあり、近世後期の商人荷物に関する限り、高砂の大蔵元らは荷主に有利な取り計らいをしていたのであり、それはすでに長期に及んで慣習として成立していた。大蔵元仲間は、これを改め領主米同様仲仕賃も荷主に負担させようとしたのである。

(3) 穀物・干鰯などすべての荷物について、蔵入れたまま越年した場合は、越年蔵敷料を徴収するという主張は、直前の連判帳Cの「定」(※4)にも「一商人米穀并諸荷物蔵敷之儀ハ、越年致候ハ、五歩増請取可申事」と同様のことが書かれている。規定があるにもかかわらず改めて主張しているのは、連判帳の規定がすでに有名無実となっていたためと考えられる。

(4) 蔵入れた荷物の持ち主が変わった場合は、あと名前の者からも蔵敷料をとるという主張も、連判帳Cの「定」(※4)に「一蔵元着之荷物売買出来候而、

荷主名前替り預り候ハ、定之通蔵敷請取可申事」とあるので、本来の規定が守られなくなっていたのを守らせようとしたと考えられる。

(5) 諸荷物代「銀懸出し」、すなわち荷主が延払いで商品を売る場合は、「先規定」の通り荷主から口銭をとる。これは連判帳に明確な規定はないが、「先規定」として復活しようとしたものと考えられる。

(6) 兵庫津送り穀物類運賃・大坂行き穀物運賃については運賃定の通り1匁8厘と1匁2分を取るとあるが、連判帳A～Cの運賃定は1匁2分5厘・1匁5分であるので、これより2割程度安いのが不審である。物価引き下げを進めた天保改革の基調に従っていた可能性もある。いずれにせよ値上げとはいえないだろう。また大坂川上荷賃を荷主から取るというのは、連判帳A～Cでは荷主から半分取るとされているのを、全額荷主が出すよう求めているのである。商品運賃は荷主が出すのが通常であるので、大蔵元はそのように改めようとしたと考えられる。

(7) 移出品の蔵敷として、穀物類1俵1分5厘、角荷氷こんにやく1個銀3分、酒1挺2分5厘、油粕1箇3厘5毛(仲仕賃含む)とし、大坂からの下り荷物の干鰯・鯡の蔵敷は1駄につき各々1匁・1匁1分とする。これも連判帳A～Cとは違う単位で蔵敷が決められているのが特徴である。たとえば穀物類の蔵敷は連判帳では1石銀3分の定であるが、1俵1分5厘になると、4斗俵では3分7厘余と高くなる。魚肥の蔵敷は大俵1分5厘から小俵7厘と大きさにより決められていたが、干鰯と鯡でわけて蔵敷を取るとしており、おそらくこれは値上げとなる可能性があったと考えられる。

以上、大蔵元の主張は、全体として「先規」や「定」に復帰することを求める論調であり、幕府天保改革の基調に添うものである。連判帳の規定より荷主に有利な取引慣例が成立していたのを、もとに戻そうという意図が感じられる。とりわけ商品代取引の決済における銀目への復帰が主なねらいだった。

またこの規定は基本的には加古川上流からの荷物を大坂などに商品を移出し、高砂の大蔵元が商品代支払いを代行する場合を前提としている。魚肥は大坂からの移入品を大蔵元も取り扱ったが、どちらかといえば干鰯間屋である小蔵元の取り扱うものであり、この規定に賛同していた小蔵元の利益となる。

この規定に対し、加古川筋の村々の荷主らは、「全新規之儀」として反発した。注目されるのは、反対の理由として加古川下りの商品ではなく、加古川を上る魚肥の値上げになることを挙げていることである。すなわち天保8年に幕府が出した肥料の運賃・口銭・費用の引き下げを命じる触に反し、取引先の湊である高

砂で費用が増せば村々百姓の困窮の原因になると主張している。

これは東播五郡の荷主にとって何より魚肥が共通の関心事であったためと考えられる。川下りの商品については先述したように丹波・多可郡からの商品に偏り、また後述するように高砂以外への輸送も可能であって対抗手段があった。また大蔵元が取引仕法の「連判帳」への復帰というある意味尤もな要求をしてきたことに対し、幕府法令を根拠として対抗したとも考えられる。

荷主らの訴えを受け、東播五郡の各領の大庄屋・惣代庄屋は集会をして、以下のことを取り決めた。来たる3日に、加東郡粟生村(小野市)に郡中惣代として庄屋6人、荷主惣代5人が集まり、その席へ高砂の蔵元惣代・売荷問屋惣代4人を呼んで取引法の変更の撤回を要求する。撤回しない場合は幕府の魚肥値下げの触もあることなので、御城米・売荷とも高砂以外に「湊替」して高砂には運ばないことにする。3日の掛け合いと湊替の費用は五郡村々惣高割で拠出し、「湊替」と決まったなら、高砂が荷受したいと歎願しても、一領・一村たりとも取り合わない。これが「東播五郡村々申合之事」という議定として残されている内容である。

この決定を五郡村々の川筋の舟問屋等諸問屋も承知して、荷主に新法反対をかけあい、不承知の荷主の荷物は川筋一同で取り扱わないこととした。

この交渉の結果は明らかではないが、長期の「湊替」は行われなかった模様であるので、五郡村々の要求がある程度受け入れられたのではないだろうか。

この一件からわかることは、以下のようなことである。高砂の大蔵元らにとって、近世後期には加古川下りの商人荷物の荷受が領主蔵元とともに重要な業務となっていたが、荷主との力関係から「先規」・「定」から事実上後退せざるをえなかった。しかし銭相場下落による経済的打撃や天保改革の影響により、本来の取引法に戻ろうとしたのが、この規定だったと思われる。しかし時代の流れを戻すことはできなかった。

なお東播五郡が高砂との交渉で、いざというときの「湊替」を述べていることには重要な意味がある。高砂は近世を通して、同じ加古川の河口港である今市と荷受を争っていた。そもそも万治期(1658～61)の加古川の瀬違え以前は今市に通じる西加古川のほうが高砂に通じる東加古川より川幅が広く、正保3年(1646)には幕府領であったことから船場に取り立てられ、上流から薪炭が下っている。瀬違え以降も、今市は幕府領から小田原藩領・一橋家領と移り、姫路藩領である高砂とは支配違いとなったことから、加古川上流に多い姫路藩領以外の村々、たとえば姫路藩領の滝野の対

岸にあつて荷受を争った新町などは、今市と結びついて、姫路藩の滝野船座—高砂大蔵元の流通ルートに対抗した。

但馬豊岡藩の専売品である骨柳(柳行李)荷物を大蔵元が荷受して滝野船座と争論となった一件を検討しよう。骨柳は滝野船座付荷物であるが、実際は陸路で飾磨津・高砂・魚崎などへ陸送されることも多かった。文政3年(1820)には滝野ではなく新町へ為替付荷物として送り付けられ、滝野船座はこれを抜荷として高砂での荷受を差しとめた。ところが大蔵元小間物屋儀兵衛がこれを荷受して、滝野船座に訴えられたのである。小間物屋は姫路藩宛嘆願書において、「於高砂ニ而は、たとひ新町村瀧野村ニ不限、其外何れ之河岸場より下□有之候とも、高砂え着仕候得は一統の潤ひニ相成、可相悦義ニ御座候、然ル処右骨柳荷物四拾六丸之分、於高砂請払仕間敷様被仰渡候ニ付、請払之儀相断候得は、則高瀬船ニ而引取、直様西川え積廻シ、御他領今一(市)村わたや伝四郎と申方え水揚仕候由承知仕候」と述べている^{註57}。すなわち高砂の大蔵元の主張は、どこの河岸からであろうと着荷すれば高砂全体の潤いとなるということ、もし荷受を断れば骨柳は他領今市に荷受されるということであった。抜荷の品とわかっていて荷受した理由は、今市との競合にあったのである^{註58}。今市との荷受をめぐる競合は、高砂の大蔵元が商人荷物の荷受において連判帳の規定より譲歩を迫られた理由の一つとしてもあげられるだろう。

④小蔵元との紛争

近世後期の大蔵元は、高砂の小蔵元とも荷受けをめぐって競合した。高砂の小蔵元は本来は干鯛問屋や仲買で、小蔵元への加入は大蔵元の会合の際に決定された。大蔵元と異なり本来商品の荷受はできなかったが、蔵元の名が付されたのは干鯛代として10石以下の米を荷受することが許されていたからである。小蔵元は、文化6年(1809)14人、天保7年12人、天保14年9人、安政4年(1857)6人と、近世後期には減少傾向にあったが、その一部は前述のように大蔵元に移動しており、両者を兼ねた者もいた。

同じように荷受けを行うことから、両者の関係は対立の可能性を含んでおり、天保14年に小蔵元松屋惣右衛門方に着荷した藍玉の荷受をめぐる全面的な紛争となった。同年閏9月付の小蔵元9人による高砂大年寄宛訴状は以下の通りである。

史料 I

天保十四卯年閏九月中小蔵元共より左之歎書差出候処、同十月二日伊奈様・熊澤様御両家江善右衛門殿・長平殿御両人、右小蔵元共歎書并ニ大蔵元規定帳面持

參二而御窺被申上候處、明三日御用場江可罷出候様仰付候由

乍恐御歎奉申上口上

高砂小藏元共
松屋惣右衛門
塩屋五一兵衛
魚屋四郎太夫
網屋利助
坪屋惣右衛門
橋本屋武右衛門
坪屋十右衛門
塩屋五郎兵衛
塩屋平兵衛

一 私共小藏元渡世之者ニ御座候處、先規より高砂川口より入荷物共、御他領奥筋商人川下ケ米拾石已下之分請払仕来り候付、川口御番所様并ニ御津留所江茂、先規より小藏元共印鑑差上、御穀留中も御他領米受払勘定帳面差上、従来仕来通渡世相続仕候所、先日中右客荷之内松屋惣右衛門方江阿州より藍玉積来候ニ付、奥筋高瀬舟江積替候所、大藏元年番米屋又右衛門其場へ参り、藍荷物其許買受之荷物ニ有之哉、但請払荷物ニ有之哉、段々相尋候ニ付、阿州より送付候ニ付奥筋江差遣可申由相答候處、又右衛門より申候ニ、大藏元株外之者ハ客荷物一切取扱致し候儀全不正之儀故、宜敷相差留可申候間、元船江積戻候様申候ニ付、段々手続之次第を以相答候へ共、中々聞入不申、嚴敷差留申候故、又致方無之、其様ニ阿州船江積戻候所、船頭始船子共高瀬舟江積替候荷物、又々積戻し候儀如何之訳合ニ候哉と大ニ立腹仕候ニ付、様々と相断置、小藏元之内壺屋長右衛門・塩屋五郎兵衛方江右之次第相届候處、兩人早速大藏元年番米屋又右衛門方江問合ニ参る處、又右衛門申候者、全躰小藏元株譲り合致候儀決而不相成、勿論奥荷物一切取扱も不相成段申シ候ニ付、何故之儀と相尋候處、元來小藏元之儀者大藏元仲間規定帳ニ致調印居候由ニ而、已前之帳面差出候ニ付、見請候處、小藏元者客荷物取扱仕間敷旨相認め候文言之続、小藏元名前之者共調印有之證文、奥書ニ者御支役御衆中并ニ月番御年寄衆中御調印も在之、驚入可申様無御座候、其俣引取、差掛り之藍荷物之儀ハ大藏元之内相頼、荷主差支ニ不相成様荷先〔 〕為相送候へ共、右之次第ニ而者阿州藍荷物ニ対し申訳も無之、渡世差支江歎敷儀ニ御座候、元來大藏元之儀者諸御家様御收納米御藏元并ニ奥筋川下ケ諸荷物請払仕候ニ付、年々冥加銀三枚宛御上納仕来候儀と奉存候、川口より入荷物之儀者追勝手次第取扱候而も差構無之由、先前より一統承知仕候儀ニ御座候間、已來川口より入荷物請払仕候儀、大藏元共より差障り不申候様、

御憐愍を以御利解被成下置様奉願上候、右願之通御賢慮被成下候ハ、難有奉存候、已上

惣代

塩屋五郎兵衛
壺屋長右衛門
月番年寄
弥次兵衛
同利兵衛

天保十四卯年閏九月

町大年寄御衆中^{注59}

すなわち、事件は小藏元の松屋惣右衛門方に阿波から送り付けられた藍玉を加古川上りの高瀬舟へ積み替えていたところ、大藏元年番の米屋又右衛門がやってきて、小藏元が荷受をするのは不正として舟積みを差し止めたことから始まった。

小藏元の内壺屋長右衛門・塩屋五郎兵衛が米屋又右衛門方へ理由を問い合わせたところ、米屋は小藏元は「奥荷物一切取扱も不相成段」を述べた。そしてその理由を尋ねた小藏元らに、以前の大藏元仲間規定帳(連判帳Bか)を示し、小藏元は客荷物を取り扱えない旨を記した証文に小藏元名前の者以下の者が調印しているのを示した。小藏元らは「驚入可申様無御座候」とそのまま引取り、藍荷物は荷主の迷惑にならないよう大藏元の誰かに頼んで川上に送った。しかしこのままでは「阿州藍荷物ニ対し申訳も無之、渡世差支え歎敷儀」として、閏9月に高砂町大年寄に嘆願書を出したのである。大年寄は10月2日にこれを姫路藩に伺い出ている。

嘆願書にある小藏元の主張は、大藏元は領主米の藏元と奥筋といわれる加古川上流から下る諸荷物を荷受する者で、川口より入る沖口荷物はこれまで自分たちが自由に取扱っても何の問題もなかったので、大藏元がそれを妨害しないように命じてほしいものである。嘆願書冒頭で、小藏元は前々から高砂川口より入る沖口荷物と川上の10石以下の商人米を荷受してきたと主張した。

これに対し、大藏元は同年12月に以下のような嘆願書を大年寄に提出した。

史料Ⅱ

乍恐以書付御歎奉申上候

一 此度小藏元共より歎書差出候ニ付、大藏元年番之者共御呼出、大藏元心得方并に先規より書類等巨細ニ可申出様被仰聞、奉畏乍恐左ニ奉申上候

一 右小藏元と申者往古ハ無御座候、大藏元より外ニ而者荷物壱駄ニ而も請払相成不申地法ニ御座候處、小

蔵元と名目相始候儀、干鰯売買仕候ニ付而者、川筋村々より干鰯代米ニ受取申候米穀取捌方差困り候趣歎出候ニ付、右代米丈ニ限り、尤拾石已下之取扱者勝手ニ為致、則名目小蔵元と相号テ、米穀御穀留中ニても川口御番所様江印鑑差上置、出切手を以拾石已下之米穀出入自由致し參候得共、右干鰯売買相休候節ハ、小蔵元名目相除退キ可申之一札、大蔵元江受取罷在候間、新規ニ干鰯商売相始小蔵元加入之者有之節ハ、其御名付入用料として銀壺枚大蔵元江差出、子孫至り候而も小蔵元之名目相伝へ年々之御冥加銀者不申及、年分之会合諸雑用等之入用壺錢文ニ而も割掛候儀曾而無御座候へ者、畢竟空蔵元ニ而御座候へ共、干鰯代米取扱差支候ニ付、小蔵元之名聞為相唱候事ニ御座候而、其余之入津物ハ勿論、川筋下り荷物受払一切為致間敷取極メ證文数通大蔵元江取之、正徳年中より百式十余ヶ年之間右取極一札通り相守双方聊故障差支之儀無御座、互ニ銘々其職を相営来申候儀ニ付、右正徳年中小蔵元共より取置候證拠書物、乍恐奉入御覽候間、小蔵元共ニも自分売買荷物之外、他之荷物請払壺駄ニ而も仕候と申古記録類等所持仕罷在候歎、乍恐此段御札奉願上候

一 大蔵元一統之儀も、追々衰微仕、別而近来諸荷物請払大ニ相減困窮仕、兎や角と心配至極罷在、其意も不弁、是迄他之荷物取扱不仕候間相許来候小蔵元共ニ御座候、勿論年々大蔵元申合之帳面ニも規定印形乍仕、自余之差障りも不厭、古記證類ヲも反古同前ニ致し、請払仕度杯と身勝手之御願仕候儀ハ、我忝之至甚以歎敷、難渋至極ニ奉存候間、是迄不相変銘々其職分を以、可也之渡世家名相統仕、重而新法之儀不申掛様、小蔵元之者共江御利解被為 仰聞被下置度、不顧恐以書付歎訴奉申上候、右之段格別厚御憐察を以御聞届被為 成下置候ハ、大蔵元一同莫太之御慈悲子々孫々ニ至迄永久有難仕奉存候、已上

大蔵元年番

炭屋久左衛門

鍵屋源右衛門

米屋又右衛門

天保十四卯年十二月

町大年寄御衆中^{注60}

大蔵元仲間の主張は、干鰯商人が干鰯代として受け取る米の売りさばきの便宜のため歎願したことから10石以下の米の取り扱いを許して小蔵元の名義が始まったのであり、小蔵元は大蔵元仲間から独立した存在ではなく、沖口荷物はもちろん川下りの荷物の荷受も許されていないとするものである。そしてこのことについては、正徳期(1711～16)に小蔵元から取った

証拠書類もあるとした。

以上のように、大蔵元と小蔵元の主張は真っ向から食い違っている。大蔵元の連判帳を検討すると、「奥筋荷物改之事」の最後の項目に、「一、荷物着候小蔵元江參候而干鰯代米候哉、又者買荷物ニ候哉、吟味可致、若紛敷荷物ニ候ハ、其小蔵元江引合置、早速当番江相届及吟味可申事」とある。小蔵元に着く荷物について干鰯代米か買荷物か吟味することを大蔵元改役に指図するとのことであるので、これから干鰯代米の荷受が許されていたことがわかる。

文化6年(1809)の連判帳Bの「定」には、「近年小蔵元干鰯代米と名付ケ紛敷義共有之候故、已来者干鰯代引当ニ請取置候米自分江買取候者格別、干鰯代者銀子ニ而請取、右引当米外方江相渡売払候様客先より申来候ハ、早速其趣大蔵元江掛合、紛敷義之無様致可申事」という項目が加わる。10石以下でも干鰯代米ではない小蔵元の荷受行為は否定されている。これは文化期に小蔵元が干鰯と関係がない米を荷受する事態があり、大蔵元がこれを差し止めたものと考えられる。

沖口荷物についてはどうだろうか。天保14年段階に小蔵元が沖口荷物の荷受をして加古川上流に送っており、これが慣習として成立していたことは、史料Ⅱからもよくわかることだろう。連判帳は大蔵元の寄合で確認され、小蔵元や町役人も連印するものであるが、連判帳Bの連印は文化10年で途切れている。小蔵元の嘆願書でも大蔵元年番米屋は「已前之帳面」を示したとあり、小蔵元は長年連判帳を確認していなかった可能性が高い。

その上、連判帳A～Cのいずれも、沖口荷物を大蔵元のみが荷受できるとはっきり書いてはいないのである。史料Ⅰで、大蔵元年番米屋又右衛門は「客荷物一切取扱致し候儀全不正」・「奥筋荷物一切取扱も不相成」と言い、小蔵元も「小蔵元は客荷物取扱仕間敷旨相認メ候文言」とあるが、連判帳A～Cの「奥筋荷物改之事」にしかそれらしい記述がない。しかも「奥筋荷物改之事」では、「一、商人諸荷物大蔵元之外一切取扱致候事不罷成候、一、大蔵元之外江着候諸荷物、直買ニ有之哉、若請払ニ有之候哉、送状一々吟味之事、一、送出諸荷物船々江直積一切不罷成候事」とあり、前掲の小蔵元に着く荷物の吟味を定めた最後の項目に続くので、題名といい、全体として小蔵元の干鰯代米や送出荷物の船直積に重点があることといい、本来加古川上流の奥筋からの荷物の規定であると理解するのが自然である。前節でも述べたように、大蔵元の荷受特権は元々加古川上流奥筋から下る米や林産物を対象とするもので、文化期頃からは中・下流の商品や沖口荷物については大蔵元以外的小蔵元やその他の商人が流通

を担ってきたのではないだろうか。

天保末年に大蔵元が沖口荷物の荷受の独占権を争った理由について書かれた史料はない。しかし史料Ⅱの後半部には大蔵元一統が追々衰微し、特に近年諸荷物の荷受量が減少していると書かれており、こうした事情が関係していると思われる。

さて、大蔵元と小蔵元の争論の結末はどうなったのだろうか。この間大蔵元は小蔵元の荷受行為を差しとめていたが、姫路藩町奉行は弘化2年(1845)8月に高砂大年寄に対し、「取調中小蔵元仕来り通り申渡」を行った^{注61}。大年寄は、商人荷物荷受の仕来りは米10石以下と聞いているので、そのように申し渡してよいかと町奉行に改めて伺ったところ、「其儀も小蔵元共仕来り之通与申渡し候様被仰聞」と、10石以下云々については明言しなかった。その後の姫路藩の裁定は大蔵元の記録に記録がなく不明であるが、そのことからもおそらくそのまま小蔵元の仕来り、つまり沖口荷物も含めて荷受を認めたのではないだろうか。大蔵元の連判帳は変更されていないので、これまで通り黙認するかたちを取ったと考えられる。

終わりに

播磨高砂の大蔵元は、近世前期には廻船による塩・米の買い積みや運賃積みに従事し、隔地間流通により大きな富を得た。同時に丹波や奥播磨の領主蔵元・商人荷物の荷受問屋として、加古川を下る蔵米・林産物の荷受を行った。加古川流域の流通と全国流通は大蔵元において、連結されていたのである。

近世後期には、塩と米の価格低落により廻船による隔地間流通は困難となり、大蔵元は加古川下りの領主米と商人荷物の荷受に業務の中心を移した。ところがそれも丹波での商品生産の発達により地域的な米市場が形成され、領主米の津出し量が減少したことから動揺した。また正徳期(1711～16)には魚肥の需要拡大により、干鯛商である小蔵元による干鯛代米の荷受が始まった。

それに対して高砂の大蔵元の仲間は宝暦8年(1758)に株仲間化し、それまでもあった仲間の取り決めや領主との交渉などの前例も含めた規定集を連判帳という形で整えた。そのなかで大蔵元の荷受の独占権や高砂の渡海船による商品移出の独占権が、高砂の「地法」として明文化され、領主や荷主、小蔵元に対して主張されていく。大蔵元の株仲間化には姫路藩の許可を得ているものの、その荷受の独占権は領主が直接与えたものではないのである。連判帳の規定も、高砂において積み重ねられた取引慣例を「地法」として記すもので、特権的というにはやや疑問があるだろう。

最終局面は文化期(1804～18)以降に訪れた。廻船活動はほぼ終焉を迎え、加古川舟運においても大蔵元以外の沖口荷物や魚肥に無関係な米の荷受が拡大し、領主米の津出しの減少もあいまって、荷受量が減少した。同じ河口港で姫路藩領外の今市などとの荷受の競合もあり、加古川上流荷主に対しても譲歩を迫られ、連判帳の諸規定も荷主に有利なかたちで運用されている。

こうしたことから大蔵元は経営不振に陥り、干鯛商である小蔵元からの新規加入者はあったが、仲間全体の衰退は止められず、株が流動化した。天保改革期に加古川上流の荷主や小蔵元に対して、連判帳の規定の回復により挽回しようとしたが、失敗した。また領主に蔵元の地位を維持するために貸付を迫られ、蔵元職をめぐる争いが引き起こされたことから、大蔵元仲間としての統制が失われている。

高砂の大蔵元の担う商品流通の本質は、領主米の荷受けや地払という点では特権的といえるかもしれないが、廻船活動にせよ加古川舟運にせよ、本来隔地間の自由な商品流通だった。地域での市場が未発達で米や塩などの価格が高く生産地と消費地の差も大きい近世前期には、大きな利益を生んだが、地域市場の活発化と物価の平準化により次第に後退を迫られていくのである。

また近世前期から隔地間流通が商品流通の全てではなく、本来大蔵元が積極的に関わらなかった部分、たとえば沖口荷物については小蔵元や高砂の間屋・商人、渡海船船頭などが担っていた。天保期(1830～44)になって大蔵元はその部分でも荷受けの独占権を主張したが、小蔵元などと紛争を生じ、果たせなかったのである。

注

¹ 西向宏介「近世後期における地域的市場の展開 - 19世紀の播州を対象に」『日本史研究』559、2009年。

² 『高砂雑誌(全)』(高砂市史編纂準備室編・発行、1997年)。

³ 国立公文書館所蔵。

⁴ 前掲『高砂市史』第5巻史料57。

⁵ 『高砂市史』第2巻(2010年、高砂市)第3章第9節。

⁶ 前掲『高砂市史』第5巻史料46「[記録]より高砂町方明細帳抜書」。

⁷ 中川すがね「播磨国高砂湊の渡海船」『新兵庫県の歴史』3、2011年。

⁸ 榎本弥左衛門『榎本弥左衛門覚書』、平凡社、2001年。

⁹ 中川すがね「播磨上灘目東部の製塩業」『甲子園大学紀要』37、2009年。

¹⁰ 国文学研究資料館所蔵「新野辺組・大塩組・宇佐崎組塩浜反

- 別帳」。
- ¹¹ 伊川一良「西廻り海運の発達と羽州塩業」（柚木学編『日本水上交通史論集』2、文献出版、1987年）。
- ¹² 小村式「裏日本における瀬戸内塩の流通－越後国を中心に－」（福尾教授退官記念事業会編『近世社会経済史論集』吉川弘文館、1972年）。
- ¹³ 鳥根県立図書館鶴田文庫。
- ¹⁴ 鳥根県立図書館鶴田文庫「石見近世史料難船史料」。
- ¹⁵ 中川すがね「寛文・延宝期の上方廻船－泉州日根郡湊浦の新屋の活動を事例に」『甲子園大学紀要 C 人間文化学部編（7）』、2004年。
- ¹⁶ 『酒田市史』史料篇第一集「三十六人御用帳」巻1。
- ¹⁷ 『両津市誌』資料編。
- ¹⁸ 広島県立文書館蔵複写資料。
- ¹⁹ 香川県立文書館複写資料「沖ノ浦船番所諸国廻船入津記録」。
- ²⁰ 山形大学附属図書館蔵。
- ²¹ 柚木学編『諸国御客船帳』上・下、清文堂出版、1977年。
- ²² 『高砂市史』第2巻（2010年、高砂市）第3章第6節4。
- ²³ 阿江幸子氏所蔵 万治3年3月21日「仕り渡シ申手形之事」。
- ²⁴ 阿江幸子氏所蔵 寛文4年8月5日「(荒荷抜荷につき誤り)」。
- ²⁵ 阿江幸子氏所蔵 寛文8年10月21日「覚」。
- ²⁶ 阿江幸子氏所蔵
- ²⁷ 阿江幸子氏所蔵 明暦3年10月25日「乍恐返答仕指上ケ申候」。
- ²⁸ 阿江幸子氏所蔵 承応4年3月11日「乍恐言上」。
- ²⁹ 阿江幸子氏所蔵 寛文8年卯月20日「覚」。
- ³⁰ 阿江幸子氏所蔵「加東郡滝野村同郡新町荷分出入嘸致申ニ付、互ニ相済シ候證文事」。
- ³¹ 阿江幸子氏所蔵 猪飼次郎兵衛様御代官所播州加東郡之内新町五郎右衛門…乍恐書付ヲ以御訴訟申上候御事・明暦3年10月「乍恐言上」。
- ³² 阿江幸子氏所蔵。
- ³³ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ³⁴ 『高砂市史』第5巻（2005年、高砂市）史料40姫路下里家文書「姫路御領分中村々并高寄せ覚」。
- ³⁵ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」嘉永6年正月「奉願上口上」。
- ³⁶ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ³⁷ 「高砂雑誌」。
- ³⁸ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ³⁹ 中須家文書「大蔵元定法」。
- ⁴⁰ 前掲『高砂市史』第5巻所収、菅野家文書。
- ⁴¹ 高砂市立図書館所蔵。
- ⁴² 前掲中川すがね「播磨国高砂湊の渡海船」。
- ⁴³ いずれも菅野家文書。
- ⁴⁴ 前掲「[記録]より高砂町方明細帳抜書」。
- ⁴⁵ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁴⁶ 前掲『高砂市史』第5巻史料181小野市黍田町有文書。
- ⁴⁷ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁴⁸ 三枝家文書。
- ⁴⁹ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁵⁰ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。前掲『高砂市史』第5巻史料175高砂市有岸本家文書「諸願書之控并ニ奥印物之控」。
- ⁵¹ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁵² 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁵³ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁵⁴ 阿江家文書 天保9年9月「(萩原役所宛願書)」。
- ⁵⁵ 前掲『高砂市史』第5巻史料176阿江幸子氏所蔵「規定」。
- ⁵⁶ 前掲『高砂市史』第5巻史料177阿江幸子氏所蔵。
- ⁵⁷ 阿江幸子氏所蔵 文政3年3月「恐再御歎キ奉申上候口上」。
- ⁵⁸ 高砂は塩の川上においても今市と争っていた。これについては、前掲中川すがね「播磨上灘目東部の製塩業」を参照のこと。
- ⁵⁹ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁶⁰ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。
- ⁶¹ 高砂市立図書館所蔵「蔵元定法・蔵鋪運賃極連判帳」。

ゲームによる仕訳学習システムの構築

那須 靖弘

平成 22 年 10 月 29 日受理

Development of game type learning system for journalizing

Yasuhiro Nasu

概要:簿記学習において仕訳は最初の関門であり、躓く者も多い単元でもある。しかし、仕訳のルールは特に難解なものではなく、基本的な仕訳を覚えてしまえば様々な応用ができるようになる。つまり、仕訳の学習は相当量の問題を解き基本的な仕訳を覚えてしまうことが必要なのである。筆者は、学生の興味を引くためにカードゲーム形式で仕訳学習を行えるシステムを開発した。このシステムは、仕訳の最初のステップを学習させるための、カードによって仕訳を作成した後でその意味を考えさせる逆方向仕訳形式と、仕訳の基礎が理解できた後に行うための、通常の仕訳問題を提示する形式の学習モードを備えており、教員が管理画面より簡単に動作モードを切り替えて学習できるようにシステムである。

本稿は、筆者が開発したゲームによる仕訳学習システムについて報告するものである。

キーワード：簿記、電子会計、仕訳、ゲーム、学習教材

1 はじめに

コンピュータの導入にともない、企業において会計処理は正確かつ高速に実行されるようになった。かつて、如何にしてミスがなくすかということが非常に大きな命題であり、複式簿記という仕組みが発展してきたのであるが、コンピュータはミスを犯さず、帳簿にチェック機能を持たせる複式簿記の仕組みはもはや実用的な価値はなくなったと言える。実際、コンピュータ会計システムでは従来の簿記の手法とは異なるやり方で処理が行われており、例えば、表示の要求に応じて帳簿が作成され内部に帳簿の実体を持たない会計システムも存在する。

ところで、コンピュータ会計システムは他のシステムと連携し情報を取り込むことが可能であり、大幅な省力化が可能となっているが、レシートや領収書など電子化されていない原始証憑も多く、人手に頼る部分が残されており、複式簿記における仕訳の形式で入力が行われている。さらに、会計システムから出力される財務諸表から企業の業績を読み取るスキルは必要であり、社会人の素養として会計処理に関する理解が求められていることには変わりはない。

このような情勢の変化に対応すべく、長年にわたり簿記検定を実施してきた日本商工会議所も電子会計実務という新たな検定試験を平成15年より実施している。

すでに述べたように、会計情報をコンピュータ会計システムに入力するには、複式簿記における仕訳のルールに従う必要がある。つまり、コンピュータ会計にとっても仕訳は基本であり、授業でも比較的早い段階で仕訳について説明することになる。しかし、仕訳のルールは多くの学生にとって難解であり、その時点で学習を放棄してしまう学生が多いことも事実である。多くの学生にとってなじみのない仕訳であるが、ルール自体特別に難しいものではなく、相当量の問題数をこなし基礎を身につけてしまえば応用もしやすく、その後の学習はスムーズに進む。このため筆者は、簿記学習をサポートするシステムとしてゲームによる仕訳学習システムを構築し「電子会計実務検定対策講座」において利用してきた。

本稿は、筆者が開発した学生の興味を持続させる工夫を行った仕訳学習システムについて述べるものである。

2 仕訳とは

仕訳とは一つの取引を2つの会計事象として捕らえ、貨幣価値で測定し、勘定科目の増減を記述するものである。勘定科目は資産、負債、資本、費用、収益の5つのグループに区分され、資産と費用のグループの勘定科目は借方(左側)にくればプラスであり、負債、資本、収益グループの勘定科目は貸方(右側)に

くればプラスを意味する。

例えば、「商品を100円で仕入れ、代金を現金で支払った」という取引は「仕入 100 / 現金 100」という仕訳になる。

この場合、借方の仕入勘定は費用であるため、仕入に要した費用が100円増加したことを意味する。また、貸方の現金は資産であるため現金が100円減少したことを表している。簿記の入門である3級レベルでも約80もの勘定科目について学習する必要がある、このことが簿記学習の最初の関門となっている。

3 順・逆方向仕訳問題

仕訳を習得するには、取引を会計的な事象として捉える技能が必要となる。授業において取引と仕訳を並べて提示しながら解説をすれば、多くの学生はその意味は理解するのであるが、それだけでは、問題を与えても自力で解答することは困難であり、数多くの練習問題を自分の力で解くことが必要とされている。問題文から仕訳を完成させるまでの思考手順を分析すると、以下のような段階に分けて考えることができる。

- (1) 問題文から取引内容を把握する。
- (2) 取引内容を会計事象として捉える。
- (3) 勘定科目に置き換える。
- (4) 貸借を考える。
- (5) 貸借それぞれの金額を計算する。

この中で、特に(2)の会計事象として捉える手順は教えることは難しく、仕訳練習を繰り返し行い自ら習得する必要がある。一般的な学習で用いられる仕訳練習問題は、取引を説明した文章から仕訳する形式のものである。実務において仕訳する場合にも取引を把握して仕訳をするため、この形式の問題は実務に即した内容であると同時に、この形式の問題が解ければ上記のすべての技能をマスターできていることも確認できる。しかし、この形式の問題は上記の手順をすべて習得しなければ解くことができない問題でもあり、難易度も高い問題であるといえる。

一方、仕訳を与え、その取引内容を推定させる問題は、(2)に関しては、会計事象を一般の言葉に変換することになり逆の場合と比較すると容易であり、学習者は(3)と(4)の部分についてのみ考えればよい。このため、初学者でも扱いやすい問題となり、苦手意識を植え付けることが少ないことが期待できる。

ここでは、通常の仕訳問題を順方向仕訳問題、仕訳を与えて取引を推定する問題のことを逆方向仕訳問題と呼ぶことにする。なお、この両方の形式の練習問題は補完的に利用することで効果があるものであり、副次的には、形式を変えることで学生を飽きさせず多く

の練習を行うこともできる効果も期待できる。

4 ゲーム形式による仕訳練習

一般にどのような科目の勉強においても、進度は学習者ごとに異なるのが常である。特に一斉授業において、理解の進んでいる学生とそうでない学生の差は、授業が進むにつれてますます開いていくことは経験上良く知られている。新しく学習する内容の科目では、その傾向が特に顕著であり、初期の段階で躓くと後々その差が大きくなる傾向は強い。

このため、授業においては、学生間の進捗を調整する必要がある、折に触れて復習的な内容を取り入れる必要がある。このとき、理解が進んでいる学生にも、そうでない学生も興味を維持させながら取り組むことのできる課題が必要となる。

ところで、ほとんどの学生は子供のころにコンピュータゲームを経験しており、青年となった現在でもコンピュータゲームで遊んでいる学生も少なくない。そこで、筆者らはゲームという多くの学生が興味を持つ形式で仕訳練習をさせることを検討した。

一般に、教材として利用するゲームでは、理解が深まれば高得点が得られるようにすることで学習の動機づけをおこなうが、授業において学生同士に競わせる形式のゲームの場合、習熟度がゲームの勝ち負けに直結したのでは学習の進んでいる学生が常に勝つこととなりゲームの楽しみが失われてしまうため、運によって勝敗が左右される要素を取り込むことが必要となる。そこで、本システムではトランプのポーカーのようにカードを取りながら役を作る形式を採用した。具体的には勘定科目と金額の記載されたカードを5枚配り、そのカードから適当なカードを選択して貸方、借方に配置することによりより仕訳を作ることとし、完成させた仕訳に応じて得られる取得ポイントの大きさを競うゲームとした。当然のことであるが、仕訳は貸借のバランスが取れ、勘定科目の組み合わせも適切でなければならない。なお、ゲームとして仕訳の種類を限定するため修正仕訳はゲームの対象外としている。

5 システムの概要

現在、本システムは授業内での利用に限定しているが、将来的に学生が自宅などからアクセスし、自習できるようにすることも考慮し、ブラウザさえあれば学生側の機器を選ばないWebアプリケーションとしてPHP+MySQLを用いて構築した。

ゲームには①逆方向仕訳を行わせる形式、②原始証券から仕訳を行わせる形式、③通常の仕訳問題から仕訳を行わせる形式の3種類、また、動作モードとし

て1回仕訳を完成させるごとに停止してスコアを競うゲームモードと各自が自分のペースで問題を解いていく自習モードがあり、教員の管理画面から切り替えることができるようになっている。

図1に管理画面を示す。管理画面には各学生累積得点と、ゲームごとの勝者が表示されている。

教師は、ゲームタイプを選択するリストボックスからゲームの種類を選び、「新規ゲーム」ボタンをクリックすることでゲームを開始することができる。なお、「新規ゲーム」ボタンはゲームモードにおいて新しいゲームを開始する場合にも使用する。

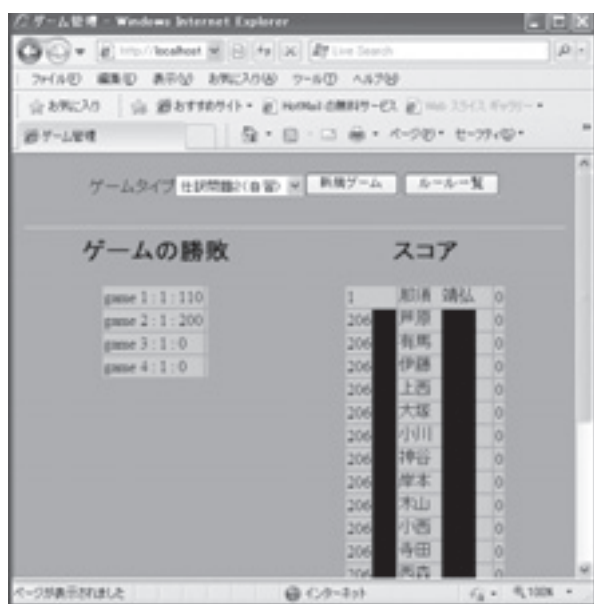


図1 管理画面

逆方向仕訳形式

この形式は各学生にランダムに5枚のカードを配り、そのカードで作ることのできる仕訳を答える形式のゲームである。配られたカードで仕訳を作ることができなければ、何枚でもカードを交換することができ、仕訳が完成した時点で確定をする。学生が行った仕訳はルールデータベース上にある仕訳と比較して自動採点を行っている。

ゲームモードでは全員の操作が完了した時点で、教員が管理画面において「新規ゲーム」ボタンをクリックすれば、参加者の仕訳と得点が、教員画面に表示される。なお、教員画面は教示用のモニターで学生にも提示されており、学生は各自の得点を確認することができる。この形式では、カードの金額が得点となるが、同じ金額でも多くのカードを使った仕訳ほど得点が高くなるようにしている。

逆方向仕訳問題では先にカードを使って仕訳を完成した後、その仕訳の意味を考えさせるプロセスが学習

において重要となるが、完成した仕訳が正しい仕訳であれば、○×形式のクイズが出題されるようになっており、そのクイズに答える過程において仕訳の意味を考えさせ、理解を深めることができるように工夫している。



図2 逆仕訳形式の画面

原始証券仕訳形式

この形式は原始証券を表示し、それに対する仕訳を行うものである。画面にはカードが5枚表示されるが、逆仕訳形式のようにカードを交換しながら仕訳を完成させるやり方では、何度カード交換しても必要なカードが出てこず学生が飽きてしまうという問題があったため、最初に配られる5枚のカードの中に必ず正解のカードが含まれ、カード交換をせずに仕訳を完成させることができるようにしている。

なお、本システムで採用しているカードを使った仕訳問題ではカードに記載されている金額が仕訳のヒントとなる。実際、金額から勘定科目を推定する学生がおり学習の妨げになるという問題があった。このため、最初に配るカードとして、金額の等しいダミーのカードもあわせて配布するようにして、学生が単純に金額から仕訳を推定できないようにしている。本システムでは、自動採点のために正解のカードを問題データベースに登録しているが、別のカードを使い同じ仕訳をしても正しく採点されるように工夫している。

このゲームでは得点は一律であり、正解すると10ポイント得ることができる。



図3 原始証票仕訳形式の画面

通常の仕訳問題形式

この形式は文章で取引内容が表示される簿記学習において最もオーソドックスな形式の問題である。この形式では問題文の記述の仕方によりさまざまな難易度の問題を作ることができるが、現在は、他の2形式と比較して難易度の高い問題を登録しており、授業の後半で利用している。この形式も、最初に配られる5枚のカードの中に正解のカードが含まれており、学習者はカードを選択して仕訳を完成させるものである。この場合も正解すると10ポイント獲得できる。



図4 通常の仕訳問題形式の画面

すべての形式に共通の事柄であるが、学生が行った仕訳はデータベースに登録しているため、各学生がど

の程度仕訳を理解しているか確認することができる。

6 まとめ

本研究はコンピュータ会計実務において必要となる仕訳を、学生が楽しく学べるような教材の開発を目的としたものである。

対面型の授業においても従来の紙と鉛筆による演習では、クラスが数十名になると各学生の進捗が教師は把握できない。このため、学生の理解をリアルタイムに把握できる仕組みは教師にとって有益な情報を提供してくれるツールとなる。

また、ゲーム形式で授業を行うと、普段それほど熱心でない学生も目を輝かせて取り組んでくれる。学生同士を競わせる形で授業を行うと真剣に取り組んでくれる学生も多い。

さらに、一方通行の講義では学生同士の教えあいという行動は見られないが、ゲームということもあり、仕訳に関する理解が遅れている学生も、友人に教えもらいながら楽しんでゲームに参加でき、その過程で、教えていた側の学生も自分の理解できていない点について再確認できるといった利点もあると考えられる。

逆仕訳問題は仕訳学習の初期で行うものであり、従来のシステムでは授業の後半でシステムを使用することはできなかったのですが、今回、順方向の仕訳問題が提示できるように拡張したため、授業全体を通して本システムを利用することが可能となった。

本システムは5枚のカードを用いて仕訳を行うものであるため、5者択一形式の問題と同様であり、特に金額を計算によって求めるという問題には適応しにくい。より高度な学習内容をサポートするためには別の形式のシステムとの併用が必要となる。

参考文献

- [1] 那須靖弘, 榊井猛, 梶木克則: 「教え合いを重視した簿記仕訳ゲーム」, 情報教育研究集会講演論文集, pp725-726, 広島 (2006)
- [2] 那須靖弘, 榊井猛, 梶木克則: 「教え合いを重視した簿記仕訳ゲーム-複合仕訳への拡張-」, 教育システム情報学会, 第32回全国大会論文集, pp438-439, 長野 (2007)
- [3] 那須靖弘, 榊井猛, 梶木克則: 「順逆仕訳に対応したゲームによる簿記学習システム」, 情報教育研究集会講演論文集, pp725-726, 仙台 (2009)
- [4] 那須靖弘, 榊井猛, 梶木克則: 「逆方向仕訳問題出題システムの改善」, 教育システム情報学会, 第35回全国大会論文集, pp438-439, 札幌 (2010)

高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性尺度の開発と応用に関する調査研究

藤田 綾子

平成 22 年 10 月 29 日受理

Development and application of productive-aging intent scale

Ayako Fujita

要 旨

健康な高齢者のサクセスフル・エイジングのための生き方として、プロダクティブ・エイジングの可能性を探るために、「地域・仲間への貢献因子」「次世代への社会貢献」「自己成長因子」「精神的充実因子」からなるプロダクティブ・エイジング志向性尺度を開発した。開発された尺度について、イノベーター普及理論を用いて「イノベーター」「初期少数採用者」「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」に類型化するカットオフポイントを算出した。類型化はポジティブ感情とプロダクティブ・エイジング活動を予測した。さらに、1 年間の高齢者講座は「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」をより高い志向性の類型に変化をさせる影響を持つことが明らかになった。

キーワード：サクセスフル・エイジング、プロダクティブ・エイジング、イノベーター理論

ABSTRACT

The purpose of this study is the development and application of productive-aging intent scale.

That scale contains four factors, which are 'contribute to the neighborhood' 'contribute to next generation' 'self growth' and 'sense of fulfillment'. And the scale can be divided into five types, ① innovator ② early adopter ③ early majority adopter ④ late majority adopter ⑤ laggard.

Those types of the scale can estimate the positive feeling and productive aging activity .

And it is revealed that the aged peoples learning class can change the type.

Keywords : successful aging, productive aging, innovation theory

はじめに

高齢期の「サクセスフル・エイジング(幸せな老い)」のためにどのような生活が望ましいかについて、1960年代に行われたHavighurstら(1953)の「活動性理論」とCummingら(1961)の「離脱理論」の論争は有名である。

活動性理論は、高齢期は身体的老化があるとしても、高齢者が社会参加活動をする事によって役割を獲得し、友人も得ることが出来るのでサクセスフル・エイジングが可能になるというものであった。しかし、活動するためには心身の健康が条件となることから、健康でなければサクセスフル・エイジングを得られないというのは、健康を喪失している人はサクセスフル・エイジングは期待できないと言っていることになるとして批判された。

一方、離脱理論は、高齢期の身体的老化とともに社会と関わる活動が少なくなり、人間関係が減少しても、それは加齢による身体的な老化とのバランスを考えると自然なことである。そしてその時期は自分自身の内なる世界に関心を持つことでサクセスフル・エイジングを得ることが出来るというものである。近年研究が注目されている「老年的超越理論」(Tornstam,L.2005)は離脱理論の延長線上にある。活動性理論と離脱理論の論争は、Neugartenら(1968)がサクセスフル・エイジングは個人のパーソナリティによって決まるのであって、どちらかに決められるのではないという「継続性理論」によって決着が着いたとされている。確かに、高齢期がそれ以前の発達の連続線上にあることを考えると、高齢期にも個々人のパーソナリティによってどのような生活をするのかの

選択は当てはまるはずである。高齢期になったから「離脱」が良いとか「活動」するのが良いとかは決められないであろう。しかし、高齢期のサクセスフル・エイジングはパーソナリティの問題ではなく、加齢という過程の中で避けることのできない身体の老化、退職などの社会的役割の減少、精神的な面で起きる老化現象とどう折り合いをつけて幸せを得るかということである。Baltes,P.B. (1997) の提案するSOC理論は、高齢期は老化による身心の機能喪失や社会的役割喪失と折り合いをつけてサクセスフル・エイジングを得るために、それまでの活動の幅・領域などを選択的に削ぎ（選択的Selective）その選択した幅・領域の内容に対する適応を最重点化して（最適化 Optimization）、さらに、低下した機能を補うために新しい方法を獲得する（補償 Compensation）という選択・最適化・補償（SOC）によって適応が可能であるという考え方であるが、この理論は説得力がある。

しかるに、サクセスフル・エイジングに関するこれまでの研究の中で身体の健康についての評価である「主観的健康」が重要な影響要因になることは一致した結果である。このことは、主観的健康の良し悪しによってSOCの対処の仕方が異なってくることを示唆している。つまり、健康の面で不安があったり喪失をしている人は離脱理論的な適応を選択し、健康な人は活動理論的な適応をしていくのではないかと考えられる。

そこで、本研究では主観的に健康で日常生活に問題のない人たちの高齢期の生き方について考えるにあたり、活動性理論の延長線上にある、「プロダクティブ・エイジング」の観点から考察を進めたい。

プロダクティブ・エイジングという概念は、もともと、Butler (1985) が高齢になっても生産的・独創的な能力を維持している人が多いにも拘わらず、根拠のない慣行や偏見などの年齢差別（エイジズム）によって高齢者の能力が生かされていないことから年齢差別への反論として生まれたものである。

プロダクティブな活動の定義は一般に「報酬があるかないかにかかわらず、物財やサービスを生産する活動」と定義され、具体的な活動としては「有償労働」「ボランティア活動」「親族や友人、近隣に対する無償の支援提供」（杉原 2010 Herzog et al 1989）などを指している。

しかし、家族の介護のような「親族や友人、近隣に対する無償の支援提供」活動については近年介護のポジティブな側面についての検討も行われているが、ストレスなどで介護者の心身に悪影響を及ぼす面の強いことが報告されることが多いのでプロダクティブ・エ

イジング活動から除くべきだと考えられる。何故なら、プロダクティブ・エイジングは高齢者がプロダクティブな活動をすることによって社会の中での役割を担うことも重要であるが、目的は高齢者にとって心身の健康に役立つものでなくてはならないからである。

さらに、プロダクティブ・エイジング活動は健康で心理的にも問題が少ない人が選択する場合が多く、その効果として死亡や身体的機能低下のリスクの軽減、健康の自己評価の維持、抑うつ傾向の抑制や生活満足度、幸福感、自尊感情などのサクセスフル・エイジングの維持・向上に貢献することのできる活動であると位置づけるからである。つまり、高齢者がプロダクティブな活動を行うことで、高齢者の身体・心理面に良好な効果をもたらす可能性が期待される活動である。そのメカニズムはプロダクティブな活動を行うことで、意味のある社会的な役割を担っているという意識を持つことができ、自己概念やサクセスフル・エイジングが高まり、それによって、健康に良い影響をもたらされるという、いわば、個人にとっては「健康予防活動」「健康増進活動」である。このようにプロダクティブな活動への参加が身体・心理面に良好な効果をもたらすならば、健康で心理的にも問題が少ない人の選択行動としてプロダクティブな活動への参加を推進することが求められる。しかしながら、これまでのプロダクティブ・エイジングに関する研究は、プロダクティブな活動を規定する要因として年齢・性・学歴・経済状態・身体の状態・心理的健康（認知レベル）等個人的な特性との関連についての知見の蓄積は図られているが、活動に結び付く意識についての研究取り組みは行われていない。そこで、本研究ではまず、プロダクティブ・エイジングに結び付く意識を「プロダクティブ・エイジング志向性」として、この志向性を測定するための尺度を作成することに取り組んだ。

次に、この尺度を用いて、高齢者教室に参加する前後（1年間の間隔）での意識の変化（教育効果）を規定する要因を、高齢者大学での講座内容、動機、仲間づくりなどの視点から明らかにすることを目的にした。

研究1 「プロダクティブ・エイジング志向性尺度」作成

目的 「プロダクティブ・エイジング」はBass,S. A.Caro,F.G. & Chenらの定義に代表されるように、「高齢期を個人の成長・満足と社会への関わりを両方を充足させていく生き方である」とし、自分自身の健康や精神的な満足にも配慮しながら、他者や社会にとっても貢献できる活動をすることであるとして、自分以外の人のために行う活動と定義し、活動の目的を明確に

している。従って、本研究では、この定義に適合するような意識内容から構成され、高齢者の精神的満足とプロダクティブな活動を予測する尺度作成することが目的である。

方法

予備尺度項目の選定

(1) 項目の収集

プロダクティブ・エイジングは「高齢期を個人の成長・満足と社会への関わりを両方を充足させていく生き方」との定義に基づいている。そこで、「高齢者にとっての成長感とはどういうものか。精神的な満足とは何か、社会との関わりはどのような関わりがあるのか」についての項目を、老年心理学を研究している8名で収集した結果、134項目が抽出された。

(2) 項目の構成の検討

収集された134項目についてTKJ（トランプ式のKJ法）を用いて項目の重複・類似の整理を行うと共に概念整理（図1）を行った結果70項目が残った。

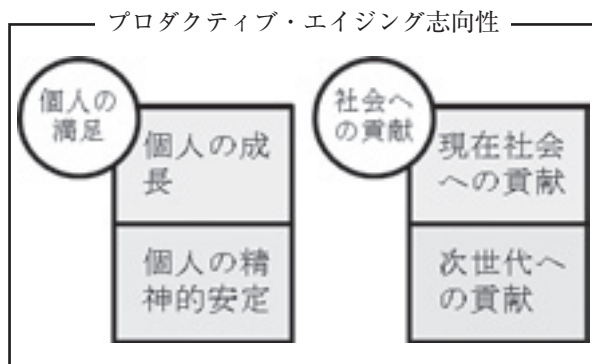


図1 プロダクティブ・エイジングの概念図

70項目の中から図1で導かれた構成要素を測定できるような項目を選択する目的で調査を行なった。

調査協力者

〇県の高齢者学級

有効回答 男性568名 女性504名 総計1,072名
(平均年齢65.61 ± 4.19) である。

調査時期 2006年7月

手続 き 講義終了後調査の主旨を説明して70項目のプロダクティブ・エイジング志向性の予備尺度を配布し、その場で回収した。調査への記入は強制するものでないことを説明した。

調査内容

- (1) プロダクティブエイジング志向性予備尺度(70項目)
- (2) 生活満足度尺度 (LSI-K)
- (3) 社会活動への参加度

結果

プロダクティブ・エイジング志向性予備尺度70項目について、選択肢5段階（非常に重要～全く重要でない）で評価し、得点化を行った。70項目に対して、平均値、標準偏差から極端に偏りがある項目、即ち平均値は5点満点で2以下（3項目）を床効果、4以上（10項目）を、天井効果を示す項目として削除した結果57項目が残った。

次に、57項目の探索的因子分析を行うために、まず各項目間の相関係数を算出した結果「今持っている技術を高める」と「特技を活かす」という2つの項目に $r=.74$ という高い相関が確認されたので、後者を残し前者を削除して56項目にした。因子分析結果56項目の探索的因子分析（最尤法、Promax回転）を行った。4因子を仮定しているため4因子解を採用した。第1因子は「子や孫世代の役に立つこと」「人としての義務を果たすこと」「人を慈しむこと」「子や孫世代に経験を伝えること」など『次世代への社会貢献』、第2因子は「経歴を増やすこと」「人から注目されること」「生きて証を残すこと」などが高い因子であり『自己成長因子』とした。第3因子は「精神的に落ち込まないようにすること」「精神的に強くなること」「気分転換をすること」など自分の精神的な安定を示しているため『精神的充実因子』とした。第4因子は「地域から分担された役割を果たすこと」「人と助け合うこと」など地域や仲間への貢献に関する項目であり『地域・仲間への貢献因子』と命名した。

内的整合性の検討

各因子の内的整合性を表すCronbachの α 係数は、第1因子.90、第2因子.91、第3因子.92、第4因子.88であり、高い整合性のあることが示された。

また、因子間の相関はすべて.63以上で有意に高く、4因子が相互に関連しあっており、プロダクティブ・エイジング志向性として内的一貫性の点で信頼性が保たれていると言える。

尺度の簡便化

実際に利用できる尺度にするためには、協力者の負担をできるだけ減らしておく必要がある。そこで、プロダクティブ・エイジングについての共通理解を持つ研究者が協議して基本的に因子負荷量の高い順から、各因子から5項目づつ（第4因子が5項目であったのでその数に合わせしている）を選定した。

表2は、20項目の因子分析を（主成分分析、プロマックス法回転）行った結果である。

プロダクティブ・エイジング志向性得点は20項目

表1 プロダクティブ・エイジング志向性尺度の因子分析

	成 分			
	自己成長因子	次世代への社会貢献	地域・仲間への貢献	精神的充実因子
PA20 経歴を増やすこと	.894	-.158	-.046	-.036
PA14 生きた証をのこすこと	.801	-.198	.089	.019
PA8 経歴を活かすこと	.751	.060	.059	-.030
PA15 能力を活かすこと	.657	.042	.201	.031
PA2 新しい技術を身につけること	.636	.544	-.391	-.072
PA10 人生の目標を持つこと	.414	.018	.214	.270
PA1 人を慈しむこと	-.141	.836	-.105	.088
PA3 人としての義務を果たすこと	-.089	.781	.166	-.075
PA6 より良い社会を創造すること	-.105	.747	.161	.041
PA5 景観を保護すること	-.036	.707	.084	.074
PA4 子や孫世代の役に立つこと	.255	.598	.037	-.067
PA12 地域から分担された役割を果たすこと	-.002	-.030	.948	-.095
PA13 人と助け合うこと	-.166	.158	.794	.037
PA11 友人や知人の役に立つこと	.198	.019	.664	.042
PA19 自分が住んでいる地域の役に立つこと	.324	-.033	.603	-.024
PA7 助けを求めている人の役に立つこと	-.018	.392	.504	-.008
PA17 精神的に落ち込まないようにすること	-.139	.034	-.087	.998
PA18 精神的に強くなること	-.047	-.009	.010	.888
PA16 趣味を持つこと	.229	.031	-.092	.677
PA9 気分転換をすること	.105	.016	.197	.547
寄与率 (累積寄与率 64.96%)	4.05	9.57	6.24	5.09

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法、第1因子「自己成長因子」($\alpha = .843$) 第2因子「次世代への社会貢献」($\alpha = .849$) 第3因子「地域・仲間への貢献」($\alpha = .862$) 第4因子「精神的充実因子」($\alpha = .862$) 全体 ($\alpha = .929$)

の総合得点で評価することになっているので、項目全体の信頼性が高いことが重要であるが、信頼性を表す α 係数値は、.929 と十分に高いことが確認できた。下位因子の構成は、「精神的充実」「自己成長因子」「次世代への社会貢献」「地域・仲間への貢献」から成り立っている。

以上から表1の20項目の内容からなる尺度を「プロダクティブ・エイジング志向性尺度」とする。

研究2 信頼性の検討

目的 プロダクティブ・エイジング志向性尺度 (20項目) の再検査による信頼性の検討を行う。

方法

調査協力者 〇老人クラブ会員研修参加者41名
平均年齢 78.2歳 (標準偏差12.60)
手続き 3ヶ月 (月2回) の研修期間のうち、間に2週間の間隔をおいて、講義の終わったあとと同じ項目の調査を2回行う。

た。2回とも答えた人のデータのみを用いた。

調査時期 2007年10月

結果

再検査の結果プロダクティブ・エイジング志向性尺度総合点の相関値は $r = .805$ ($p < .005$) であり、安定している尺度と言えることが確認された。

研究3 プロダクティブ・エイジング尺度によるカテゴリー化と妥当性の検討

目的 研究1、2で項目内の安定、再テストの信頼性は確認できたがこの尺度で測定した得点の高い人はプロダクティブ・エイジング活動を行い、精神的満足も満たされていることが必要である。そこで、プロダクティブ・エイジング志向性について地域高齢者のサンプリング調査を行い、プロダクティブ・エイジング志向性尺度の標準化を行い、精神的満足とプロダクティブ・エイジング活動を予測できるかどうかについて

て確認することを目的に調査を行った。

プロダクティブ・エイジング志向性尺度のカテゴリー化は、Rogers (1983) のイノベーション普及理論を参考に5つの類型化を試みることによってその妥当性を検証する。ロジャースは、イノベーションとは「個人もしくは他の採用の単位によって新しいものと知覚されたアイデア、行動様式、物である」と定義しており、イノベーションの普及には採用者を図2に示すようなカテゴリーに分けることができると述べている。そこで、プロダクティブ・エイジング活動を「高齢者にとっての新しい行動様式」と位置づけ、「イノベーター」「初期少数採用者」「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」にロジャースの仮定している割合で分類するカットオフポイントを算出し、そのカテゴリー化が精神的安定とプロダクティブ・エイジング活動を予測できるかどうかによって妥当性を検証することを目的とした。

方法

調査協力者：大阪府の北部にあり、大阪市のベッタタウンとしての性格を持ち、総人口約27万人(2008年)のA市を調査対象とした。60歳以上 67,000人から住民基本台帳に基づき1.5%にあたる1,003人を抽出した。調査方法は郵送で行い、有効回答数は505人で、回収率は50.5%であった。本サンプルの概要を表2に示す。

表2 地域調査協力者

	男性	女性	全体
人数 (%)	242 (48.1)	261 (51.5)	503 (100)
年齢	69 (5.4)	69 (5.8)	69 (5.6)
ADL	3.8 (1.1)	4.5 (1.1)	4.1 (1.2)

年齢、ADLの()内は標準偏差

健康については「良い」69.8%、「どちらとも言えない」は16.0%、「悪い」人は14.2%であった。

調査内容：研究1、2で作成しているプロダクティブ・エイジング志向性尺度(20項目)

この尺度は、プロダクティブ・エイジング志向性得点として1次元で得点化される。下位因子として個人に志向した「自己成長因子」「精神的充実因子」他者・社会に志向した「次世代への社会貢献」「地域・仲間への貢献」からなり、それぞれが5項目づつから構成され、全体で20項目である。評定は5件法(大変重要である～全く重要でない)である。得点範囲は20点から100点であり、得点が高いほどプロダクティブ・エイジング志向性が高い。

調査方法：郵送法

調査時期：2008年1～2月

結果

1 尺度のカテゴリー化

プロダクティブ・エイジング志向性尺度は、Rogers (1958) によってイノベーションの採用が相対的に早かったか遅かったかによって人々のイノベティブネスを測定するために提案されているイノベーション普及理論を適用しようとしている。

Rogersはこの普及曲線は「経験的規則性として正規分布曲線、もしくはそれに近似する曲線が描ける」として正規分布曲線の2つのパラメーターである平均と標準偏差を用いて正規分布を5つのカテゴリーに分けるとしている。カテゴリー分けの基準と名称は下記の図2に示す。

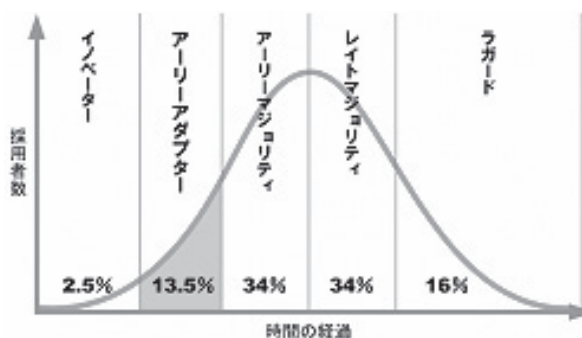


図2 ロジャースのイノベティブネスによるカテゴリー化

Rogers (1958) は、カテゴリーに分ける方法は基本的に標準得点に基づくものであると述べている。そこで、得られたプロダクティブ・エイジング志向性尺度得点について個人ごとに標準得点を求め、Rogers (1958) に基づきカテゴリー化した結果が表3である。

表3 プロダクティブエイジング志向性尺度のカテゴリー化

カテゴリー	実数	%
イノベーター	12	2.7
アーリーアダプター 初期少数採用者	78	17.8
アーリーマジョリティ 前期多数採用者	138	31.5
レイトマジョリティ 後期多数採用者	142	32.4
ラガード 採用遅滞者	68	15.5
合計*	438	100.0

*回答不備者 67名

カテゴリー化の基準得点を粗点で表わすと、イノベーターは99点～100点、初期少数採用者は86～98点、前期多数採用者は77～85点、後期多数採用者は64～75点、採用遅滞者は63点以下がカットオフポイントになる。

2 プロダクティブ・エイジング志向性尺度によるカテゴリー化の妥当性検証

(1) 精神的安定の予測

精神的安定を測定する尺度として、老年心理学ではこれまで生活満足度尺度 (LSI) (Neugarten, B.L et. al.) 自尊感情尺度 (Self Esteem) (Rosenberg, M.) アフェクト・バランス尺度 (Affective Balance Scale) (Bradburn, N.M.)、PGCモラルスケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) (Lawton, M.P.)、ポジティブ気分などが使用されている。

そこで、今回はLSI-Kとポジティブ気分の2変数を用いて検証を行った結果を図3,4に示している。

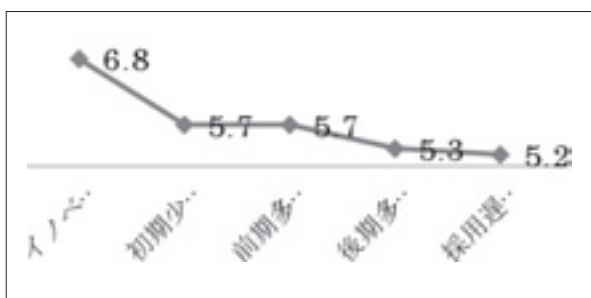


図3 生活満足度とカテゴリー

F = 3.4 df=1 p<0.10

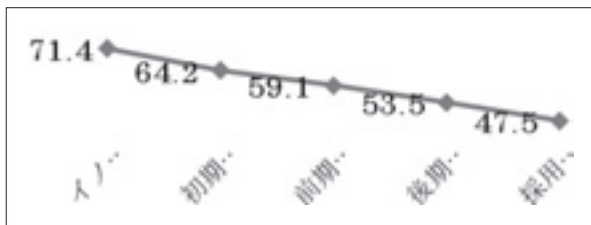


図4 ポジティブ気分とカテゴリー

F=21.62 df=4 P<0.001

生活満足度については、カテゴリー間に差の傾向が、ポジティブ感情には有意な差がみられた。一方、生活満足度 (LSI-K) とポジティブ気分の間のピアソン相関係数値は (r = 0.262 N=366 P<.001) 有意な関係が示された。

従って、プロダクティブ・エイジング志向性のカテゴリー化は精神的安定のポジティブな気分を推測することが出来ること、LSI-Kは推測することが出来る傾向にはあるが明確な有意差を見出すことはできない。しかし、ポジティブな気分を介しては推測できることが明らかになった。

(2) プロダクティブ・エイジング活動の予測

高齢者の行う活動には、1) 自分の健康や生きがいのために行うもの、2) 家族のために行う介護・家事

活動、3) 社会参加・ボランティア活動のような社会貢献活動、4) 就労などがあるが、これらの活動全体の中で家族のために行う介護・家事活動を除いた具体的な活動についてリストアップしたものが表4である。

表4 高齢者の活動リスト

活動分野	具体的活動	活動分野	具体的活動
A 地域活動	自治会参加 地域行事 近所付き合い	D 教養活動	カルチャー 講演会 趣味の会 老人大学
B 付き合い活動	友人訪問 デパート 親戚訪問 買い物 御寺参り	E 社会貢献活動	NPO 活動 シルバー人材 ボランティア
C アウトドア活動	運動 レクリエーション 国内外旅行	F 就労	収入のある 仕事

それぞれの活動を行ってれば1点としてカウントしてカテゴリーごとに比較したのが図5~10である。就労についてはプロダクティブ・エイジング志向性尺度では推測できないが、「社会貢献活動」「地域活動」「付き合い活動」「教養活動」「アウトドア活動」のいずれの活動においてもカテゴリー間に有意な差があり、「イノベータ」「初期少数採用者」「前期多数採用者」の順に活動は低下している。就労については、「前期多数採用者」が最も高く社会活動の中でも特殊な領域であることが明らかになった。

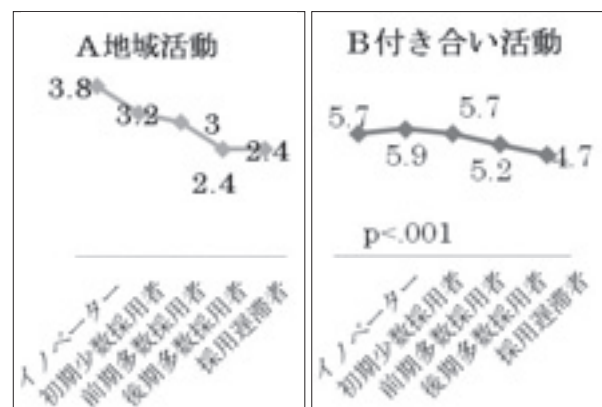


図5・6 カテゴリーと社会参加活動

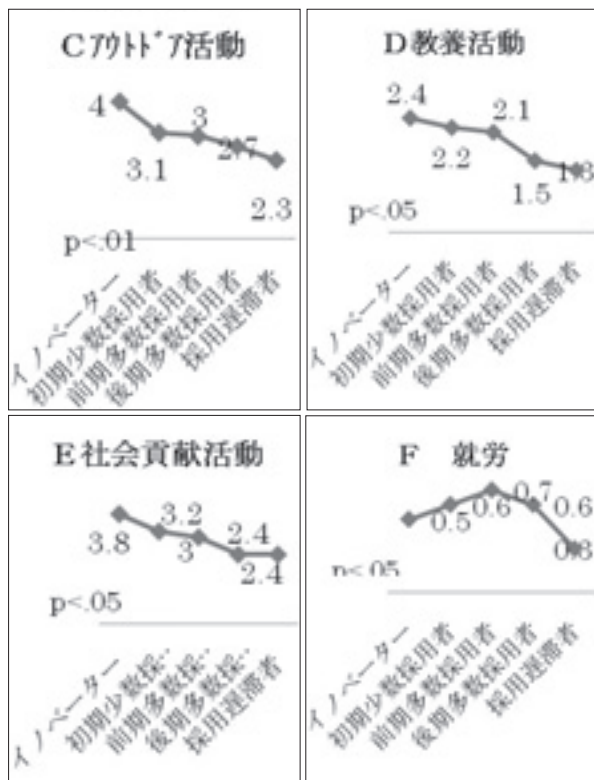


図7～10 カテゴリーと社会参加活動

活動間の相関係数値 ($r = .19 \sim .47$) は、就労を除いて相互に有意な関係にあり、活動性の高い人とそうでない人に分れている。このことは、活動のどれか一つに参加することで他の活動に広がることを示唆している。プロダクティブ・エイジング志向性尺度は就労は予測しないが、「社会貢献活動」「地域活動」「付き合い活動」「教養活動」「アウトドア活動」を予測できる尺度であることが確認された。

結果

以上 (1) と (2) の結果から、プロダクティブ・エイジング志向性尺度によるイノベーション普及理論を参考にした5つのカテゴリー化を試みた結果、カテゴリー化は高齢者のポジティブ感情で測定した精神的安定とプロダクティブ・エイジング活動を予測できる妥当性のある尺度であることが確認された。但し、就労活動については予測できないことも明らかになり、一般的な社会参加活動と就労参加は異なった動機のもとに取り組まれていることが示唆される。

研究3 プロダクティブ・エイジング志向性は高齢者講座での1年間の学びによって影響を受けるのか？

目的 高齢者のサクセスフル・エイジングの生き方として「活動性理論」の主張の延長戦上でプロダクティブ・エイジングがButler, R.N.ら (1985) によって提唱されていることは前述した。活動性理論は社会

的な活動が大きいほど生活満足度が高いという主張であったが、同じように、プロダクティブ・エイジングはプロダクティブな活動に関与し続けることは高齢者にとって良いことであるという考え方である。

藤田 (2006) が高齢期に表4 (就労は除く) にあげた活動に目を見張るような活動をされている人12名に対してインタビューを行ったところ、全員が1回あるいは複数回何らかの学習講座への参加経験を持っていることが明らかになった。そこで、高齢者の学習講座としての高齢者大学への参加がイノベーターに繋がるプロダクティブ・エイジング志向性を変化させることができるのではないかと考えられる。

そこで、研究3では、高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性は高齢者大学での1年間の学びによって変化させることができるのか、変化させることができる要因は学びの内容なのか仲間関係なのかについて検証することを目的に調査を行った。

方法

調査協力者 O 高齢者大学 受講者全員 274名

調査時期 2008年7月 (入学時)

2009年2月 (卒業時) の2回

調査内容

プロダクティブ・エイジング志向性尺度 講座のコース 仲間づくり 講座への満足度 ポジティブ感情

調査方法

2回とも授業終了後に説明を行いアンケート回収箱に各自返却する。回答は強制するものではないことを調査票に記載した。

結果

1 入学時から卒業時へのプロダクティブ・エイジング志向性の変化

高齢者大学へ入学時と卒業時にプロダクティブ・エイジング志向性を調査しカテゴリー化した結果を図11に示している。参考までに、高齢者大学に地域一般の中でどのような人たちが入学しているかを見るために地域一般のパターンも示している。その結果、高齢者大学入学者は後期多数採用者やラガードと言われる採用遅滞者の割合が地域と比較して多く、プロダクティブ・エイジング志向性について決して高い人が入学しているわけではなく、何かを模索している人が多いことが推測される。1年を経て、卒業時に地域の割合と類似してくること、特に後期多数採用者をより高い状態に変化させるのに効果を発揮していることが示唆された。

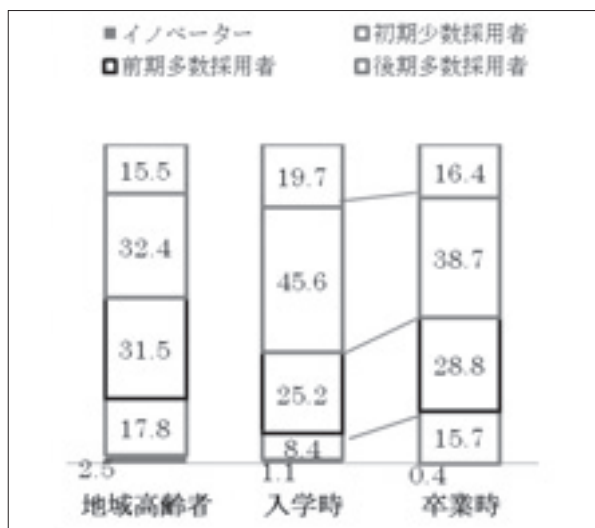


図11 高齢者大学入学時から卒業時へのカテゴリー変化

さらに、変化の方向について入学時と卒業時に1段階でもイノベーターよりになった人をプラスへの変化、採用遅滞者の方向への変化をマイナスへの変化、カテゴリーに変化のなかった人を変化無しとして算出したのが図12である。

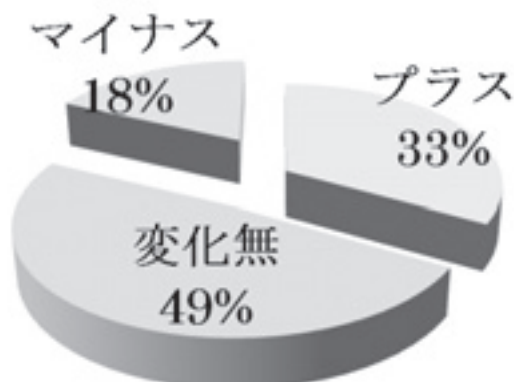


図12 入学時から卒業時への変化

その結果、入学時と卒業時にプロダクティブ・エイジング志向性類型がプラスの方向へ変化した人は33%、マイナスへの変化18%、変化がなかった人は49%であった。

内訳についてみると、イノベーターであった人は全員(3名)初期少数採用者になっている。初期少数採用者であった人のうち6割はそのままであるが、3割は前期多数採用者になっている。前期多数採用者はそのまま前期多数採用者が4割であるが、2割が初期少数採用者に変化し3割は後期多数採用者になっている。後期多数採用者は5割はもとのままであるが4割は志向性を高めている。また、採用遅滞者の5割はそのままであるが残りの5割が志向性を高め少くと

も後期多数採用者に半数近くが志向性を変えていることから、高齢者大学の教育は前期多数採用者、後期多数採用者、採用遅滞者に効果を発揮することが示唆された。

表5 入学時と卒業時の志向カテゴリーの変化

		卒業時 %					
		イノベ	初期	前期	後期	遅滞	合計
入学時	イノベ	0	100	0	0	0	100
	初期	4.3	60.9	30.4	4.3	0	100
	前期	0	20.3	43.5	30.4	5.8	100
	後期	0	8.8	31.2	49.6	10.4	100
	遅滞	0	1.9	5.6	40.7	51.9	100
%		0.4	15.7	28.8	38.7	16.4	100

2 講座内容とプロダクティブ・エイジング志向性変化

調査対象とした高齢者大学では、11の講座(①健康福祉②歴史・考古学③自然アウトドア④保健体育⑤笑いで健康づくり科⑥朗読語り部科⑦英会話初級⑧英会話中級⑨中国語⑩ITコミ⑪手話)が開催されている。

講座ごとにプラス変化をみると「健康福祉」「自然アウトドア」「笑いで健康づくり」などの健康志向が4割を超えている。「英会話初級」「歴史考古学」「ITコミ」は3割から4割弱で「朗読」「手話」「保健体育」「英会話中級」「中国語」は3割以下である。科目との因果関係は必ずしも明確ではないが、健康系など一緒に活動することはプラスへ変化させることに影響を与えるのではないだろうか。

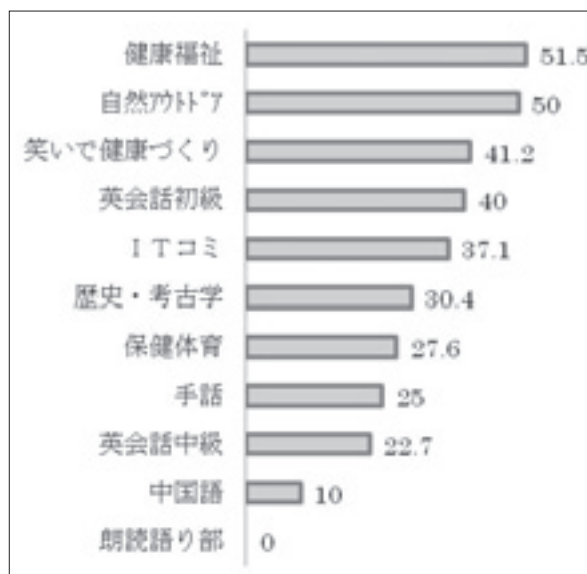


図13 講座ごとのプラスへ変更した%

3 プロダクティブ・エイジング志向性類型の変化と仲間づくり

高齢者大学の目的の一つは仲間を作ることであり、10人以上作った人が18%、5~10人が45%、であり、6割近くが5人以上の友人を作っている。3人以上となると92%になり、ほとんどの人が仲間づくりを行っており、仲間づくりによる志向性の変化は見られない。

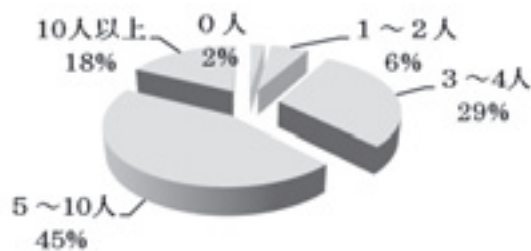


図14 高齢者大学での仲間づくり

4 志向性の変化とポジティブ感情

プロダクティブ・エイジング志向性のカテゴリーの変化とポジティブ感情について検討を行ったが、有意な差はなく、例えば、採用遅滞者が後期多数採用者に変化してプラスへの移行がポジティブ感情を喚起することはなく、イノベーター、初期少数採用者、前期多数採用者などのカテゴリーに志向性が高まっていることが重要であることが確認された。カテゴリー別のポジティブ感情には入学時 ($F=7.44$ $df(4)$ $P<.001$) 卒業時 ($F=7.98$ $df(3)$ $P<.0001$) とともに差がみられる。イノベーターと初期少数採用者の間には差は見られないという結果であった。

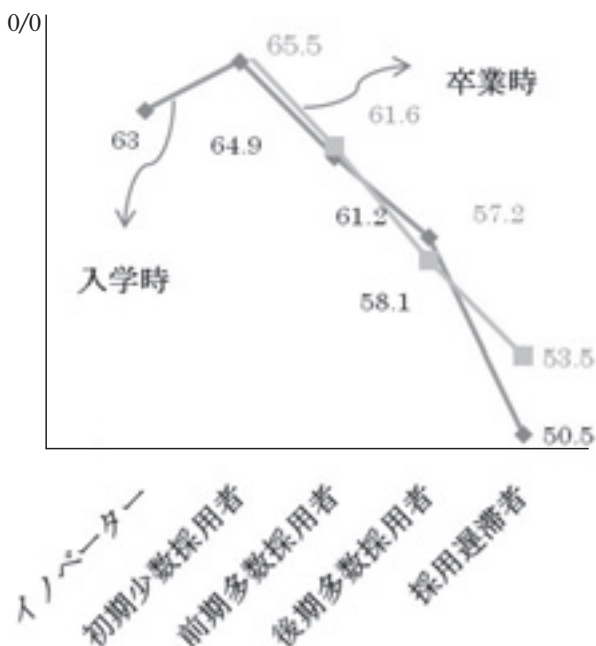


図15 入学時・卒業時のカテゴリーとポジティブ感情

まとめ

超高齢社会における健康な高齢者のサクセスフルな生き方として、自分の成長や精神的満足とともに積極的に次世代や地域社会に貢献する活動を行うこと、つまり、「プロダクティブ・エイジング」がButlerらによって提唱されている。そこで、本研究では、プロダクティブ・エイジング活動に結びつく意志(意欲)をプロダクティブ・エイジング志向性として、志向性を測定し類型化する尺度の開発を行った。類型化はロジャースのイノベーター普及理論に基づき「イノベーター」「初期少数採用者」「前期多数採用者」「後期多数採用者」「採用遅滞者」に分類した。分類された類型はプロダクティブ・エイジング活動を予測でき、ポジティブな感情を予測できることが明らかになった。また、高齢者大学のような学習機関に所属することで、志向性を高めることができることも明らかになった。これらの結果から、高齢者大学の教育目標として仲間づくりと同時にプロダクティブ・エイジング志向性を向上させる教育をすること、それは、講義のみの学習よりは、健康をキーワードにした身体を動かしながら学びをクラス仲間と共有できるような学習内容がより効果のあることが示唆された。

文献

- Bass, S.A. Caro, F.G. & Chen, Productive Aging: Concept and ChallengesMorrow-Howell N., Hinterlong J Sherraden, M.eds., Johns Hopkins University Press., Baltimore.pp37-78 2001
- Baltes,P.B. On the incomplete architecture of human ontogeny: Selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. American Psychologist, 52, 366-380 1997
- Butler & Gleason. Productive Aging; Enhancing Vitality in Later Life, Springer, New York. 1985
- Cumming, M.R.and Henry, W.H. Growing Old: The Process of Disengagement. Basic Books. New York 1961
- 藤田綾子『超高齢社会は高齢者が支える』大阪大学出版会 2006
- Havighurst,R.J. Human Development and Education. New York Longmans, Green. 1953
- Herzog, A.R. Kahn,R.L. Morgan, J.N. et al. J.Gerontol 44, S129-S138 1989
- Neugarten, B. L., Personality and pattern of aging. InB. L.Neugarten (Ed.) Middle Age and Aging. Chicago: The University of Chicago Press pp.173-177 1968
- Rogers,E.M., Everett M., Categorizing the Adopters of Agricultural Practices, Rural Sociology, vol.23 No.4. December pp.347-354 1958

杉原陽子 プロダクティブ・エイジング 大内尉義他編著「新
老年学」東京大学出版会 pp1630-1634 2010

Tornstam,L. Gerotranscendence: A developmental theory of
positive aging. New York: Springer. 2005

謝辞

本研究においては、茨木市の高齢化対策室、大阪府
地域福祉推進財団の多大な協力があつた。また 共同
研究者として大阪大学人間科学研究科に在籍中であつ
た、中原純、狩谷明美、中里和弘、河村諒、枝さゆり、
長塚美和、久保尚子、竹村節子、大野知代の協力を得
ている。ここに深く感謝の意を表する。

大学におけるモバイル端末の演習環境

梶井 猛

平成 22 年 10 月 29 日受理

Computing environment of university that uses Virtual Software

Takeshi Masui

[概要]

最近、広く利用されている携帯電話に代わって、幅広いインターネットサービスが利用できるスマートフォン、IPADをはじめとするモバイル端末が普及してきた。スマートフォンは、OSとしてAndroidが導入され、マウスの代わりにタッチパネルの操作で利用する。アプリケーションの利用、データの管理などモバイル端末の操作は、クラウドコンピュータを利用したパソコンのデスクトップと同じである。大学のリテラシー教育では、一般的に学内LANに接続されたWindowsパソコンを利用してIT時代に対応した演習を実践している。本学の現代経営学部では、モバイル端末で動作するアプリケーションに対応した演習として、USBメモリに格納されたモバイル用のOSを利用して、擬似的に体験させてきた。今回、スマートフォンなどに使用されているandroidに注目し、Windows上で動く仮想ソフト上で動くandroidを利用してモバイル端末の操作が体験できる演習環境について報告する。

キーワード：パソコンのOS、モバイル端末、android、仮想化ソフト

1. はじめに

2010年になって、iモードの携帯電話に代わって、MID（モバイルインターネット・デバイス）であるスマートフォン、IPADを始めとするモバイル端末が驚異的に普及した。インターネットの利用は、これまでの設置されたパソコン、ネットパソコンなどの機器から、さらに小さいモバイル情報端末まで拡大してきた。今年度の新入社員、新入生の間でも、携帯電話の代わりにスマートフォンを購入して、携帯電話の感覚でインターネットサービスを利用している。使いこなせるかどうかは別にして、MIDで電子書籍、音楽の配信、ビデオの配信など新しいサービスが利用できるようになっている。

2008年、「低価格（5万円）パソコン」として爆発的に普及した超小型で低価格のノートパソコンであるネットブックの人気も今なお高く、さらなる小型MIDとともに、これらのデバイスをターゲットにした軽量ディストリビューションも登場している。スマートフォン用OSである「android」、ネットブックに最適された「Ubuntu Netbook Edition」、Ubuntuをベースとし、ネットパソコンでも十分なパフォーマンスが発揮できるようにチューニングされた「Easy Peasy」などのOSもリリースされ、モバイル端末の機

能が向上している。

スマートフォンが普及してきたIT時代において、大学においてもこれらのモバイル端末がWi-Fiで利用できるパソコン環境が必要である。IPADを購入しても、大学でWi-Fiが利用できなければ、速度面において十分に性能が発揮できない。モバイル端末があっても、演習で利用することもできない。これからの大学において、パソコンに代えてモバイル端末を利用させる演習も増大していくと考えられるが、とりあえずゼミナールでモバイル端末の利用体験ができる環境を検討した。

本学のパソコン演習室は2002年以降Microsoft社のWindows XPが導入され、一般的な情報処理教育で利用だけでなく、さまざまなインターネットサービスが利用できるコンピュータ環境が整備されている。Windowsの主要アプリケーションであるオフィスソフト、電子メール、ファイルサービス、プリントサービス、学習用のeラーニングだけでなく、履修登録、成績の閲覧などが利用できる。

筆者の専門ゼミナールでは、Windowsパソコンに最近話題になっているUbuntuを導入して、大学におけるパソコンの有効利用について演習を行っている。1台のパソコンにKnoppix、Ubuntuなどが利用できる

環境を整備してきた。さらに、「仮想化ソフト」と呼ばれるアプリケーションを導入し、Windows上で他のOSが同時に利用できる環境も整備した。

今回、ネットブック、スマートフォンなど種々のモバイル端末で使用されているOSをゼミナールの演習で利用できる環境を整備した。携帯用のOSである「Android」のOSを演習室のパソコンにインストールすることによって、モバイル端末のデスクトップを体験できる。現在、専門のゼミナールにおいて、マウス操作で利用するモバイル端末用のOSの活用方法を検討している。本稿では、大学のパソコンで利用できるモバイル端末が体験できるパソコン環境について報告する。

2. モバイル時代のパソコンのOS

Microsoft社は、2007年1月にWindows XPの後継としてWindows Vistaを全世界で発売、2009年10月22日にWindows Vistaの後継のとしてWindows7を販売した。しかし、Windows XPのサポートも2014年まで延長していて、本学も2010年現在Windows XPを使用している（Windows Vistaのライセンスはあるがバージョンアップしていない、Windows7の導入は未定）。

現在、Windowsパソコンにおいて3つのバージョンのOSが混在している。本来なら、最新のバージョンが利用されるべきであるが、OSの機能アップより操作性、運用面におけるこれまでの互換性のメリットが重要視されている。個人でパソコンを新規に購入するには、Windows7しか選択の余地はないが、Windows XPダウングレードサービスを利用することによって、Windows XPを使い続けることも可能である。しかし、パソコンユーザは、利用したいOSをパソコンに導入するには、個人でOSをインストールするしか方法がない。パソコンの愛好家、マニアは別として、パソコンのOSは保守運用が必要となるので、個人では自由にOSは選択できない。

Microsoft社の最新のOSであるWindows 7の売り物のひとつに、モバイル携帯のスマートフォンの機能であるタッチパネル機能を標準装備している。パソコンがタッチパネル対応なら、画面に指で触れるだけで写真データを動かしたり、音楽を再生したりできる。OSの機能において、MIDの操作性が導入されている。これからのクラウドコンピューティングの時代におけるパソコンのOSは、Microsoft社のWindowsがベースになって機能アップして、Windows 7がこれからのパソコンの主流でありつづけるのかは混とんとしている。

Microsoft社のWindows以外にパソコンで利用できる

OSとして、Ubuntu、Fedoraなどインターネットで無料配布しているPC-UNIXと呼ばれるLinuxディストリビューションがある。インターネットで配布しているパッケージをパソコンにインストールするだけで、Linuxの豊富なアプリケーションが利用できる。最新のLinuxディストリビューションの使用することによって、パソコンを活用することができる。

2010年4月にデスクトップ用途を中心に人気のUbuntuに、最新版の10.04が登場した。図1にLiveCDで立ち上げたUbuntu 10.04のデスクトップ画面を示す。インストール用のアイコンをクリックすることによって、簡単にハードディスクにインストールできる。過去のバージョンで取り込んできた先進機能をさらに向上させ、安定したOSになっている。その上iPhoneとの接続性の向上が図られ、9.10まではiPhoneを接続してもその中のiTunes領域にアクセスできなかったが、10.04からは可能になっている。さらに、①起動時間の改善（約15秒、8.04と比べると半分）、②外観の大幅な変更、③オンラインで音楽を購入できるUbuntu One Music Storeのクライアント機能も標準で実装しているなどのコミュニケーションツールとの連携強化、④米NVIDIA社のグラフィックチップ用のドライバの強化といったユーザの使い勝手にかかわる改良が施され、これまでと同様Windowsに代わるデスクトップが利用できる。

Ubuntu 10.04には従来通りデスクトップ向けのDesktop Edition、サーバ向けのServer Editionが提供されるほか、ネットブックに最適化したNetbook Editionも用意されている。今回の目玉は、Netbook EditionにARM版があること。ネットブックより小型のスマートブックなど多様なモバイル端末に対応できるように、ARMアーキテクチャ向けのバージョンが用意されている。

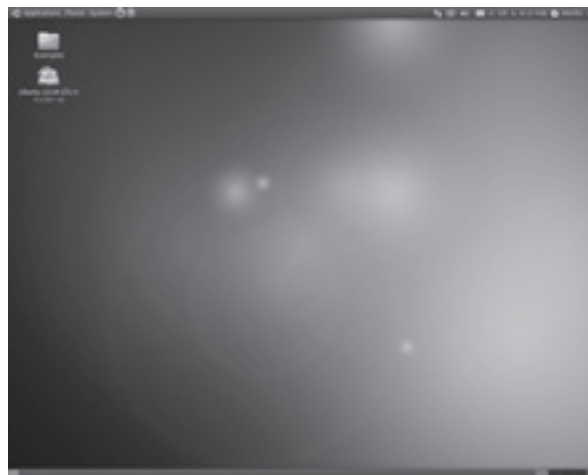


図1 Ubuntu10.04のデスクトップ

図2にNetbook Editionのデスクトップ画面を示す。Netbook Editionは、ディスクサイズは思いのほか小さいが、Opera、Fennec、ChromiumのWebブラウザがインストールされ、ウィンドウは基本的にシングルウィンドウで起動するようになっている。ネットブック専用ならば専用のソフトやカスタマイズも利用できる。

現在ネットブック、タブレット、スマートブックで最も勢いがあるのはiPadであり、Chrome OS、Android、WebOSやMeeGoあたりがライバルである。ネットブック/タブレットは、Apple、HPやNokiaの様にハードもOSも提供できるメーカーもいれば、OSのみ提供するメーカーもある。また、GoogleやIntelの様にOSのみでなく多様なサポートができる巨大なバックグラウンドを持つメーカーもあり、Ubuntu Netbook Editionがネットブックのパソコンの標準になるかどうかは別である。

Appleの成功を見ているとハードウェアやOSが優れている必要はあるが、その周りを形成するApp StoreやiTunes Store等のサポートも必要となる。ただ、Ubuntu Netbook EditionがIPADのOSまで利用されるようになるのかわからない。Ubuntu Netbook EditionはOSの軽さだけではなく、電子書籍とかスマートフォンで利用できるようなOSに発展していくかも知れない。

LinuxベースのネットブックOSを開発するEasy Peasy開発チームは3月に、EasyPeasy 1.6を公開した。Easy PeasyはUbuntuをベースとしたネットブック向けの軽量ディストリビューションで、スペックの低いパソコンでも十分なパフォーマンスが発揮できるようにチューニングが施されている。容量は830MB。Easy Peasyの公式サイトよりディスクイメージを入手できる。Easy PeasyはもともとUbuntu eeeという名

前で台湾Asustek Computer社のEeepPCをメインターゲットに開発が行なわれていた。

LiveDVDからインストールし、ハードディスクから起動すれば、図3に示すようなグリーンを基調としたデスクトップ画面が現れる。Webの利用に特化したユーザインターフェイスを特徴とし、プラグアンドプレイで音楽やビデオを楽しめる。操作面がネットブックに合わせて改良、操作画面はディスプレイ解像度が低いネットブックでも快適に操作できるように全画面表示を採用している。加えて、起動速度もUbuntuに比べ飛躍的に向上させている。

ソフトウェアもネットブック向けに用意され、メールやWebブラウジングといった定番ソフトから、つぶやきサイトのtwitterやSNSのFacebookなどを使えるソフトも採用している。ネットブックの購入層に合わせたのか、動画や音楽系のソフトも数多く収録している。さまざまなフォーマットの音声や動画も幅広く再生できるように、多くのコーデックがデフォルトでインストールされている。画像の編集および管理には

表1 Easy Peasyの特徴

概要	Ubuntu 10.04 (Lucid Lynx) をベースとし、Linuxカーネル2.6.32.8ベースのカスタマイズ
特徴	HAL (Hardware Abstract Layer) パッケージを削除することで、起動時間が改善
ドライバ	NVIDIA向けのオープンソースドライバ「Nouveau」も含まれるほか、プロプライエタリドライバのサポートも強化
Webブラウザ	Firefox 3.6
メール閲覧	Evolution 2.82.2
オフィスソフト	OpenOffice も最新版の3.2



図2 Netbook Editionのデスクトップ画面



図3 Easy Peasy1.6

フォトタッチソフト「Picasa」を利用する。さらに、米Adobe Systems社のFlash plug-inのようなベンダーが開発するソフトも標準でインストールされ、インストール後すぐに動画サイトYouTubeのようなFlashコンテンツをたよとしたサイトにアクセスできる。EasyPeasy 1.6の特徴を表1に示す。Ubuntuを一步先取りしている。

Androidは米国Google社が2007年11月に発表し、2008年10月にオープンソースとして公開された携帯電話向けソフトウェア・プラットフォームであり、2010年以降日本でも多くのキャリアからAndroid搭載のスマートフォンが販売されている。Androidは今後、携帯電話に留まらず、情報家電など他の組み込み分野にも大きな影響を与えている。

2008年12月、Androidの開発版ブランチである「cupcake」が発表され、特にその中でも目を引いた機能として「x86CPUへの対応」が挙げられる。x86CPUでも動作可能にしたことで、例えばシンクライアントやMID (mobile internet device) など他の用途でも使われることが可能となった。携帯電話や組み込みなどの機器のソフトウェアとして開発されたAndroidはWindowsが動く「普通のパソコン」でも動作する。

Android-X86プロジェクトでは、台湾ASUSTek Computer社のネットブックであるEeePC向けのAndroidのイメージファイルを提供しており、手軽にインストールメディアを作成してパソコンに導入できる。現在安定版のX86用Android 1.6 release 2のイメージファイルとソースコードのコンパイルが必要な最新のAndroid 2.1が公開されている。Androidを利用するには、パソコンのハードディスクに直接インストールする方法、もう一つは、仮想マシン上にインストールする方法がある。パソコンにインストールの後、パソコンをモバイル端末としてAndroidを利用することができる。パソコンにAndroidをインストールすることによって、大学の演習において、モバイル用端末の操作性、実用性を体験することが可能となる。

今回は、Androidを演習室のパソコンで動かすことを検討した。使用したAndroidは、台湾ASUSTek Computer社の「EeePC 701」で動作するように開発されたものである。

EeePC向けのAndroidのイメージファイルが演習室のパソコンで使用できるかが問題となる。共通で利用する大学の演習室のパソコンは、既存のOSを変更できないので、Androidを導入する場合、最新の注意が必要となる。配布しているイメージファイルがパソコンで起動するかどうかのチェックから行う必要がある。

これまで、PC-UNIXとして配布されてLinuxディストリビューションの中で、Fedoraシリーズ、Vine LinuxのLive CDは利用できたが、Ubuntu、Knoppixは、利用できるバージョンと利用できないバージョンが存在している。そのため、Windows以外のOSを利用する場合、パソコン環境の整備は容易ではない。Live CDの運用、USBメモリの利用、ハードディスクへのインストール、仮想ソフトの利用など検討項目も多い。毎年、時代に対応した最適なパソコン環境を更新している。

今回、Android-x86 ProjectのDownloadページから、android-x86-1.6-r2.isoのLive CD形式のイメージファイルをダウンロードし、USBメモリに書き込んだ。このUSBメモリをパソコンに挿入することによって、AndroidがLive CDのOSとして動作する。図4にAndroidのデスクトップ画面を示す。図5にAndroidのメニュー画面を示す。さらに、ハードディスク、USBメモリにインストールすることもできる。ダウンロードしたLive CD形式のUSBメモリは、USBデバイスからブート可能なパソコンでは、USB端子に挿入することによって、動作が確認できる。当然ASUSのEeePC 901をはじめ演習室のパソコンで使用できた。ただし、グラフィックスボードが対応していない旧式のパソコン(演習室のIBMパソコン)では、Besaモードで起動する必要がある。Live CDでは、Local & Text、LAN環境などの設定を毎回する必要がある生じるので、実際に運用するにはハードディスクか、USBメモリにインストールする必要がある。当然ASUSのEeePC 901のSDDメモリには導入できた。さらに、外部のUSBメモリにもインストールができた。USBメモリ版をパソコンに挿入するだけで、設定が格納されるAndroidが起動できた。作成したAndroid



図4 Androidのデスクトップ画面

のUSBメモリ版は、lenovo社のThinkPad X60では起動したが、Panasonic LetsNoteでは起動するが、途中で止まってしまった。演習室のパソコンは、Live CD版はブートするが、USBメモリ版は起動しなかった。ハードディスクへのインストールは、Windowsのブート領域であるMBRをGRUBに書き換えるため、導入をあきらめた(共有で利用するパソコンでは、デフォルトでWindows XPがブートする仕組みを変更することはできないので)。そのため、Windows XPで動作する仮想ソフトにインストールした。

パソコンで動作するAndroid-x86は、実際のスマートフォンを組み込まれている実機に比べると、無線LANのサポート、日本語入力など機能が低い。さらに、アプリケーションのサポートなど、利用できない機能は多い。しかし、モバイル端末のOSとして発展していくAndroidのデスクトップ、操作などは、モバイル端末を利用していく上でパソコンでの利用は価値がある。

3. 仮想化ソフトの利用

最近多くのLinuxディストリビューションに仮想化ソフトが標準に搭載され、手軽に仮想実行環境が利用できるようになっている。仮想化ソフトは、安定して動作するのに加えて、ごく平均的な性能のパソコンで利用できる。仮想化ソフトはよく利用されているものだけでも数種類あり、日々更新されている。表2に無償で利用できる主な仮想化ソフトを示す。これらの仮想化ソフトをWindowsパソコンで利用する価値がある。

Virtual Boxは、当初ドイツのソフトウェア会社Innotekにより作成され、現在Sun MicrosystemsによりSun xVMの一部として開発されている仮想化のプラットフォームである。Virtual Boxは、既存のホス

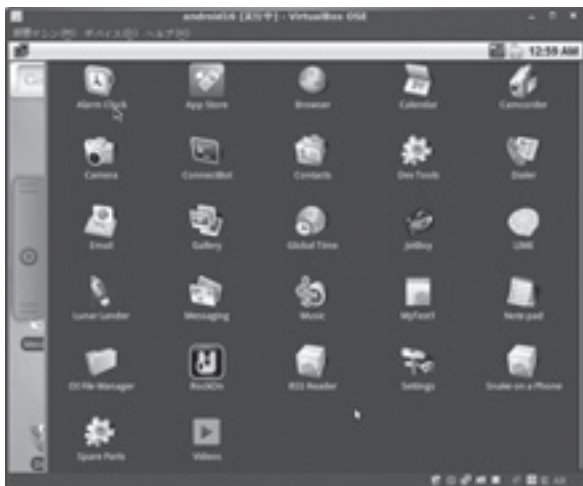


図5 Andoroidのメニュー画面

ト・オペレーティングシステム上にインストールされ、このアプリケーションの中で、追加のオペレーティング・システムを載せて実行する。例えば、Windows XPがホストOSとして動作している単一仮想マシン上で、Linuxをゲストとすることができる。Ubuntuの公式ページにVirtual Box用仮想マシンとWindowsおよびUbuntuで動作するVirtualBoxのプログラムがアップロードされている。

VMwareは米国VMware社が開発した仮想化ソフトで、正確には製品シリーズの名称で、シリーズには10種類近くの製品がある。VMware PlayerをWindowsにインストールするだけでは、仮想PCは使用できない。Ubuntuの配布形態には、Ubuntu Japanese Teamが作成した仮想マシンのイメージがあり、VMwareイメージファイルを適当なディレクトリにコピーして展開して利用する。この中にあるubuntu.vmxをダブル・クリックするだけで、VMwareのウィンドウが表示され、Ubuntuが起動する。イメージファイルとして、Ubuntu8.04だけでなく、Vine Linux4.2、KNOPPIX5.3.1もアップロードされている。VMware Playerは、仮想イメージファイルを作成できないので、他のOSを利用する場合、VMware Server もしくは、フリーのソフトを使用して仮想イメージファイルを作成する必要がある。

KNOPPIXは、DebianGNU/LinuxベースのLinuxディストリビューションで、KNOPPIX 5.3.1には、仮想化ソフトのVirtualBox Open Source Editionが搭載されている。KNOPPIX5.3.1日本語版には、仮想化ソフトのQEMUが搭載されており、KNOPPIX上で別のKNOPPIXの起動、Windows上でKNOPPIXの操作ができる。仮想化ソフトのQEMUを使用すれば、KNOPPIXを簡単にWindows上で動作させることができる。KNOPPIXのメディア内にあるWindows用の実行ファイルを実行するだけで、QEMUがWindows上で起動し、自動的にKNOPPIXが起動する。パソコ

表2 無償で利用できる主な仮想化ソフト

ソフト名	特徴
Virtual Box	米国Sun Microsystems提供、デスクトップ用の軽量ソフト。
VMware Player/Server	米国VMware提供、デスクトップ用の軽量ソフト。
KVMとQEMU	KVMの開発コミュニティ提供、Linuxカーネルに組み込まれている。
Xen	Xen.org提供、サーバ向けの機能を備えている。
VirtualPC2007	マイクロソフトが無償で配布している仮想PCソフト

ンの性能によっては起動しなかったり、動作が非常に遅くなる。LiveCDでブートができないパソコン対しても、仮想化ソフトで作成した仮想PCのHDDにKNOPPIXをインストールでできた。

マイクロソフトが無償で公開している仮想PCソフトVirtual PC 2007を使えば、新たにPCを用意することなく、異なるOSのマシンを用意できる。仮想PCソフトは、いま使っているOSを動かしながら、同じマシンで別のOSを使うためのソフトで、PCのエミュレーターである。たとえば、XPの実行環境で仮想PCソフトを使えば、XPのデスクトップ上でVistaやLinuxなどのOSを扱える。それぞれのウィンドウ内に、OSのデスクトップが表示できる。ネットで配布されているOSの無料イメージを使えば、VistaやLinuxも無料で利用可能となる。Virtual PC 2007を使えば、XP上でVistaを起動できる。

本学のゼミで使用するパソコンにはこれらの仮想ソフトをインストールして演習を行ってきた。しかし、KNOPPIX5.31のLiveCDのメディアは利用できなかったが、米国Sun Microsystemsが提供している仮想化ソフトVirtual BoxにKNOPPIX日本語版をインストールしたところ、問題なく利用できた。また、Ubuntuも8.04のLive CDも演習室のパソコンで利用できないが、仮想PCの上では利用できるなど、パソコンにインストールできないOSも仮想OS上では動作ができることもあり、仮想OSを利用する価値は十分にある。(KNOPPIX6.0、Ubuntu8.10以降のバージョンは演習室のパソコンでインストール可能となった)

4. 大学のパソコンでの利用

本学の演習室に設置されているパソコンのOSは、パソコンリテラシの演習などでWindows XPのアプリケーションが利用できる共用のパソコンである。使用したパソコンの仕様を表3に示す。CPU処理速度1.7GHz、メモリ容量1Gbyte、ディスク容量80Gbyte、1GbitのNICを備え、さらにUSB端子に接続したディスクデバイスからブートできる機能を備えた一般的なパソコンである。

モバイル用のOSをWindowsパソコンで利用するには、さまざまな方法がある。1台のパソコンでWindowsとLinuxを共用する場合、Windowsが入っているHDD(ハード・ディスク)にLinuxを追加して、電源投入時にOSを選ぶ、いわゆる「デュアル・ブート環境」を構築する方法。2006年以降、Linux/BSDディストリビューションの配布において、別称1CD Linuxとも呼ばれ、CDやDVD、USBメモリから起動

できるLive CDの種類が増え、パソコンにインストールされていないOSもLive CDを利用することによって即時に利用できるパソコン環境が普及してきた。Windowsしかインストールされていないパソコンでも、CD-ROMから起動するだけで利用できるLive版のLinuxを利用する方法。より手軽にLinuxを利用できる、Linuxディストリビューションで配布されているLive CDをWindows XPの代わりに利用できる。これらの方法は、ハードディスクにインストールして起動するか、またUSBでブートできるかどうかディストリビューションの内容に依存する。インストールするOSは、いわゆるハードウェアに依存する。配布しているOSを利用するだけなので、起動しなければあきらめるより仕方がない。

ハードウェアに依存しない方法として、仮想化ソフトの利用が考えられる。仮想化ソフトを使用すれば、Windows上でLinuxを利用できる。

これまで演習室のパソコンで、KNOPPIX、UbuntuなどのLive CD、USBメモリを利用して、Windows以外のLinuxを利用できるパソコン環境、さらにハードディスクにLinuxパーティション確保して、マルチブートでLinuxをゼミナールの演習で利用してきた。ハードディスクにインストールできないOSは米国VMware社のVmware、Sun Microsystems社のVirtual BOX、Microsoft社のVirtualPCの仮想化ソフトをパソコンに仮想化ソフトを導入して、仮想化ソフト上で動作するデスクトップ環境も利用してきた。

今回、モバイル端末で使用されているOSをゼミナールのパソコンで利用できるようにするために、ハードディスクにLinux用のパーティションを追加し、さらにWindowsにSun Microsystems社のVirtual BOXをインストールし、その上にAndroidを導入した。

4-1 ネットブック用OSのインストール

演習室のパソコンは、Windows XPが快適に利用できるスペックであるが、ハードディスクの容量は80GByteしかなく、Linuxを導入するには容量が少ない。

表3 ゼミナール室のパソコンの仕様

名称	HP Compaq Business Desktop dc5750
プロセッサ	AMD Sempron Processor 3400+1.79 GHz
チップセット	ATI RADEON XPRESS 1150
主記憶容量	Pc2-5300 (667MHz) 1GB
HDD	S.M.A.R.T対応 80GB

ゼミで利用するパソコンに、ubuntu10.4だけでなく、Ubuntu Netbook Edition、Easy Peasy、Androidなどのモバイル用のOSが利用できるように、80Gbyteのハードディスクに8GbyteのLinux用のパーティションとSwapパーティションを作成してインストールした。図6にパソコンのディスクの領域を示す。各々のOSはブートメニューで利用するOSを選択できるようにした。

3つのネットブック用のOSを実際に利用するには、学内のネットワーク環境を利用する必要が生じる。そのため、最低限proxyの設定、Windowsのファイルの共有、プリンタの設定を行った。図7にUbuntu 10.04のデスクトップを示す。

proxyの設定はインターネットに接続するための必須条件である。ファイルの共有はWindows共有を使用している。Windows XPで作成した文書ファイル、データファイルがアクセスできる環境になっている。ユーザ名はWindowsのIDを使用している。図8にWindows共有の設定のウィンドウを示す。Windowsで使用しているZeroxの3050ネットワークプリンタもUbuntuで利用できるように、Linux用のドライバ
 fxlinuxprint-1.0.1-1.i386.rpm
 fxlinuxprintutil-1.0.1-3.i386.rpm
 をダウンロードして、Webブラウザで、Cupsの設定メニューを使用してプリンタの設定をした。、3つのOSはWindows XPと同じネットワークサービスが利用できるパソコン環境になっている。

4-2 仮想化ソフトでの利用

Androidはハードディスクにインストールできなかったため、仮想ソフトVirtual BOXで運用している。Androidをパソコンで利用するため、最初に、Windows XPにVirtual Boxをインストールし、次にVirtual Boxに、Android用仮想マシンを作成した。とりあえず、OSタイプ=Other Linux、メインメモリ=256MBとし、仮想HDは2GBと設定した。図9にAndroidの仮想マシンの概要を、図10にAndroidをインストールするVirtual BOXの仮想マシンのウィンドウを示す。

Androidのインストールは、仮想マシンにDAEMON Toolsの仮想ドライブを割りあて、android-x86-1.6-r2.isoで起動すると、インストール画面が表示される。「Installation - Install Android-x86 to hddisk」を選択してインストール。仮想HDの初期化(ext3でフォーマット)後、OSがインストールされる。

仮想マシンを立ち上げると、図11に示すようにWindows上に、Androidが起動できる。画面上をマウ

スのドラッグ&ドロップすることによって、スマートフォンと同じような動作がする。インストール直後は日本語表示ができないので、メニューの中の「設定」で表示される図12に示す画面において、アイコン「Local&text」の項目でJapaneseを選択すると、図13に示すように日本語で表示される。図14にメニューを示す。パソコンがネットワークに接続していると、DHCPにより自動的にIPが設定し、proxyの設定をすることによって、インターネットにアクセスできる。Webブラウザも問題なく立ち上がり、Flashには未対



図6 マルチブートパソコンのディスク



図7 Ubuntuのデスクトップ

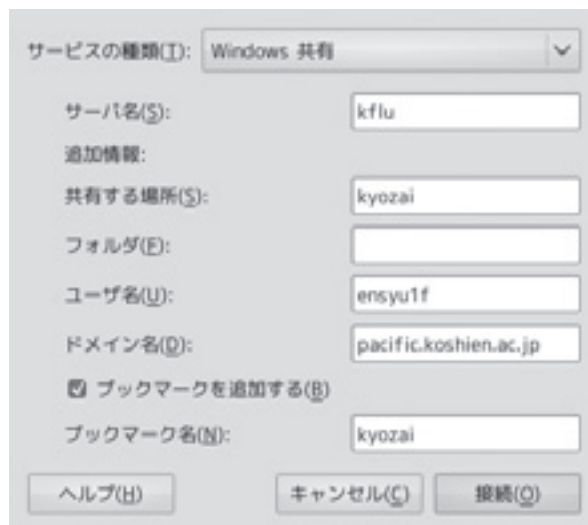


図8 ファイルサーバの設定

応であるが、表示はWindowsと比べて遜色はない。Androidで色々アプリケーションを操作してみようとすると、SDカードが必要になる。また、アプリのインストールする、メニューの「App Store」もSDカードが要求される。Virtualbox & Android-x86の場合、表4で示す仮想SDをHDのパーティションで設定することによってがAndroid-x86でSDカードが利用できる。

AndroidはとりあえずWindowsパソコンにインストールできるが、ネットワークの接続、日本語入力など問題点も多い。しかし、パソコンの設定、アプリケーションのインストールなど、演習での利用価値は



図9 Android 概要 (VirtualBox)



図10 Android のインストール画面



図11 Virtual box 上で動作する Android

ある。よく「IPADで何をするのか」という質問と同じように、「Androidで何をするのか」と尋ねられる。モバイル時代のリテラシーの演習テーマである。現在、学内のネットワークに接続して、学内のネットワークサービスの利用、さらにGoogleのサービスなどの実

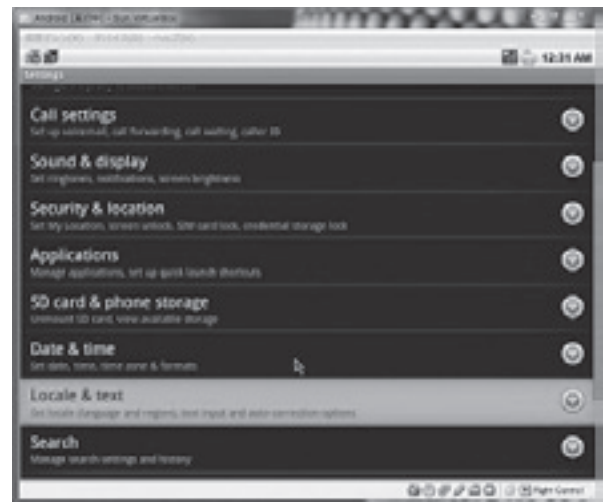


図12 日本語表示の設定



図13 日本語された設定メニュー

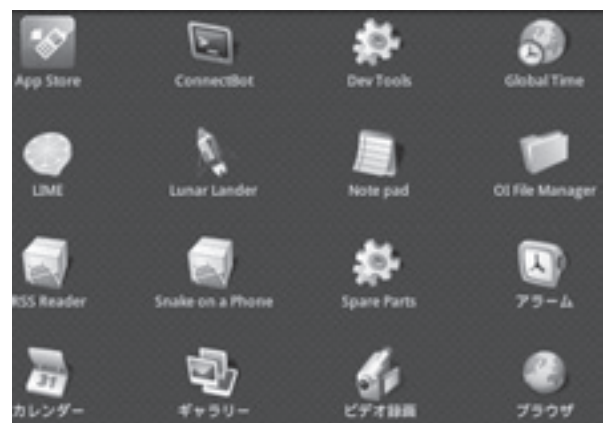


図14 日本語されたメニュー

習を行っている。クラウドコンピューティングを利用する環境として利用していく価値がある。

5. さいごに

最新のOSの機能、操作性、実用性を体験するには、実際に利用するパソコン環境が必要となる。2007年からゼミナールにおいて、CD-ROMからブート可能なKNOPPIX、Fedora、UbuntuなどのディストリビューションのLive CDを使用してきた。2008年度には、フリーで配布されているKNOPPIX、Fedora、UbuntuなどのディストリビューションのLive CDをUSBメモリにインストールし、USB端子に挿入するだけで利用できるLive USBを作成した。2009年度には、ゼミナールにおいて仮想化ソフトを利用してKNOPPIX、Ubuntu、およびVine LinuxなどをゲストOSとしてインストールしてきた。2010年度は、携帯端末の操作を体感できるように、Ubuntu Netbook Edition、Ubuntu、Easy Peasy、AndroidなどのOSが利用できる環境を整備した。

これらのOSもパソコンにVMware、Virtual Box、Virtual PC2007などの仮想化ソフトを導入して、ゲストOSとしてパソコンの可能性を追求している。仮想化ソフトを使用することによって、インストールされているOSに関わらず、どのパソコンを利用しても、

ゲストOSが利用できることが確認できた。最近のパソコンでは、仮想化ソフト上のゲストOSの操作性は高く、十分に利用できるパソコン環境になってきている。仮想化ソフトの導入は、最近のパソコンでは、単にアプリケーションを動作させるレベルになってきている。むしろ仮想化ソフトを使用して1つのOSでできなかったことを1台のパソコンでできるようになったことに価値がある。Windowsにないアプリケーションを利用することによって、パソコンの実用性は高くなっている。

仮想化ソフトによって、パソコンにインストールされるOSは何でもよくなるかもしれない。大学のパソコンにおいて利用したいOSを自由に選んで利用できるパソコン環境が得られるようになってきたといえる。

参考文献

- 1) 榊井：Linuxを用いたパソコン環境、甲子園大学紀要第29号、2001年
- 2) 榊井：マルチブートシステムを用いた演習環境、甲子園大学紀要第31号、2003年
- 3) 榊井：Webサーバのシステム構築について、甲子園大学紀要第33号、2005年
- 4) 榊井：Webサーバのシステム構築について(2)、甲子園大学紀要第34号、2006年
- 5) 榊井：Live CDを使用した大学のコンピュータ環境、甲子園大学紀要第35号、2007年
- 6) 榊井：Live CDを使用した大学のコンピュータ環境(2)、甲子園大学紀要第36号、2008年
- 7) 榊井：仮想化ソフトを使用した大学のコンピュータ環境、甲子園大学紀要第37号、2009年

表4 仮想SDカードの設定

1. android-x86インストール時に仮想ハードディスクをsda1とsda2の2つのパーティションに分割し、ext3でフォーマット。
2. android-x86をsda1にインストール。
3. android-x86の起動時、カーネルの引数に「SDCARD=/dev/sda2」と追記してブート。これで、android-x86で仮想HDがSDカードとして認識・マウントされた。
4. メニューの「App Store」を押すと、「AndAppStoreクライアント」が起動する。



図15 Webブラウザの起動

論文

精神療法における自己愛と甘えの問題について

安村 直己

平成 22 年 10 月 29 日受理

On Problem of Narcissism and Amae in Psychotherapy

Naoki Yasumura

要旨

ナルシズムの概念は、フロイト以来、その理論的複雑さからさまざまな問題点が指摘されてきた。しかし、一方で、「ナルシスティック」や「自己愛的」などの言葉は、今日では一般的に広く用いられており、また、そこには否定的な意味が込められていることが多い。近年は、自己愛性人格障害の診断名が登場したこともあり、自己愛の問題は、臨床的にますます注目されている。そこで本論文では、精神分析におけるナルシズム概念の変遷とその問題点を概観し、さらに、「病的な自己愛」と「健康な自己愛」の相違について、土居健郎の「甘え」理論を通して考察した。そして、さらに実際の臨床例を自己愛と甘えの観点から検討し、「健康な自己愛」について臨床的に考察した。

キーワード：ナルシズム、健康な自己愛、甘え理論

ABSTRACT

The concept of narcissism is the most complicated one in psychoanalytic theory. However, at present, it becomes to be very popular term such as narcissistic and narcissist. These terms seem to have negative connotation whenever they are used in everyday life. Lately narcissistic problem is focused as the important clinical issue since the new diagnosis of narcissistic personality disorder is appeared in DSM. The purpose of this paper is to examine the concept of narcissism in the clinical practice. At first I review the conceptual development of narcissism in psychoanalytic theory and examine the differences between pathological narcissism and healthy narcissism from the point of "Amae" theory by Dr. Takeo Doi. Then I present clinical material and examine the problem of narcissism clinically.

Keywords : narcissism, pathological narcissism and healthy narcissism, "Amae" theory

1. 問題

自己愛の問題は、古くて新しい問題である。自己愛はナルシズム narcissism の訳語だが、ナルシズムという言葉は、1899年に精神分析学者のパウル・ネッケ Naecke, P. が、「自分の姿や自分の肉体にのみ愛や性欲を感じる」という性倒錯患者の異常心理を、ギリシャ神話のナルキッソスの物語にむすびつけて「ナルシズム」と呼んだことが最初と言われている。その後、フロイトが1914年に「ナルシズム入門」を著し、精神分析理論におけるリビドー論的な概念として「リビドー（自我リビドー）が自己に向けられていると考えられるすべての状態」をナルシズムとして総称し、それ以来、ナルシズムの概念は精神分析における重

要な概念となった。

しかし、現代では、このナルシズムという言葉は、「ナルシスティック」あるいは「ナルシスト」といった言葉で、一般的にも広く使われるようになっていく。あの人はナルシスティックだ、あるいはナルシストだと言えば、自分のことしか興味関心がなく、傲慢で、うぬぼれや自己陶醉の強い、鼻持ちならない人物だという意味であろう。またナルシスティックの訳語である自己愛的という言葉も、一般的に、そうした自己本位で、自分にのみ愛着の偏ったありようを意味するものとして使われており、それらはすべて決していい意味ではなく、軽蔑的な意味合いが込められて使われていることが多い。つまり、もともと価値中立

的な精神分析的概念であった自己愛は、今や価値判断を色濃く含んだ言葉として広く用いられるようになってしまっているのである。

一方、近年、米国の診断基準であるDSMに「自己愛性パーソナリティー障害」の診断名が登場し、専門家の中で、患者の自己愛的な特徴をパーソナリティーの問題として捉えようとする動きが広がっている。ここにはパーソナリティーを障害として診断するという倫理的な問題が加わり、自己愛の問題はさらに複雑さを増してきているように思われる。

しかし、考えてみれば、そもそも自己を愛し、慈しみ、大切に思うこと自体は、至極当然のことであり、健康なことだと考えられる。むしろ、自分を愛せないことの方が問題であり、病的な状態とも言えるだろう。自己愛を自己尊重や自尊心の意味で捉えれば、それはすぐに了解されることである。それならば、自己愛的であることは、本質的には健康なものとも言えるのだろうか。それとも自分をどのように愛するか、その愛し方が問題なのだろうか。あるいは単に、自分を愛するその強さの程度が問題になるのだろうか。それはまた人や年齢によって違うものなのだろうか。このように自己愛について考えだすと、さまざまな疑問が生じてくる。これは、自己愛やナルシズムという言葉や概念が、今日、文脈によって多様な意味に用いられており、また、そこにはさまざまな誤解や偏見がつけ加わるため、多くの混乱が生じていることを示しているものと思われる。

一方、日本の精神分析医で、著書「甘えの構造」で知られる土居健郎は、「甘え」がナルシズムと密接に関連しているとして、ナルシズムの概念を「甘え」の観点から詳細に論じている。土居の考察は、臨床的観察を基に展開されており、ナルシズムの解明に新しい光を投げかけている。

そこで本論では、ナルシズム（自己愛）についての精神分析学派における今日までの理論的な発展と、その問題点について概観し、次に、土居健郎の「甘え」理論の中で展開されているナルシズムについての土居の論考を取り上げる。そして最後に、実際の臨床例の検討を通して、精神療法における自己愛と甘えのものと問題と、その治療プロセスについて、若干の考察を加えたい。

2. 精神分析学派における自己愛をめぐる論議

まず、自己愛、ナルシズムをめぐる精神分析学派における議論は、これまでどのような流れを辿ってきたのかについて概観する。そもそもフロイトは自己愛

をどのように見ていたのだろうか。フロイトは自己愛を、最も原初的な自己の身体に対する性的な愛着の段階である「自体愛」autoerotismの段階から、愛情対象が自己から他の人格的对象へと向け変わった「対象愛」object loveへと発達していく、その中間の段階として説明している。そして、「自体愛」から「自己愛」、そして「対象愛」へと移っていくことが、人間的成長の道筋としたのである。つまり、フロイトは自己愛を対象愛よりも未熟なもの、発達的に下位のものとして位置付けたのである。フロイトが生きたユダヤーキリスト教文化には、キリストの自己犠牲を最も尊いものとする一方、自己愛は劣ったもの、恥ずべきもの、価値の低いものとして道徳的に軽蔑する風潮があったものと思われる。そうしたキリスト教的価値観が、フロイトが自己愛について論じる際に影響を与えなかったとは言えないだろう。そこには、愛他主義が最高の美德とされる西洋文化の中において、自己愛を価値判断と切り離して論じることがいかに困難であるかが表れているように思われるのである。

さて、現在よく批判されているナルシズムに関連するフロイトの説に、「自我リビドー」と「対象リビドー」の考えがある。「ナルシズム入門」(1914)の中で、フロイトは、リビドーを二つに分けている。自己の表象に対して向いている自己愛的なリビドーを「自我リビドー」、親や友人など対象表象に向いているリビドーを「対象リビドー」としたのである。しかし、リビドーの総量は一定と考えたため、一方が余計に使われると、その分、他方が減ってゆくという極めて単純なリビドーの配分モデルを提唱した。つまり、自我リビドーが増加し、自己愛的になれば、その分だけ対象リビドーが減少し、対象愛が低下するというのである。今日、このような自我リビドーと対象リビドーを対立的に捉え、自分を愛することと他人を愛することが常に相反する関係にあるという考え方は、愛に対する非常に皮相的な理解でしかないと批判されている。自分を愛し、自分を大切にできる人こそが、他者に対しても情愛深く接し、相手を大切にすることができるものである。自分を愛することのできない人間が、他人を愛することはできないだろう。このように、自己愛と対象愛は、フロイトの言うように必ずしも対立するものではなく、また、明確に区別することもできないものではないかと考えられるのである。

また、フロイトは、同じ「ナルシズム入門」の中で、ナルシズムを「一次的ナルシズム」primary narcissismと「二次的ナルシズム」secondary narcissismに分けている。一次的ナルシズムは、生まれてすぐの赤ん坊の状態であり、まだ自己表象も対

象表象もない段階であるから、完全に自分にしかリビドーが向いていない、自我リビドーのみの状態を指している。そして、その後、自己表象と対象表象が分化するようになり、対象表象に向かう対象リビドーが、何らかの原因で再び自己表象に向けられるようになったものを二次的ナルシズムと名付け、その二次的ナルシズムに退向した極端な状態を、外界への関心を一切失って自閉し、自己表象にしかリビドーが向かなくなった誇大妄想の分裂病患者の状態だと考えたのである。しかし、一次的ナルシズムの概念については、自他未分化な状態で、自己の表象もまだ生まれていないはずの赤ん坊に、自己を愛するというナルシズムが存在するという考えには、基本的に論理的矛盾があることが指摘されている。

また、フロイトは、神経症を分析治療中に転移が生じる転移神経症と、リビドーが自我に集中し、転移が生じない自己愛神経症 narcissistic neurosis に区別した。そして、自己愛神経症では、対象リビドーが撤去され、自己に向かっているため転移が生じず、分析治療が困難であるとして、分裂病や心気症を自己愛神経症に含めて論じている。しかし、この分裂病を自己愛神経症に含める考え方は、精神病と神経症の区別をあいまいにしており、ここにも混乱が生じている。

このようにフロイトは、ナルシズムの概念をリビドー経済論に基づく精神分析理論の抽象的説明概念として用いており、理論的にも複雑で錯綜しているため、現在、多くの批判が向けられている。また、分裂病を二次的ナルシズムの状態として捉え、自己愛神経症に含めたり、同性愛をナルシズムと関連づけて論じるなど、フロイトの自己愛論は、やはり病的なナルシズムの問題を中心に展開されており、自己愛を精神病理学的な側面から捉える傾向があるように思われる。

こうした流れの中で、フロイトとは異なった自己愛に関する見解が、その後、多くの精神分析家から提出されるようになった。それは、自己愛をもっと健康なものとする見解である。フロイトの弟子だったフェダーン Federn, P は、フロイトの自己愛論に、さまざまな批判的修正を加えたことで知られている。それらをひとことで言うならば、人間が、その精神生活を健康に営んでいくためには必須の「健康な自己愛」というものがあり、この健康な自己愛の満足が、すべての精神活動のエネルギー源になっているというものである。また、フロイトが、精神分裂病を、原始的な自己愛の段階への退行としたのに対して、フェダーンは、むしろ健康な自己愛の欠如として捉え、異議を唱えている。こうした健康な自己愛の考えは、エリク

ソン Erikson, H. のアイデンティティー論や、スピッツ Spitz, R.、ボウルビー Bowlby, J. らによる乳幼児研究にも影響を与えたとされている(中西、1987。馬場、1997)。また、精神分析医のバリント Balint, M. は、自己愛の起源を、自分で自分を愛することではなく、対象に愛される体験であるとして、フロイトの一次的ナルシズムを批判し、「受身的対象愛」passive object love を一次的なものとして提唱したことで知られている。

そして近年、米国の精神医学の診断基準である DSM に、ナルシスティック・パーソナリティー・ディスオーダー Narcissistic Personality Disorder (自己愛性パーソナリティー障害) が登場したこともあって、臨床の場で自己愛の問題を持つ患者の治療が注目されるようになり、これまでは治療困難とされてきた自己愛障害の患者を治療するための理論と技法が精神分析学派の中で盛んに論じられるようになった。その中で当時最も注目を集めたのが、コフォート Kohut, H. とカンバーグ Kernberg, O. の論争である。

コフォートとカンバーグの見解の対立は、自己愛性パーソナリティー障害の治療をめぐる、それぞれが提唱したアプローチがまったく対照的だったこともあって、盛んに取り上げられた。ここでは、その治療アプローチの違いについて詳述することはしないが、そこには自己愛の問題に対する、両者の捉え方の基本的違いが関係しているように思われる。その基本的な違いとは、カンバーグ (1984) が自己愛障害の患者の「病的なナルシズム」の存在を強調し、自己愛的な患者の特徴をその病理の表れとして捉えたのに対し、コフォート (1971) は、むしろ患者の「健康なナルシズム」に注目し、患者の自己愛的な欲求を正常なナルシズムの発達のために必要なものと見なしたところにあると言えるだろう。

コフォートは、対象愛と併行して自己愛も、未熟な幼児的自己愛からより成熟した自己愛へと独自に発達するという、二重軸理論 double axis theory を唱えている。コフォートが、健康な自己愛の発達ラインを提唱し、自己愛を人間にとって一生に渡る必要不可欠なものとして肯定的に捉えた意義は大きい。コフォートは、自己愛性の患者の停滞した自己愛の発達を促進させるべく、患者が必要としている反応を治療者が提供する必要を説いたのである。一方、カンバーグは、自己愛性の問題をもつ患者は、病的な自己愛組織を有しているとし、表出的な精神分析的技法をもって、その病的な自己愛構造体を分析することが必要だと主張した。コフォートとカンバーグの理論や技法の違いは、二人が治療対象とした患者の一群の病態水準や自己愛障害のタ

イブが異なっていたからではないかとの指摘もあるが (Adler, 1992. Gabbard, 1994)、やはり、ここでも、フロイトから続く、自己愛を健康なものとするか、それとも病的なものとするかの対立が見られるのである。

このように自己愛を「健康な自己愛」と「病的な自己愛」に分けて考えることは、自己愛の錯綜した論議を整理する、ひとつの視点だと思われる。しかし、それならば、「健康な自己愛」と「病的な自己愛」を明確に区別できなくてはならないが、しかしそれがなかなか困難な作業なのである。精神分析学者で論客として著名なギャバード Gabbard, G.O. も、著書「精神力動的 精神医学」の中の自己愛性人格障害についての章の中で、「現代の精神科臨床においては、自己愛について、それが健康なものか、病的なものかを区別することには困難がともなう。ある程度の自己への愛は正常であるばかりでなく、望ましいものであるけれども、自己尊重 self-regard は連続体を成しており、ここまですべて健康な自己愛で、ここから先が病的な自己愛になるという一点を確定するのは容易なことではない」 (Gabbard, 1994) と述べ、健康な自己愛と病的な自己愛を同じスペクトラムの線上にあるものとしながら、その区別はつけがたいと告白しているのである。しかし、果たして本当に、健康な自己愛と病的な自己愛は同じ連続体の線上にあると言えるのだろうか。それらは同じ自己愛と言ってもいいのだろうか。

この点について、日本の精神分析医で「甘え」理論の提唱者として国際的に著名な土居健郎は、「健康な自己愛」と「病的な自己愛」を、リビドーが向かっているその自己の自我意識の状態の違いをもって区別することができることを論じており、注目に値する。つまり、同じ自己愛あるいはナルシズムと言っても、本質的にそれらは異なったものであることが論じられているのである。そこで次に、土居健郎による自己愛と甘えをめぐる論考を概観してみたい。

3. 土居健郎による自己愛と甘えをめぐる論考

周知のように土居健郎は、「甘え」の概念を普遍的な精神分析的概念とし、「甘え」理論を構築したことで著名であり、今やそれは世界的に認められている。土居は、自身でも述べているように、「甘え」概念を以って従来の精神分析理論を再構築しようとしたと言える (土居, 1961)。その中で、土居は「甘え」に対応する唯一の精神分析的概念として、バリント Balint, M. の「受身的対象愛」 passive object love の概念を見出し、自己の論文の中でバリントを頻繁に引用している。バリントは、フロイトの一次的ナルシズムの存

在を否定し、受身的対象愛を一次的なものとして位置付け、それを「一次愛」 primary love としたことで知られているが、土居はこのバリントの考えに大いに賛同の意を示している。

土居は、論文「ナルシズムの理論と自己の表象」 (土居, 1965a) の中で以下のように述べている。「受身的対象愛というのは対象を愛するというのではなく、対象に愛されたいと思う心の動きである。普通いう対象愛は前者の意味であって、後者の場合はそれをバリントが強調するまで、あまり重視されていなかったものである。前者を“対象を求める”ことであるとすれば、後者を“対象に求める”ことであるといつて区別することができよう。さて、バリントは、ナルシズムの発生はこの受身的対象愛に関係する、という。その成立機転は次のごとくである。まずは人に愛されたいと願う。しかしその欲求が満たされないときは、仕方なく自らを愛することになる。これがナルシズムの状態であって、したがってナルシズムは常に二次的な産物というわけである。」つまりバリントは、対象に愛されたいという最も根元的な人間の欲求が挫折したとき、自己を防衛するために自分で自分を愛することになる状態がナルシズムなのだと主張しているのである。土居はバリントの考えを支持し、バリントの受身的対象愛はまさに「甘え」のことであると明言して、さらに次のように論じている。「まず考えられることは、受身的対象愛が常に満たされることはあり得ないから、甘えられない悩みは誰しも幼時に多少とも経験するということである。しかし何らかの理由により愛情不足が甚だしい時には、幼児は甘えることを殆ど経験せず、自分に甘えるナルシズム (自己愛) の状態が発生する。もっとも甘えが満足される場合にも、必ずながしかの内的葛藤を経験せねばならないから、その限りにおいてナルシズムは誰にでも生ずるといえることができる。」 (土居, 1961) ここで土居は、ナルシズムを、甘えが満たされない時に誰にでも生ずる「甘えの葛藤」として捉え直しているのである。これは、フロイト以来極めて難解な抽象的説明概念であったナルシズムの概念を、「甘えの葛藤」という具体的で実際の臨床的視点から理解する道を開いたという意味で、注目される。

そしてさらに土居は、論文「“自分”と“甘え”の精神病理」 (土居, 1960) の中で、精神療法の過程において患者が自己の甘えを自覚した後に最終的に「今まで“自分”がなかった」ことに気づくことが治療的転機となるという現象を見出しているが、その治療的意義を論じる際、その「自分」の意識とは「ナルシズム的な自我意識」ではない「成熟した自我意識」であ

ると述べている。少し長いが重要な指摘なので以下にその部分を引用してみよう。

「バリエーションは、このナルチシズムが治療状況の中で融解し受身的対象愛が自然な形で出てくることを重視したが、日本人患者では、むしろこの際、甘えを自覚した後に改めて今まで自分がなかったことに気づき、対象から分離された自己の存在に目ざめる現象のほうが目立っている。そしてこの現象はナルチシズムの実体を解明する上に新しい光を投げかけると信ぜられるのである。というのはナルチシズムは普通自己愛と解されているが、この場合の自己は自己の固有の存在に目ざめていない自己であり、むしろ単に個体というほうがふさわしい。このことから次のような結論が導き出される。すなわちもしナルチシズムを広義に解釈するならば、自己の固有な存在の表象を持っており、それにリビドーが向けられている場合が健康なナルチシズムであり、それに反してかかる自我像がなく、徒らに個体としての自己にリビドーが氾濫している状態が病的なナルチシズムである。この点に関して“自分がある”“自分がない”という日本語の表現を使用することが非常に役立つ。なぜなら“自分”という言葉は、客観的な自己よりも、自己についての表象を指していると考えられるからである。」(土居、1960)

ここで土居は、病的なナルチシズムにおける「自己」は「自己の固有の存在に目覚めていない自己」であると指摘している。そして反対に、自分がなかったことに目覚めた「自己」は、逆説的に、対象から分離した自己であることに目覚めた自己であり、いまや自己の表象をしっかりと持った自己となっているというのである。土居は「自我が真に自己を自覚するとは、甘えによって対象に密着していた自己を対象から引き離し、独立した存在としての自己の表象をもつことである」と述べている。そしてさらに、自我意識という視点から、バリエーションのナルチシズムの説明に対して、土居は次のような疑問を投げかけている。「バリエーションのごとく、愛してもらえないから仕方なく自分を愛するのがナルチシズムの実体であるとしても、この過程は決して意識的反省的なものではあり得ない。すなわちナルチシズムは自己愛であるというが、この場合の自己は真に自覚された自己ではないのである。」(土居、1960)つまり、病的なナルチシズムは、独立した存在としての自己の表象をもっておらず、意識的反省的な自己とはなりえていないものなのであるから、所謂、自己を愛するという意味での自己愛の意識それ自体は発生していないと言わねばならないのである。これは筆者の臨床体験にも当てはまる。自己愛障害の患者が自己愛的で自己中心的な主張や言動を示してい

る時、その患者からは決して自分を愛し、大切にしているといった意識は感じられず、むしろ非常に不安定で、ある種、自分をまったく見失っているかのような印象を受けることがあるからである。

さらに土居は、病的なナルチシズムである分裂病のナルチシズムについても以下のように述べている。「結論としていえば、分裂病的なナルチシズムは自己愛といっても名ばかりで、自分のない自己愛、リビドーや攻撃衝動の跳梁に打ち負かされた状態にほかならないというべきだろう。」(土居、1965a)このように病的なナルチシズムとは「自分のない自己愛」なのであり、真に自覚された自己意識である「自分のある自己愛」、つまり健康なナルチシズムとは、本質的にまったく異なったものであるとしているのである。

また、土居は、ナルチシズムが「甘え」、つまり依存欲求の不満に由来して生じる点から、その依存欲求の不満の起きた時期が幼く、その強さが著しいほど、重篤な精神病理の発現につながることを、以下のように述べている。「ごく幼い場合は、愛されたい甘えたいという欲求はあっても、まだ愛するという事は知らない。したがって依存欲求の不満がおきる時期が幼ければ幼いほど、その結果おきてくる状態は自己愛という言葉であらわせるものからはほど遠いと考えねばならない。ことにこの際、依存欲求の不満が著しいと、非常な混乱状態がおきてくると想定される。すなわち甘えは対象を失い、本能衝動は現実的に満足させられないので自体性欲的また自己破壊的な現象がおこり、一次過程が支配的となる。この状態は現実との接触がまったく失われた精神病の場合に相当すると考えられるだろう。」(土居、1965a)これは、精神病におけるナルチシズムの状態についての記述であるが、土居は、神経症のナルチシズムについても次のように述べている。「同じ幼児でも自他の区別ができて自己の観念がおぼろげながら成立し、甘えるということを十分知った後に欲求不満を経験するときは、自分に甘えまた自分を甘やかす状態が招来されると思う。これは一般的に言って神経症の素質となるナルチシズムであると考えられる。」神経症とは、自分が自分に甘えるという意味でのナルチシズムの状態なのである。

ここで土居は、再び「病的なナルチシズム」と「健康な自己愛」の違いについて取り上げ、さらに以下のように述べている。「病的なナルチシズムが依存欲求の不満に由来するとするならば、健康な自己愛は依存欲求の真の満足ないしその克服を契機として生ずる。それは低い段階での依存の満足に留まらず、したがって単なる甘えを超えて信頼のなかに自分は愛されているという確信をもつことである。実際、人は他から愛さ

れることによって始めて愛すべき自己を発見し、またその結果そのような自己を自らも愛するようになると考えられる。もっとも自己の発見は、甘えられないという苦い体験を契機としておきることもあるが、もしそれだけで愛と信頼を体験しないならば、そのような自己はナルシズム的の自己となる。すなわちそれはしばしば“自分がない”という意味での自己体験であり、自己を愛するというよりも自己に執着することであり、自己に執着する一方、他方では自己を嫌悪する自己分裂の状態なのである。」(土居、1965b)ここで土居は、病的なナルシズムの殻を破るためには、これまで自分がなかったことに気づき、対象と分離した自己に目覚めるだけではなく、他者からの愛と信頼を体験することの必要性を述べている。これはこれまでの土居の論文にはなかった叙述であり、自己愛をめぐるさらなる土居の思索の展開が見られるところである。

このように土居の「甘え」理論は、自己愛の分析が重要なテーマとなっており、まさに自己愛理論と言ってもよいものであるように思われる。今日の自己愛障害の精神分析的治療において、土居の「甘え」理論は、これまでにはなかったナルシズムについての新しい理解を導入しており、臨床的に極めて有用であると考えられる。そこで次に、臨床素材として自己愛に問題をもつ患者の精神療法の治療経過を取り上げ、土居の「甘え」理論の視点からナルシズムの病理とその治療について臨床的に検討してみたい。尚、守秘義務のため、事実関係については変更を加えている。

4. 臨床例による検討

クライアントの良子(仮名)は30歳で、ある製薬会社の開発研究所に研究員として勤めていた。半年ほど前から、出社することがつらく、吐き気やふらつき、全身の脱力感などが出現するようになり、外来の精神科クリニックに来院した。大学生のころから、ストレスが溜まると過食しては吐くことを繰り返してきたが、2ヶ月前からそれらの症状がひどくなっていると言う。治療としては、主治医が薬物療法を行うと共に、筆者が担当となって個人精神療法を週1回で開始することとなった。

精神療法の初回、良子は、「以前から自分に自信がなく、自分は甘えているんじゃないかとずっと思ってきた。今回も出社がつらくなって、自分がつくづく情けないです。」と自己を否定的に述べた。しかし、そうした訴えが数回続いた後、良子は、もともと自分は芸術大学に入り音楽家になりたかったが、親からの強い反対であきらめ、仕方なしに両親の薦める薬学部に進んで研究職として今の会社に入ったことや、両親は嫉

に異常に厳しく、幼い頃から親に頼ったり甘えたりした記憶がほとんどないこと、などを次第に語るようになった。一方、自己否定的な言動は変わらず、「でも、自分がこんなことでしんどいと思うのは、単に甘えているだけだと思う。」と繰り返し、音楽家への夢についても、「いつまでも夢を追って現実逃避しているのは、自分が甘えているんだと思う。」「もっと自分は自立すべきだと思います。」とかたくなに主張した。面接中の態度は、迷いなくはきはきと話しはするが、自然な感情の流れが感じられず、どこか表面的で常に肩に力が入っており、全体的に窮屈な印象を受けた。結局、その後、半年ほどして過食の症状は軽快し、以前よりは楽に出社できるようになって、最後は連絡なく治療を中断し、来所しなくなった。治療の後半で、良子はやけに明るくなり、「このごろはもう何も考えないようにしています。」「もう私は普通の人のようにやれています。」と語っていたのが印象的だった。

ところが、それから1年ほどして、良子は再び面接の予約を取り、来所した。治療者がこれまでの経過を聞くと、「これまでの1年間、ただ惰性で生きてきました…。」「上司に自分のしんどさを打ち明けたら、甘えていると言われた。そしたらいったいどうしたらいいの? って言いたかった…。」「本当は生きていくことにずっと虚無感があった…。生きていくことが苦しい。」と泣きながら切々と訴えた。治療者はこれまでとは違う良子の語りに胸を打たれ、良子の言葉に耳を傾け続けた。時間となり、良子は精神療法の継続を希望し、治療は再開されることになった。

再開後の面接では、良子の苦しみが治療者の心にストレートに伝わってくるようになった。毎回、良子は抑うつ的で、幼い頃の親からの仕打ちで傷ついてきたことや、夢を捨てて興味のもてない仕事をしなくてはならない苦痛、そして、過食・嘔吐の症状の苦しさや激しい自己嫌悪などを沈痛な表情で訴えた。また、「本当のことを言うと何もかもやめたい…。我儘なことは分かっているんです。だから、こんなことを親にも言えないし、両親に心配をかけたくない…。でも、これまで親に一番気を使ってきた。気を使って元気で明るくしている私を、親は本当の私だと思っている。」と語った。過食・嘔吐の症状はひどく、常に食べることが頭から離れず、極度にイライラする状態が続いた。「これまでの30年間、これは私の甘えなんだからもっと頑張らないといけないんだとずっと思いながら、結局、つらくなって食べ吐きして、これは甘えだとまた考えて、グルグル同じところを回ってきた。そこから先に行けないんです。」と良子は苦悩に顔を歪め、訴えた。また、その一方で、「カウンセリングで喋ると

後でよけいに悶々とする。余計なことを喋ってしまったと後悔する。後で自己嫌悪になる。」とも語り、自己の内面を言葉にして人に打ち明けることへのアンビバレントな感情を語った。また、「私は自分が相手に不愉快な思いをさせた時に、許してもらえない自信がない。受け入れてもらえない自信がないんです。相手の度量に疑いをもってしまう。」と語り、相手を信じることのできない自分があることを語った。

しかし、ある日、母親からの外出の誘いを思い切って断った良子は、自分の中にこれまで経験したことのない大きな開放感があることに気づいた。「今回、親の誘いを断わって、ひとりで家にいてもものすごくゆっくりした。何も考えなくてボーッとできた。それが一番のご馳走だった。これまで親には気を使って、一度も誘いを断ったことがなかった。多分、親を信じられないから自分を殺して付き合っていたんだと思う。それが今回は、やめてもいいよと親が言ってくれるんじゃないかと思えた。親の愛情を信じることができた。」と語った。そしてさらに「本当は、自分はものすごく淋しがりやなんです。本当は甘えたいんです。どっぷり何も心配しないで親の愛情に包まれたいんだろうなと思う。こんな風にこれまで思ったことはなかった。これまでずっと、人はわずらわしいだけだと思ってきた。でも、本当のところは、相手に求めていたところがあったんだと思う。」と初めて語り、自分の中に甘えの欲求があることを発見した。こうして洞察が次第に深まっていったが、過食症状はなかなか改善せず、その後、過食後に重い抑うつ感と虚無感、さらに離人感が出現した。「もうダメかも知れない。自分には何の価値もない。もうこんな風に生きているだけなら死んだ方がいいんじゃないかと思う。」と語り、良子は治療者の前で声をあげて泣いた。治療者は良子の苦しみに共感しながらも、良子が自己の防衛を解き、心底から治療者にありのままの自分をさらすことができるようになったことを意味深く感じた。そして次回には苦痛のピークが過ぎ、症状が若干軽快したことが良子から報告された。

その後、面接では、幼いころから人と関わると心臓が口から出そうになるほど不安になるのを人に知られるのが怖くて、外に出るのが嫌だったこと、家に帰るとずっと空想の世界の中に閉じこもっていたことが語られた。良子は、自分だけの空想の世界がいかにも自分にとって大切だったかを幾度となく治療者に語った。しかし、甘えの欲求については、「自分は甘えたいのかもしれない」と言っただけで、すぐにまた「甘えたいとは思わない」と前言を翻すなど言動が二転三転することが続いた。

ある回、良子は「しんどい、しんどいと言って、自分は甘えているだけなんじゃないかと思ってしまう。皆はしんどくても乗り越えて頑張っているのに、なめてるんか！と言われるんじゃないかと不安になる。結局、自分は根のない根無し草だと思う。自分の核がない。自分がないのかもしれない。」と語った後、「でも、ここで誰にも話せないようなことを話せるので楽になっている。」とも付け加えた。こうして自分の核のなさをつくづく実感した良子は、その後、「こうして自分のことをダメだ、ダメだ、つらい、つらいと言っているが、それがなくなったら不安なのかもしれない。それがなくなると、何にも自分にはなくなってしまうんじゃないかと。そうすると次に行かないといけなくなることが不安なので、そう言っているところがあるんだと思う。」と初めて自己否定が自己の防衛にもなっていることを洞察した。

その後は、しばらく安定した状態が続いていたが、数ヶ月後、再び、激しい過食症状が良子を襲った。「もう地獄です… どうしていいかわからない」と語り、その際、身体が女性らしくなることへの嫌悪感と、そのきっかけとなった幼少時の外傷的体験が初めて吐露された。良子は「この話は初めて人に言った」と語った。治療者はその重みを感じ、胸に強い痛みが走った。そして最後に、良子は症状に対してどうしたらいいか治療者に助言を求めてきた。しかし、治療者は、その時、ありきたりの助言しかすることができず、治療者として無力感を抱いた。ところが次回、症状が軽快していることが報告された。そこで、前回の面接について尋ねると良子は、「前回、先生の助言を聞いて、解決策なんてなくて、結局は、自分で何とかするしかないんだということが、あの後、突然閃いたんです。これまで甘えた考えの方に行ってしまったんですが、頑張って生きていくのは自分なんだ、人に解決策を求めてもダメで、やっぱり答えを出すのは自分なんだと思った。結局、これまで自分が自分に甘えていたんだと思う。これまで、しんどい最中に、そんな風に思ったのは、生まれて初めてだった。」としみじみと語ったのである。

それからは過食が起こっても程度が軽くなり、安定した精神状態が長期的に続くようになった。その間、性に関する葛藤についても詳しく語られるようになり、過食によって精神的に満たされない思いを解消していることにも気がついた。また、職場での軋轢についても、素直にその愚痴を治療者に語れるようになった。そして、良子は、「職場では人間関係にいろいろ気を使うが、人間に生まれてから、そういうストレスや気疲れは避けられないものだと思う。だから、それは

気持ちを転換してやっていくしかないな—と思う。この頃、こんな風に思うようになった。この頃、こんなこと思っている自分があるな—と思うことが多い。少し成長したな—と思います。」と初めて自己を肯定的に語るようになった。

その後も安定した状態が続いたが、ある回、良子はこれまでの治療経過を振り返り、次のように語った。「一回治療を中断したのに、先生が嫌な顔ひとつせず、面接を再開してくれた。先生は私を許して、受け入れてくれた。私が勝手なことをしても、人は許してくれるということを体験した。その後、どんなことを話しても、先生がずっと聞いてくれる、先生に嫌われることはないんだ、人として受け入れられるんだということを学ぶことができた。これが本当の人間関係、信頼関係というものなんだと思った。この頃、他人と喋っても、前ほど気にならなくなった。以前は、こんなことを喋ってしまったといつも思った。今は思わなくなっている。対人間ということに少し自信が持てきたように思う。」また、良子は「前はすぐに自分はダメ人間なんじゃないかとまで思ったが、この頃は、そこまで思わなくなった。今はそういう自分をそのまま認め、受け入れるようになってきた。」とも述べた。甘えについて聞いてみると、良子は「今、ここで甘えていると思います。でも、他のところではまだなかなかできません。なかなか人をそこまで信じることは難しい。私は甘えるのにも覚悟と根性があるんです。」と語った。しかし、良子の対人関係は、明らかに以前より不安の軽減したものになっていることが見てとれた。そして、その後、抑うつ感や過食症状はほとんど訴えられなくなり、「自分で何とかやっていけそうに思う」と良子は語り、またもししんどくなったら来所することを約束して、終結となった。良子の甘えの葛藤は完全に解決されることはなかったが、これまでの洞察や言動から、かなりの部分が解消されたものと考えられた。

ここで良子の精神療法の治療経過を振り返り、自己愛と甘えの観点から検討してみたい。精神療法の初回から良子は、自己否定的に「自分は甘えているんじゃないか」と執拗に訴え続けた。それは、自分は現実の厳しさから目をそらし、自立して自己を確立する努力を避けようとしているのではないかという自己への不安であり、自分で自分を甘やかしているのではないかという自己批判と自己不信の表現でもあったと考えられる。しかし、治療を中断するまでの前半では、良子はそうした自己の問題を盛んに自ら言及しながらも、深刻さが感じられず、どこか余裕すら感じられた。そ

して、治療者が良子のつらさに共感的に反応すると、逆に「これは単なる甘えで、自分はもっと自立すべきなんです」と治療者の発言に反発さえしたのである。こうして結局、良子は自分の弱みを面接で表出しないまま、症状がその後若干軽快したことで治療は中断となった。しかしその1年後、症状が悪化して再来所した際には、良子は前半とは異なり、毎回、泣きながら激しい抑うつ感や虚無感を治療者に訴え、自己の本当の姿を治療者の前に露呈した。そして、自分は甘えているんじゃないかとの悩みのループからこれまでずっと抜け出せないできた苦しみについて語ったのである。

ここで「甘え」に対する良子の自己否定について考えてみる必要があるだろう。自分は甘えているんじゃないかと執拗に訴える良子は、実はそう言うことで自分に甘えていたと考えられるからである。それは土居の言う「甘えることに甘えている」状態であり、まさに自分が自分に甘え、自分の中に閉じこもる「ナルシズム的な自我意識」の状態であったと考えられるのである。つまり、良子は、自分は甘えていると言いながら、真の意味での「甘えの自覚」に達していなかったのである。そのため、良子の甘えの葛藤は自己撞着し、グルグルと回り続けざるを得なかったのだと思われる。もし、真の甘えの自覚に到っていれば、そこには甘えられない現実への気づきが伴はずなのである。

しかし、治療の後半になって良子は、自己を否定し続けることで前に進むことを避けている自分があることに思い至り、甘えることに甘えている「自己防衛としての甘えの意識」の存在に気がつきだした。そして、その気づきに到る前に、親の誘いを生まれて初めて断わり、それが親に受け入れられて、不安なく親に甘えることのできた体験をしている。良子はこの体験の後、「何の心配もなくどっぷり親の愛情に包まれたいんだと思う」と、これまで否定してきた甘えの欲求を素直に認めることができている。また、他者への依存欲求の存在も否定せず受け入れる言動が見られるようになり、さらに治療者にも取り繕うことなく自己の苦しみの感情をさらにストレートに表現することができるようになった。

そして、その後、極限の過食の苦しみを訴える中で、良子は、治療者に自己の苦痛がいくら共感されようとも、その直接的な解決を治療者に求めることはできないという「甘えの危機」を体験し、結局、自分が答えを出して、自分自身が何とかするしかないという考えが、苦しみの只中で突如としてひらめき、「真の甘えの自覚」に到ったのだと考えられる。こうして良子は、

対象から分離した真の自己の感覚を取り戻し、その後、初めて自己を肯定的に語った。また、自分の変化を前向きに捉えるようになり、この頃から健康な自己愛に基づく自我意識が生じ出しているのである。

ここで改めて良子の自己愛の変遷に沿って治療経過を見てみたい。当初、良子は自己の甘えを否定的に捉えながら、秘かに自分が自分に甘え、自己愛を満たしていたと考えられる。良子は、真の自分がないナルシズム的自我意識の状態にあったのである。しかし、その後、親や治療者に甘えることのできた体験を経て、良子は肯定的に自己の甘えを受け入れることができるようになっていった。そしてさらに、治療者に甘えたくとも甘えることはできず、自分で何とかするしかないという甘えの深刻な危機を体験した際に、真の甘えの自覚に至っている。他者から分離した真の自己の核が意識されるようになった良子は、土居の言う「自分がある」状態となり、その「自分」を核とした健康な自己愛の萌芽が次第に見られるようになった。良子の治療経過は、以上のような健康な自己愛の回復のプロセスとして見るができるように思われるのである。

また先述したように、バリントは、分析治療の最終段階において受身的対象愛、つまり甘えの意識が現れることを述べたのに対して、土居は、日本人の治療においては「甘えの自覚」だけでは足りず、さらに「自分がなかった」という気づきが生じることが必要であることを指摘しているが、これは本症例においても当てはまっていると思われる。良子の「甘えの意識」は、ある意味では治療の初期から存在しており、それ自体が良子の主訴になっていたとさえ言えるからである。

日本では、甘えに関する問題意識を初めから有している患者が、比較的多いように思われるが、これは逆に言えば、日本人は「甘え」を意識しても、なかなか「自分が自分に甘えるナルシズム」の域を出ることができないことを示しているのではないかと考えられる。それでは、どうして日本人は「自分への甘え」を脱することが難しいのだろうか。それは、土居が指摘するように、日本語には甘えに関連する語彙が豊富であり、それだけ「甘え」の意識が欧米人よりも逆に抵抗なく受け入れられているため、単に自己の「甘え」を意識するだけでは、自己の中で「甘え」を意識している上位の自分が、実際は甘えている下位の自分を自己批判し、あたかも自己の「甘え」を問題視しているようなスタイルを取りながら、実際には甘えを享受しているという「自己防衛としての甘えの意識」が生じやすくなるのではないかと考えられるのである。したがって、日本人の患者の場合、「自分が自分に甘えるナルシ

ズム的自己」を脱するためには、単に甘えを意識するだけでは難しく、そこにさらに「甘えの意識」それ自体が自己の防衛となっていることを洞察し、さらに甘えられない現実に直面する「甘えの危機」を体験することで、自分は甘えを実際にはまったく克服しようとしていなかったという、土居の言う「自分がなかった」ことの自覚が強く生じることが必要なのだと思われるのである。良子の治療過程では、そうした甘えの意識の防衛的側面に気づき、真の洞察が生じた頃より、積極的に肯定的な自己の自覚が生じているのである。

さらにここでもうひとつ注目されることは、「真の甘えの自覚」の到達に前後して、実際に治療者や親に自己の甘えが受け入れられた体験をしていることである。土居(1965b)は、ナルシズム的自己の殻をやぶるためには甘えを超えた真の信頼関係を体験しなければならないことを述べている。良子の治療過程においても、最終時に良子は、治療者に治療の再開を受け入れてもらえたことや、治療者に何を話しても許され、受け入れられることを確信できるようになったことによって、真の人間関係と信頼関係を学ぶことができたことと語り、治療者への感謝の念を述べている。他者への真の感謝とは、自己と他者の分離を前提として生じるものである。良子のこの言葉は、良子の自己が今やナルシズム的自己ではなく、健康な自己愛に基づいた自己から発せられたものと考えられた。そして逆に、来所当初から執拗に訴えられていた「自分は甘えているんじゃないか」との良子の発言は、土居の言葉で言えば、良子の自我意識が、自己を愛するというよりも自己に執着し、他方では自己を嫌悪する自己分裂のナルシズム的状态(土居, 1965b)にあったことを示していたと考えることができるのである。

5. おわりに

精神療法の過程とは、ナルシズム的自己の状態にあった患者が、勇気をもって治療者に甘えの欲求を向けるようになり、その後、治療者との信頼関係の中で、治療者に甘えたくとも甘えることはできないという「甘えの危機」を体験して、「対象から分離された自己の存在」に目覚める段階に達し、「自分」のある健康な自己愛に基づいた自己の積極的な感情が育っていくプロセスではないかと考えられる。

フロイト以来、ナルシズムに関する議論は複雑さを極め、概念的な混乱さえ生じているように思われるが、土居の「甘え」概念を用いたナルシズムの分析は非常に臨床的であり、そこには「自分のない自己愛」である「ナルシズム」と「自分のある自己愛」である「健康な自己愛」という、新しいナルシズムの理

解の糸口が示されているように思われる。しかし、実際にその違いを明確に意識することは極めて困難なことであり、このナルシシズムの自己の殻を、人間はなかなかやぶることができないことも事実である。それは、人間が、出生以来、自己と対象が渾然一体となった最早期の没我的な母子一体の体験を、その後も一生求め続けるということと関係しているのだろう。しかし、そもそも、そうした体験は幻想でありナルシシズムとは、まさにその幻想的体験を求めようとする苦悩であると考えられる。コフートが人間を「悲劇の人」としたのも、その意味であろう。健康な自己愛とは、こうした幻想から脱し、対象から分離した固有の存在としての自己に目覚めることで生まれるものだといえよう。その意味で、精神療法とは、治療者との間でもう一度夢を見た後、その夢から醒め、固有の自己の存在に真に目覚めなおす体験を提供しようとしているのではないかと考えられるのである。

参考文献

- Adler, G. (1992) : Psychotherapy of the Narcissistic Personality Disorder Patient : Two Contrasting Approach. Hamilton, G (1992) From Inner Sources. Jason Aronson Inc. London.
- 馬場禮子 (1997) : ナルシシズムの病理とアイデンティティ. 心理療法と心理検査. 日本評論社.
- Balint, M. (1968) : The Basic Fault : Therapeutic Aspects of Regression. Tavistock Publications. 中井久夫訳 (1978) 『治療論からみた退行－基底欠損の精神分析』. 金剛出版.
- 土居健郎 (1960) : 「自分」と「甘え」の精神病理. 精神神経学雑誌, 62, 149 - 162.
- 土居健郎 (1961) : 精神療法と精神分析. 金子書房. 198 - 204.
- 土居健郎 (1965a) : ナルチシズムの理論と自己の表象. 精神神経学雑誌.
- 土居健郎 (1965b) : 精神分析と精神病理. 医学書院.
- 土居健郎 (2001) : 統「甘え」の構造. 弘文社.
- Freud, S. (1914) : On Narcissism : An introduction. Standard Edition 14. 懸田克躬訳 (1969) 『ナルシシズム入門』. フロイド選集 5. 日本教文社.
- Gabbard, G.O. (1994) : Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice. American Psychiatry Press. Washington, D.C. (権成鉉訳. 精神力動的臨床精神医学－その臨床実践 [DSM - IV] ③臨床編 : 第2軸. 岩崎学術出版社.)
- Kernberg, O. (1984) : Borderline Conditions and Pathological Narcissism. Jason Aronson. New York.
- Kohut, H. (1971) : The Analysis of the Self. International Universities Press. (水野・笠原監訳 (1994) 『自己の分析』, みすず書房.)
- Kohut, H. (1984) : How Does Analysis Cure? International Universities Press. (水野・笠原監訳 (1994) 『自己の治癒』, みすず書房.)
- 岡野憲一郎 (1998) : 恥と自己愛の精神分析.
- 岡野憲一郎 (1999) : 新しい精神分析－米国における最近の傾向と「提供モデル」. 岩崎学術出版社.
- 小比木啓吾 (1981) : 自己愛人間, 朝日出版社.
- 小比木啓吾 (1985) : 現代精神分析の基礎理論. 弘文堂.
- 小比木啓吾編 (1987) : 精神分析セミナーⅣ－フロイトの精神病理学理論. 岩崎学術出版社.
- 中西信男 (1987) : ナルシシズム－天才と狂気の心理学. 講談社.

総合教育研究機構の学術活動

[2010年1月～12月](アイウエオ順)

〔著書〕

- 1) 中井孝：『システム思考のすすめ』大学教育出版 4月
- 2) 若槻健：『教育社会学への招待』西田芳正編著、志水宏吉監修、大阪大学出版会 4月

〔論文〕

- 1) 上野義久：『西東詩集』の「ズライカの書(そのI)」 『甲子園大学紀要』37号 25-32 3月
- 2) 梶木克則：インターネットを活用した教育支援への取り組み 『甲子園大学紀要』37号 33-39 3月
- 3) 田邊和徳：ペスタロッチの人間観と道徳性の成立 『甲子園大学紀要』37号 7-14 3月
- 4) 中井孝：システムをつくり方、変え方 『甲子園大学紀要』37号 41-53 3月
- 5) 西川真理子、若槻健、小野博司、金崎茂樹、中西佳世子、梶木克則：『学生力』を高めるための「教養演習Ⅰ」
(2) 『甲子園大学紀要』37号 55-67 3月
- 6) 比名和子：『広い藻の海』—ゴシック小説として 『甲子園大学紀要』37号 69-75 3月
- 7) 榊井猛：仮想化ソフトを使用した大学のコンピュータ環境 『甲子園大学紀要』37号 15-24 3月
- 8) 山田勝久：①中国・黒水国遺跡の調査報告—河西回廊の要衝、黒水国の興亡を中心として— 『甲子園大学紀要』37号 1-6 3月 ②楼蘭の歴史と文学—王城の破棄と後世への文学的影響について— 『シルクロード研究』第6号 シルクロード研究センター 5月 ③国際交流の精華、鳩摩羅什の光輝な偉業 『中国国際友誼促進会紀要』2010年版 11月
- 9) 若槻健：①市民性教育における「地域とのつながり」 『甲子園大学紀要』37号 77-84 3月 ②地域に根ざした生涯学習社会構想 『学習社会研究 第1号 学習社会と地域主権』日本学習社会学会編 179-188 11月

〔学会発表〕

- 1) 榎本雅俊：ヒルベルト空間の部分空間の配置と quiver の表現 京都大学数理研究所研究集会 9月3日
- 2) 梶木克則、榊井猛、那須靖弘：①Google ドキュメントの共有機能による共同編集を利用した授業支援 教育システム情報学会第35回全国大会、26-F1-2、平成22年8月26日北海道大学 ②専門用語の解説文の穴埋め問題作成を取り入れたITパスポート試験対策講座の試み 平成22年度情報教育研究集会、D3-6、平成22年12月11日 京都府民総合交流プラザ
- 3) 西川真理子：意欲を高めるための初年次教育の試み(その2) 第32回大学教育学会大会 愛媛大学 6月
- 4) 若槻健他7名：学力政策の比較社会学(その2)—全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか— 日本教育社会学会第62回大会 関西大学 9月

〔その他〕

- 1) 若槻健：「B県調査」『学力向上策の比較社会学的研究』科研基盤A 平成21年度 22-46 3月

栄養学部の学術活動

[2010年1月～12月]

[論文]

- 1) 日本調理科学会近畿支部 揚げる・炒める分科会(村上恵、安藤真美、水野千恵ほか)：使用限界(風味点数3)に達したフライ油の特性、日本調理科学会誌43、38-43(2010)
- 2) 井上吉世、林淑美、原知子、和田珠子、水野千恵、中原満子、伊藤知子、村上恵、的場輝佳：フライ油の使用限界に関する研究—から揚げの食味とフライ油の風味点数—、日本食生活学会誌 20、313-319(2010)
- 3) 川合真一郎：生態毒性の評価法—行動生態毒性学の展望—、産業と公害 39、32-36(2010)
- 4) 鈴木美季子、森 恵見、中西由季子、木村修一：ラットにおける妊娠前期の極端な制限食が生後仔ラットの体組成に及ぼす影響、微量栄養素研究27、69-73(2010)

[著書]

- 1) Takahiro Gotow: Chapter 10, Neurofilament Cross-Bridges - A Structure Associated Specifically with the Neurofilament Among the Intermediate Filament Family, R.A.Nixon, A.Yuan (eds.), Cytoskeleton of the Nervous System. (Advances in Neurobiology Vol.3) Springer ISBN: 978-1-4419-6786-2
- 2) 田中克・川合真一郎・谷口順彦・坂田泰造編：水産の21世紀—海から拓く食料自給、京都大学学術出版会(2010)

[学会発表]

- 1) 伊藤知子、水野千恵ほか：国産菜種油の調理特性の比較、日本調理科学会平成22年度大会(2010年8月 福岡)
- 2) 磯邊厚子、坂本千科絵、植村小夜子、小関佐貴代：スリランカの農園の妊婦の健康問題と社会的背景—ヌワラリア県での調査から—、第36回日本保健医療社会学会大会(2010年5月)
- 3) 木原葵、太原和美、兼頭由乃、濱田圭子、伊藤裕美ほか：食育推進状況アンケート結果に基づいた食育事業の評価、第49回日本公衆衛生学会近畿地方会(2010年7月9日 京都テルサ)
- 4) 古段佐規子、押場美穂、芝健司、濱田大輔、濱田圭子、伊藤裕美ほか：新型インフルエンザ(A/H1N1)PCR検査実施患者調査結果について、第49回日本公衆衛生学会近畿地方会(2010年7月9日 京都テルサ)
- 5) 押場美穂、芝健司、濱田大輔、古段佐規子、濱田圭子、伊藤裕美ほか：施設等の現場で活用できる「感染症対策」DVDの作成について、第49回日本公衆衛生学会近畿地方会(2010年7月9日 京都テルサ)
- 6) 伊藤裕美、増田宗之、寅屋壽廣：幼稚園・保育所における食育の推進状況と課題について、第69回日本公衆衛生学会総会(2010年10月27日 東京国際フォーラム)
- 7) 押場美穂、濱田圭子、伊藤裕美、増田宗義：社会福祉施設等に対する感染症対策の支援について、第69回日本公衆衛生学会総会(2010年10月27日 東京国際フォーラム)
- 8) 川合真一郎、黒川優子、森真理恵、藤井あや、張野宏也、伏見浩、小谷知也、神村祐司：クロマグロの健苗育成技術開発研究—24. クロマグロの仔魚期における消化酵素活性の日周リズムと消化管内餌生物量との関係、平成22年度日本水産学会春季大会(2010年3月 藤沢)
- 9) 川合真一郎：合成化学物質から見た陸と海のつながり、公開シンポジウム「森里海連環と地球的課題」(2010年9月 けいはんな学研都市)
- 10) 鈴木美季子、森恵見、中西由季子、木村修一：ラットにおける妊娠前期の極端な制限食が生後仔ラットの体組成に及ぼす影響、日本微量栄養素学会第27回学術集会(2010年7月 京都)
- 11) 白川哉子、中西由季子、富本靖、山里哲史、米田勝朗：女子学生の鉄強化による持久力向上について—長距離競技者による血液性状の変化と記録—、日本体育学会61回大会(2010年9月 豊田)

[社会教育活動]

- 1) 食べものを見分ける力を養いましょう！（小関佐貴代、2010年1月 伊丹市桜台小学校PTA家庭教育向上委員会）
- 2) 心と体を健康にする賢い子育て食（小関佐貴代、2010年10月 川西市大和地区福祉委員会30周年&「ハイ・はい」15周年記念講演）
- 3) ほんまもん生活セミナー”おいしさ”と”栄養の科学”～健康に必要な科学の目～（小関佐貴代、2010年2月 兵庫県淡路県民局淡路生活科学センター）
- 4) 講義テーマ「身体活動に関する保健指導」平成22年度保健実践者育成研修会近畿6府県合同研修会（伊藤裕美、2010年8月31日 大阪府：大阪市立大学）
- 5) 川合真一郎：JICA Training Program “Synthetic chemicals in the aquatic environments”（2010年8月23～24日 高知大学）
- 6) 川合真一郎：世界の水は今どうなっているか、水の講座 第2期「水をめぐる生きものたち」（主催：大阪市立環境学習センター 生き生き地球館、企画・運営：シニア自然大学校、後援：朝日新聞社、2010年10月30日 大阪市）
- 7) Yukiko Nakanishi: Market & Effectiveness Trial of IFFS in Cambodia, National Workshop-Considering a Launch of Iron Fortified Fish Sauce and Soy Sauce to Reduce Anemia in Cambodia. (2010年 7月 Cambodia)
- 8) Yukiko Nakanishi: Contribution to International Society through Project SWAN and IDEA in Asian Developing countries, 第4回国際O-CHA 学術会議. (2010年9月 静岡)

その他

- 1) 中西由季子：社団法人農林水産先端技術産業振興センター「東アジア食品産業海外展開支援事業」推進委員として出席（2010年9月 東京、2010年11月 Philippines）

現代経営学部の学術活動

[2010年1月～12月]

【著書】

- 1) 原田理恵：守本とも子、星野政明編著『介護の基本・コミュニケーション技術』第2章「介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ」分担執筆 黎明書房（2010.9）

【論文】

- 1) 那須靖弘：「Wikiを利用した調べ型学習教材の開発」甲子園大学紀要37（2010.3）
- 2) 那須靖弘、土井滋貴：「ミックスド・シグナル構成も可能なFPGA活用のすすめ—Cortex-M1にFreeRTOSを実装する—」 インターフェース（2010.9）

【学会】

- 1) 那須靖弘、榊井猛、梶木克則：「逆方向仕訳問題出題システムの改善」教育システム情報学会（2010.8）
- 2) 那須靖弘、榊井猛、梶木克則：「e-learningによる社会福祉士試験対策の実践」 情報教育研究集会（2010.12）

【社会教育活動】

- 1) 竹内準治：「戦略について」国際コンサルタント機構（ユニコン）（2010.9）
- 2) 坂本正子：子どもの虹情報研修センター企画評価委員会委員
- 3) 坂本正子：大阪府社会福祉審議会児童福祉専門分科会被措置児童等援助専門部会委員
- 4) 坂本正子：宝塚市地域自立支援協議会委員長
- 5) 坂本正子：兵庫県阪神北子育て応援ネットワーク交流大会基調講演「虐待予防と早期発見・早期対応」・パネルディスカッション「地域ぐるみで子どもを守るネットワークづくり」（2010.1）
- 6) 坂本正子：兵庫県阪神北ブロック児童委員特別専門研修「地域で子どもを守る～児童虐待防止における児童委員の役割と地域連携について」（2010.10）
- 7) 坂本正子：兵庫県社会福祉士会阪神ブロック学習会「こども虐待防止と社会的養護を考える」（2010.10）
- 8) 坂本正子：兵庫県児童福祉司任用資格取得講習「児童福祉論」（2010.11）
- 9) 坂本正子：兵庫県社会福祉士会ひよこゼミナール「こども虐待防止と社会的養護について」（2010.11）
- 10) 那須靖弘、榊井猛：元気なら組み込みシステム技術者の養成 ベーシックコース（2010.6）

人文学部の学術活動

[2010年1月～12月]

【著書】

- 1) 大川清丈「『勉強』『頑張り』と日本社会」西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子編『メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学, 社会心理学, 精神医学を融合して』pp.117-126、ナカニシヤ出版、2010年。
- 2) 大川清丈「日本人論の系譜—南博『日本人論』(1994)」、井上俊・伊藤公雄編『日本の社会と文化』(社会学ベシックス第10巻)、pp.197-206、世界思想社、2010年。
- 3) 金網知征「第8章 治療への自然主義的行動アプローチ」、カタルツイナ・ハヴァースカ、アミ・クリン、フレッド・R・フォークマー編、竹内謙彰・荒木穂積監訳『乳幼児期の自閉症スペクトラム障害～診断・アセスメント・療育～』、pp.265-306、かもがわ出版、2010年9月。
- 4) 高橋依子「臨床心理学とメンタルヘルス」・「親と子の応答関係」西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子編『メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学, 社会心理学, 精神医学を融合して』pp.9-16、pp.32-40、ナカニシヤ出版、2010年。
- 5) 中川すがね(共著)高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史』第二巻(通史編近世)、pp.48-121、pp.232-254、pp.308-531、pp.709-719、pp.790-809、pp.812-846、pp.861-880、高砂市、2010年。
- 6) 藤田綾子「高齢者のメンタルヘルス」、西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子編『メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学, 社会心理学, 精神医学を融合して』、pp.59-69、ナカニシヤ出版、2010年。
- 7) 藤田綾子「尊厳維持」、大内尉義・秋山弘子編集『新老年学』、pp.1912-1916、東京大学出版会、2010年。
- 8) 安村直己「家庭でのメンタルヘルス」、西村健監修、藤本修・白樫三四郎・高橋依子編『メンタルヘルスへのアプローチ—臨床心理学, 社会心理学, 精神医学を融合して』、ナカニシヤ出版、2010年。

【論文】

- 1) 一色 哲「ベッテルハイムと沖縄」、『キリスト教史学』(キリスト教史学会)63、pp.104-134、2010年7月。
- 2) 一色 哲「軍事占領下における地域形成とキリスト教—1940年代後半の沖縄を事例に—」、『日本の神学』(日本基督教学会)49、pp.32-52、2010年9月。
- 3) 大川清丈「新聞投書欄から見た『受験』と努力主義」『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察(中間報告)』2007年度～2009年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書[研究代表者:尾中文哉(日本女子大学)]、pp.6-17、2010年3月。
- 4) 大川清丈「努力主義の日英比較—『逆欠如』という観点から—」『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察(中間報告)』2007年度～2009年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書[研究代表者:尾中文哉(日本女子大学)]、pp.18-22、2010年3月。
- 5) 金網知征「友人集団形成傾向といじめ特性との関連についての日英比較研究」、『甲子園大学紀要』第37号、pp.161-171、2010年3月。
- 6) 神尾暢子「落窪擬音の表現効果—女君の幸福と北方の不幸—」、『甲子園大学紀要』第37号、pp.181-188、2010年3月。
- 7) 神尾暢子「リレー連載第18回 私が勧めるこの一冊『国語史原論—日本国語の史的展開—』」、『日本語学』第29巻第12号、pp.68-74、2010年10月。
- 8) 神尾暢子「源氏物語 下人の表現機能」、『むらさき』第47号、pp.81-84、2010年12月。
- 9) 高橋依子「樹木画テスト」、『臨床心理学』第10巻第5号、pp.662-667、2010年9月。
- 10) 谷口(藤本)麻起子「摂食障害の自律性について」『甲子園大学紀要』第37号、pp.145-151、2010年3月。
- 11) 谷口(藤本)麻起子「摂食障害の人の在り方に関する心理臨床学的研究」、平成22年9月24日、京都大学大学院博士(教育学)学位論文。
- 12) 中川すがね「播磨上灘目東部の製塩業」、『甲子園大学紀要』第37号、pp.186-206、2010年3月。

- 13) 中川すがね「史料調査報告 昆陽寺と村—鎮守堂文書・正覚院文書紹介」、『地域研究いたみ』49号、pp.18-27、2010年3月。
- 14) 藤田綾子「超高齢社会における高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性を高めるための調査研究」、『大阪ガスグループ福祉財団 研究・調査報告集』vol.23、pp.101-109、2010年。
- 15) 安村直己「自己愛障害をめぐるユング派とコフートの接近について」『甲子園大学紀要』第37号、pp.129-143、2010年3月。

【評論その他】

- 1) 中川すがね「パネルディスカッション記録『大阪と摂津について』」、『大塩研究』第62号、pp.3-15、2010年3月。

【学会発表】

- 1) 一色 哲「『一國伝道史』から『キリスト教交流史』へ—沖縄を起点に一」、キリスト教史学会西日本部会、関西学院大学梅田キャンパス、2010年3月。
- 2) 一色 哲「『地の果て』の証人たち—『辺境教会』の形成からみた南島キリスト教史・試論—」、キリスト教史学会第61回学術大会、宮城学院、2010年9月。
- 3) 一色 哲「『一國伝道史』から『キリスト教交流史』へ—『日本』キリスト教史の対象と空間・再考—」、日本基督教学会第58回学術大会、立教大学、2010年9月。
- 4) 大川清丈「新聞投書欄から見た努力主義の論理」、日本教育社会学会第62回大会、関西大学、2010年9月。
- 5) 高橋依子「描画テストの臨床的活用」、包括システムによる日本ロールシャッハ学会第16回大会ワークショップ、札幌、2010年6月。
- 6) 高橋依子「投影法のこれから」、包括システムによる日本ロールシャッハ学会第16回大会シンポジウム、札幌、2010年6月。
- 7) 高橋依子「言語障害児の教育に活かす臨床描画」、日本言語障害児教育研究会第42回大会記念講演、東京、2010年8月。
- 8) 高橋依子「HTPPテスト入門」、日本描画テスト・描画療法学会第20回大会ワークショップ、高松、2010年10月。
- 9) 高橋依子「包括システムによるロールシャッハ・テストの基礎と解釈」、日本ロールシャッハ学会第14回大会ワークショップ、大阪、2010年10月。
- 10) 中川すがね「銭屋佐兵衛と分・別家—大坂本両替研究からみた逸身家文書の意義—」、逸身家文書研究会、東京大学本郷キャンパス都市史研究センター(とらっど3)、2010年9月5日。
- 11) 藤田綾子「超高齢社会に心理学はどのような貢献が出来るのか?」、日本心理学会第74回大会シンポジウム、大阪大学、2010年。
- 12) 藤田綾子「高齢者の子育て支援について」、日本心理学会第74回大会ワークショップ、大阪大学、2010年。

【社会教育活動】

- 1) 青柳寛之「発達障害児への心理療法を考える」事例へのコメントと討論、甲子園大学発達・臨床心理センター第6回心理臨床セミナー、西宮市大学交流センター、2010年11月14日。
- 2) 金網知征「いじめの実態と対応～日英比較研究より～」、道徳性発達研究会、神戸親和女子大学、2010年7月。
- 3) 金網知征 日本発達心理学会国際ワークショップ通訳「乳幼児期における自閉症スペクトラム障害：診断・アセスメント・治療(講師：Katarzyna Chawarska)」、立命館大学、2010年8月。
- 4) 金網知征「いじめと人間関係」甲子園大学 心理学部現代応用心理学科 開設記念連続講座 犯罪心理入門、宝塚市立男女共同参画センター・エル、2010年10月。
- 5) 金網知征、日本道徳性発達実践学会第10回大会記念講演会通訳「これからの心の教育、道徳教育の方法とあ

- り方（講師：Larry Nucci）」、同志社大学、2010年11月。
- 6) 高橋依子「1歳児のころとことば」、子育て講座、宝塚、2010年2月・5月。
 - 7) 高橋依子「描画テスト（HTPP）を学ぶ」、大阪府臨床心理士会ワークショップ、大阪、2010年12月。
 - 8) 谷口麻起子「甲子園大学発達・臨床心理センター第6回心理臨床セミナー『発達障害児に対する心理療法を考える 友達と遊べない小学生の事例』事例理解の視点をめぐる討論」、西宮市大学交流センター、2010年11月14日。
 - 9) 藤田綾子「宝塚市における図書ボランティア実態調査報告」、宝塚市社会教育委員会報告書 2010年。
 - 10) 中川すがね、講演「大坂町人平野屋武兵衛の生活と行動」、阪神シニアカレッジ同窓会、宝塚ソリオホール、2010年9月21日。
 - 11) 安村直己「子育てと家族関係」、子育て講座、宝塚、2010年2月・5月。
 - 12) 安村直己「虐待の家族力動と治療について」、敦賀児童相談所、2010年10月。

執筆者紹介 (アイウエオ順)

石川 朝子	学生支援員	学生支援推進プログラム事務室
市来 百合子	博士後期課程	人文学部
上野 義久	准教授	総合教育研究機構
大塚 賢龍	教授	現代経営学部
梶木 克則	准教授	総合教育研究機構
金崎 茂樹	教諭	本学院中学校・高等学校
金綱 知征	助教	人文学部
上村 健二	准教授	総合教育研究機構
谷口 麻起子	助教	人文学部
中井 孝	准教授	総合教育研究機構
中川 すがね	准教授	人文学部
中西 佳世子	助教	総合教育研究機構
那須 靖弘	准教授	現代経営学部
西川 真理子	准教授	総合教育研究機構
比名 和子	准教授	総合教育研究機構
藤田 綾子	教授	人文学部
榭井 猛	教授	総合教育研究機構
増田 将伸	准教授	総合教育研究機構
安村 直己	教授	人文学部
山田 勝久	教授	総合教育研究機構
若槻 健	准教授	総合教育研究機構
渡邊 喜久	教授	現代経営学部

編集後記

甲子園大学紀要 No.38 (2011) をお届けします。

今回から表紙に出版年を記載し、論文は学部の垣根を取り払い、一段組み・二段組みの順で、各々執筆者名のアイウエオ順に掲載いたしました。

甲子園大学図書館のホームページ (<http://www.koshien.ac.jp/library/index.html>) からもご覧いただけます。併せてご利用ください。

甲子園大学紀要投稿規程

I 要 項

- 1 紀要は年1回3月発行することを原則とする。
- 2 紀要投稿者は本学教職員に限る。但し連名の場合は本学関係者以外も認める。なお、研究科後期課程の院生は、投稿申込期日までに論文原稿に対して、指導教員およびその他の教員1名の推薦を必要とする。
- 3 論文の掲載は編集委員会で決定する。
- 4 内容は総説、原著、調査、資料とし総説以外は投稿者が指定する。総説は原則として編集委員会で依頼する。
- 5 論文は和文または外国語文とし、一編の長さは図表を含め400字詰め原稿用紙100枚以内を原則とする。
- 6 投稿は一人一編を、共同研究の場合は二編以内を原則とする。
- 7 文章は原則として横書きとする。但し人文系で必要な場合は縦書きとする。
- 8 別刷りは一編につき30部を無料とし、それ以上は執筆者負担とする。
- 9 アート紙、色刷りなど特殊な印刷は執筆者負担とする。
- 10 紀要に掲載された原稿の著作権は甲子園大学紀要編集委員会に帰属する。

II 細 則

- 1 原稿は表紙付きを1部とワープロ文書ファイルを提出する。
- 2 表紙には内容の指定、題名、英文題名、著者名、ローマ字著者名、本文、図表の枚数および校正送付先を明記する。
- 3 和文の論文には、英文要約(200ワード以内)、キーワード4個以内とその英訳を添付する。和文要約(400字以内)の添付は、執筆者所属学会の慣例に従う。
- 4 原稿は原則としてワープロ使用とし、欧文はダブルスペースとする。
- 5 文中、イタリック体とする語は_____線、ゴシック体は_____線、その他特殊言語には_____線をつける。
- 6 図表はそのまま使用できる大きさとする。
- 7 図表の挿入位置は、原稿欄外に朱書きして指示する。
- 8 本文中の引用文献は記号を付し、文献は本文の最後にまとめる。
- 9 執筆に関する記載要項は、執筆者所属学会の慣例に従う。

付 記

投稿の申込期日は、毎年9月末日、原稿提出期限は10月末日とする。

甲子園大学紀要 第38号

平成23年3月18日	印 刷
平成23年3月31日	発 行
編 集 者	甲子園大学紀要編集委員会
発 行 所	甲 子 園 大 学
	〒665-0006 兵庫県宝塚市紅葉が丘10-1
	T E L : 0797-87-8023 F A X : 0797-87-8356
	E-mail : lib@koshien.ac.jp
印 刷 所	能 登 印 刷 株 式 会 社
	〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号
	T E L : 076-233-2550

